

博士学位論文

幕末・明治初期における「諫言」の変遷と終焉

— 下級武士の忠誠観を中心に —

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
日本言語文化専攻

頼 鉦菁

平成 25 年 4 月

目次

序章

1. 研究目的	1
2. 研究の方法と基軸	6
3. 先行研究	8
4. 各章の構成	9

第一章 江戸時代における諫言像 ― 武士の忠誠意識を中心に ―

はじめに	12
第一節 『葉隠』における「暁の上の御奉公」	14
1-1 主君への情念	15
1-2 御家に対する理念	18
1-3 主君への情念と御家に対する理念との狭間	21
第二節 元禄赤穂事件	23
2-1 「御家の再興」を第一とする家老派 ― 大石良雄	24
2-2 主君のための「仇討ち」を主張する堀部武庸	26
第三節 元禄赤穂事件をめぐる儒学者の論評	27
3-1 赤穂諸士の「義」への肯定論	28
3-2 赤穂諸士の仇討ち行為への批判	29
むすび	33

第二章 日中諫言精神の比較試論 ― 吉田松陰の視点から ―

はじめに	35
第一節 儒学の「三仁」への評価	37
第二節 松陰の中国忠臣観	42
第三節 屈原の心象世界への共鳴	44
3-1 松陰の諫言精神	44
3-2 松陰と屈原	46
3-3 松陰における「狂」の意味	49
むすび	53

第三章 幕末期における下級武士の諫言精神

はじめに	55
第一節 久坂玄瑞と吉田松陰との交流	57
1-1 久坂玄瑞の攘夷論	57

1-2	吉田松陰の反論	60
第二節	久坂の「言路洞開」論と草莽論	62
2-1	「言路洞開」論	64
2-2	草莽論	65
第三節	佐賀藩の江藤新平	67
3-1	義祭同盟	67
3-2	江藤新平の『凶海策』	68
3-3	江藤の脱藩と尊王活動	70
むすび		71
第四章	幕末・明治初期における「諫言」、「建言」/「建白」―「言路洞開」をめぐる―	
はじめに		73
第一節	「諫言」、「建言」/「建白」の意味	75
第二節	江戸時代における「言路洞開」と諫言の政体概念	76
第三節	幕末における「諫言」の変容と「言路洞開」の要請	79
第四節	西洋政体の導入と紹介	84
第五節	明治初期における「建白」	88
5-1	廃刀論	91
むすび		93
第五章	明治初期における江藤新平の革新性と反動	
はじめに		95
第一節	先行研究と課題	97
第二節	佐賀士族との緊張関係	100
2-1	藩政改革の理念	101
2-2	佐賀の藩政改革	105
第三節	政府官僚との軋轢	107
3-1	陸軍省と大蔵省との衝突	107
3-2	官商結託への批判	109
第四節	佐賀の乱	116
むすび		117
終章		119
注記		127
参考文献		128

序章

1. 研究目的
2. 研究の方法と基軸
3. 先行研究
4. 各章の構成

1. 研究目的

本研究は、中国（儒学）から受容し、江戸時代の武家社会で忠誠を代表する概念として形成された「諫言」が、政局が不安定な幕末期において、下級武士たちによっていかに受け継がれ実行に移されたのか、また、その過程でいかなる概念に変容したのかを考察するものである。

江戸時代において、主君に忠義を尽くす場は、従来の戦場から畳の上に移り変わり、武士もまた畳の上の奉公人へと転身した。幕藩体制においては、「御家」の安泰を維持することがすなわち忠誠であると幕府に規定されていたため、「御家」は基本的に武士の忠誠を尽くす対象となっていた。このような背景において、儒学的「諫言」は、武家社会で「畳の上の御奉公」、すなわち「治世の御奉公」として武士のエートスと結びつき、「忠誠」と同一視される傾向が強かった。忠誠の代名詞となっていた「諫言」がもっとも活発に行われていたのは、政局の不安定な幕末期であった。嘉永六年（1853）のペリーの来航は、幕府を対外問題に直面させただけでなく、同時に日本国内においても攘夷や開国、または公武合体派か佐幕派かなどの内部分裂を引き起こした。この時期に、のちの明治維新の担い手となった下級武士たちは、志士として「ダイナミック」な諫言精神を発揮し、日本を近代国家へと前進させた。本研究は、この動乱期において、志士としての下級武士の諫言精神が、中国士大夫との対比において、いかなる独自性を有していたかをまず明らかにする。その上で、有志の者たちの諫言精神はどの程度まで革新的、あるいは近代的であったのか、また彼らがなお封建的の思惟に拘束されていたとすれば、それはいかなる点であったのかを探究するとともに、この動乱期における「諫言」の内実的变化を観察する。

そもそも「諫言」は、「諫」から派生した言葉である。『説文解字』（100年）は、「諫」という字義について「証^{ただす}也」と記している。そして『周礼』（成立年代不明）の注記には、「諫とは礼儀をもって正すなり」と記されている。つまり、正すことが「諫」の原義である。中国において、「諫言」の概念は古くから存在しており、中国の制度史や儒学史において長い歴史と伝統がある。『管子』に、「禹は諫^{かん}鼓を朝に立てて、訊^{じん}咥^{あい}に備へしな

り」¹とあるように、「諫鼓」²が設けられたという記述から、諫言の概念がすでに古代中国で発展していたことは明らかである。その後春秋戦国時代において、孔子をはじめ、諸子百家が林立し、正すという意味合いをもつ諫言は、その思想が次第に成熟していった。

儒学は、自己修養を通して自他の人格を完成に導き、倫理的に優れた社会の建設を目指す教学である³。孔子は「政は正なり。子帥いて正しければ、孰か敢えて正からざらん」⁴と、政を「正」と見なしている。そして、「其の身を正しくすること能わざれば、人を正しくすることを如何せん」⁵、すなわち身を正しくすれば、人をも正すことができる、と言うように、身を正すことによってはじめて人を正すことができるとする。これはすなわち「修己治人」のことである。孟子、荀子なども個人道德と政治との一体性を主張する孔子の説を踏襲してさらに展開させていった⁶。そのため、儒学においては、「君主でありながら諫臣がいないと過ちを犯す」⁷と記されるほど、人を正す諫言の働きはとりわけ重要視されており、臣としていかに君主を諫めるか、その諫言の仕方もきわめて多彩であった。例えば、『孔子家語』においては、「忠臣の君を諫むるに五義有り。一に曰く、譎諫⁸。二に曰く、嚮諫⁹。三に曰く、降諫¹⁰。四に曰く、直諫¹¹。五に曰く、諷（風）諫¹²」¹³と記され、また、『説苑』（前漢・劉向）にも「……諫に五有り。一に曰く正諫、二に曰く降諫、三に曰く忠諫、四に曰く嚮諫、五に曰く諷諫」¹⁴と記されている。諫言はそれほど重要視されているが、諫言という行為自体は、「諫めざれば則ち君を危うし、固く諫むれば則ち身を危うす」¹⁵のものである。したがって、「君を危うせんよりは、寧

¹ 「禹立諫鼓於朝、而備訊咎」（『管子』下、新釈漢文大系 52、遠藤哲夫著、明治書院、1992 年、931 頁）。

² 中国の伝説上の聖天子堯、舜、禹が、その施政について諫言しようとする人民に打鳴らさせるために、朝廷の門外に設けたとされる鼓（『日本国語大辞典』第 3 巻、小学館、1972/2003 年、1259 頁）。

³ 戸川芳郎、蜂屋邦夫、溝口雄三『儒教史』山川出版社、1987 年、28 頁。

⁴ 「政者正也、子帥而正、孰敢不正」（『論語』「顔淵」金谷治訳注、岩波文庫、1963/2008 年、237 頁）。

⁵ 「不能正其身、如正人何」（前掲、『論語』「子路」、256 頁）。

⁶ しかし、法治主義を説いた法家は、政治の中心は権力であると主張し、道德の政治における働きは重要であるが、それは絶対的な影響力ではないとする（陳謙『中国古代政治伝播思想研究』北京：中国社会科学出版社、2009 年、34 頁）。

⁷ 「人君而無諫臣則失正」（『孔子家語』新釈漢文大系 53、宇野精一著、明治書院、1996 年、262 頁）。

⁸ 思ったままを口にせず遠まわしに諫めること（前掲、『孔子家語』の語釈による、183 頁）。なお、『毛詩』の中には「主文而譎諫」とあり、「文」によって遠まわしに諫言することであると記している（『毛詩』「毛詩卷第一」漢文大系第 12 巻、星野恆、服部宇之吉校訂、富山房、1911/1975 年、2 頁）。

⁹ 齒に衣を着せずに諫めること（前掲、『孔子家語』の語釈による、183 頁）。

¹⁰ あたかも主君の意志を尊重して従うようでありながら、次第に自分の思わく通りに制御して諫めること（前掲、『孔子家語』の語釈による、183 頁）。

¹¹ 面と向かって、是非善悪を包み隠さず述べて諫めること（前掲、『孔子家語』の語釈による、183 頁）。

¹² 何かにかこつけてそれとなく気づくように諫めること（前掲、『孔子家語』の語釈による、183 頁）。

¹³ 「忠臣之諫君、有五義焉。一曰譎諫、二曰嚮諫、三曰降諫、四曰直諫、五曰諷（風）諫」（前掲、『孔子家語』、183 頁）。

¹⁴ 劉向『説苑』塚本哲三編、有朋堂、1928 年、292 頁。

¹⁵ 同書、293 頁。

身を危うせん。身を危うして終に用ひられざるときは、則ち諫も亦功無けん」¹⁶と結論づけるところに、中国の諫言の哲学がよく示されている。つまり儒学では、基本的に「所謂大臣なる者は、道を以て君に事え、不可なれば則ち止む」¹⁷ことを処世の道として勧め、諫言も「主を度りて之を行ふのみ」¹⁸と、孔子は語っている。そして、孔子自身は「吾は其れ諷諫に従はんか」¹⁹と「諷諫」を選択するのである。

このように、中国に多様な諫言の仕方があることは、文と政治とが緊密に結びついた伝統文化にその淵源を求めることができる。中国においては、とりわけ隋朝以降（581～）、士大夫として出仕するに当たって、まず科挙（587年ごろから）に合格しなければならなかった。科挙試験は基本的に四書五経の教養を選考基準とし、「文」によって優秀な人物を選ぶシステムであった。文才が官職に就く基本的な条件であったため、諫官もまたこのようなシステムにより選考された。科挙制度が次第に健全化することにより、家系の低い平民であっても政治に対する大きな志を抱くものは、試験に及第すれば出仕が可能となった。そのため、在野における文人にしろ、在朝における士大夫にしろ、「文」を通して君主に直接的、間接的に諫言することが多かった。そのような士大夫の代表例としては、社会の実情を諷諭詩などの写実的詩文の創作によって君主に伝えようとした白居易（772～846）がいた。

一方、「諫言」の本格的な政治体制への組織化は、周（前770～前256）の時代まで遡ることができる。『周礼』「地官司徒」には「保氏掌諫王惡」とあり、「保氏」という官職が最初の諫官であった。秦・漢時代には、「散騎」、「諫議大夫」、「給事中」などの諫諍を掌る官職が設置されていた。そして、唐代には前代の制度を引き継いで、左・右散騎常侍、左・右諫議大夫、左・右給事中の他、さらに左・右補闕と左・右拾遺、起居郎という官職が増設された。「散騎常侍」は広徳二年（764）の時、正三品、左右各四名であり、「給事中」は唐高祖武徳三年（620）の時、正五品、定員四名である。そして、「諫議大夫」は武徳五年（622）に正五品上という位で、貞元四年（788）に左右各四名の定員であった。唐代に初めて設置された「補闕」と「拾遺」は垂拱元年（685）に作られ、「補闕」は従七品上、左右各二名で、「拾遺」は従八品上、左右各二名である。白居易や杜甫（712～770）はかつて左拾遺に任じられたことがある。なお、「起居郎」も唐代に初めて増設され、従六品上の位であった²⁰。

このように、唐代においては、諫言を司る官職が前代より増設されており、諫言の機能も拡大し、また、君臣の間で諫言が重視されていたので、諫言文化の全盛期に達していたといえる。貞観元年（627）に唐太宗（在位 626～649）は「宰相内に入りて、国計

¹⁶ 同書、293頁。

¹⁷ 「所謂大臣者、以道事君、不可則止」（前掲、『論語』「先進」、217頁）。

¹⁸ 「唯度主而行之」（前掲、『孔子家語』、183頁）。

¹⁹ 「吾従其諷諫乎」（前掲、『孔子家語』、183頁）。

²⁰ 傅詔良『唐代諫議制度與文人』北京：中国社会科学出版社、2003年、53～60頁を参照。

を平章するときには、必ず諫官をして随ひ入りて、政事を預り聞かしめ、關説する所有らしむ」²¹という紹令を發布し、諫官は諫言のほかに政治に参与し意見を提出する権利及び義務も持つようになった。諫言が当時の政治体制において重んじられていたことがうかがえる。諫言文化がどのぐらい普及し、また政体における諫言の機能がいかに働いていたかについては、唐の太宗（李世民、598～649、在位 627～649）が臣下からの諫言をよく納めたことや、魏徵などの諫官が忌憚のない直言で太宗を諫めたことを記した『貞觀政要』（750 年以降成立）を通して窺える。

宋に至り、唐の「補闕」が「司諫」に、「拾遺」が「正言」に改められ、また天禧元年（1017）に「諫院」が独立した機関として設置された。今まで宰相の下に属していた諫官は、宰相から独立するようになった²²。また、従来、諫言を司る言官、及び官吏を監察する「御史」が分離していたが、宋においては、皇帝に対する諫言以外に、朝政の欠失も官吏の監察の違失も諫官の職責に含まれるようになったのである。唐代の諫官より一層独立性をもっていた宋代の諫官が、三度諫言して受け入れなければ去るという諫言の仕方を習慣としていたことは、この時代の特徴であるといわれている²³。そして、明朝においても、基本的に宋代の制度を踏まえ、諫官は諫言の職分以外に、官僚に対する監督も任務としていた²⁴。

以上のように、中国の歴代においては、諫言を掌る諫官の官職を設置する伝統があった。また、諫官となる官僚は、その官位が必ずしも高い者ばかりではなかった。

「修己治人」という儒学的な諫言思想が、政体に組み入れられて政治化することにより、諫言の概念は一層多元的な様相を示すことになった。貞觀の盛世を築き、治世の明君と言われた唐太宗はその好例である。『貞觀政要』は唐太宗の諫言觀を次のように記している。「人、自ら照らさんと欲すれば、必ず明鏡を須ふ。主、過を知らんと欲すれば、必ず忠臣に藉る。若し主自ら賢聖を恃まば、臣は匡正せず。危敗せざらんと欲するも、豈に得可けんや。故に君は其の國を失ひ、臣も亦獨り其の家を全くすること能はず。隋の煬帝の暴虐なるが如きに至りては、臣下、口を鉗し、卒に其の過を聞かざらしめ、遂に滅亡に至る。虞世基等、尋いで亦誅せられて死す。前事、遠からず。公等、事を看る毎に、人に利ならざる有らば、必ず須く極言規諫すべし」²⁵。太宗は前代隋の滅亡を鏡として、諫言が国の存亡と直接的に関わるものと考えており、国の興亡を左右するほど

²¹ 「宰相入内、平章國計、必使諫官隨入、預聞政事、有所關説」（『貞觀政要』上、新釈漢文大系 95、原田種成著、明治書院、1978 年、144 頁）。

²² 虞云国『宋代台諫制度研究』上海：上海書店、2009 年、45～48 頁。

²³ 同書、52～54 頁。

²⁴ 蔡明倫「言官群体与明代政治格局—以言官群体与其他政治群体的互動為中心」（『明清社会群体研究』所収、吳琦編、北京：中国社会科学出版社、2009 年）、85～86 頁。

²⁵ 「人欲自照、必須明鏡。主欲知過、必藉忠臣。若主自恃賢聖、臣不匡正。欲不危敗、豈可得也。故君失其國、臣亦不能獨全其家。至如隋煬帝暴虐、臣下鉗口、卒令不聞其過、遂至滅亡。虞世基等、尋亦誅死。前事不遠。公等每看事、有不利於人、必須極言規諫」（前掲、『貞觀政要』上、142 頁）

の大きな意味を与えていた。また、「貞観二年、太宗、魏徵に問ひて曰く、何をか謂ひて明君・暗君と為す、と。徵對へて曰く、君の明かなる所以の者は、兼聽すればなり。其の暗き所以の者は、偏信すればなり。詩に云く、先人言へる有り、芻蕘に詢ふ、と。昔堯舜の治は、四門を闢き、四目を明かにし、四聰を達す（後略）」²⁶とあるように、諫言は「下意上達」、つまり人民の意見を吸収する一つのルートと見なされている。臣からの積極的な諫言を望んだ太宗は、「諫諍を聞き、政教の得失を知らんことを冀ふ」²⁷と、諫言（もちろんこの諫言とは儒学が勧める風諫や橘諫などあらゆる仕方による諫言である）を通して、自分の政治の得失を知り、民意を聞くことを希望している。このような政治体制下の「諫言」は、主君の過ちを正すだけではなく、主君の治政を助けるという意義をも賦与されていた。

一方、日本において「諫」という用語は早くも『日本書紀』（720）に現れている。
「中納言直大貳三輪朝臣高市麻呂、表を上りて敢直言して、天皇の、伊勢に幸さむとして、農時を妨げたまふことを諫め争めまつる」²⁸、すなわち中納言三輪高市麻呂が農事の際に伊勢に赴こうとした天皇に諫言した有名な条である。農作業の時期に天皇が行幸すれば、農事の妨げになるため、高市麻呂は礼をもって正すという考えから天皇に諫言したのである。日本においては中国のように諫言を司る官職は設置されなかったが、「参議」が中国の「諫議大夫」に当たる職掌を担っていたことは、『伊呂波字類抄』、『拾芥抄』や『故実拾要』などに記載がある²⁹。武家政権が成立する鎌倉時代より以前に、中国のような文を通して諷諭を込めた詩歌や伝記を記したものとしては、山上憶良（660～733 頃）や三善清行（847～918）などが挙げられる³⁰。その後、武家が政権を開いた鎌倉以降は、長年「武」が中心となった。やがて戦国時代を迎え、その戦乱が収まって天下を統一した徳川幕府は、「武」とともに、「文」も兼ね備えるべきことを標榜した。よって、諫言が江戸時代の武家社会で大変重要視されたゆえんもここにあると考えられる。江戸時代には、主君に忠義を尽くす行為を発揮する場合は、従来の戦場から「畳の上」に変化した。また、殉死が「不義」と見なされ、禁止されて以来、「畳の上での御奉公」が重要視されるようになった。当時の記録では、各藩の家訓にしろ、武士道に関する教訓にしろ、新たな忠義概念である「文武兼備」を基調とする「奉公の道」や「治国の道」などが常に話題になっている。そしてその中に、「諫言」がしばしば言及されているので

²⁶ 「貞観二年、太宗問魏徵曰、何謂為明君暗君、徵對曰、君之所以明者、兼聽野。其所以暗者、偏信也。詩云、先人有言、詢于芻蕘、昔堯舜之治、闢四門、明四目、達四聰（後略）」（前掲、『貞観政要』上、32 頁）。

²⁷ 「冀聞諫諍、知政教得失」（前掲、『貞観政要』上、142 頁）。

²⁸ 「中納言直大貳三輪朝臣高市麻呂、上表敢直言、諫争天皇欲幸伊勢妨於農時」（『日本書紀』下、日本古典文学大系 68、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注、岩波書店、1966 年、513 頁）。

²⁹ 『古事類苑』官位部七、細川潤次郎等編、古事類苑刊行会、1932 年、445～447 頁。

³⁰ 目加田さくを「漢文芸作家圈における諷諭・諷諫の挫折と潜行」『香椎潟』26 号、福岡女子大学、1981 年、173～191 頁。目加田さくを「善居逸の文芸における政治的志向」『香椎潟』18 号、福岡女子大学、1973 年、1～14 頁。

ある。例えば、『葉隠』(1716)には「奉公の至極の忠節は、主に諫言して、国家治むる事也」³¹と述べられており、近世武家社会における「諫言」は「治世のご奉公」においても「治国の理念」においても、極めて重要な意義をもっていた。江戸時代において、儒学的諫言概念は、武士の忠誠と結び付けられることにより、あらたな近世独特の諫言概念へと形成されていったのである。

幕藩体制において、政治を行うことは家老のような上級武士層のみの特権であったため、諫言の実行も基本的に一部の上級武士層に限られていた。しかし、この体制は幕末の動乱期に崩壊した。諫言行為が盛んに行われ、諫言精神がもっとも活発に発揮されたのは、内憂外患を抱えて緊張した幕末であった。志士としての下級武士たちは、藩や藩主に忠誠を尽すために、職分を越えて藩主や藩府に上書し、諫言した。そして、彼らの政治舞台への登場を促したのは、各々の背後にいた藩主や藩力の支持という要素以外に、彼らが政治の学問である儒学の素養を身に付け、自分は士大夫的指導層の一員であるという自覚を持っていたことも重要な要素をなしたのである。志士としての下級武士たちのこのような諫言精神(志士精神)が、どのようにして明治維新を推進する大きなエネルギーとなっていったのか、またそこに潜んでいた彼らの革新的な性格とはいかなるものであったのか、という問題は検討に値する。さらに、幕末にこのような変革を求めた志士的精神が、明治の近代国家成立の過程において、なぜ今度は逆に近代化を阻む要素となったのか。幕末に志士として活躍し、明治維新によって中央政府の官僚に転身した者たちが、なぜ最終的に官僚世界から離脱していったのか。これらの問題を明らかにすることが、本研究のもう一つの意図でもある。

2. 研究の方法と基軸

丸山は『忠誠と反逆』³²において、江戸時代の武士の忠誠精神は、「非合理的な主従のちぎりに基づく団結と、『義を以って合する』君臣関係と、この二つの必ずしも一致しない系譜が——一はヨリ自然成長的な習俗として、他はヨリ自覚的なイデオロギーとして——化合したところに形成されたもの」³³である、と指摘している。彼の示す「非合理的な主従のちぎり」とは、「一般的法秩序の弛緩を背景として、主君への人格的忠誠を機軸とする私党的団結によって武士の利益と安全とを確保する必要から発展したもの」³⁴であり、それは、「封建的主従関係が『御恩』としての封土の給付に対する従者の献身的『奉公』によって成立」³⁵したという背景によって裏付けられている。したがって、武

³¹ 『三河物語 葉隠』(2-141) 日本思想大系 26、岩波書店、1974年、314頁。

³² 「忠誠と反逆」の初出は、『近代日本史講座 6 自我と環境』(筑摩書房、1960年、379～471頁)である。本論文は、1992年に筑摩書房により出版された単行本『忠誠と反逆』所収のテキストを用いた。

³³ 丸山真男『忠誠と反逆』筑摩書房、1992年、16頁。

³⁴ 同書、15頁。

³⁵ 同書、15頁。

士のエートスは元来「戦闘という非日常的な状況を前提としている点においても、また生死の運命共同性の実感を分有しているという点においても、むしろ非合理性を本質」³⁶としていた。

この「非合理的＝情誼的な契機は主従関係が伝統化するにしたがって増大する。主君の『恩』はつねに領地的の封与あるいは恩賞という物質的側面によって裏づけられているが、それが『譜代相伝』の恩、あるいは『重代』の恩として蓄積されるとともに、個々の主君の恣意で簡単に引き上げられない既得権的性格を濃化し、他面『奉公』もまた双務契約的意識をこえて、伝統への忠誠と癒着するようになる」³⁷。そのため、臣下は必ずしも君主に一方的に服従する存在ではない中国に比して、江戸時代の武士は、主君に「献身的な奉仕」³⁸をする傾向が強かった。しかし、江戸時代の武士は主君に対して必ずしも消極的な恭順のみをもっぱらとしていたわけではないと、丸山は力説する。武士の性格について彼は次のように述べている。

中国家産官僚＝読書人の「合理的」生活信条が荘重な儀礼主義と古典的教養の修得と天下の秩序の平衡性の維持という静態的性格を強く帯びていたのにくらべて、**戦闘者としての武士の行動様式は本質的にダイナミックであり、それが忠誠の発現の仕方にも著しい能動性と『臨機応変』性を賦与した……『君、君たらざれば去る』という淡泊な——そのかぎりで無責任な——行動原則を断念するところから生まれる人格内部の緊張が、かえってまさに主君へ向かつての執拗で激しい働きかけの動因となるのである。いわゆる絶対服従ではなくて、諫争が、こうしてその必然的なコロラリーをなす**³⁹。

（傍点丸山、太字強調は筆者）

丸山によれば、秩序を重んじる儒学の礼制により、中国の官僚は「静態的」な性格をもっている。これに対して、江戸時代の武士も「文」という儒学の素養を身につけてはいるが、「武」としての「ダイナミックな」性格を保持しているため、中国の官僚より能動的な性格を帯びる。そして、このような武士の「ダイナミック」な忠誠を代表するものが「諫争」だと言うのである。

この「ダイナミック」な忠誠がいかなる状況で露呈するかについて、武士の忠誠の対象に留意する必要がある。武士にとって、「御家の『安泰』は既成の『和』の維持ではなくて、行動の目標となる。こうした側面はとくに集団の危機感に触発された際に奔騰する。忠誠が真摯で熱烈であるほど、かえって、『分限』をそれぞれまもる形での静態的な忠誠と、緊急の非常事態に際して分をこえて『お家』のために奮闘するダイナミックな

³⁶ 同書、15 頁。

³⁷ 同書、17 頁。

³⁸ 同書、18 頁。

³⁹ 同書、18～19 頁。

忠誠とが、生身をひきさくような相剋をひとりの魂の中にまきおこすのである」⁴⁰。丸山が指摘するように、「御家」は武士の忠誠対象であり、その「御家」の安泰が武士の行動目標となる。そのため、武士の「ダイナミック」な諫言精神が、幕末の動乱期においてももっとも顕在化することになったのである。

本論文は、丸山がここで指摘する武士の「ダイナミックな忠誠」に注目し、それが典型的に現れる江戸時代の「諫」をキーワードとして分析を進める。分析対象としては、まず江戸時代を通じての「諫」をめぐる諸現象を概観した後で、当時の代表的な志士であった下級武士を取り上げ、安政の大獄で獄死した吉田松陰（1830～1859）、禁門の変を起こした久坂玄瑞（1840～1864）、さらに明治初期に佐賀の乱を指揮した江藤新平（1834～1874）を中心に考察する。

3. 先行研究

諫言に関する代表的な先行研究としては、石井紫郎及び水林彪の著述が挙げられる。二人とも近世国制史の視点から、幕藩体制における諫言と中国のそれとの違いについて検討した。

二人はともに、中国儒学の伝統的な諫言概念が、江戸時代の儒学に取り込まれる際に、日中の政治体制の相違から、「忠」、「孝」の概念が修正され、その結果、近世の諫言はその作法や意味内容において、中国儒教から実質的に遠く離れたものとなった、と指摘している⁴¹。また石井は、両国において、「諫言」が「道」を実現する手段であるという理念は同様であるが、中国の諫臣は、「道」の実現を追求すると同時に、「不殺我、公得名。殺我、吾得名」とあるように、「自己の名」をも求める⁴²一方で、近世日本においては、『葉隠』が示すように、「我忠節にて主君の悪名を顕し申に付、大不忠」⁴³という理由から、「忠義の諫言と申は、能御請被成筋を以、潜に申上るもの也」⁴⁴とされ、中国の諫言が顕在化するのに対し、近世日本の諫言は「潜在」性を強調している、と述べている。

水林や石井を含めた多くの研究が指摘するように、日本の「諫言」は家老のような重役にしか許されない行為であり、「諫言」できる者が極めて限られていたため、「諫言」の発展にはその限界があった⁴⁵。

⁴⁰ 同書、19 頁。

⁴¹ 石井紫郎『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』東京大学出版会、1986 年。水林彪「近世の法と国制研究序説（五）—紀州を素材として—」『国家学会雑誌』国家学会、第 94 巻第 9・10 号、1981 年、659～707 頁。

⁴² 石井紫郎、前掲書、205 頁。

⁴³ 前掲、『三河物語 葉隠』（2-129）、308 頁。

⁴⁴ 前掲、『三河物語 葉隠』（2-114）、302 頁。

⁴⁵ 諫言の延長線上にある現象としては笠谷和比谷の考察した「主君押込」が挙げられる。笠谷は「諫言」は「押込」と有機的に連動した抵抗の手段であり、いわば「押込」は物理的強制力をもってする「諫言」の延長であり、「諫言」は穏健的外貌で迫る「押込」に他ならないのである。それ故に通常は「押込」の発動にまで進む必要はなく、「諫言」の段階で抵抗の目的は十分に達成された」と述べてい

「諫言」の実行が江戸の幕藩体制においてきわめて困難であった理由について、前田勉は以下のように論じている。彼は家臣たちに諫言を促す一方で主君に「言路洞開」を求めた儒学者たちに注目し、諫言を普及させようとした儒学者たちの言論を通してこの問題を考察している。諫言が困難であった本質的な要因について、前田は、江戸時代は「武威」の国家であったという結論を下している⁴⁶。つまり近世国家は下からの批判を「理非の差別なし」に抑圧する「武威」の国家であり、家臣の諫言と主君の「言路洞開」は、この国家体制とそもそも相容れないというのである⁴⁷。

このように、従来の先行研究は江戸時代を中心に法制史や思想史の視座から諫言を検討してきた。しかしながら、諫言の全体像を把握するには、諫言がもっとも盛んに行われた幕末を視野に入れる必要がある。したがって、本研究は幕末期に焦点を当て、中国の儒学から摂取した諫言の日本の変容を先行研究を踏まえて概観した上で、幕末から明治初期にかけての時代に諫言の辿った変化を分析する。また、当時の身分秩序の打破を志した下級武士層の上書には、諫言という用語以外に、これと同じ意味方向の建言・建白という漢語表現も現れており、諫言と並行して使用されている。また、維新後の明治政府は五箇条の御誓文の一箇条である「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」を基に、「建白書」の受理制度を布告した。あえて「建白」という語彙を使用したのは、新しい時代を強調しようとしたとも考えられるが、諫言から建言・建白への用語使用は検討に値する問題である。

以上のように、本論文は、諫言、そしてその延長線上にある建言・建白を武士的忠誠心との関連で時間軸に沿って考察する。この通時的視座は従来の時代に限定した研究を補い、「諫言」という文化現象の見取図を提供する点で有意義であると考えられる。

4. 各章の構成

本論文は次の五章から構成されている。

まず、第一章では、江戸時代における武士の忠誠意識を中心に分析する。あわせて、中国的（儒学的）な「諫言」が江戸時代の武家社会において、忠誠との関連で、いかなる概念であったかについても検討する。分析対象としては、武士道の心得を説く代表的な著作『葉隠』（1716）を取り上げる。また、『葉隠』と同時代の赤穂事件（1701）を関連する事例として、そこでの武士の忠誠観を検討する。さらに、儒学者の赤穂事件に対する主な論点を時間軸にそって整理し、武士の忠誠イデオロギーが時代に応じてどのように変化していったのかを概観的に辿る。

第二章では、「御家」に奉公する武士の「ダイナミック」な忠誠心を代表する諫言精神

る。笠谷和比古『主君「押込」の構造』（平凡社、1988年）を参照。

⁴⁶ 前田勉「諫言の近世日本思想史」（『公家と武家Ⅳ—官僚制と封建制の比較文明史的考察—』所収、笠谷和比古編、思文閣出版、2008年）、194頁。

⁴⁷ 同書、188頁。

がもっとも顕著に発揮された幕末期に焦点を当てる。嘉永六年（1853）のペリーの来航後、政局が次第に不安定になっていた幕末において、志士となった下級武士たちの諫言精神は、中国の士大夫のそれと比較して、いかなる特徴を有していたのかについて、吉田松陰を中心に考察する。

中国儒学の伝統的な諫言概念は江戸時代の儒学に取り込まれる際に、日中の政治体制が異なるため、忠誠の拠って立つ基盤が修正された。石井紫郎及び水林彪は、その結果、近世の諫言がその作法や概念内容において、中国儒教から実質的に遠く離れたものとなったことを指摘している。しかしこの差異は、忠誠のベースが異なることによって現れた表面的なものにすぎない。実際には、江戸時代の家臣が死を覚悟して主君に幾度も諫言したように、中国にも比干のように諫死した忠臣や屈原のように汨羅に身を投げた諫臣がいた。したがって、日本の諫死精神と中国の伝統的な諫死精神との相違はより立ち入って検討すべき問題である。幕末においては、有志、とりわけ下級武士層が武士としての「ダイナミック」な諫言精神を発揮し、自覚的な政治活動に取り組むようになる。このような諫言精神を代表する人物として吉田松陰がいる。中国の伝統的な士大夫に比べ、日本の武士がよりダイナミックな精神をもっていたことは概ね肯定できるが、諫言精神を一括して武士の基底をなすダイナミズムと片付けてしまうことは軽率であろう。中国の忠臣と日本の忠臣がこのような当為としての制度を自身の良心へと血肉化する場合に、彼らの心象世界が果たして同様であったか否かは未だ掘り下げられていない問題であり、それを探ることが本章の目的でもある。

そして第三章においては、幕末期における下級武士が幕藩体制の厳格な身分秩序を無視し、積極的に藩府や藩主に上書・諫言した行為の裏にある諫言精神を考察する。ここでは、長州藩の久坂玄瑞、及び佐賀藩の江藤新平を分析対象として取り上げる。久坂も江藤も微禄の家柄の出身であり、幕藩体制において政治参与が許されない身分であった。しかし、尊王・攘夷の論争が白熱していた幕末においては、彼らのような多くの下級武士が、「ダイナミック」な諫言精神に基づき、分を越えて政事について諫言した。この章では、久坂と江藤の尊王攘夷の活動を通して、そこに現れた革新的な理念と、それにもかかわらずなおも保たれていた封建的な思考とに焦点をあてて分析する。

第四章は、江戸時代の幕藩体制において、制度の中に組み込まれた「諫言」がいかなる政体概念であったのかについて検討する。また、幕末においては「諫言」という語彙以外に、「建言」、「建白」などの漢語表現が現れたことにも注目し、この新しい現象の時代背景を考察する。

江戸時代において、「諫言」という用語は藩の家訓書や武士の教訓書に散見され、よく知られた語彙であった。幕末には諫言と類似する意味合いで「建言」/「建白」という漢語表現がしばしば現れたが、維新後は、建白書受付制度が成立したことにより、「諫言」に代わって「建言」/「建白」が圧倒的に多く用いられるようになった。本論は「言路」

の手段となる諫言と建言 / 建白などの漢語の使用法を通して、「諫言」の封建的性格、黒船以降の西洋との接触による近代的政治体制への指向などに関連づけて分析する。幕末になって、それまで政治思想のベースとされてきた儒学のほかに、新知識としての洋学が導入された。洋学の幕末における影響力は、政体構想以外に当時の海防にも多大な影響を与えた。したがって、本章は、洋学を視野に入れ、建言 / 建白などの表現が維新後に次第に主流となっていった時代背景を分析する。

最後に、第五章では、幕末の志士たちの一部が下級武士から中央政府の官僚に転身した後に、近代国家の成立過程で、なぜ最終的に離脱することになったのか、という問題に焦点を当てて、江藤新平をその代表例として考察する。初代司法卿であった江藤は、近代的司法制度の基礎固めに貢献した一人として、革新的な考え方をもっていたと評価されているが、その一方で、韓国征討という対外進出論を唱え、佐賀の乱の首謀者ともなったことから、反動的であったとも見られている。本章は、このような「改革と反動の奇妙な混合物」⁴⁸である江藤の政治思想が、同時代の官僚化した志士たちと同調した部分、そして齟齬を生じた部分について、他の官僚たちの政治思想を傍証として検討する。それによって、幕末期の革新的な志士精神が、明治の官僚世界に適合しなかった要因は何であったのかを明らかにすることが、本章の目的である。

⁴⁸ E・H・ノーマン「日本政治の封建的背景」『ハーバート・ノーマン全集』第2巻所収、大窪愿二編、岩波書店、1977年、171頁。

第一章

江戸時代における諫言像 ― 武士の忠誠意識を中心に ―

はじめに

第一節 『葉隠』における「暈の上の御奉公」

1―1 主君への情念

1―2 御家に対する理念

1―3 主君への情念と御家に対する理念との狭間

第二節 元禄赤穂事件

2―1 「御家の再興」を第一とする家老派―大石良雄

2―2 主君のための「仇討ち」を主張する堀部武庸

第三節 元禄赤穂事件をめぐる儒学者の論評

3―1 赤穂諸士の「義」への肯定論

3―2 赤穂諸士の仇討ち行為への批判

むすび

はじめに

本章は、江戸時代の幕藩体制における武士の忠誠意識を中心に考察し、「諫言」がその中でいかなる位置付けであったかを検討する。分析対象としては、武士道の心得を説く代表的な書物である『葉隠』（1716）を取り上げる。併せて、『葉隠』と同時代の赤穂事件（1701）をその実例として検討する。

戦乱がなくなった江戸時代において、主君に忠義を尽くす行為の場は、従来の戦場から「暈の上」に変わった。徳川幕府は四代将軍家綱（在位 1651～1680）の代から幕藩体制の方針を今までの武断政治から文治主義へと変え¹、それ以降、弓や槍よりも「暈の上の御奉公」がより一層重要視されるようになった。「諫言」は「治世の御奉公」の一つの形態としてこの頃登場し、武士に重んじられた。「治世の御奉公」とする「諫言」は、政体における機能性よりも、武士のエートスと繋がる精神性のほうに重きを置いていた。それは、幕府と藩府の政治体制、及び武士の忠誠意識と不可分の関係にあったからである。

従来の先行研究は、主に中国の「官僚制」と近世の「専制的家父長制的家産官僚制国

¹ 武家諸法度の中にはその変化が明確に表れている。慶長二十年（1615）の「文武弓馬之道、専可相嗜事」は、天和三年（1683）に「文武忠孝を励し、可正礼義事」へと変わり、さらに宝永七年（1710）には「文武之道を修め、人倫を明かにし、風俗を正しくすべき事」と、儒学倫理を基盤に修正された。なお、「殉死」の禁止令は寛文三年（1663）に口達され、天和三年（1683）に公式に武家諸法度に組み込まれた。

家」²という政治体制の構造面から、儒学概念の「諫言」が近世の政治体制の中でいかなる形に変貌を遂げたかについて分析を行っているが³、忠誠という武士のエートスと繋がる諫言精神が、どのような輪郭を持っているのかについてはまだ十分に検討されておらず、分析する余地が残っていると思われる。

江戸時代の武士の忠誠精神や近世の法制、国制などを解明するにあたり、『葉隠』以外に、示唆に富む資料である赤穂事件も重要な手がかりを提供してくれる。赤穂四十六名（四十七名の説もあり）義士の事件は、その発生直後から同時代の儒学者の間で盛んに議論されていただけでなく、歌舞伎などの演劇でも、この事件を元に「仮名手本忠臣蔵」が作られた。この事件について論じる先行研究は、主に赤穂義士の主君への忠誠心及びそれをめぐる近世儒学者たちの議論に焦点を当てており、近世の幕藩体制を支える将軍―大名、大名―家臣という二重構造の分析や、この二重構造の下における武士精神の考察が大勢を占めている。例えば、田原嗣郎は『赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造―』⁴の中で、中央集権的な「仁政」と大名領国制の「お家」という二つの概念を対象として、幕藩体制はこの二重構造により成立し、武士の忠誠観も即ちこの二つの原理と思想により築かれていたと指摘した⁵。幕藩体制下にある二重構造については、水林彪も同様に指摘している⁶。つまり、この二重構造体制により、将軍と家臣の間の楔をなす大名がなくなれば、「仁政」と「お家」思想は相対立するものになる。田原はこれを問題として提起し、赤穂事件及びその事件に対する同時代の儒学者の議論を通し、当時の武士が持っていた幕藩体制という複合的な政治制度の観念構造を解明しようとした。そして彼は、幕藩制はその中核にある「お家」の思想を正統的原理とみなす武士道的空間を有しながらも、その周囲に「仁政」の思想によって支えられる中央政府としての幕府という厚い壁をめぐらした世界であると、結論付けた⁷。

ここで田原は幕府と藩府という二重構造から生ずる思想的対立を「仁政」と「お家」

² 近世の武家社会は主従制と身分階層制度という二つの原理により形成されており、官僚は基本的に身分制と不可分の関係にあった。このような形態を水林は「専制的家父長制的家産官僚制国家」と定義している（水林彪「近世の法と国制研究序説（五）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』国家学会、第94巻第9・10号、1981年、659～707頁）。

³ 石井紫郎「近世の国制における『武家』と『武士』」（『近世武家思想』日本思想大系27所収、岩波書店、1974年）、水林彪「近世の法と国制研究序説（五）―紀州を素材として―」（『国家学会雑誌』国家学会、第94巻第9・10号、1981年、659～707頁）、前田勉「諫言の近世日本思想史」（笠谷和比古編『公家と武家Ⅳ―官僚制と封建制の比較文明史的考察―』所収、思文閣出版、2008年、191～192頁）。

⁴ 田原嗣郎『赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造―』吉川弘文館、1978年。

⁵ 田原嗣郎が提示した徳川期の「仁政」思想において、全国の領地と国民は「天」から将軍に預かったもので、将軍が仁政を行い、人民を安ずることは人君としての天職である。そして、各領地と領民はまた将軍から大名に預かったものである。大名は将軍の命令に服し領国をよく治めなければいけない。そして大名に仕える家臣が大名に忠誠を尽くすことは即ち将軍に対する忠誠である。一方、仁政思想と異質な「お家」思想というのは、大名は領地と領民をその先祖から預かっているという考え方である。大名に仕える家臣団にとってはお家（藩）が最高の価値であり、主君である大名が最高の存在である（前掲、『赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造―』、74～104を参照）。

⁶ 注2を参照。

⁷ 前掲、『赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造―』、229頁。

によって表現しているが、それは要するに、藩、つまりお家の内部に戦国時代から残っている主従関係の契りという衆道的な「情念」、及び士として主君を助け民を安ずるといふ儒教的な治世「理念」が、武士の忠誠観に共存していることを示している。

本章は、田原及び水林が指摘する幕藩体制の二重構造という図式を踏まえて、『葉隠』や赤穂事件を通して武士の忠誠たる情念と理念との葛藤を考察し、さらにそこにおける諫言の位置を明確にする。また、儒学者の赤穂事件に対する論点を検討し、時代とともに変化する武士の忠誠イデオロギーについて分析する。

第一節 『葉隠』における「暈の上の御奉公」

『葉隠』は山本常朝（1659～1719）が三十三年間にわたる主君への奉公、佐賀藩士としての心得及び佐賀藩の出来事などを七年間にわたって同藩の田代陣基に語り、それを田代が筆録し編集したものといわれる⁸。『葉隠』は十一編から成り、最初の聞書第一と第二は武士の本分に関する教訓を、残りの第三から第十一は佐賀藩内、または他藩で生じた事件や、藩主の談話等について記している。

『葉隠』はその冒頭で「御家来としては、国学可^{こころがくべき}心懸事也……大意は、御家の根元を落着、御先祖様の御苦労・御慈悲を以、御長久の事を本付申^{もとづけもうすため}為に候」⁹と記し、奉公人は「国学」、いわゆる藩の歴史、伝統などのことを心得るべきとしている。また「釈迦も、孔子も、楠も、信玄も、終に竜造寺・鍋嶋に被官被懸^{かけられ}候儀無之候えば、当家の風儀に叶ひ不^{もうさざる}申事に候」¹⁰とあるように、佐賀藩の家臣は仏学や儒学、国学などより、自分の御家の学を第一にすべきであると唱えている。この「御家」を至上とする考え方は、いわゆる「暈の上の御奉公」の「公」でもある。主君の御家への奉仕は、主君に忠誠を尽くすことと等しい概念として形成されたことにより、武士の奉公の「公」には、主君を含めた御家もまた、忠誠を尽くす対象として考えられているのである。

奉公人としての精神は、全て序文の「四誓願」¹¹の部分に表れている。「四誓願」は、「於^{ぶどうにおいて}武道おくれ取^{とり}申間敷事」、「主君の御用に可^{たつべき}立事」、「親に孝行^{つかまつるべき}可^{べき}仕事」、及び「大

⁸ 相良亨『『葉隠』の世界』（『三河物語 葉隠』日本思想大系 26 所収、斎木一馬、岡山泰四、相良亨校注、岩波書店、1974 年）、657 頁。

⁹ 前掲、『三河物語 葉隠』、216 頁。

¹⁰ 同書、216 頁。

¹¹ 山本の「四誓願」は、佐賀藩第一の碩学と謳われた石田一鼎（1629～1693）の影響を受けたとされる。石田一鼎は十七歳の時に父を亡くしてその家督を継ぎ、知行三百二十五石で初代藩主鍋島勝茂（1580～1657）の近侍として仕えた。後に二代藩主光茂を補佐し御側相談役として勤めたが、寛文二年（1662）三十四歳の時、光茂の忌諱にふれて支藩小城に預けられ、更に西松浦郡山代郷に貶謫された。幽居七年にして許され、寛文九年（1669）に佐賀郡松梅村下田に隠居した。一鼎の学識を慕って教えを乞う者も多く、山本もその一人であった。一鼎の著した『要鑑抄』は士分や奉公の故実、武士道について論じたもので、その中核思想は全て冒頭の「武士道ニ於テ未練ヲ不可取」、「先祖ノ名字ヲ断絶スヘカラス」、「畢竟主君之御用ニ可立」の三箇条に纏められており、これが『葉隠』の四誓願の原型であるともいわれる（川上清吉『葉隠の哲人石田一鼎』霞ヶ関書房、1942 年、及び『佐賀県近世史料』第八編第三巻、佐賀県立図書館、2007 年、6～7 頁）。

慈悲をおこし、人の為に可^{なるべく}成候事」という四箇条で成り立っており、山本はこれらを武士として常に心掛けるべきことと考えている。

1-1 主君への情念

山本は九歳の時に佐賀藩の二代目藩主鍋島光茂（1632～1700）のもとに召し出され、当初「小僧」として側近に仕え、次いで御小姓役、御書物役手伝に昇り、光茂が死ぬまでの三十三年間、主君への奉公に努めた。彼は奉公の心得を『葉隠』以外に、自らの養子に宛てた「愚見集」（1708）にも記している。「愚見集」は奉公の根本としての忠孝、武勇、慈悲、知恵、及び奉公の枝葉としての風体、芸能等を記した武士の教訓書である。そこには奉公人としての基本的な姿勢について次のように記されている。

奉公人ハ忠孝を可尽為計ニ生レ出たるといふ事を真実ニ知ヘシ、忠孝といへは二ツノやうなれとも、主ニ忠節を尽スガ則親ニ孝行也……奉公とハ公ニ奉ルと書たり、**即今身命ヲ殿様ニ奉りて見よ、はや私と云物ハ一物もなく成也、身命主君ノ物なれハ、主人を心王と崇奉りて、御下知を請て万事をなせ、十二時中行住座臥、飲茶談笑、挙手動足、忠節ならずと云事なし、御城ニ出、御前ニ出、役儀を勤る計を奉公と云ニハあらず、則座ニ大切之御被官一人出来たる也、是を名付て忠臣といふ。則奉公之根本也**¹²。（太字強調は筆者）

主君に忠誠を尽くすことは、すなわち親孝行することであるとする山本の考え方は、武家社会の忠・孝が一体化した忠誠概念を示している。忠を第一とする彼は、「身命」を主君に捧げることが「奉公」であると考えている。このように、主君のために命を捨てる奉公精神には、前代から受け継がれてきた衆道的な契りが内在している。

武家社会における主従関係の契りは、一方において「主従の日常生活における双数的『ちぎり』によって理念化されている」¹³。そこには制度的媒介が存在せず、「定型化した死の心象がこうして長い時間をかけ、主従の日常において彫琢され心象上の作品として共有される。しかし彫琢された理想的な、理念的な死は現実の合戦において実現されることはまずない」¹⁴、というような理念化した「相聞的」情念である。他方において、それは「形而下の御恩と形而上の誉れ」¹⁵を合わせた合戦的な情念である。この合戦的

¹² 山本常朝「愚見集」（『佐賀県近世史料』第八編第一巻所収、佐賀県立図書館、2005年）、853～854頁。

¹³ 前野佳彦『中世の修羅と死生の弁証法』法政大学出版局、2011年、76頁。また、主従情念の生成に関する詳細は同書を参照されたい。

¹⁴ 同書、77頁。

¹⁵ 同書、105頁。前野は「合戦は、本来的に非日常的な定位行為であり、その目的は（特に中世的合戦の場合）形而下の恩賞と形而上の誉れである。したがって合戦休日における日常的祝祭性の〈遊び〉には、本来の修羅世界の「真剣さ」が内挿されることになる。この修羅世界は儀礼世界でもあった。その儀礼の奥底に偶発的現実の世界が広がっている」と指摘している（同書、104頁）。

な情念は、やがて封建集権の進展に伴って論功行賞という御恩が形骸化するにつれて、個人的エートスへと昇華していく¹⁶。要するに「『御恩』－『奉公』の儀礼性そのものに原初的にこうした双数的情念が内在」¹⁷しているため、主従関係は最終的に「原初的な双数性へと復帰」¹⁸するのである。

では、『葉隠』に描かれる主君に対する情念は、いかなるものであろうか。山本が生まれた万治二年（1659）は、大坂の陣（1614～1615）や島原の乱（1637～1638）などの内乱が既に治まり、世情が安定を迎えた時代であった。この頃になると、主従関係は合戦時代にみられた殉死などの情念的な契りではなく、「禄」によってのみ繋がっていた。また、当時の文治政治において、殉死（『葉隠』では追腹¹⁹と呼ぶ）は、寛文三年（1663）に「殉死ハ古より不義無益の事なり」²⁰という理由で幕府により禁止令が口達され、さらに天和三年（1683）²¹と宝永七年（1710）²²にはこれが武家諸法度に組み込まれ、固く禁じられるようになる。佐賀藩は、この幕府による殉死の禁止令より一足早い寛文元年（1681）²³に禁令を發布している。つまり、文治政治における殉死の禁止は、「殉死といういびつな人格的關係を『不義無益』として否定することで、主従の人格的關係そのもののあり方を変えよう」と²⁴するものであり、また、家臣は主君という人格に忠誠を尽くすのではなく、今後は非人格的な「御家」に奉仕することをも意味している。

しかしながら、山本はなお全身命を主君に捧げるという合戦時代の感情を尊重し、主従関係の契りを強化しようと考えている。彼は主君に「身命」を捧げるという情念的な感情を次のように「恋」に擬えている。

¹⁶ 同書、118 頁。

¹⁷ 同書、144 頁。

¹⁸ 同書、144 頁。

¹⁹ 『葉隠』では、幕府のいう「殉死」はすべて「追腹」という語を用いている。その理由について小池喜明は次のように指摘している。佐賀藩の二代目藩主光茂以前の代では、「殉死」という用語を使用していた。しかし、二代目藩主、江戸育ちの光茂は、「殉死」を戦国の蛮風と見なし、「追腹御停止」の禁令を發布した。「佐賀藩では『殉死』はあり得ず、事実としてすべて主君の許可を得られぬままの『追腹』とな」った。したがって、『葉隠』において、光茂以前の事実上の「殉死」をすべて「追腹」と改めて統一していることには、山本の主君光茂に対する心遣いが窺える（小池喜明『葉隠一武士と「奉公」』講談社学術文庫、1999/2004 年、349～354 頁）。

²⁰ 「寛文三年五月廿三日 殉死ハ古より不義無益の事なりといましめ置といへとも、被仰出無之故、近年追腹之者餘多有之、向後左様之存念可有之者にハ、常々其主人より殉死不仕様ニ堅可申含之、若以来於有之者、亡主不覚悟越度たるへし、跡目之息も不令抑留儀、不届可被思召者也」（『徳川禁令考』前集第一、法制史学会編、創文社、1959 年、65 頁）。

²¹ 「天和三年癸亥年七月廿五日 殉死之儀、彌令制禁事」（前掲、『徳川禁令考』前集第一、66 頁）。

²² 「宝永七年庚寅年四月十五日 殉死の禁、更に厳制を加ふる所也、或ハ徒黨を殖て、或ハ誓約を結ふのとき、妄に非義を行ひて敢て憲法を犯すの類、一切に厳禁すへき事」（前掲、『徳川禁令考』前集第一、69 頁）。

²³ 寛文元年七月七日、二代目藩主光茂の代に、佐賀藩は「追腹」の禁止令を發布した。『葉隠』も「御追腹の者被差留。以来御法度に被仰付候。其後、紀州光貞卿御感心、御家中追腹法度に被成候。其後、寛文三年、公儀御法度に成也」と記している（前掲、『三河物語 葉隠』、351～352 頁）。

²⁴ 横田冬彦『天下泰平』日本の歴史 16、講談社学術文庫、2009 年、287 頁。

奉公人は、心入一つにて澄事也。分別・芸能にわたれば事むつかしく、心落着ぬもの也。又、業にて御用立は下段也。分別もなく、無芸・無勇にて、何の御用にも不立、田舎のはてにて一生朽果る者が、我は殿の一人被官也、御懇にあらふも、御情なくあらふも、御存被成まひと、夫には曾て不構、常住御恩の忝き事を骨髓に徹し、涙を流して大切奉存分也。是は安き事也。是はならぬ生付とては有まじ。又如斯思ふまい事ではなし。されどもケ様の志の衆は稀成もの也。只心の内ばかりの事也。長けの高き御被官也。恋の心入のやう成事也。情なくつらき程、おもひを増也。適にも逢時は、命も捨る心に成忍恋などにて候。能手本なれ。一生言出す事もなく、思ひ死する心入は深きこと也。又自然 偽 に逢ても、当座は一人悦、偽の顯るれば、猶深く思ひ入る也。君臣の間、如斯成べし。奉公の大意、是にて埒明也。理非の外成ものなり²⁵。
(太字強調は筆者)

奉公人は、主君に「一心」すれば良いと考える山本は、「業」つまり手段を使って主君の御用に立つことは「下段」の奉公であると述べている。幕藩体制において、奉公人は主君から拝領する「禄」によって主君と繋がっているが、山本はこの禄を主君からの「御恩」として、主君に専心する奉公精神を根拠づけている。このように、この「御恩」は主君に忠誠を尽くす重要な契機となったのである。主君の御恩に感謝する「志」を心の中に秘める者は、「長けの高き御被官」である。これもまた、山本の理想とする奉公人の姿である。彼はさらに主君に対するこのような感情を「忍恋」と譬えており、この「理非」で弁別できない「忍恋」こそが奉公人の良い「手本」とであると主張している。

彼の語る「忍恋」とは、「恋の部の至極」²⁶であり、「命のうちにそれとしらざるは、深恋にあらずや」²⁷、「思ひ死に極るは至極也」²⁸と言うように、「思い死に」の感情を秘めることが「忍恋」の極みであるという。「忍恋」を主従関係に擬える山本は、「思い死に」という情念を奉公の精神に転化している。つまり、主君への忠誠を代表する「命を捨てる」行為は、泰平の世において発揮する場がなくなったが、その行為に必要な精神の価値を強調して、それを畳の上の奉公精神として解釈しなおすのである。したがって、山本は絶えず「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」²⁹と述べて、武士は生死を度外視する心構えを常にもつべきであると主張する。奉公精神を「忍恋」に擬える彼は、この情念的な精神を内面化して、この内面的な情念こそが至極の奉公であるという。ここにおいて、彼の主君に対する情念は、原初的主従情念に基づく衆道的な契りであることが明らかになる。

²⁵ 前掲、『三河物語 葉隠』(2-62)、289 頁。

²⁶ 前掲、『三河物語 葉隠』(2-34)、282 頁。

²⁷ 同書、282 頁。

²⁸ 同書、282 頁。

²⁹ 前掲、『三河物語 葉隠』(1-2)、220 頁。

したがって、『葉隠』のなかで繰り返し強調される、「奉公人は一向に主人を大切に働く迄也。是最上の被官也……此上に、智恵・芸能も有て、相応の御用に立は猶幸也。何の御用にも不立、無調法千万の者も、^{ひたす}涔らに奉歎志さへあれば、御頼切の御被官也。智恵・芸能ばかりを以御用立は下段なり」³⁰というただひたすら主君を思う奉公精神もまた、先述したような内面的な情念に裏付けられているのである。

1-2 御家に対する理念

山本の主君に対する情念的な奉公精神には、制度や法を度外視する非合理的な考え方が現れているが、「暈の上の御奉公」について、彼は次のように述べている。

忠節の事。一番乗・一番鎗幾たびよりも、主君御心入を直し、御国家を固め申すが、大忠節也。一番乗・一番鎗杯は、命を捨て懸る迄也。其場ばかりの仕事也。御心入を直し候事は、命を捨てても不成、一生骨を折事也。^{まず}先諸傍輩も請取、主君も御請取候者に成て、御心安く、御懇意をうけ、年寄・家老役に成たる上にてなければ、諫申事不相叶、此間の苦労、難量事に候。我ための私欲の立身さへ骨折事也。是は主君の御為ばかりに立身する事なれば、中々精気続き難き事也。^{しかれ}然ども此当りに眼を不付しては、忠臣とはいふべからず³¹。（太字強調は筆者）

山本は戦乱時代の忠誠と「暈の上の御奉公」の時代における忠誠を比べ、「一番乗」や「一番鎗」のように戦場で果たす仕事よりも、主君の「御心入を直」し、「御国家を固め」という暈の上の御奉公のほうが「一生骨を折」る仕事であると語っている。つまり、一番乗や一番鎗が戦場での一時的な仕事であるのに対して、暈の上の御奉公は奉公人が生涯行うことであり、戦場で「命を捨てる」忠誠とは異質なものである。そして、いかに主君の「御心入」を直し、「御国家」の基盤を固めるかという手段として、彼は「諫言」を取り上げている。

奉公の至極の忠節は、主に諫言して、国家治むる事也。下の方にくどつきまはりては益に不立。^{しかれ}然ば家老に成が奉公の至極也。私の名利をおもわず、奉公名利をおもふ事ぞと、^{とく}得と胸に落、さらば一度御家老に成て見すべしと覚悟を極め申候³²。（太字と傍点は筆者）

主君に忠誠を尽くす具体的な行為として山本は諫言を第一に挙げている。彼は諫言と忠誠を結びつけ、主君に諫言して国家（藩）を治めることが、忠誠の極みであると考えて

³⁰ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-3）、220 頁。

³¹ 前掲、『三河物語 葉隠』（11-28）、554～555 頁。

³² 前掲、『三河物語 葉隠』（2-141）、314 頁。

いる。ここで彼のいう奉公とは、主君を含めた御家に対してである。

しかしながら、身分秩序の厳しい体制の下では、諫言は「家老」などの上層武士にし
か許されていなかった。『葉隠』に「其位に至らずして諫言するは、却て不忠也」³³と記
されているように、たとえ主君に対して忠勤を尽くす志を持っていたとしても、一定の
地位・身分に達していない者が諫言すれば、却って「不忠」になるのである。そのため、
山本は、『主君の御用に立べし』、是を家老の座に直りて諫言し、国を^{おさむべし}可治³⁴として、
主君の御用に立つとは、家老の座に就いて主君に諫言することであり、これが「暈の上
の御奉公」の理念であると説いている。山本は主君への奉公精神において、「忍恋」、「思
い死に」、「理非」を弁別しない、などの情念的な一面を見せているが、「暈の上の御奉公」
における幕藩体制の身分秩序に則した考え方からは、彼の情念が理性的な制度を維持す
ることにも寄与したことが窺える。

関が原の戦いを収めて天下統一を成し遂げた徳川家康は江戸幕府を開き、その後まも
なく慶長二十年（1615）年に武家諸法度を発布した。その第一条目には「文武弓馬之道、
専可相嗜事」とあり、武士は「文」「武」を兼ね備えることが求められている。また、幕
府は、儒学とりわけ朱子学を補佐として、体制を強固なものとし、秩序を整えた。そし
て、「戦場の戦士」から「暈の上の奉公人」に転じた武士は、各々の職分により奉公する
ことがその役目となったのである。

このような幕藩体制においては、山本が考える「暈の上の御奉公」は、基本的には当
時の制度に即している。また、諫言する資格をもつ身分が、家老など一部の上級武士に
限定されていたことは、佐賀藩のみならず、当時の他の藩も同様であった。幕藩体制に
おける諫言の詳細については、第四章で詳しく論じる。

山本は、主君個人への奉公精神については、絶えず命を捨てることを唱えているが、
暈の上の御奉公における大忠節としての諫言については、「諫言・異見は、和の道、熟談
にてなければ、用に不立候。きつと仕候申分^{もうしぶん}忤^{あひなり}にては、当り合に成て、安き事も直らぬ
もの也」³⁵と記しているように、死を覚悟する苛烈な「諫諍」や「諫死」を強調してい
ない。彼は「忠之肝要ハ諫ニ極ル、治国平天下ノ根本なれハ尤無他事事也、然れ共節ニ
臨て一命を捨る者ハ多けれ共、主人ニ御異見を申者ハ昔・稀也、畢竟罪を恐レ身を思ふ
故也、前ニ不云や、身命を主君ニ抛置たる者何ぞ諫るニ難からん、尤御異見を申上ルニ
ハ品有へし」³⁶と、諫言にも必要な「命を捨てる」覚悟については述べているが、こ
での死の覚悟は、全身命を主君に捧げるという主君への情念と必ずしも連結してされず、
むしろ「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」というような武士の士気と意気込みに関わ
っているように思われる。

³³ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-43）、233 頁。

³⁴ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-19）、226 頁。

³⁵ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-152）、259 頁。

³⁶ 山本常朝、前掲、「愚見集」、854 頁。

次に、『葉隠』に記される諫言の実例を通して、いかなる諫言の方法が忠節とされたかを検討する。

将監、常々被申候は、「諫と云詞、早私也。諫は無きもの也」と申候。一生御異見申上たるを知らる人なし。又一度も理詰にて申上たる事なし。潜に御納得被成候様に申上候由。前々数馬も終に「御用」と申て罷出御異見申上たる事なし。御序に、潜に申上候に付、能御受被成候。外に存たる者無之故、御誤終に知れ不申。理詰にて申上るは、皆我忠節にて主君の悪名を願し申に付、大不忠也。御受不被成時は、弥御悪名に成り、不申上には劣り候て、我ばかり忠節者と諸人に知られ申迄に候。潜に申上、御受不被成時は、不及力儀と存果し、弥隠密して、色々工夫を以、又申上仕候へば、一度は御受被成事に候。御受不被成、御悪事有之時、弥御味方仕、何とぞ世上に知れ不申候様に可仕事、と也³⁷。（太字強調は筆者）

山本は年寄役に就いた中野将監³⁸と家老の中野政利³⁹を例に取り、二人の「理詰」ではなく秘かな諫言を忠誠と見なしている。「主人に諫言をするに色々有べし。志の諫言は脇に知れぬ様する也。御気に逆はぬやうにして御癖を直し申物也」⁴⁰。主君に対するこのような密かな諫言行為を山本は「志の諫言」と称している。また、ここにおける諫言を通して家を治めるという山本の考え方は、儒学における諫言の働きによって治国平天下を目ざす理念と共通している。しかしながら、山本が忠誠とみなす理によらない諫言は、儒学の理による諫言論とは大いに異なっている。

理によらない諫言については、『葉隠』の中に次のような例もある。中野数馬利明⁴¹が年寄の職に就いた頃、羽室清左衛門⁴²を含めた五人の家臣が主君の「御意に背」いたので、「切腹」を命じられた。そこで、中野は藩主の綱茂（三代目）に「御助被成候様に」⁴³と申し上げたところ、綱茂は「詮義相極、切腹申付候に、可助道理有之候て申義に候哉」⁴⁴と、中野に尋ねた。中野が「道理は無御座候」⁴⁵と申し上げたところ、「道理無之処に助候様にと申義、不届に候」⁴⁶と、綱茂は中野を叱りつけた。中野はその場を退いた

³⁷ 前掲、『三河物語 葉隠』（2-129）、308 頁。

³⁸ 中野将監、名は正包。中野家から山本家を嗣いだ常朝の父重澄の次兄将監正守の孫で、山本常朝にとっては従兄の子にあたる。光茂時代の年寄役であったが、元禄二年（1689）九月、君命により切腹。介錯は当時三十一歳の山本常朝であった（小池喜明、前掲、『葉隠一武士と「奉公」』、259 頁）。

³⁹ 中野政利は、山本常朝の父の長兄中野内匠茂利の長男であり、山本の従兄にあたる。光茂代の加判家老をつとめた（同書、259 頁）。

⁴⁰ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-110）、251 頁。

⁴¹ 前述した中野政利の子。

⁴² 家老に次ぐ着座の身分。

⁴³ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-136）、256 頁。

⁴⁴ 同書、256 頁。

⁴⁵ 同書、256 頁。

⁴⁶ 同書、256 頁。

が、再び参上して、同じことを七回繰り返した。そこでついに綱茂は「道理は無之候処に七度迄申ことに候間、助くる時節にて有べし」⁴⁷と考え直して、五人の助命に同意したという。

中野が主君に七回も諫言したことは、儒学の「三たび諫めて聴かれざれば則ち^{これ}之を逃る」⁴⁸という諫言の古典的な精神とは異なっている。彼の七度にわたる理によらない諫言は、五人の家臣の助命という目的を果たした。その成功は「組織の成功」⁴⁹であると小池は指摘している。家老など藩の重役たちは、「御家」の安泰を維持するために、諫言で主君の「御心入れ」を直すことができなければ、主君を「押込」める慣行が当時であった。綱茂は中野を組織人とみなしており、彼の意思が組織の意思だと受け取ったという。

幕藩体制においては、藩の領地は幕府からの預かりものと認識されており、藩府がうまく政理を行わず「御家騒動」⁵⁰に至れば、幕府はいつでも御家を改易し、領土を没収する権利を持っていた⁵¹。そのため、「御家」の安泰を維持することが主君を含め、藩政に参与できる重役たちの責任となった。諫言は主君の「御心入れ」を直す働きを担っているため、御家の存続にかかわる一つの機能として認識されている。山本が諫言を畳の上の御奉公における大忠節とみなしているのも、この御家の存続という考え方に裏付けられていると思われる。上述したように、諫言で主君の悪政を正すことができなければ、御家に対する忠義という理由で家老たちが主君を押し込める行為が江戸時代には正当化されていた⁵²。「主君押込」について、笠谷和比古は、「御家」を基軸とする秩序観念において、主従関係は一代限りの属人的要素を希薄にし、永代の属門的關係に大きく比重を移していく。主君は依然として重要視されているが、「御家」の存続と対比した場合は、御家が第一義として優先されると、指摘している⁵³。

1-3 主君への情念と御家に対する理念との狭間

山本は主君の光茂（1632～1700）が隠居するまでに奉公人の理念とする家老の座に上れなかった。しかし、光茂の長年の宿願であった歌道の「古今伝授」を生前に届けたことは、彼の主君への奉公精神の現われである。

光茂は十九歳の頃より歌書を好んで、「歌書一片」に夢中になっていた。このことが勝茂（1580～1657）に知られると、勝茂は「歌は公家の所作也。武家に用なし。面々家職を捨て、何として国家を相続可成哉。只武篇・政道の事を可心懸こと也」⁵⁴と、光茂を

⁴⁷ 同書、256 頁。

⁴⁸ 『礼記』「曲礼下」、新釈漢文大系第 27 巻、竹内照夫著、明治書院、1971/1972 年、70 頁。

⁴⁹ 小池喜明、前掲、『葉隠一武士と「奉公」』、241 頁。

⁵⁰ お家騒動に関しては、福田千鶴『幕藩制の秩序と御家騒動』（校倉書房、1999 年）において、江戸時代に行われていた「御家騒動」をめぐる事件について詳細な分析がある。福田は、お家騒動が生じる原因を「主従不和型」、「藩政改革型」、「継嗣争い型」の三つに分類している。

⁵¹ 石井紫郎、前掲、「近世の国制における『武家』と『武士』」、494～495 頁を参照。

⁵² 笠谷和比古『主君「押込」の構造—近世大名と家臣団』講談社学術文庫、2006 年、177～178 頁。

⁵³ 同書、198～199 頁。

⁵⁴ 前掲、『三河物語 葉隠』（5-70）、367 頁。

譴責した。合戦経験のある勝茂は、和歌を公家の嗜みとみなしており、「政道」の役には立たないと考えている。

一方、山本と同様に合戦を体験したことがなく、泰平の世に生まれた光茂は、「御先祖様方は乱国に御生れ合、日本に名を御揚被成たる御武篇にて候。^{たまたま}適人と生れ、後々迄名を残す事をせでは無念の事也」⁵⁵と考えており、「御治世なれば、武篇を以名を可残こと不叶。乱世ならば御先祖様に劣るまじくとおもふ也。今の時に名を可残は歌学を遂、日本第一の宝、武家において幽斎ならで類もなき古今伝受を致し、一生の思ひ出にすべし。政道の障にさへならずば、祖父様へにも申訳も有之。不孝にも成まじ」⁵⁶と、勝茂とは全く異なる考え方を示している。このように、歌道に夢中だった光茂（在位 1657～1695）は、元禄八年（1695）に引退して、家督を長男の綱茂（1652～1707、在位 1695～1706）に譲ったのである。

光茂の考え方は、当時の武家社会では必ずしも異例ではない。外様大名の薩摩藩三代目藩主の島津綱貴（1650～1704）は、三男の島津久儔に七箇条の「島津綱貴教訓」（1702）を与えた。その第一条は、「一国之守護ト為テ一郡之主ト為テ、国政ヲ行ヒ士民ヲ撫育スル事、文武之道ヲ知ラ不シテハ成リ難シ。文武者車之両輪、鳥之両翼、欠ク可カラ不ル事」⁵⁷と記し、「文武兼備」が士に義務付けられているのに対し、治者の藩主にも「文武兼備」が課せられている。そして島津が語る「文武之道」とは、即ち「武門におゐては不珍事といへども、朝夕読四書五経師而通其儀、弓馬武芸之儀は勿論、能^{よく}軍法を学習、手跡^{つたな}杯陋からず、書嗜、賦詩、歌和歌、弹琴は風流之事、皆以是左文右武之栄業にして、かける時は車之一輪を折、鳥之一翼をおれるにひとし」⁵⁸ということである。「武」においては平常の武芸に励むほかに軍法の習得も必要である。また「文」においては儒学の四書五経は勿論、詩賦、和歌、琴など元来公家に属する文道も勧めている。このように、治世においては、藩主の文武兼備の「文」に対する考え方は、「政道」を助ける儒学的な文の他に、戦国武将の細川幽斎（1534～1610）をモデルとするような古今伝授的「文」も含んでいるのである。

また、磐城平藩の藩主内藤義概（1619～1685）が晩年に和歌に溺れ、藩政の実権を家老に譲ったことで、延保八年（1680）に御家騒動が起きたというような例もあった。

元禄十三年（1700）、光茂の逝去後、山本は俗世における死を意味する出家という形で隠居した⁵⁹。自身の奉公の人生について、彼は晩年に次のように顧みている。

⁵⁵ 同書、367 頁。

⁵⁶ 同書、367～368 頁。

⁵⁷ 島津綱貴「島津綱貴教訓」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、64 頁。

⁵⁸ 同書、65 頁。

⁵⁹ 「六十、七十迄奉公する人有に、四十二にて出家いたし、思へば、短き在世にて候。夫に付、難^{ありがたき}有事哉と思はるゝ也。其時は死身に決^{けつじょう}定して、出家に成たり。今思へば、近時迄勤めたらば、扱々いかい苦勞可^{かな}仕^{つかまつるべく}候。十四年安楽に暮候事、ふしぎの仕合也」（前掲、『三河物語 葉隠』（1-37）、231 頁）。

何の徳もなき身にて候へば、させる奉公も不仕^{つかまつらず}、虎口前仕^{こぐちまえつかまつり}たる事もなく候へども、若年の時分より、一向に「殿の一人被官は我也。武勇は我一人也」と骨髓に徹し思ひ込候故か、何たる理発人^{りはつにん}、御用に立人^{たつ}にても、押下げ得不被^{おしきえ}申候。却て諸人のとり持、勿体なく候。只殿を大切にと存、何事にてもあれ、死^し狂ひは我一人と内心に覚悟仕たる迄にて候⁶⁰。

(傍点強調は筆者)

主君に対するひたむきな「忍恋」や理非を弁別しない「思い死に」は、「死狂ひ」ともいえるような情念である。この主君のために命を捨てても良いという「死狂ひ」精神について、彼は大阪で奉公した時の例を取り上げている。「大坂にて御夜の物・御蒲団拝領のとき、『慰方^{なぐさみかた}に被召仕候者は、加増とは遠慮故、志迄にくるゝぞ、年寄共え礼にも及ばぬ』と被仰候時、『哀昔ならば、此蒲団を敷、此夜着を被り、追腹^{めしつかわれ}可仕^{つかまつるべき}もの』と骨髓に難有奉存候也」⁶¹という。

山本の奉公精神においては、主君に対する「思い死に」の情念と、御家の安泰を維持する理念が、互いに矛盾せず共存している。しかしながら、世情が安定した江戸時代には、新しい秩序として御家の安泰の維持が幕府に要請されており、各藩主・藩府もそれを認識していた。当然、山本自身もこのような時代状況をよく理解していたと考えられる。主君の光茂が亡くなった際、当時殉死は禁止されていたが、彼は主君に対する「死狂ひ」の精神から、主君のあとを追って死ぬこともできただろう。しかしながら、この主君に対する「死狂ひ」精神は、「昔ならば」と彼自身も語っているように、旧時代のものであると考えると、彼の客観性が現れている。

『葉隠』に表れた主君への情念、及び御家に対する理念との軽重は、山本のみが抱えていた問題ではない。有名な「元禄赤穂事件」においても、これと同じ葛藤が存在したのではないと思われる。

第二節 元禄赤穂事件

元禄十四年(1701)の三月十四日、赤穂藩主の浅野長矩(1667～1701)は「私の遺恨」⁶²により江戸城中で旗本の吉良義央(1641～1702)に斬りかかり負傷させた。同日、浅野は切腹を命じられ、御家は改易されたが、翌年の元禄十五年(1702)十二月十四日に、赤穂藩の家老であった大石良雄(1659～1703)を始めとする四十七名の遺臣が吉良邸に乱入して吉良義央を殺害した。

⁶⁰ 前掲、『三河物語 葉隠』(2-64)、290頁。

⁶¹ 同書、290頁。

⁶² 目付の多門伝八郎が浅野長矩の事情聴取を命じられて記した「多門伝八郎覚書」によれば、浅野が吉良に斬りかかった理由について、「私之遺恨有之、一己之以宿意前後忘却仕、可打果存候に付、及刃傷候」とあり、私的な遺恨により前後を考えずに、吉良を打ち果たそうとして刃傷に及んだことが分かる(「多門伝八郎覚書」『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年、165～166 頁)。

浅野が亡くなってから討ち入りまでの約一年八ヶ月の間に、遺臣たちの内部では二つの議論があった。「御家の再興」を第一義とする家老の大石良雄を代表とする主張と、「吉良義央を討つ」と唱える江戸藩邸の堀部武庸（1670～1703）を始めとするいわゆる急進派の主張である。しかし、この両派の遺臣たちは完全に対立していたわけではなく、奉公としての「忠誠」を発揮するという課題に直面した際に、非人格的な「御家の再興」をめざすか、もしくは「主君の仇討ち」を実行するかという点で葛藤が生じていたのである。両派の確執の過程は吉良を討つと主張する堀部武庸が残した「堀部武庸筆記」⁶³の中に全て記録されている。

2—1 「御家の再興」を第一とする家老派—大石良雄

浅野長矩は江戸城中で吉良義央を傷つけ、その日の「暮方に切腹」を命じられた。そして浅野家の跡継ぎの資格を有する浅野長広⁶⁴（1670～1734）は、長矩の刃傷事件によって翌日には「閉門」の身となり、さらに幕府は赤穂藩の江戸藩邸及び赤穂城の「収公」という決断を下した⁶⁵。このような非常事態のなか、国元の赤穂藩内では、「追腹」を切るか、或いは「籠城」するかなど様々な意見が出された。その中でも、家老大石良雄の立場が、幕府の派遣した受城の目付役に差し出す願書の中に示されている。この願書の趣意について「堀部武庸筆記」は次のように記している。

今度内匠頭不調法仕候に付、御法式之通、被仰付候段奉畏候。然れ共上野介殿御生存之由承伝候。左候得ば当城離散仕、何方へ面を向可_レ申様無御座候。此段家中一同之存念に御座候に付、色々教訓仕候得共、田舎者にて御座候得ば、不通に承引不仕候。^{さりながらもし}乍去若離散仕、安心可仕^筋に御座候は^べ、各別之儀に御座候。奉対上毛頭御恨ヶ間敷所存無御座候得共、於当城^{餓死}可仕覚悟御座候⁶⁶。（太字強調は筆者）

⁶³ 本論が取り扱う「堀部武庸筆記」は岩波書店の日本思想大系 27『近世武家思想』に収録された資料であり、その底本は東京大学資料編纂所に収蔵される、水戸藩儒青山勇の明治 22 年に謄写したものである。「堀部武庸筆記」の成立事情については、その文末に「堀部安兵衛報警前年自書写、以附先人」と記されている。堀部は事件当初の元禄十四年から翌年の五月（旧暦）までの間に、大石良雄を含めた同志からの書簡、及び自身の手紙を自ら書き写し、さらに補足として説明の文書を書き加え、まとめた資料を友人の細井広沢（1658～1735）に贈った。したがって、信憑性の高い史料であると判断されている（『近世武家思想』日本思想大系 27、岩波書店、1974 年、270 頁を参照、田原嗣郎『赤穂四十六士論—幕藩制の精神構造—』吉川弘文館、1978 年、17～18 頁を参照）。

⁶⁴ 浅野大学長広は長矩の弟であるが、元禄八年（1695）に浅野長矩の養継子となった。

⁶⁵ 「脇坂淡路守安照。木下肥後守公定は。浅野内匠頭長矩が播州赤穂城収公のこと仰付られ。長矩が弟大学長広兄が事に坐して閉門せしめらる」（『徳川實紀』『新訂増補国史大系』43 巻所収、黒板勝美編、吉川弘文館、1999 年、433 頁）。

⁶⁶ 堀部武庸「堀部武庸筆記」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、182～183 頁。筆者訳：この度内匠頭（浅野長矩）が不調法したことにより、法の通りに（切腹を）仰せ付けられ、我々家中の者共恐縮しております。しかしながら上野介様（吉良義央）はまだ生存していることを聞き、当城離散して、家中の者は何方へ面を向けることができます。このことは家中一同の存念であり、色々教訓しましたが、田舎の武士なので得心しておりません。とはいえ離散して安心できる筋がありますならば、各別のことでございます。上に対して奉り、少しも恨みがましい所存はございませんが、当城にて餓死する覚悟はございます。

この願書の主旨は、即ち目付役を介して、幕府に家中の者が安心できる「筋」を立ててほしいという願いであった。大石は所望する「筋」を明らかにしていないが、彼が当初から命を捨てる覚悟をしていたことは確かであろう。

一方、江戸における家老たちは、「内匠日来奉重公儀被致勤仕事」⁶⁷、また「城無滞引渡可申儀、内匠日来之存念に相叶、家中之者共忠節と被存候」⁶⁸と考え、主君は日頃から幕府を重んじて奉公していたため、家臣も主君の意志を継ぐべきだ、という立場をとっていた。

ここで大石と江戸の家老たちの意見が分かれる。「筋」が立たなければ、殉死は亡くなった主君への忠誠の証であると考える大石と、主君が亡くなっても家臣は主君が重んじた幕府への忠を尽くすべきだとする江戸家老は、主君への忠誠という点では一致しているが、忠誠の内実において相反していたのである。当時、殉死は既に禁じられていたので、大石が赤穂諸士を率いて殉死すれば、即ち幕府の法を犯し、日頃「公儀」、つまり幕府を重んじてきた主君の意志に背くだけでなく、幕府に対しても不忠となる。しかしながら、幕府の目付役への願書にもあるように、赤穂諸士らにとって納得できる「筋」を示してほしいというのが大石の第一の願いであり、命を捨てることはあくまでも最終手段なのである。とりわけ江戸の家老たちの意思を把握した後には、彼が所望する「筋」が具体的に浮かび上がっている。それはすなわち浅野家の再興である。

「吉良を討つ」と主張する藩士堀部武庸に宛てた大石の手紙には、その意志がはっきりと現われる。

兎角大学様御安否次第之事と存候。如し斯成行候も偏に大学様御為を奉存候故に候得ば、此節何様之儀候共、時節を相待、何卒御首尾宜、人前之御交も被成能事も候得ば御本望至極、然る上は何様に罷成、出家沙門之身と成候共夫迄之儀、此上亡君様大学様へ忠義に存極罷在候間、此節忤とかくの存念無之、一筋に大学様御為宜様にと、朝暮存念之外無之候⁶⁹。
(太字強調は筆者)

大石の御家再興の望みは、浅野家が後継人とする浅野大学長広にかかっていた。「大学殿御身上滅亡に及なん歟、然らば浅野の名跡まで失ひ候はん事不忠たるべし」⁷⁰と考え

⁶⁷ 同書、183 頁。

⁶⁸ 同書、183～184 頁。

⁶⁹ 同書、200～201 頁。筆者訳：とにかく大学様（浅野長広）のご安否次第のことと存じます。何かあっても偏に大学様のおためを思っております。しばらくはどのようなことがあっても、時節をあい待ち、何卒大学様のご首尾よく、人前の御交りもなさることができれば、本望の至極でございます。その上はどのように(も)なり、出家沙門の身となっても、亡君様（浅野長矩）大学様への忠義であることを存じておりますので、近頃はこのことしか考えず、一筋に大学様の御為に宜しきようにと朝暮それだけを考えております。

⁷⁰ 同書、187 頁。

る大石は、浅野大学長広が閉門を解かれれば、御家の再興を期することができ、それこそが「亡君」浅野長矩及び「大学様」への忠義であると考えて、大学が引き立てられるまで見届けることを決意した。

大石は事件当初、命を捨てる覚悟について述べており、彼自身の中には原初的な主君個人への忠誠を尽くすという情念があった。その一方で、主君個人よりも主君の「御家の持続」を重んじ、浅野大学長広を引き立てることによって御家の持続に尽力する姿もまた、彼の忠誠の別の側面である。個人という忠誠の人格的対象よりも、むしろ公的—政治的—社会的—外面的⁷¹な方向に傾いた忠誠イデオロギーは、大石の行動や考え方によく現われている。主君個人への情念をもつ傍ら「御家の持続」への「公」的な理念を併せ持つことがまさに大石の忠誠観なのである。

2—2 主君のための「仇討ち」を主張する堀部武庸

大石の「御家の再興」の意志に対し、事件当初から吉良を討つと主張していた堀部は、吉良邸へ突撃することを望んだが、「家中之面々へ走り廻り相談仕るといへども、志立候者無之、家老用人共は曾て不取合」⁷²とあるように、他に討ち入りに賛同する者がおらず、やがて同藩の奥田及び高田と三人で国元の赤穂へ支持を求めに出発した。赤穂に着いた堀部たちは家老大石と面談し、吉良義央が生存している以上、城を明け渡せば武士として顔向けできないことになり、「唯城を枕（と）して果る之外」⁷³ないと、城を明け渡さずに討死する意見を出した。堀部は武士の「面」を最重要視し、討死こそがすなわち主君への忠義であると考えている。

そもそも堀部の忠誠観は、江戸の家老を説得する話の中によく反映されている。

亡君之御祖父之家を御大切に思召候はゞ、此鬱憤は被散間敷候……亡君を主君と奉仰候上は、いつ迄も亡君へ御奉公可仕儀と奉存候。大学殿御家を立て主人之敵を見通し可指置儀なし。亡君之仰に候はゞ、大学殿にも手向可申我々にて御座候⁷⁴。
(太字強調は筆者)

堀部は「亡君之（御）憤をも休申度而已」⁷⁵という存念で、吉良を討つという主君の志を継ぐことこそが忠誠であると考え、主君への情念からもっぱら仇討ちを主張し、主君の敵に対して復讐の情熱に駆られている。堀部は主君の個人的感情に駆られた行いに

⁷¹ 丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、2004年、106～107頁を参照。

⁷² 堀部武庸、前掲、「堀部武庸筆記」、186～187頁。

⁷³ 同書、187頁。

⁷⁴ 同書、194～195頁。筆者訳：亡君（浅野長矩）が御祖父の御家を大切にお考えであったならば、（吉良義央に斬り付けて）鬱憤を散じようとはなされなかったはずですが……亡君を主君として奉仕したからには、いつまでも亡君に御奉公すべきです。大学殿（浅野長広）を後継ぎとして御家を立て、主君の敵を見逃しておくことはできない。亡君の御命令とあれば、大学殿にも手向いを致すのが我々（家臣）です。

⁷⁵ 同書、193頁。

よって御家が潰されたことを一切無視して、ただひたすら主君の意志を遂げようとする。堀部のこの情念は、大石のような主従関係の衆道的情念に基づいた「仇討の情念」であるともいえる。これについて前野佳彦は次のように述べている。

「不俱戴天の仇」の心象がこうして仇討—主体の心象世界に生じ、そのすべての位相をあらかじめ仇討—修羅化することになる。この情念化の原動力はしかし仇敵との「怨憎会苦」ではない。逆側の「愛」、すなわち殺された原・血讐主体（流された血の賠償を求める復讐主体）との「愛別離苦」の情念こそが仇討—修羅の構造を決定する⁷⁶。

堀部はここで、主君の仇とともにこの世に生きられないという情念に駆られて、仇討ちこそが主君への忠誠を全うすることであると考えている。

この事件は吉良義央の隠居が許可され、浅野大学長広がついに閉門を解かれ、本藩広島藩に差し置きとなったことにより、新たな局面を迎えた。浅野大学長広の広島藩差し置きの決定は、いわば彼による浅野家再興の望みがなくなったことを意味していた⁷⁷。そこで、これまで同調することのなかった両派はようやく合意し、大石や堀部などの赤穂諸士が団結して吉良を討つという決定的な結末に至ったのである。

大石の家系は代々浅野家の家臣であり、大石は家老の身として家臣団の中でも家格が最も高かったので、主君に対する情念は当然に思われるが、仇討ちまでの経緯を通して見ると、彼は主君個人という人格的忠誠対象よりもむしろ非人格的、「公」的な「御家の再興」に力を尽くしたといえる。しかしながら、御家再興の夢が潰えたことが、大石の心の底に潜んでいた情念の自覚を促す引き金となったのである。一方、堀部は外様の家臣であったにもかかわらず、終始主君の志を継ぐという「仇討ち」の情念を持っており、むしろ主君個人への忠誠を重んじていた。このような主君への情念と御家に対する理念の二つの要素から成り立つ忠誠観は、山本のみならず、赤穂諸士においてもはっきりとみてとれる。

第三節 元禄赤穂事件をめぐる儒学者の論評

赤穂諸士の仇討ち事件は世に大きな反響を引き起こし、儒学者の間でも注目を浴びた。赤穂諸士の行動に対する儒学者たちの反応は、毀誉褒貶様々であった。彼らは各々自分の忠誠観に基づいて論を展開し、論争した。そこには儒学思想の枠組に反映した時代の忠誠観が如実に現われている。したがってここでは、当時の儒学者たちが赤穂諸士の忠誠をいかに論じていたかを分析し、彼らから見た赤穂事件を通じて、忠誠がいかにある

⁷⁶ 前掲、『中世的修羅と死生の弁証法』、148 頁。

⁷⁷ 谷口真子『赤穂浪士の実像』吉川弘文館、2006 年、99 頁。

べきものと考えられていたかについて、時代を追ってその変化を考察する。

3—1 赤穂諸士の「義」への肯定論

赤穂事件が幕を閉じた直後から、早くも林鳳岡(1644～1732)及び室鳩巢(1658～1734)は諸士たちの討ち入り行為について言及していた。林鳳岡は幕府の御用学者林羅山の孫であり、当時五代将軍綱吉(1680～1709 在任)の信任も厚く、大学頭に任せられていた。在朝の林鳳岡は事件発生後に「復讐論」(1703)と題する短文を記し、文中に四十六士の討ち入り行為は「義」であると賞賛し、「義士」として評価している。

林は、「生を偷み恥を忍ぶは、士の道」⁷⁸ではないので、赤穂諸士らが主君個人に対する情念により仇討ちしたことは理解できるとしている。しかし、「公儀」である法によれば、「讐とする者は必ず誅せらる」⁷⁹ため、「亡君の遺志を継ぐと雖も、天下の法を讐とするを免れ」⁸⁰ない。情念となる主君との契りと「公儀」とする法律は一見両立しがたく、対立しているが、林は「上に仁君賢臣ありて、以て法を明らかにし令を下す。下に忠臣義士ありて、以て憤りを^の據べ志を遂ぐ」⁸¹と語り、赤穂諸士らは家臣として主君への忠誠を果たしており、幕府側は、浅野や赤穂諸士らに刑を下したことにより、「公儀」を行った。したがって、この両者は「並び行はれて相悖らず」⁸²というのが、林の忠誠に対する基本的な姿勢である。つまり、幕府に仕え、在朝の身である林は、各藩(御家)が幕府体制の基盤となっていることを踏まえ、その論理を保持しつつ、幕藩体制の秩序を優先させようとした。将軍(幕府)―大名の主従関係と、大名(藩主)―家臣という御家内部の主従関係は、直線的に連結されているわけではなく、「公儀」的秩序と主従関係の契りは並存するというのが林の忠誠観である。

林は赤穂諸士の主君に対する情念による仇討ちに肯定的な態度を示しているが、彼らの仇討ち行為を勧めているわけでは決してない。「天下の士、膏沢に沐浴して、怠惰の心生ず……彼の一举に及びて、奮発興起し、以て義に向ふの心起り、君は臣を信ずるを知り、臣は君に忠なるを知るなり」⁸³と述べているように、彼は赤穂諸士らの行為が太平の世に武士のモラルを示す良い模範となると考えているのである。

また、室鳩巢も林と同様に、赤穂諸士らの行動が士風を教化する役割を持っていると考え、上下二巻の「赤穂義人録」(1703)を公表した。室は赤穂諸士による仇討ち行為を「張皇し、その行ひを顕揚し、並びに義人を以てこれを称す。その志は即ち善し。私議を立てて公法を非とする」⁸⁴ものではないと、著書の刊行の動機についてはっきりとそ

⁷⁸ 林鳳岡「復讐論」(『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年)、372 頁。

⁷⁹ 同書、372 頁。

⁸⁰ 同書、372 頁。

⁸¹ 同書、373 頁。

⁸² 同書、373 頁。

⁸³ 同書、373 頁。

⁸⁴ 室鳩巢「赤穂義人録」(『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年)、

の序に記している。彼が赤穂諸士を称賛するのは、「赤穂の諸士、朝廷の義英を赦せしことを聴かずして、衆もて仇を都下に報ず。諸士は則ち生を捨てて義を取」⁸⁵った点にあり、身を捨て義をとるという家臣としての分を果たし、主君への忠誠を尽くしたからである。室も林も赤穂諸士の仇討ち行為自体を称賛したわけではないが、「死を以て義と成す」という士としての勇氣は是認していた。

近世の儒学者においては、赤穂諸士への肯定論が圧倒的に多く、その論調も似通っている。室鳩巢と林鳳岡以降の赤穂諸士らへの肯定論は概ね否定論者に反論するためのものなので⁸⁶、ここでは逐一取り上げない。

3—2 赤穂諸士の仇討ち行為への批判

室鳩巢と林鳳岡による肯定論の後、佐藤直方（1650～1719）は直ちに「四十六人之筆記」（1705）を記し、林が示した論点に反駁した。世の中が赤穂諸士らを忠臣義士と称えるなかで、佐藤の論は反対論の先駆であった。これとほぼ同じ時期に、荻生徂徠（1666～1728）も赤穂諸士らの行為を批判する見解を示した。ここでは赤穂諸士らの行為への主な反対意見を取り上げて考察し、そこに表れたもう一つの忠誠観を分析する。

3—2—1 主君に対する情念への批判

佐藤直方は「四十六人之筆記」（1705）において、世間に四十六士を忠臣義士と称えることについて、次のように批判している。「無学ノ人ハ義理不明、^{あやまり}誤^{うべ}テカク云モ宜也」⁸⁷しかし、「林氏ガ死ヲ悼ンデ詩ヲ賦シ、予讓・田横ニ比シ、忠義ノ臣ト称シ、其死ヲ恨ミ、又『報讐趨義』ト書ス」⁸⁸のは同意できない。佐藤は士たる者は「詳ニ考ヘ明ニ弁ジテ、世俗ノ惑ヲ発クベキ」⁸⁹だと考え、士としての使命感に駆られ、理非を分別せずに赤穂諸士らを称賛した林鳳岡を非難した。彼はまた、「上野助ハ彼等ガ讐ニハ非ズ。上野介ガ内匠頭ヲ害シタラバ讐ト云ベシ」⁹⁰と儒学的な「理」の観点から、赤穂諸士らの仇討ちの出発点が当初から理非を分別しない行動であったと見なしている。「亡主之憤ヲ想ヒ、心ノ昏惑スルヨリ一筋ニ討之」⁹¹という赤穂諸士らの行動の動機が、主君に対する情念だということを批判しているのである。

一方、荻生徂徠の「四十七士論」（1705）は「義奴市兵衛の事を記す」という文の付記として記された論である。「義奴市兵衛の事」とは、元禄八年（1695）に起こった猪鹿狩

272 頁。

⁸⁵ 同書、272 頁。

⁸⁶ 例えば、松宮観山『読春台四十六士論』（1730 年代）、五井蘭洲『駁太宰純赤穂四十六士論』（1730 年代）などは、太宰春台『赤穂四十六士論』（1731～1733）が提出した論点に反駁する著書である。太宰春台の論点については後述する。

⁸⁷ 佐藤直方「四十六人之筆記」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、378 頁。

⁸⁸ 同書、378 頁。

⁸⁹ 同書、379 頁。

⁹⁰ 同書、379 頁。

⁹¹ 同書、379 頁。

りの誤射事件で、これを内済にしたことが後に発覚し、関係者が処罰された出来事に端を発する。市兵衛が仕える上総国市原郡姉崎村の名主次郎兵衛（1663～1734）もこの事件で家も畑も没収された上、伊豆大島に流されることになった。下僕の市兵衛は主人次郎兵衛の家族を養育するかたわら、毎月江戸の奉行所へ主人の赦免を嘆願し、十一年後の宝永二年（1705）になってようやくその願いが聞き届けられたのである⁹²。

徂徠は市兵衛が「鞠躬として力を竭くし、以てその主に忠たるの道を致し、能くことごとくその為すを得る所の者を為して、久しく輟めず、誠志、県官を感ぜしめ、以てその主の家を復して、身良民と為る」⁹³と、御家の復興に一筋思いをかけたことを大いに称賛している。そして、御家復興という理念をもつ市兵衛と対比させて、赤穂諸士らの情念を批判するのである。

徂徠はまず「長矩、義英を殺さんと欲す。義英の長矩を殺せしには非ず。君の仇と謂ふべからざるなり。赤穂は義英を殺さんと欲したるに因りて国亡ぶ。義英の赤穂を滅ぼせしには非ず。君の仇と謂ふべけんや。長矩一朝の忿、その祖先を忘れて、匹夫の勇に従事し、義英を殺さんと欲して能くせず。不義と謂ふべきなり」⁹⁴と語り、浅野長矩が一己の恨みを晴らそうとし、結局「祖先を忘れ」、「匹夫の勇」を逞しくして、自らの御家が潰されるに至ったことが「大義」に背いていると判断した。そして、「四十有七人の者、能くその君の邪志を継ぐと謂ふべきなり。義と謂ふべけんや。然りと雖も、士や生きてはその君を不義より救ふこと能はずんば、寧ろ死して以てその君の不義の志を成さん」⁹⁵と述べ、不義である主君の「邪志」を受け継いだ赤穂諸士らがただ情念から仇ではない仇を討ったことを批判したのである。「御家の復興」という理念を実現した市兵衛を称える一方で、情念により行動する浅野長矩と赤穂諸士らを指弾するところに、徂徠の忠誠観がよく現われている。

佐藤と徂徠の学派は異なるが、両者は赤穂諸士らの情念による理非を分別しない行動を批判し、「御家の復興」という理念を重視する点で、その忠誠観は一致している。

3-2-2 仇討ちの動機—自己名利への批判

さらに、『葉隠』（1716）の中にも赤穂事件についての言及がある。第一節で分析したように、山本が奉公とする忠誠観には、主君への情念と御家に対する理念という二つの要素が、矛盾なく共存している。赤穂事件について彼は次のように記している。

何某喧嘩打返をせぬゆへはじに成たり。打返の仕様は踏懸て切殺さるゝ事也。是迄恥に不成也。仕果すべきとおもふ故、間に不_レ合。向は大勢杯といひ候時、時を移

⁹² 田原嗣郎、前掲、『赤穂四十六試論—幕藩制の精神構造—』、156～157頁。

⁹³ 荻生徂徠「四十七士論」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、400～401 頁。

⁹⁴ 同書、400 頁。

⁹⁵ 同書、400 頁。

し、べり、止に成相談に極る也。相手何千人もあれ、片端よりなで切と思ひ定て向ふ迄也。成就也。多分仕澄すもの也。又浅野殿浪人夜討も泉岳寺にて腹切ぬが落度也。又、主を討せて敵を討こと延々也。若其中に吉良殿病死の時は残念千万也⁹⁶。

山本は赤穂諸士らの仇討ち事件を喧嘩の仕返し事件と見なしており、赤穂諸士らが事件直後でなく、一年過ぎた後に吉良を討ったことに疑問を呈し、また吉良を討った直後にその場で自刃しなかったことについても、常に死ぬ覚悟をもつべき武士精神に反するものと見た。

山本のこの論点は、徂徠の門人である太宰春台（1680～1747）にも共通している。太宰春台（1680～1747）が著した「赤穂四十六士論」（1731～33）の内容は基本的に徂徠の考え方を受け継ぐものとされている。春台は「赤穂侯の死は、吉良子これを殺すに非ざれば、即ち吉良子は赤穂侯の讐に非ざるなり。良雄ら何ぞこれを殺すを得ん」⁹⁷と述べ、吉良義央は敵ではないとする点で佐藤直方や荻生徂徠と同じ観点に立つ。しかし、太宰は是非を分別しない赤穂諸士らに対する先人の批判的言説を踏まえ、さらに論を展開している。彼は武士精神を評して、「わが東方の士、おのづから一道あり。その君長の死を見れば、立ちどころに即ち心乱れ狂を發し、踵くびすを旋めぐらさずしてその難に赴き、ただ死を以て義と為し、またその当否を問はず」⁹⁸と述べ、日本の武家社会を特徴づける武士の衆道的な情念を認めている。しかし、赤穂諸士らは、「悠悠として時を待ち、徒らに陰謀秘計を用ひて、以て吉良子を殺さんことを求む。彼その志は事を済し功を成し以て名利を要もとむるに在」⁹⁹る。つまり、赤穂諸士らの仇討ちの動機は自己名利を求めることにあると春台は批判するのである。さらに春台は、「吉良子を殺し、捷をその君の墓に献ずれば、則ちその事済したり、その責塞がれたり。（中略）ここにおいてか四十六士以て自裁すべし。なほ何ぞ官命を」¹⁰⁰と語り、「良雄らの若き者は、大義を仮りて以てその利慾を済す者なり」¹⁰¹として、亡君の志を継ぎ、亡君のために敵を討った行為の動機が純粹ではないことを『葉隠』の山本より一層鋭く論斥した。

ここで、肯定論者の林鳳岡と室鳩巢の論点を振り返ってみると、両者とも士風を教化する武士道のモラルを示す事件として、赤穂諸士らの情念による行為が良い模範となることを認めている。これに対して、山本も太宰も武士の主君への情念は是認するが、赤穂諸士らが直ちに復讐を遂げ、即座に自刃して果てなかったことを問題視している。太宰はそれが「私」から発した名利、つまり自己名利のためであるとして断罪しているの

⁹⁶ 前掲、『三河物語 葉隠』（1-55）、237 頁。

⁹⁷ 太宰春台「赤穂四十六士論」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、406 頁。

⁹⁸ 同書、407 頁。

⁹⁹ 同書、407 頁。

¹⁰⁰ 同書、408 頁。

¹⁰¹ 同書、408 頁。

である。

3—2—3「忠」も「義」もあらず

このように、山本や太宰の赤穂諸士らへの批判的言説は突発的な情念の発露を認めてはいるが、「御家の復興」という理念を最優先させている。ところが、かなり時代が下って、鳥取藩士の伊良子憲（1763～1829、字大洲）の「四十六士論」（1819）になると、主君に対する情念が完全に否定され、赤穂諸士の行為は義でも忠でもないと言われる。

そもそも、伊良子が考える臣の道については「君義則順而行之、君非則諫而止之、…然而事既遂矣、不可諫也、則宜思所以補其過且図使社稷無墜」¹⁰²と述べられ、社稷を守るという儒学に基づく理念こそが彼の忠誠観なのである。したがって、主君を補佐し、御家を維持することが家老の職分であり、大石が主君への情念から仇討ちをしたのは家老として全く失格であると、伊良子は非難している。さらに、たとえ大石の志が「不必在殺吉良侯」¹⁰³であり、「蓋欲待嗣君定立而後就死殉君、以自謝其陷君於難之罪也」¹⁰⁴と考えても、殉死それ自体は忠でも義でもないのである。

殉死の禁止令は近世前期に幕府により公布されていたが、主君のために殉死することは武家ではまだ稀に行われていた。この武家社会特有の行為である殉死について、伊良子は次のように考えている。

武人之風者実自戦国始……梟雄武将率皆念欲収武夫以為己腹心爪牙、於是申法令明賞罰弁勇怯、使其士卒喜戦楽死以為己用¹⁰⁵。

伊良子は戦国時代に始まる武人の風は、一時的な権道の策に過ぎないとして、「武人之風始乎戦国、而其流弊及於今也、如以殉君死者為忠臣、亦戦国余習……及至聖代有令禁之、然後雖愚人亦有以知夫殉死之為未必義也」¹⁰⁶と記し、殉死は時代の遅れの弊風であると断罪しているのである。したがって伊良子は、殉死を覚悟した大石に対して、士としての自覚がなく、未だ主君個人への情念から行動するという武人意識にとどまってお

¹⁰² 伊良子憲「四十六士論」（早川純三郎編『赤穂義人纂書』第1所収、日進舎、1910年）、113頁。筆者訳：君の行いが義であれば臣も従ってこれを行うべきであり、君の行いが非であれば、臣は即ち諫めてこれを止めるべきである……しかし、ことが過ぎれば諫めることができない。（その時臣たる者は）その過ちを補い社稷を失墜しないように図るべきである。

¹⁰³ 同書、115頁。

¹⁰⁴ 同書、113頁。筆者訳：（浅野家の）後継ぎを立ててから主君に殉じて死に、主君を難に陥らせることを謝罪する。

¹⁰⁵ 同書、115頁。筆者訳：武人の風は戦国時代から始まり……戦国武将は皆武夫を集め、もって己の腹心、爪牙となそうとした。そこで、法令を立て、賞罰を明らかにし、勇怯を弁ずる。武夫らに戦いを喜ばせ、死を楽しませることなど、全て一己の用のためである。

¹⁰⁶ 同書、115頁。筆者訳：武人の風は戦国時代から始まり、その流弊は今日に及んでいる。もし君の死に殉じた者を忠臣となすならば、それは戦国の余習である。当代に至ってはそれを法で禁じており、その後の愚人でも殉死は必ずしも義とではないと知っている。

り、このような陋習は「不学之過」¹⁰⁷であると、一層厳しく非難した。

赤穂事件への言及において、武士の主君に対する情念を是認していた山本や太宰などと異なって、伊良子はその論述を通して、完全に「御家」に対する理念から構築された忠誠観を示し、そこに旧時代的な情念の介入を一切許容しなかったのである。

むすび

本論は、武士道の心得を説く代表的な書物『葉隠』(1716)の分析を通して、中国的(儒学的)な「諫言」が江戸時代の武家社会においては、武士の忠誠という概念として形成されていったことを明らかにした。そして、『葉隠』に現れた武士の主君への情念、と御家の安泰を図る理念から成る武士の忠誠観が、同時代の赤穂事件(1701)にも現れていたことを検証した。

近世江戸期は忠誠を尽くす場所が、戦場から「畳の上」に変化した時代である。乱世においては、武士にとって「武」が最重要の課題だったが、徳川幕府に至ると治世において「文」「武」がともにその必須条件であることを認識し、「文武兼備」をもって国是としていた。したがって、幕府は朱子学を官学として取り入れ、文治政策を積極的に推進していった。このような幕府の一連の政策により、武士は従来の絶対的服従の忠誠観から離脱し、新たに主体性を重視する忠誠観を構築することになったのである。

『葉隠』と同時代に起きた赤穂諸士の仇討ちのプロセスを分析することによっても、近世武士の内面には主君への情念と御家に対する「公」的な理念が並存していたことが明らかになった。赤穂事件における大石は、主君個人への情念と御家の維持への理念を併せ持っていたが、主君への情念は常に心の底に潜ませ、非常事態とならないかぎり、それを顕在化させなかった。一方、堀部は外様の家臣であったにもかかわらず、終始主君の志を継ごうとする仇討ちの信念を持っており、むしろ主君個人への忠誠を重んじていた。このように、当時の武士の忠誠観にはまさにこの二つの要素が様々なありようで混在していたと考えられる。

しかしながら、儒学者の赤穂事件に関する論点を追ってみると、時代の推移に応じて、主君への情念より、御家に対する理念を重んじる忠誠観が支配的になっていく。赤穂事件の評価をめぐっては、儒学者の間でも賛否両論あり、肯定論者は武士の主君に対する情念をある程度まで認めていたが、それはあくまでも士風を教化し、或いは武士道を維持する手段としてであった。一方、批判論者は、武士の主君に対する個人的な情念を無視できないものと見なしはしたが、御家の安泰を優先させていた。そして時代がさらに下ると、武士の忠誠観にとっても、非人格的な「御家」が圧倒的に重要なものとなり、主君個人への情念は、旧時代を象徴し、時代に逆行する弊風と見なされるようになる。

¹⁰⁷ 同書、116頁。

赤穂事件をめぐって論争した儒学者は各々学派が異なるが、非人格的な御家に忠誠を尽くすべきだとする考え方は、彼らに共通する忠誠観であった。このような儒学者の説く忠誠観は時代が求めていたイデオロギーであり、当時の武士の忠誠観にも次第にそれが浸透していったと考えられる。

第二章

日中諫言精神の比較試論 — 吉田松陰の視点から —

はじめに

第一節 儒学の「三仁」への評価

第二節 松陰の中国忠臣観

第三節 屈原の心象世界への共鳴

3—1 松陰の諫言精神

3—2 松陰と屈原

3—3 松陰における「狂」の意味

むすび

はじめに

幕藩体制においては、「御家」に奉公することが武士の忠誠イデオロギーとなっており、「御家」の安泰を維持することが基本的に武士の行動目標ともなっていた¹。この前提に基づき、政局が不安定になった幕末期において、武士はどのように忠誠の代名詞ともいえる諫言精神を行ったのかについて、本章では、吉田松陰（1830～1859）が中国の忠臣の志気や行為をいかに解釈、評価したかを通して、彼の自（日本）— 他（中国）認識から形成された諫言精神を分析する。また、松陰と中国の士大夫が、中国の諫死精神を代表する屈原に対してそれぞれに示した観点を対比させながら、志士としての下級武士の諫言精神の特徴を考察する。

中国儒学の伝統的な諫言概念は江戸時代の儒学に取り込まれる際に、日中の政治体制が異なるため、忠誠の拠って立つ基盤が修正された。石井紫郎及び水林彪は、その結果、近世の諫言概念が諫言の作法や概念において、中国儒教から実質的に遠く離れたものとなったことを指摘している²。その具体例として、『荀子』に「能く言を君に進め、用ひらるれば即ち可とし、用ひられざれば即ち去ること有る、之を諫と謂ふ」³という中国儒学の諫言観は、江戸時代の林羅山（1583～1657）によって「臣トシテ君ヲ諫ムベキコトアラバ、幾度モ諫ムベシ」⁴と修正されたことが挙げられる。しかしこの差異は、忠誠の

¹ 丸山真男は「御家の『安泰』は既成の『和』の維持ではなくて、行動の目標となる」と指摘している（丸山真男『忠誠と反逆—転換期日本の精神史的位相—』筑摩書房、1992年、19頁）。

² 石井紫郎「近世の国制における「武家」と「武士」」（『近世武家思想』日本思想大系27所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974年）。水林彪「近世の法と国制研究序説（五）—紀州を素材として—」（『国家学会雑誌』国家学会、第94巻第9・10号、1981年、659～707頁）。

³ 「有能進言於君、用則可、不用則去、謂之諫」（『荀子』新釈漢文大系第5巻、藤井専英著、明治書院、1966年、378頁）。

⁴ 林羅山「儒門思問録」（関儀一郎編『続日本儒林叢書』第2冊所収、東洋図書刊行会、1931年）、30

基盤が異なることによって現れた表面的なものにすぎない。実際には、江戸時代の家臣が死を覚悟して主君に幾度も諫言したように、中国にも比干のように諫死した忠臣や屈原のように汨羅に身を投げた諫臣がいた。したがって、日本の諫死精神と中国の伝統的な諫死精神との相違はさらなる検討に値する問題である。

江戸時代においては、諫言を行う臣は諫臣として組織化されておらず、それを実行することができるのは家老などの一部の上層家臣だけであった。しかし幕末に至り、有志、とりわけ下級武士層が武士としての「ダイナミック」な諫言精神を発揮し、自覚的な政治活動に取り組むようになる。このような諫言精神を代表する人物として吉田松陰がいる。松陰の諫言精神について、丸山真男は「戦闘者としての武士の行動様式は本質的にダイナミックであり、それが忠誠の発見の仕方にも著しい能動性と『臨機応変』性を賦与した……『君、君たらざれば去る』といういわば淡泊な行動原則を断念するところから生れる人格内部の緊張が、かえってまさに主君へ向かっての執拗で激しい働きかけの動因となるのである。いわゆる絶対服従ではなくて諫争が、こうしてその必然的なコロラリーをなす」⁵と述べ、主君に対する「没我的傾倒」と強烈な「自我意識」との逆説的結合により、日本の諫争はダイナミックな行動を生んでいくようになると指摘している⁶。諫言精神に内在するこのような主君への「没我的」忠誠心は、第一章で分析した『葉隠』の「滅私奉公」という武士のエートスにも通じていると考えられる。

中国の伝統的な士大夫に比べ、日本の武士がよりダイナミックな精神をもっていたことは概ね首肯できるが、諫言精神を一括して武士の基底をなすダイナミズムと片付けることは軽率であろう。松陰の精神論研究の基礎を作った藤田省三は、松陰の諫死精神について次のように述べている。松陰の法律や規則に対する冒涇と犯行は、「それらの制度によって成り立っている者に対する無類の忠義心と、際立った矛盾を示しながら彼の中に共在していた。その矛盾の個人的な解決は『諫め』の哲学」⁷であった。そして、「周囲の世界の全てから裏切られ、その孤独の中でいよいよ深く確信されていった時、一個の宗教的内面性と超越性を獲得するに至った稀有の精神的営みを松陰は終末近くにおいて示したのであった」⁸。つまり、ここで藤田が示そうとしたのは、現存制度から疎外された松陰の家臣としての良心なのである。しかし、中国の忠臣と日本の忠臣がこのような当為としての制度を自身の良心へと血肉化⁹する場合に、彼らの心象世界が果たして同

頁。

⁵ 丸山真男、前掲書、18～19 頁。

⁶ 同書、31 頁。

⁷ 藤田省三『精神的考察—いくつかの断面に即して—』平凡社、1982 年、96 頁。

⁸ 同書、96～99 頁。

⁹ 毎熊佳彦は、「中国で完成され日本で模倣された東洋の専制政体は、法家の法治を制度の実体とし、儒家の徳治を制度のイデオロギーとする……法治の苛斂誅求の本音と、徳治の民本的な建前との並用が、専制政体下における制度の本質を、存在としての制度と当為としての制度の両極に二重化する。制度内的良心はこの当為としての制度の理念を自らの法源とする。存在としての制度への忠誠が制度の法を遵守する循吏達しか生まないのに対して、制度内で目覚めた制度的当為は、現存の制度を批判

様であったか否かは未だ掘り下げられていない問題であり、それを探ることが本章の目的である。

第一節 儒学の「三仁」への評価

松陰の中国忠臣観を検討する前に、まず彼が儒学で称賛される人物をどのように評価していたのかを通じて、彼の忠誠観の基底を一瞥しておきたい。

儒学では、『論語』に「微子はこれを去り、箕子はこれが奴と為り、比干は諫めて死す。孔子の曰わく、殷は三仁あり」¹⁰とあるように、殷王朝の微子、箕子及び比干の三人を「殷三仁」と称している。殷の紂王は暴政を敷いていたので、紂王の庶兄である微子は王を諫めたが受け入れられず国を去った。紂王の叔父である箕子も紂王に諫言したが聞き入れられず、狂人を装い奴隷となった。そして、同じく紂王の叔父である比干も諫言したが最後には殺されてしまった。その後、周の武王が殷を破ると、微子は武王に仕えて封地を受け、また箕子は武王に招聘され、王のために「洪範」という一国を治める大法を講じたという。

松陰はこの三人に対して、「微子は国を去つて周の封を受け、箕子は周の為に洪範を陳ぶ、皆人臣の義に非ず。況や宗室の親にして、此の悖逆^{はいぎやく}の事を為すをや。之れを比干の諫死^{たぐい}に比し、謂ひて三仁と為す、可ならんや」¹¹と述べ、微子も箕子も人臣としての義を尽くしていないと考えて、儒学とは異なった見解を示している。松陰はさらに「箕子は殷の宗室なり。武王は殷の仇敵なり。国亡びて仇敵の為に法を伝ふるは人臣の義に非ず」¹²として、自分の敵国の君主に治国の法を講義した箕子を大いに批判し、「吾が志を以て云はば、亡国の後、敵国の主人何程大聖人にもせよ、洪範を陳ずるに忍びんや」¹³と、一つの君臣関係を絶対視する態度を示している。

このように主従関係を絶対視する背景には、確立されてすでに久しい幕藩体制があった。十六世紀の終わり頃、最初の全国統一政権として出現した豊臣政権は、諸大名を藩

する諫臣達の伝統を生む」と述べている（『東洋的専制と疎外—民衆文化史的な制度批判—』文化史研究会、1987年、413頁）。

¹⁰ 『論語』「微子」金谷治訳注、岩波文庫、1963年/2008年、363頁。

¹¹ 「丙辰幽室文稿」[1856]（『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、404頁。

¹² 「講孟餘話」[1855—1856]（『吉田松陰全集』第3巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、167頁。なお、本章は大和書房の『吉田松陰全集』第3巻に収録された「講孟餘話」を使用する。「講孟餘話」の旧題は「講孟筭記」であるが、改題した理由について、松陰は跋文において「（前略）余の獄に在るや、囚徒宵居る。其の已に家に帰るや、親戚盍^{あひあつ}簪^{かん}まる。時に乃ち孟子を把りて之れを講ず。其の訓誥^{くわ}を精しくするに非ず、其の文字を喜ぶに非ず。唯だ其の一憂一楽、一喜一怒、尽くこれを孟子に寓するのみ。故に其の喜樂に当りてや、孟子を講じて復た益々喜樂し、其の憂怒するに当りてや、孟子を講じて復た益々憂怒す。憂怒の抑ふべからざる、喜樂の歇^やむべからざる、随話随録し、稍積みて巻を成すもの即ち此の著なり。然れば則ち是れ特だ講孟の餘話のみ」と述べている。前掲、「講孟餘話」[1855—1856]、427頁。

¹³ 「読綱鑑録」[1858]（『吉田松陰全集』第5巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、94頁。

という形で位置づける一方、太閤検地－兵農分離を通じて在地領主制を解体し、名主層を彼らに従属していた隷属農民とともに、一様に封建的小農民として被支配階級の地位に固定化し、その結果、大名領国制が全国的規模で実現した¹⁴。後の徳川政権は豊臣政権の基本政策を踏襲し、さらにその拡大・強化を通じて統一封建権力の地位を確立していった¹⁵。封建的土地所有の編成原理は、このような上から下への「御恩」を基軸に構成されている。幕藩体制という固有の原理を貫徹するための重要な要素は「兵農分離」と「石高制」の二点に求められ、この二つの要素が、幕府と藩、及び藩と家臣団の主従制の基礎をなしたのである¹⁶。中世においては、「奉公」と「家」の利益、いわゆる「家業」は必ずしも直結していなかったため、「奉公」の提供者は「奉公」の相手の選択、態様、程度などに対する自立性が高かった¹⁷。ところが、江戸時代になると、武士が君臣関係を破棄することは、すなわち生計の手段を失うことを意味し¹⁸、『家』が『家職』＝『治世の御奉公』のための目的団体¹⁹となった。

武士の生計上の自立性がなくなった江戸時代においては、父や子が君に仕えて禄を得ていたため、禄すなわち君恩によってはじめて孝が可能になるという考え方が定着していった²⁰。つまり、禄という媒介物により、君臣は切り離せない関係となったのである。

「人臣たる者、未生の前より君恩に生長し、一衣一食より、一田一廬より、君恩に非ざるはなし。況や其の重禄高位を世々にするをや。身体髪膚父母の賜ふ所と云へども、父母祖考より皆君恩に生長する所なれば、頂より踵に至る迄、皆君の物に非ざるはなし」²¹と松陰が記しているように、君恩が絶対的なものであるという考えは当時の武家社会に深く浸透していた。すでに多くの先行研究が指摘するように、儒学においては孝が忠より優先されるのに対し、江戸時代の忠孝は一体化していた。松陰もまた「講孟餘話」において、伝統的な儒学とは異なる忠孝の解釈を示している。

¹⁴ 藤野保『幕政と藩政』吉川弘文館、1979年、1～2頁。

¹⁵ 徳川家康の覇権確立後、豊臣秀吉によって打ち出された「幕藩制」下の基本的階級関係は変化を蒙ることなく、徳川検地に継承されていく。新たに成立した徳川政権は、旧族・豊臣大名に対する改易・転封を強行すると共に、徳川家臣団の中から徳川一門・譜代大名を多数創出し、名実ともに統一封建権力としての地位を獲得するに至る（藤野保『日本封建制と幕藩体制』塙書房、1983年、78頁）。なお、近世の幕藩体制の成立については、藤野保『幕藩体制史の研究』（吉川弘文館、1961年）を参照。

¹⁶ 藤野保、前掲、『幕政と藩政』、3～4頁。

¹⁷ 石井紫郎は、「中世の段階においては、『奉公』と『家』の利益とが完全に一致していたわけではない……『忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず』という、『忠』と『孝』との矛盾相克が中世には存在しえたのである」と述べている（石井紫郎『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』東京大学出版会、1986年、196～197頁）。

¹⁸ 水林彪「近世の法と国制研究序説（二）—紀州を素材として—」『国家学会雑誌』国家学会、第90巻第5・6号、1977年、225頁。また、水林彪は、「中世の武士は、農村に居住して農場を経営し、所領において一切の権力を行使していた。かれの労働は、肉体労働と精神労働の双方を含んでおり、かれは一個の総合人である。しかるに、近世の武士は直接的生産過程から分離せしめられて都市に居住し、ただ統治という精神労働のみに従事した」と述べている（前掲論文、254頁）。

¹⁹ 石井紫郎、前掲、『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』、203頁。

²⁰ 水林彪、前掲、「近世の法と国制研究序説（二）—紀州を素材として—」、226頁。または石井紫郎、前掲、『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』、202～204頁に詳しい。

²¹ 前掲、「講孟餘話」、243頁。

經書を読むの第一義は、聖賢に阿^{おもね}らぬこと要なり（中略）孔孟生国を離れて他国に事^{つか}へ給ふこと済まぬことなり。凡そ君と父とは其の義一なり。我が君を愚^ぐなり昏^{こん}なりとして、生国を去りて他に往き君を求むるは、我が父を頑愚として家を出でて隣家の翁を父とするに齊^{ひと}し……道を明かにして功を計らず、義を正して利を計らずとこそ云へ、君に事へて遇はざる時は諫死^{かんし}するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり²²。

君と父を同義と見なす松陰は、孔孟が生国を離れて他国に出仕したことを批判し、「生国を去る」こと自体を否定している。ここでは、古代中国と近世日本の君と父の位置づけに対する観点が明らかに分岐している。そもそも本来の儒学においては、忠を含めたあらゆる徳の出発点は孝にあり、全ての徳は孝に帰着すると考えられている。孝は始源的な徳目であり、忠はこれに従属する第二次的な徳目にすぎないのである²³。したがって中国では、「父子天合」といって父子関係は天性のものであるのに対し、君臣関係は「君臣義合」というように後天的に結ばれた関係であると捉えられている。

これに対して日本では、君と父が一体化しているため、「去徙^{きよし}は皆其の国を去りて他国に徙^{うつ}るを云ふ。是れ游仕^{ゆうし}の人に就いて云ふ。世禄^{せろく}の士国と休戚を同じうする者の如きは、豈に禍を免かれ自ら其の智に誇ることを得んや。人臣たる者、時の不淑^{ふしゅく}に遇ひて諫諍^{かんじやう}死を致す、固より正義なり。何ぞ遽^{にわ}かに去徙^{きよし}することを得んや」²⁴と松陰も記すように、人臣たる者は「君恩」ゆえに、「君に事へて遇はざる時は諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり」²⁵と、君臣の主従関係を全うして、「死ぬ」覚悟をもつべきだと考えている。だからこそ彼にとって、国を去って他の主君に仕えた微子も箕子も、諫死した比干に及ばないのである。

松陰は日本の国体を判断の基準にしたため、儒学における「三仁」の評価と異なった観点を示しているが、彼は決して微子や箕子を認めていないわけではない。そもそも、儒学思想と国体との関係について、松陰は「道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。君臣父子夫婦長幼朋友、五者天下の同なり。皇朝君臣の義万国に卓越する如きは、一国の独なり」²⁶と考えている。彼が記した「君臣父子夫婦長幼朋友」という儒学の五倫は、『孟子』における原文では、「父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り」²⁷とあり、父子は君臣より先にある。日本の国

²² 前掲、「講孟餘話」、23～24 頁。

²³ 水林彪、前掲、「近世の法と国制研究序説（二）—紀州を素材として—」、219～220 頁。

²⁴ 前掲、「講孟餘話」、173 頁。

²⁵ 前掲、「講孟餘話」、25 頁。

²⁶ 前掲、「講孟餘話」、411 頁。

²⁷ 『孟子』「勝文公上」新釈漢文大系第 4 巻、内野熊一郎著、明治書院、1962/1967 年、184 頁。

体を本位とする松陰は、父子と君臣の順序を変えたが、その内実、いわゆる五倫の道は、「公共の道」＝「同」であり、世界に共通する、或いは普遍的なものであると考える。その一方、国体は「独」なるものだと主張するのである。

五倫の道を異なる主体に組み込むことにより、それぞれ「独」自的な国体が展開する。日本と中国との国体がそれぞれいかなる「独」自性を有しているかを考えるにあたり、松陰は中国の「易姓革命」に注目する。

漢土の流は皇天下民を降して、是れが君師なければ治まらず。故に必ず億兆の中に
扱ひて是れを命ず。堯舜・湯武の如き其の人なり。故に其の人職かなに称はず、億兆を
治むること能はざれば、天亦必ず是れを廢す。桀紂・幽厲の如き其の人なり。故に
天の命ずる所を以て天の廢する所を討つ。何ぞ放伐に疑はんや。本邦は則ち然らず。
天日の嗣てんじつ永く天壤と無窮なるものにて、此の大八洲おおやしまは天日の開き給へる所にして、
日嗣ひつぎの永く守り給へるものなり。故に億兆の人宜しく日嗣と休戚を同じうして、復
た他念あるべからず。若し夫れ征夷大將軍の類は天朝の命ずる所にして、其の職に
称ふ者のみ是れに居ることを得。故に征夷をして足利氏の曠職こうしよくの如くならしめば、
直ちに是れを廢するも可なり。是れ漢土君師の義と甚だ相類す。然れども湯武の如
きは義に依り賊を討ず、命を天に承くと称す。本邦に在りては然らず。赫々たる天
朝、天日の嗣、宇内に照臨ましますに、天朝の命を奉ぜずしてほしいまま擅に征夷の曠職を
問はんとすれば、所謂「燕を以て燕を伐つ」ものなり、所謂「春秋に義戦なき」も
のなり。天子の命を奉ぜずして敵国相征するは何程の正義に依ると云ふとも義戦に非ず 28。 (太字強調は筆者)

中国において、堯と舜のような統治者が万民の上に立ったのは、「天」によって選ばれたためである。したがって、統治者もその討伐者も、その任務を果たしたのは全て「命を天に承く」、すなわち「天命」によるものであると、松陰は儒学の天命論を援用して中国の易姓革命を説明している。これに対して、日本では天皇は万世一系であり、幕府は天朝に命じられたものであるため、「曠職」のようなことがあれば、「直ちに是れを廢するも可」である。つまり、松陰は天皇の不動の地位とその永続性を強調すると共に、天壤無窮の皇統、万世一系の国体は、すなわち日本の「独」であると主張しているのである。

そもそも「天命」は中国革命の原理である。では、「天命」とはいかなるものであろうか。『孟子』においてこのような話がある。燕国を攻撃して勝利を得た齊宣王は孟子に、万乗の戦車をもつ我々は、わずか五十日間で同じ万乗の戦車をもつ燕国を打倒したことは、人の力ではなかなか成し得ないことなので、「取らずんば、必ず天の殃有らん」²⁹、と語った。それを聞いた孟子は、「之れを取りて燕の民悦ばば、則ち之を取れ。古の人之

²⁸ 前掲、「講孟餘話」、56 頁。

²⁹ 前掲、『孟子』「梁惠王下」、69 頁。

を行ふ者有り、武王是なり。之を取りて燕の民悦ばずんば、則ち取ること勿れ。古の人
之を行ふ者有り、文王是なり。万乗の国を以て、万乗の国を伐つ。箪食壺漿こしよとうして、以て
王の師を迎ふるは、豈に他あらんや、水火を避けんとてなり。水の益々深きが如く、火
の益々熱きが如くんば、亦運らんのみ」³⁰と応じたという。

ここでは、「天命」は「民」と連結していることがはっきりと示されている。儒学にお
ける政治の理想は「仁政」であり、この「仁政」とは孟子が示す「民」本位の政治学で
ある。「天の視るは我が民の視るにしたが自ひ、天の聴くは我が民の聴くに自ふ」³¹と孟子が
記しているように、天意とはすなわち民意である。したがって、孟子が宣王に語った「民
悦ばば、則ち之れを取れ」という言葉には、「仁政」という条件がなければ、「義戦」と
して成り立たないという意味合いが含まれている。また、この他にさらにもう一つの条
件があり、それを揃えなければ「義戦」としても成り立たない。先述した引用文にある
ように、孟子は「春秋には義戦なき」と語っている。『論語』に「天下道あれば、則ち礼
楽征伐、天子より出ず。天下道なければ、則ち礼楽征伐、諸侯より出ず」³²と記されて
いるように、「礼楽征伐」が「天子より出ず」ることこそが「道」であり、「義」なので
ある。したがって、孟子の「春秋は義戦」なしの「義」は、「天子」と「仁政」二つの意
味を含んでいるといえる。この儒学的天命の思想については、『水滸伝』の中に恰好の範
例が見出せる。『水滸伝』の背景は宋徽宗帝治下の政治が乱れかつ国政が衰退している時
代である。梁山泊に集まった好漢たちは「替天行道」の旗を掲げ、「心に忠義を存し、と
もども勲功を国に立て、天に替って道をおこない、辺境を守り民を安んぜしめる」³³
ことを志として、貪官奸吏たちを懲らしめた。好漢たちは「仁政」を行動基準としている
が、それは「天」に替ることを意味している。この「替天行道」の旗はやがて彼らが朝
廷に招安され、帰順後に「順天」と「護国」の二面旗に変えて、立てられるようになった³⁴。
ここにおける「天」の意味については、梁山泊の首領である宋江が、朝廷から招
安の詔を受け取った後に、他の衆好漢や兵士たちに語った話の中に含まれている。

（前略）このたびめでたく朝廷より招安を受け、再び天日を仰ぎ見ることになった。

いずれ都へのぼって、国家のために力をつくさねばならない（中略）天子にお目に
かかり、そのご洪恩にお報いする決心……³⁵（傍点は筆者）

「天日」や「天子」は、いわゆる「順天」の「天」につながる文脈にある。中国では「天」
の概念が、このようにコスモロジ的な秩序体系とのかかわりで多様に用いられていた。

³⁰ 前掲、『孟子』「梁恵王下」、70 頁。

³¹ 前掲、『孟子』「万章上」、333 頁。

³² 前掲、『論語』「季氏」、329 頁。

³³ 施耐庵『水滸伝』（中）中国古典文学大系第 29 巻、駒田信二訳、平凡社、1968 年、423 頁。

³⁴ 施耐庵『水滸伝』（下）中国古典文学大系第 30 巻、駒田信二訳、平凡社、1968 年、第 82 回を参照。

³⁵ 同書、48 頁。

一方、万世一系の国体である日本においては、「天」とはすなわち天皇のことである。たとえば、松陰は、孟子の「天命」と「義戦」の概念を理解した上で、独自の討幕理論を展開している。彼は、幕府を伐つことは、「天皇」にしかできず、「天子の命」がなければ、「正義」の戦ではないと唱えているのである。彼の言う「天」とはすなわち一義的に「天皇」を意味する。

第二節 松陰の中国忠臣観

松陰の「三仁」に対する評価には、日中の国体の差異を認めた上で日本の国体を全肯定する態度が窺える。ここでは、彼が比干以外の中国の忠臣義士の行為をいかに考えていたか、そしていかなる点に注目して賞賛したのかについて、幕末の志士たちに愛読された浅見綱斎（1652～1711）の『靖献遺言』（1687）を通して考察してみたい。

嘉永五年（1852）、入獄中の松陰は当時多くの勤皇志士に読まれていた浅見綱斎の『靖献遺言』を手に入れた³⁶。平素より歴史上の人物の行いを見習って自身の志を励まそうとしていた松陰は、中国忠臣の事績が記された『靖献遺言』を通じて、自らが犯した職分の踰越という罪の正当性、合理性を求め、そこから慰藉を得たのである。

浅見綱斎は山崎闇斎（1619～1682）の門人で、大義名分論を唱えた人物である。彼が勤皇精神を鼓吹するに当たり、日本の忠臣を列举する代わりに中国の忠臣義士を取り上げたのは、幕府の注意をそらすためであるといわれている³⁷。『靖献遺言』³⁸には屈原（前340～前278）、諸葛亮（181～234）、陶淵明（365～427）、顔真卿（709～785）、文天祥（1236～1282）、謝枋得（1226～1289）、劉因（1249～1293）、方孝孺（1357～1402）という中国の忠臣義士八名が扱われているが、これは浅見綱斎が意図的に選んだ人物たちである。

松陰はこれら八名に「詠史八首」³⁹という詩を賦した。これらの詩には浅見綱斎が記した内容を基に、新たに自らの観点と心情が加えられている。その内容を通して、松陰が中国の忠臣義士をどのように捉えていたのか、また彼が何に注目し、中国の忠臣義士

³⁶ 「同四富永弥兵衛に与ふるの書」には「靖献遺言の一書は、読者をして勃然沛然として忠義の心を興起せしむ……此の書を借り、反覆して手より釈つに忍びず、声を抗げて誦読し、傍に人なきがごとし」と記されている（『野山獄文稿』[1855]『吉田松陰全集』第2巻所収、大和書房、1973年、303頁）。

³⁷ 序説には「幕府開始以来、楠・新田・菊池諸公の如き忠臣たちを表彰する時は、朝権を壟断する幕府は、足利氏同様に朝敵たらざるを得ない。若し此くの如き書を公にせば、幕府の迫害を被り、発行を停止せられ、折角の企ても水泡に帰せむ」と記されている（浅見綱斎『靖献遺言』五弓安二郎訳注、岩波文庫、1939年、6頁）。

³⁸ 浅見綱斎が『靖献遺言』を著した動機について、その跋文には、「古今忠臣義士が素定の規、臨絶の音、衰頹危乱の時に見はれ、而も青史遺編の中に表はるゝ者昭昭たり。捧誦して之を覆玩する毎に、其の精確惻怛の心、光明俊偉の気、人をして当時に際はり、其の風采に接するが如くにして、感慨嘆息、歆慕奮竦、自から已むこと能はざる者有らしむ。其れ亦尚ぶ可きかな。間、窃に其の特に著しき者を纂めて八篇を得たり……嗚呼、箕子已に往けり。而して其の自から靖んじ自から先王に献ずる所以の者、万古一心、彼此間つる無きこと此くの如し。然らば則ち後の遺言を読む者、其の心を験する所以も亦豈に遠く求めむや」と記されている（前掲、『靖献遺言』、275頁）。

³⁹ 松陰は「詠史八首」という題目の下に「靖献遺言を読むに因りて作る」という注を付けている（『吉田松陰全集』第6巻、山口県教育会編、大和書房、1973年、45頁）。

らの忠誠心に共鳴していたのかが窺える。まず中国史上周知の諫臣の代表である屈原に対して、松陰は次のような詩を捧げている。

「屈原」⁴⁰

秦国情不測 張儀多詭詞 秦国、情測られず、張儀、詭詞多し。
懷王聽不聽 上官逞忌猜 懷王、聽聽からず、上官、忌猜を逞しうす。
内為姦邪擾 外為強敵窺 内は姦邪に擾され、外は強敵に窺はる。
国事日益非 愁思乱如糸 国事日に益々非なり、愁思乱れて糸の如し。
宗臣不得君 偷生尚為誰 宗臣君に得られず、生を偷みて尚ほ誰れの為めにせん。
懷石沈汨羅 汨羅千古悲 石を懷いて汨羅に沈む、汨羅千古に悲し。

(太字強調は筆者)

太字で強調した部分には、松陰の屈原に対する考え方が示されている。屈原の諫言は懷王の耳には到底届かず、松陰は「宗臣不得君」「偷生尚為誰」の二句で屈原の悲懷を付度している。とりわけ「偷生尚為誰」という一句からは、松陰が屈原の孤独の心情を看取り共感していることが窺える。また、「汨羅千古悲」の一句には屈原の悲願が永遠のものであり、彼の精神が後代にも継承されていることが示唆されている。つまり、松陰が目したのは、後世まで記憶されている屈原の精神の永遠性である。同様の観点は、蜀漢の「諸葛亮」孔明、東晋の「陶潜」陶淵明、唐の「顔真卿」、宋の「文天祥」、宋の「謝枋得」、元の処士たる「劉因」、明の「方孝孺」についての詩作にも現れている。

例えば、「諸葛亮」では、「尤憐出師表、大義揭千秋」⁴¹（尤も憐れむ出師表、大義千秋に掲ぐ）とあり、孔明の正統を死守する大義が「千秋」に掲げられるという。また、「五斗米のために腰を折らず」で著名な陶淵明に対しても、晋の滅亡後も宋に出仕しない彼の志節を「潯陽人久亡、至今照人目」⁴²（潯陽人久しく亡し、今に至りて人目を照らす）と賞賛している。宋の文天祥に対しても、「一篇正気歌、忠義到今称」⁴³（一篇正気の歌、忠義今に到りて称す）とし、その忠誠心が今日も称賛されていることに注目している。

これらの中国史上著名な人物の中には、汨羅江に身を投げて世を去った屈原や夷敵に対抗して処刑された文天祥らのような忠臣もいれば、二朝に仕えることを拒んだ陶淵明

⁴⁰ 「詠史八首」[1854]（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、45～46頁。

⁴¹ 「詠史八首」「諸葛亮」[1854]（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、47頁。

⁴² 「詠史八首」「陶潜」[1854]（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、48頁。

⁴³ 「詠史八首」「文天祥」[1854]（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、50頁。

や劉因のような処士もいる。それぞれの経歴は異なるが、松陰は彼らに共通する不滅の忠誠心に注目したのである。同詩作に反映されたこのような観点は、まさしく彼自身の信念でもあったといえる。

そして、そもそもこの出発点には、「一誠兆人を感じしむ」⁴⁴、誠志があれば幕府を含めた天下の人々を動かすことができるという松陰の信念があった。松陰は積極的に藩府に諫言書を呈出することにより、こうした諫言が家老から藩主へ、藩主から幕府に至り、幕府を正すことができると考えていた。彼が生涯貫き通したこのような信念は、安政の大獄で処刑される前に残した『留魂録』の中にも見出せる。松陰は「五月十一日関東の行を聞きしよりは、又一の誠字に工夫を付けたり……一白綿布を求めて、孟子の『至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり』の一句を書し、手巾へ縫ひ付け携^{たづさ}へて江戸に來り、是れを評定所に留め置きしも吾が志を表するなり」⁴⁵と記し、また自分の信念を冒頭の「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」⁴⁶という一句に集約していた。彼は自分がこの世を去っても誠志は永遠に伝わるものと信じていたからこそ、八名の忠臣義士の事績を記した『靖献遺言』を読んで、彼らの誠志を重んじる精神に強く惹かれ、心の底から共感したのである。

第三節 屈原の心象世界への共鳴

前述したように、松陰の中国忠臣への評価、及び屈原を含めた八名に対する観点を通して見ると、君臣関係の絶対性が彼の忠誠観の基盤であったことは明らかである。したがって松陰の諫死の心象世界を考察する前に、まずその諫言精神の形成過程について検討する必要があるだろう。

3-1 松陰の諫言精神

嘉永五年（1852）、士籍と家禄を剥奪された後もなお松陰は、「防長の臣民は防長に死生すべく、皇国の臣民は皇国に死生すべき」⁴⁷として、自らを長州藩の「世臣」及び日本国の「臣民」と位置づけることを止めなかった。

ここでは、彼が「世臣」、「皇臣」として忠誠を尽くそうとしたその対象に注目しなければならない。幕藩体制においては、主君より「御家」が武士の忠誠対象となっていた。赤穂事件において家老の大石内蔵助がお家存続の可否をあれほど重要視していたことがその典型例である。また、笠谷和比古が指摘するように、大名が家臣団に「押込」まれするという慣行にも、その御家を至上とする忠誠観がよく現れている⁴⁸。しかしながら、

⁴⁴ 安政三年（1856）に松陰が勤皇僧の黙霖（1824～1897）と反幕問題をめぐって論争した書簡に現れた考え方である（『吉田松陰全集』第7巻、山口県教育会編、大和書房、1972年、443頁）。

⁴⁵ 「留魂録」〔1859〕（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、287頁。

⁴⁶ 同書、287頁。

⁴⁷ 前掲、「講孟餘話」、387頁。

⁴⁸ 笠谷和比古『主君「押込」の構造—近世大名と家臣団—』（講談社学術文庫、2006年）を参照。

幕末になると、武士が忠誠を尽くす対象が、かつての「御家」から藩主たる主君あるいは天皇へ転移するという忠誠構造の変容は、見過ごすことのできない事実である⁴⁹。

松陰の場合、遊学する前に上書した内容は専ら藩政府への意見であったが、嘉永六年（1853）に藩主の毛利敬親に上書した「将及私言」は、もはや御家の政策に対する提言ではなく、主君たる者は何をすべきかについて諫言する内容であった⁵⁰。この時の松陰は既に士籍を剥奪され、制度から遊離した身であり、いわゆる「家国秩序」⁵¹から排除された状況で、藩主から江戸遊学の許しを得ていた。「将及私言」とはすなわち「父祖累代国家の御厚恩を蒙り奉りたる事に御座候へば、仮令当時御家人召放たれ候とも、責ては一ニヶ条なりとも御為筋に相成るべき儀申出で度き存念にて、将及私言一冊を選述仕り候」⁵²という動機による、主君個人に対する「私言」である。ここでは藩と藩主が分離した結果、松陰の忠誠の対象が非人格的な御家ではなく主君にあることは明白であった⁵³。このように具体的な忠誠対象が移行することにより、松陰の忠誠観は次のような輪郭を示すことになる。

（前略）防長両国は一人の両国なり。一人にして在らば、則ち両国在り、一人にして亡くば、則ち両国亡し。不幸にして一人、其の人に非ずんば、則ち両国の民当に皆諫死すべし。若し或は死せず、去つて他国に往くは、両国の民に非ざるなり、山中に隠耕するは、両国の民に非ざるなり。万一支那の所謂君を誅し民を弔するがごとき者あらば、虎狼豺犀、決して人類に非ざるなり。故に曰く「天下は一人の天下なり」と。而して其の一人の天下に非ずと云ふは、特だ支那人の語のみ。然りと雖も普天率土の民、皆天下を以て己が任と為し、死を尽して以て天子に仕へ、貴賤尊

⁴⁹ 桐原は松陰と藩主の関係を主題として、松陰の忠誠の転回を初期、中期、後期に分けて論じている（桐原健真「吉田松陰における「忠誠」の転回—幕末維新期における「家国」秩序の超克—」『日本思想史研究』、東北大学大学院文学研究科日本思想史学研究室、33号、2001年、83～101頁）。また、橋川文三は、幕末から明治初期にかけての武士の忠誠意識の変容、藩から朝廷へという忠誠対象の転換、及び維新後における忠誠心の矛盾について系統的に検討を行っている（橋川文三「忠誠意識の変容」『近代日本社会思想史Ⅰ』近代日本思想史体系第1巻所収、有斐閣、1968年、143～164頁）。

⁵⁰ 上書の「将及私言」は「大義」、「聴政」、「納諫」、「内臣を飭しめ、外臣を親しむ」、「四目を明らかにし四聰を達す」、「砲銃」、「船艦」、「馬法」、及び「至誠」という総論の全九項目により構成されている。

⁵¹ 桐原健真、前掲論文、87頁。

⁵² 「将及私言」[1853]（『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、20頁。

⁵³ 松陰の忠誠対象の転位について、桐原健真は次のように指摘している。長州藩兵学師範時代の松陰は、「現前する主君よりも歴史的に形成された全体性としての『家国』」を重視し、「家学教授（山鹿流兵学師範）としての職分を全うすることが、主観的には主君への『忠』であり吉田家への『孝』であると考えられていたのであり、それは客観的には自らを『社稷の臣』として『家国』秩序の中に位置づけ、アイデンティファイさせる『忠誠』行為にほかならなかった」。しかし、嘉永五年（1852）に亡命の罪により士籍も家禄も奪われた松陰は、「家国秩序から排除され」る一方で、藩主によって江戸遊学を勧められるという転倒した状況において、新たな忠誠対象を模索していた。当時の松陰の忠誠観には「藩と藩主とを分離してとらえようとする傾向を見ることができる」（桐原健真、前掲論文、84～89頁）。

卑を以て之れが隔限を為さず、是れ則ち神州の道なり⁵⁴。(太字強調は筆者)

「世臣」としての松陰は「両国の民当に皆諫死すべし」と、大名たる主君への忠誠心を示すと同時に、「普天率土の民、皆天下を以て己が任と為し、死を尽して以て天子に仕へ」と語り、「貴賤尊卑」なく全ての民は、死ぬ覚悟で天皇に忠誠を尽くすべきであると考えている。「防長両国は一人の両国なり」及び「天下は一人の天下なり」という藩主と天皇を矛盾せず並立させる考え方は、主従関係を絶対視する松陰の忠誠観を端的に表わしている⁵⁵。

中国の忠臣義士への観点においても、「将及私言」においても、松陰は「至誠」を繰り返し強調し、「一誠兆人を感じしむ」という信念を持っていた。しかし、「君に事へて遇はざる時は諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり」⁵⁶とも語っているように、至誠による感悟、または諫言が幕府に届かなければ、彼が取るべき最後の選択は「諫死」にはかならない。「世臣」としては諫死すべし、「皇臣」としては死を尽くすべしという忠誠観は、武士のエートスに繋がっている。「諫死」を、自らに残された最後の、しかも唯一の選択可能性とするところに、松陰の純粋な忠誠心が窺える。

3-2 松陰と屈原

松陰は最後に書き残した『留魂録』に、「余去年已来心蹟百変、挙げて数へ難し。就中、趙の貫高をこいねが希ひ、楚の屈原を仰ぐ」⁵⁷と記し、これまでの心境を顧みながら、獄中で自殺した趙の貫高と汨羅に身を投げた屈原への強い関心を示している。彼が安政元年(1854)に創作した漢詩「屈原」にも明らかなように、松陰は屈原の不滅の志節に注目した。また、弟子との往復書簡や彼自身の詩作にも、屈原はしばしば登場する。彼はなぜ屈原にとりわけ関心を持ったのか、また屈原にいかなる共感を持ったのだろうか。

3-2-1 屈原の諫死構造

まず、屈原が自死の道を選んだ経緯について検討する。屈原について『史記』は次のように記している。「屈原は、名は平、楚の同族である。楚の懷王の左徒(官名)となっ

⁵⁴ 「丙辰幽室文稿」[1856] (『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年)、406頁。

⁵⁵ 松陰にとって、天皇は「歴史的知識としてではなく、彼の魂が直面するきわめて具体的な忠誠対象として浮かび上がってきた」。その結果、彼は「擁護さるべきものは幕藩体制の修正形態ではなく、天皇の意思そのものである」と認識している。こうした考え方は、「尊王の成果をあげようとする水戸学的忠誠のロジック」を断ち切っていると橋川文三是指摘している(橋川文三、前掲、「忠誠意識の変容」、151頁)。また、桐原健真も当時の松陰の国体観は水戸学から国学へ転回したと述べている。桐原によれば、松陰は水戸学に触れることにより「皇国の皇国たる所以」を知るに至ったが、水戸学的尊王論は「皇国」の当為を示す一方で、その存在理由を語らなかったため、松陰は「皇国」の存在理由を探究していた。そこで、彼はその理由を「天壤無窮の神勅」に象徴される日本固有の倫理に求めようとした。つまり、天皇への崇敬は手段ではなく、むしろそれ自体が目的でなければならないと、松陰は考えている(桐原健真『吉田松陰の思想と行動 幕末日本における自他認識の転回』東北大学出版会、2009年、145～173頁)。

⁵⁶ 前掲、「講孟餘話」、24頁。

⁵⁷ 前掲、「留魂録」[1859]、287頁。

た。見聞広く、記憶力に優れ、治乱の道理に明るく、文章や言葉を綴ることに習熟していた。朝廷に入れば、王と国事を計画して命令を出し、朝廷の外に出れば、賓客をもてなし諸侯の接待をした。懷王は非常に彼を信任していた。上官大夫は彼と位が同じで、王の寵愛を争い、心の中で彼の才能を憎んでいた。懷王は屈原に法令をつくらせた。屈平はその下書きを書いていて、まだ完成していなかった。上官大夫はそれを見て、取りあげようと思った。しかし屈平は渡さなかった。すると彼は屈原のことを讒言して言った。『王様が屈原に法令をつくらせておられることは、誰も知らない者はおられません。一つの法令を出るたびに、屈原はそのことを自慢して、「思うに、私でなくてはつくれる者は無い」と申しております』と。懷王は怒って、屈原を疎んずるようになった⁵⁸。

ちょうどこの頃、秦は斉を侵略しようと考えていたが、斉は当時楚と同盟を組んでいたため、斉を討つ時には楚が援兵を出すに違いなかった。対策として張儀という謀略家を楚に送り込んだ。懷王は張儀の離間策の罠にかかり、斉との同盟を解消した。懷王はその後張儀の奸計を知ったが、彼を許して釈放した。この時、「屈原はうとんぜられ、重要な地位には就いていなかったが、斉に使者に行き、帰ってきて懷王を諫めて、『どうして張儀を殺さなかったのですか』』と言った。懷王は後悔し、張儀を追ったが及ばなかった。その後、諸侯は共に楚を攻撃し、大いにこれを破り、將軍の唐昧を殺した。ところで秦の昭王は楚と婚姻を結び、懷王と会見しようとした。懷王はでかけようとしたが、屈原は『秦は虎や狼のように残忍で危険な国で、信用できません。おいでにならない方がよいでしょう』と言った。しかし懷王の末子の子蘭は王に行くことを勧めて言った、『どうして秦とのよしみを絶ってよいのでしょうか』と。懷王はとうとう秦に出かけた⁵⁹。懷王は最後に秦にて客死した。その後、懷王の子襄王が即位した。襄王もまた讒言を信じたため、屈原を江南地方に左遷した⁶⁰。

屈原は流されて江水に至り、一人の漁父に出会った。漁父が彼を見てたずねた、「あなたは三閭大夫ではありませんか。どうしてこんな所にこられたのですか」⁶¹と。屈原は「きよせいこんだく 挙世混濁して、我独り清すむ。衆人皆酔ひて、我独り醒さむ。是を以て放たる」⁶²と、自身の孤独を漁父に語った。漁父は「夫れ聖人は物に凝滞せずして、能く世と推し移る。挙世混濁せば、何ぞ其の流れに従ひて其の波を揚げざる。衆人皆酔はば、何ぞ其の粕をく餉うはずみらひて其のうはずみを啜らざる」⁶³と述べて、「世と推移」するように勧告したが、屈原はこれを拒絶し、汨羅に身を投げた。

屈原がこのように幾度も諫言して、最後に死を選択した精神の構造は「存在への『忠』

⁵⁸ 司馬遷『史記』「屈原賈生列伝」新釈漢文大系第 89 卷、水沢利忠著、明治書院、1993 年、337 頁。

⁵⁹ 同書、342～343 頁。

⁶⁰ 同書、345 頁。

⁶¹ 同書、345 頁。

⁶² 同書、345 頁。

⁶³ 同書、375 頁。

と当為への『誠』に引き裂かれ」⁶⁴た状態にある。これを解決する手段は原理的に三つあると毎熊は指摘する。

一つは再び「登仙」して、今度は「下界」に戻らぬこと、即ち制度内の良心を制度外へと最終的に解き放つことであり、その場合、良心のディレンマも解消する代りに、もはや制度的同一性、即ち良心の主体としての制度的自我も失われるだろう。

「出関」後の老子の姿が、この制度的自我を解放した「真人」の神話的祖型だが、屈原はこの道をとらない。二番目の方法は、再び祖霊への訴えを始めることで、これは解決ではなく、解決の無期延期であり、分裂したままの良心と、分裂したままの制度が永久対峙して、良心の声は同一の円周上を回り続けるのである。肉体的な死による中断以外に、この無限運動を停止する手段はない。杜甫の運命が、ある程度まで（民衆との関りの深化をひとまず括弧に入れば）この第二の良心の道を典型化していると見ることができる。屈原はこの道も取らない。屈原が取るのは第三の手段、即ち自己破壊の道である。神仙界での遊びの頂点で、強い望郷の思いに呪縛された彼は、制度的自我を回復すると同時に自殺を決意する⁶⁵。

周王朝に出仕する老子は、周の衰微を感じて国を去ることを決めた。国境の関所（函谷関）に至った際、尹喜という役人に「子將に隠せんとす。彊めて我が為に書を著せ」⁶⁶と請われ、老子は上下二編の『道德経』を著した。出関後の老子は、再び姿を現すことはなかった。老子のように「登仙」したのち、「下界」に戻らないという手段は、ジレンマを解消する一種の方法となる。この「登仙」は制度外への逸脱であり、決して「隠遁」ではなかった。隠遁思想は神仙思想と同様に制度的責任制を解除する役割をもっているが、それはあくまでも制度内における神仙思想である⁶⁷。

制度外の「登仙」も制度内の「隠遁」も拒否した屈原について毎熊は、「死によって制度から逸脱するのではない。むしろ逆に当為としての制度と一体になるためにこそ入水するのである」⁶⁸と述べている。また、屈原が制度の当為に殉じたことについては、「屈原の自殺は、彼の良心の構造そのものによって規定されているのであり、それはある意味では諫臣としての資格の誇示ですらある。諫言する制度内の良心は、常に自己破壊の代償を払って制度の当為に殉ずる覚悟をしなければならない。これが屈原のみならず、専制政体における諫臣達の共通の自己理解であった。当為に殉ずるのは制度ではなく、

⁶⁴ 毎熊佳彦、前掲、『東洋の専制と疎外—民衆文化史的な制度批判—』、346 頁。

⁶⁵ 同書、346 頁。

⁶⁶ 司馬遷『史記』「老子韓非列伝」新釈漢文大系第 88 巻、水沢利忠著、明治書院、1990 年、55 頁。

⁶⁷ 毎熊佳彦、前掲書、349～350 頁。

⁶⁸ 同書、351 頁。

『忠臣』達でなければならないからである」⁶⁹との見解を示している。

要するに、屈原のように最終的に死を選択する忠臣にしても、杜甫のような忠臣にしても、中国専制体制における忠臣（諫臣）は諫言を通した『『愚主』の改心と『小人』の排除』⁷⁰を目的としている。よって、ここにおける「諫言」は結局制度そのものを破壊するのではなく、むしろ「制度を（イデオロギー的に）強化」⁷¹する機能を果たすのである。

3-2-2 屈原との共鳴

松陰は『漁父』に記された屈原の心境を付度し、彼の孤独感に共鳴している。間部要撃計画に際して、松陰は久坂玄瑞を含めた大半の弟子たちに反対された。安政六年(1859)、野村和作宛の書簡には、「微志を君上へ達する事も万々路なし。同志の士も私情を以て論ずる故周旋はせぬなり。今の幕府今の諸侯勤王攘夷は万々出来ぬと明らむべし。路あらば死ぬる迄諫諍するもよし、路なくば天朝と吾が藩を外より助ける手段に止まるなり……実に世の中の人には酔漢と思ふがよし。何を云うても分りもせず、腹も立てず、涙もなし、虫も居らず。そんな人を相手にするよりは、程よくだまして吾れは吾が事をするがよい」⁷²と、屈原の「衆人皆酔へるに、我独り醒めたり」に擬え、「久坂などあれ程の無情な男とは実に失望の至り……今日自殺することが出来ぬ計りで、諸友へ一死を頼めども、一人も周旋して呉れる人なし。恨めし恨めし」⁷³と、自らの志をよく理解する弟子たちが周旋しない無力感、及び裏切られた憤慨を吐露している。

しかし注目すべきは、屈原の心境に共鳴、共感する松陰が、屈原の入水について、「汨羅の投、余謂へらく、忠義の顛なりと。何となれば、小丈夫悻々の行をなす人にもあらず、去って他国に行くべき身にもあらず、さればとて、仕へて国家に益あることもなし、やるせなきの余りに、狂顛となりて江に投じたるなり。是非当否を論ずべきに非ず」⁷⁴と語り、「自己破壊」を選択した屈原の汨羅への入水を「狂顛」と見なしていることである。

3-3 松陰における「狂」の意味

松陰は屈原の自死を「狂顛」と見なした。彼のこうした見解は、中国に見られる屈原への評価とは大いに異なるものである。例えば、司馬遷（前145頃～前86頃）は、「自ら濯淖污泥の滋垢を獲ず、皜然として泥すれども滓れざる者なり。此の志を推せば、日月と光を争ふと雖も可なり」⁷⁵と、屈原の節操を高く評価した。この評価は後世、例え

⁶⁹ 同書、352頁。

⁷⁰ 同書、353頁。

⁷¹ 同書、353頁。

⁷² 「野村和作宛」[1859/4]（『吉田松陰全集』第8巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、291頁。

⁷³ 「岡部富太郎宛」[1859/4]（『吉田松陰全集』第8巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、297頁。

⁷⁴ 「照顔録」[1859]（『吉田松陰全集』第6巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、242頁。

⁷⁵ 司馬遷、前掲、『史記』「屈原賈誼列伝」、338頁。

ば王逸（114～120）にも引き継がれている。しかしながら、班固（32～92）は屈原を「露才揚己」⁷⁶と批判し、さらに「忿懣不容，沉江而死」⁷⁷、すなわち「忿」のために江に身を投じるべきではなく、詩経・大雅に説かれているように「既明且哲、以保其身」⁷⁸すべきであると考えている。他方、宋の朱熹（1130～1200）は、「原の人と為り、其の志行、或いは中庸に過ぎて、以て法と為すべからずと雖も、然れども皆君に忠し国を愛するの誠心に出づ」⁷⁹と述べ、屈原の行為は儒学が唱える「中庸」の道に合致してはいないが、彼の誠心は評価に値すると記している。

司馬遷を含め、屈原の自死に対する中国文人の観点はそれぞれ異なっているが、彼の忠君愛国の精神及び文才に対する評価は一致していた。それは彼らがともに「士大夫」の立場から、士としての屈原の節義に注目していたからだと思われる。松陰はむしろ屈原の節義を賞賛する立場にあり、さらにその心象世界にも共感しているが、屈原の行為を「狂顛」と見なす点は、中国に見られる屈原への評価とは大いに異なっている。

それでは、松陰のいう「狂」とは一体何を意味しているのだろうか。「狂」には、「くるうこと。気がちがうこと。また常軌を逸すること」という一般によく知られる意味の他に、「志が大きくて、細事をかえりみないこと」の意味もある⁸⁰。そして、「狂顛」とは「世俗を顧慮せず、思うままに振るまう」ことを意味する⁸¹。『論語』に「中行を得てこれに与せずんば、必らずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所あり」⁸²と記される「狂」は、志が大きいう意味で使用されている。『孟子』にも「何を以て之を狂と謂ふや、と。曰く、其の志、嚶嚶然たり。古の人、古の人と曰ふも、其の行を夷考すれば、焉を掩はざる者なり」⁸³とあり、孔子のいう「狂」とほぼ同様の意味で用いられている。また、中庸を处世の範とする儒学において、狂者は中庸の士の下に位置づけられることが孔子のこの言説から明らかである。

孔子や孟子のいう「狂者」について、松陰は「講孟餘話」で次のように解釈している。

狂者は世俗に異るものありと雖も、大過罪なきが如し。狂者に至りては礼法を乱り政教を害す。其の世俗の厭ひ惡む（所）となる、亦宜ならずや（中略）孟子戦国の時に生れ、其の道遂に流俗汙世に合はず。是の茫々たる宇宙、堯舜湯文孔子の道、拂地して復た存するものあることなし。僅かに孟子の一身に存す。孟子の任、至重至大、必ず氣力雄健^{狂者}性質堅忍^{狂者}の士を得て、其の盛業を羽翼するに非ずんば、何ぞ其の

⁷⁶ 「楚辞新注」（『叢書集成統編』第119冊所収、王德毅主編、新文豊出版、1989年）、13頁。

⁷⁷ 同書、13頁。

⁷⁸ 同書、13頁。

⁷⁹ 前掲、『靖献遺言』、17頁。

⁸⁰ 『日本国語大辞典』第二版第4巻、小学館、1972/2001年、389頁。

⁸¹ 同書、471頁。

⁸² 前掲、『論語』「子路」、263頁。

⁸³ 前掲、『孟子』「尽心下」、509頁。

任を負荷することを得んや。……抑々余大罪の餘、永く世の棄物となる。然れども此の道を負荷して天下後世に伝へんと欲するに至りては、敢へて辞せざる所なり。是の時に当りて中道の士の遽かに得べからざるは古今一なり。故に**此の道を興すには、狂者に非ざれば興すこと能はず**。此の道を守るには、獯者に非ざれば守ること能はず。則ち其の狂獯を渴望すること、亦豈に孔孟と異らんや⁸⁴。

(太字強調は筆者)

松陰が考える「狂」は、基本的に孔子と孟子の示した「志が大きい」という意味から出発している。そしてそこから彼は、「道を興す」にはなぜ「狂者」に期待せざるをえないのかを力説している。それは、「氣力雄健」なる「狂者」は、儒学が唱える道から外れ、「礼法を乱り政教を害する」行動力をもっているからである。世俗を顧慮せず、常軌を逸する勇氣、行動力があるからこそ、再び真の「道を興す」ことができると松陰は考えるのである。孔子と孟子は狂者より中庸の士を重視したのに対して、松陰は狂者がもつ行動性に注目し、その点で狂者を評価しているのである。松陰のこの狂者論には陽明学の系譜が窺える。王陽明『伝習録』には、「誠に天の靈に頼って、偶々良知の学を見る有り。以為へらく、必ず此に由って而る後に天下得て治む可しと。是を以て斯の民の陷溺を念ふ毎に、則ち之が為に戚然として心を痛め、其の身の不肖を忘れて、此を以て之を救はんことを思ふ……天下の人、其の是の若きを見、遂に相与に非笑して之を詆斥し、以為へらく、是れ狂を病み心を喪ふの人のみと」⁸⁵と記されている。陽明の狂者論は基本的に孔子や孟子の解する「狂者は志が大きい」という意味を踏襲し、さらに「今この良知を信（得）じて、真是真非、手に信せて行ひ去き、更に些かの覆蔵を着せず。我今纔に箇の狂者の胸次と倣（得）れり」⁸⁶と述べて、狂と実践を繋げているのである⁸⁷。

ところで、松陰が自身の行為を初めて「狂」として自覚したのは、安政五年（1858）に「狂夫の言」と題して、藩政批判を含め、言路洞開や身分を度外視した人材登用など、時勢に対する提言を記した文書においてである。「二十一回猛士」⁸⁸と常に号した松陰は、

⁸⁴ 前掲、「講孟餘話」、415～416 頁。

⁸⁵ 王陽明『伝習録』新釈漢文大系第 13 巻、近藤康信著、明治書院、1961 年、364 頁。

⁸⁶ 同書、524 頁。

⁸⁷ 島田虔次によれば、陽明の弟子、王竜溪は陽明の思想を受け継ぎ、「狂者は志があまりに高くして、実行はとかくそれにとまなわないかもしれない。しかし、なんの虚飾もなく、なんの隠すところもなく、心のままに率直に行動する。もしあやまちを犯したならば、改めさえすればよい。これこそ入聖の真路頭である」と、狂こそ聖人となるための真の道であると説いた（島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967 年、139～140 頁）。なお、狂に関する詳細な分析については、白川静「狂字論」（『文字遊心』、1990 年）を参照されたい。

⁸⁸ 「二十一回猛士」の号について、松陰は「吾れ庚寅の年を以て杉家に生れ、已に長じて吉田家を嗣ぐ……杉の字二十一の象あり、吉田の字も亦二十一回の象あり。吾が名は寅、寅は虎に属す。虎の徳は猛なり。吾れ卑微にして孱弱、虎の猛を以て師と為すに非ずんば、安んぞ士たることを得ん。吾れ生来事に臨みて猛を為せしこと、凡そ三たびなり。而るに或は罪を獲、或は謗を取り、今は則ち獄に下りて復た為すること能はず。而して猛の未だ遂げざるもの尚ほ十八回あり、其の責も亦重し……」

「狂夫の言」の文末に、「今日の計、大略此くの如し。然れども今日の患は、人未だ其の患たるを知らざれば、則ち吾が計を以て暴と為し狂と為すも亦宜なり。人にて暴と為し狂と為せども、而も吾れ猶ほ言はざるべからざるものは、是れを^お捨てば国家の亡立ちどころに至ること疑ひなければなり」⁸⁹と述べている。「今日の患」に気づくことのない愚かな人々に対して、新たに「道を興す」意味合いを含め、自身の忌憚のない提言を「狂」と自覚して、「狂夫の言」と名付けたのである。これを記した後に、彼は老中間部詮勝要撃と伏見要駕の策を次々と計り、「狂」を發した。そして、間部要撃も伏見要駕も結局は実行できず、自分の志を伸張できないと考えた松陰は、屈原に倣い、一時は絶食を試みている。

岸獄の罪人上書建白等仕るべき身分には固より之れなく、君公の御安危御榮辱目の前に迫り候儀を知りつつ安坐飽食仕り候事は実に苦心に耐へ申さず、寧ろ屈平の死に^{なら}倣はんのみと覚悟仕り、当月二十四日より飲食共に禁絶仕り専ら一死を期し候処、未だ三日ならずして、同志にて^{せんだつ}先達て^{おとがめ}御咎を^{こうむ}蒙り居り候者四人一同に^{おゆるし}御免に相成り、公恩の莫大なるを感じ、且つ斯の道未だ地に墜ちざるを悦び、覚え又々飲食を復し申し候⁹⁰。

松陰が三日後に絶食を断念した理由は、同志が君恩により咎めを解かれ、「道未だ地に墜ち」ずという希望が見えたからである。その後、彼は再び伏見要駕を動かして、弟子たちを奔走させた。弟子入江杉蔵への書簡においても、松陰は自らの行動を「狂」と認識し、自ら「狂人」と記している⁹¹。この「狂」は自身の志を意味する他に、死の覚悟を前提とする武士的倫理とも緊密に関わっている。

武士の倫理思想を代表する『葉隠』(1716)は、「武士道は死狂ひ也。一人の殺害を数十人して仕かぬるもの也。直茂公も被仰候。本氣にては大業はならず。氣違に^{なり}成て死狂ひする迄也。又武道に於て分別出来れば、早おくるゝ也。忠も孝も^{いら}不入、士道におゐては死狂ひ也。此内に忠・孝は^{おのずから}自こもるべし」⁹²として、「大業」を全うするには、「死狂い」精神が必要であると記している。ここでの「死狂い」(=「狂」)とは、『葉隠』の

と説明している(「幽囚録」[1854]『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年、87頁)。

⁸⁹ 「狂夫の言」[1858/1]『吉田松陰全集』第4巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年)、305頁。

⁹⁰ 「愚按の趣」[1859/1]『吉田松陰全集』第5巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年)、321頁。

⁹¹ 安政六年三月に野山獄にいた松陰が間部詮勝要撃事件について送った入江杉蔵宛の書簡には「如何如何、僕已に狂人……」と記されている(「入江杉蔵宛」[1859/3]『吉田松陰全集』第8巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年、252頁)。

⁹² 『三河物語 葉隠』日本思想大系 26、齋木一馬、岡山泰四、相良亨校注、岩波書店、1974年、251～252頁。

口述者である山本常朝（1659～1719）が佐賀藩祖の鍋島直茂（1538～1618）の戦場話に因み、時代に合わせてアレンジしたものであった。主君に忠誠を尽くす場が戦場から「暈の上」に変わり、江戸時代の幕藩体制が厳格に整えられた制度的現実においては、それぞれの職分に従って主君に仕えることが武士の忠となっていた。そのため、山本にとっての「死狂い」（＝「狂」）は、「大業」をなすには「狂」を要するという儒学的な「志」を含んでおり、さらに、「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」⁹³という『葉隠』の周知の言葉も、この「大業」の志に支えられた常なる「死の覚悟」（＝「狂」）であったといえる。つまり、「死狂い」とは「暈の上の御奉公」の精神を表すものであり、泰平の世における「狂」だったのである。これに対して、幕藩体制が崩壊に瀕した幕末動乱期の松陰にとっては、理想を実現するための行為は全て制度から逸脱したものとならざるをえなかった。彼の「狂」には、『葉隠』が理念化した武士道精神を再度活動へと移し換え、それを儒学的思惟と結合する意思が込められていたと考えられる。

以上のことから明らかなように、武士としての松陰は彼独自の視点から屈原の死を「狂」と見なしており、そのような見解は中国の士大夫のそれと乖離している。生死をすでに度外視した松陰の関心は、自分の「志」をいかに後世に伝えうるかの一事にあり、それだけが常に念頭にあった。『留魂録』の冒頭で彼は、「吾れの祈念を籠むる所は同志の士甲斐々々しく吾が志を継紹して尊攘の大功を建てよかしなり」⁹⁴と、自分の尊攘の志、いわゆる草莽堀起を同志たちが継承するよう切願している。自我を没却し、「尊攘の大功」を成し遂げることを念頭に置くという松陰の毅然たる意思の発露は、単なる主従関係に殉ずるという赤穂義士の自己犠牲の精神とは次元を異にするものと言わねばならない。このことは、幕末の武家社会内部において士族の忠誠観が「御家」を越えた「大業」をめざして確実に変容していった結果であり、幕藩体制が崩壊に瀕していたことの証しでもあっただろう。

むすび

本章では、吉田松陰の中国忠臣に対する評価と観点の分析を通して、彼の君臣関係を絶対視する忠誠観が、中国の伝統的儒学と異なる内実を示していることを明らかにした。また、屈原の諫死精神に対する中国の士大夫及び松陰の評価を比較、検討した結果、屈原の節義に対する両者の評価は一致するものの、松陰の観点は武士道の倫理精神を基底とする点で大きく異なっていることを示した。

中国において、あらゆる面で思想的支柱であった儒学は「中庸」の道を唱え、士大夫は総体的にそれを行動の規範としていた。また、歴代の政治体制は、文官が武官より重視される傾向にあったため、政治の主導権を握るのも文官であった。よって、政治上の

⁹³ 同書、220 頁。

⁹⁴ 前掲、「留魂録」[1859]、292 頁。

発言力も地位も優勢を占めた文官は次第に大きな勢力を成し、行動性や実務性を備える武官は、長くこのような文武不調和の政体で抑圧されていた⁹⁵。一方、江戸時代の武士は、元来行動的な戦闘力を有しており、さらに徳川幕府においては文武兼備が求められたため、儒学の素養をも備えていた。したがって、武と文が一体化した武士は、中国の士大夫に比べ、丸山真男が指摘したような「ダイナミック」な精神を持ちあわせており、この行動力が内憂外患の幕末の時代に爆発したのである。

本章で分析対象とした吉田松陰は、この幕末動乱期に武士の行動精神を体現した代表的な人物である。君臣関係を絶対視する松陰は、士籍も家禄も剥奪された身でありながらも、自らを「世臣」、「皇民」と位置づけ直すことにより、積極的に幕府や藩府に諫言し、時代の逼迫した状況を改善しようと尽力した。この至誠の心は「諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり」という武士の「死狂い」精神によって裏付けられていた。この精神は、主従関係に殉ずる戦国時代の習俗の名残であり、赤穂義士の事件にも反映されているものである。しかしながら、幕末における松陰のそれは、単なる忠誠心を表わすだけでなく、革新をめざす自らの志を何としても実現しようとする確固たる意志に支えられていた。幕藩体制が揺らぎ、忠誠観が変化するにつれ、「死狂い」精神も変容を遂げていったといえる。

ここで注目すべきは、松陰のような士の「死狂い」的諫言精神と、屈原などの中国の士大夫の諫死精神との内実が異なっていることである。毎熊も指摘するように、屈原の自己破壊は当為としての制度に殉じる行為である。いわば、過ちを正すという改善、修正の意味合いをもつ「諫言」は、毎熊の言葉を借りるなら、『愚主』と『小人』の批判であって、制度そのものの批判ではない⁹⁶。その結果、制度を否定するのではなく、むしろ諫言を通して制度をより強化するのである。ところが、幕末における松陰のような下層武士層有志の諫言は、制度内部の改革を行うのではなく、むしろ制度を無視し、さらに既成の階級の枠を打ち壊して、変革を行うことを目指した。儒学から受容した諫言の概念は、幕末の武家社会で革新的な「死狂い」的諫死精神として展開されることになったのである。

⁹⁵ 中国文官と武官の気質の違いについては、黄仁宇『万曆十五年』（邦訳『万曆十五年—1587「文明」の悲劇』東方書店、1989年）を参照。

⁹⁶ 毎熊佳彦、前掲書、353頁。

第三章

幕末期における下級武士の諫言精神

はじめに

第一節 久坂玄瑞と吉田松陰との交流

1－1 久坂玄瑞の攘夷論

1－2 吉田松陰の反論

第二節 久坂の「言路洞開」論と草莽論

2－1 「言路洞開」論

2－2 草莽論

第三節 佐賀藩の江藤新平

3－1 義祭同盟

3－2 江藤新平の『図海策』

3－3 江藤の脱藩と尊王活動

むすび

はじめに

本章では、幕末期における下級武士が幕藩体制の厳格な身分秩序を無視し、積極的に藩府や藩主に上書・諫言した行為の背景にある諫言精神を考察する。そこで、長州藩松下村塾の中心人物で、のちに禁門の変を起こした久坂玄瑞（1840～1864）と佐賀藩義祭同盟の一員である江藤新平（1834～1874）を分析対象とし、尊王・攘夷の論争が白熱した時代における二人の藩主や藩（御家）に対する忠誠観、また尊王攘夷の言動に現れた革新的な理念、そしてそれにもかかわらず維持された封建的思考に焦点をあてて分析する。

久坂玄瑞は奇兵隊を創設した高杉晋作（1839～1867）と並び、吉田松陰の門下生中の中心人物である。師の松陰の死後に、久坂を筆頭とする松陰門下の有志は尊攘論をもって長井雅楽（1819～1863）の「航海遠略説」¹に基づく藩是を変え、藩論とした²。一方、江藤新平は、薩長に出遅れた佐賀藩や藩主のために脱藩して、独自に京都で木戸孝允を通し公家と周旋した。

¹ 文久元年（1861）に長州藩は長井雅楽の航海遠略説に基づき朝幕間の周旋に乗り出すことを決定した。藩論となったこの説は開国と武備強化という外交面と、公武合体という内政面の二大方針を軸とする政策であった（高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、2007年、37頁～46頁を参照）。また、長井雅楽の史料は中原邦平『長井雅楽詳伝』（マツノ書店、1979年）に記載されている。

² 長井雅楽の政策が藩政となった経緯と、尊攘論派の台頭したプロセスについては高橋秀直「長州藩の朝幕一体化構想」（高橋秀直、前掲書）及び末松謙澄「長井雅楽の周旋」、「長井雅楽の蹉跌」（『修訂防長回天史』上巻所収、柏書房、1967年）を参照。

江藤も久坂も微禄の家柄の出自であり、従来から政事参与を許容されていない身分であった。しかし、幕末においては、彼らと同じような多くの下級武士層が、分を越えて積極的に藩主や藩府に政事に関する諫言書を提出したり、諫言したりして、次第に政局に頭角を現したことが極めて大きな特徴といえる。

そもそも幕藩体制下で、「文武兼備」が求められた武士の職分について、例えば山鹿素行（1622～1685）は次のように語っている。

凡ソ士ノ職ト云ハ、其身ヲ^{オモウ}顧ニ、主人ヲ得テ奉公ノ忠ヲ尽シ、朋輩ニ^{マジワツ}交テ信ヲ厚クシ、身ノ独リヲ^{ツツシ}慎デ義ヲ専トスルニアリ。（中略）士ハ農工商ノ業ヲサシ置テ此道ヲ専ツトメ、三民ノ間苟クモ人倫ヲミダラン輩ヲバ速ニ罰シテ、以テ天下ニ天倫ノ正シキヲ待ツ。是士ニ文武之徳知不備バアルベカラズ。サレバ形ニハ剣戟弓馬ノ用ヲタラシメ、内ニハ君臣朋友父子兄弟夫婦（ノ）道ヲツトメテ、文道心ニタリ武備外ニ^{トトノイ}調テ、三民自ラ是（ヲ）師トシ是ヲ貴ンデ、其教ニシタガイ其本末ヲシルニタレリ。コヽニオキテ士ノ道タツテ、衣食居ノツグノイ以テ心易カルベク、主君ノ恩、父母ノ恵、シバラク報ズルニタリヌベシ³。

（太字強調は筆者）

素行の職分論は主君（藩主）に対する忠や朋友に対する信など、儒学的な色彩を帯びているが、基本的に武家社会にあわせた内容である。農、工、商はそれぞれ各自の職業を持っているのに対して、武士たるものは主君に忠誠を尽くすことも、「文」「武」を兼ね備えることもその職分であると、素行は述べている。従来の「武」、武芸以外に、修身としての学問に励むことも必須となる。素行の主張と同様に、大道寺友山（1639～1730）の『武道初心集』（1725）の中でも、「武士たらむものは。三民の上に立て。事を執る職分の義に候へば。學問を致し。博く物の道理を辨へ不申しては不叶義に候」⁴と説かれ、武士にとって学問が必須不可欠なものとされている。学問について彼はさらに具体的に説明し、「武士道の學文と申は内心に道を修し外かたちに法をたもつといふより外の義は無之候」⁵と語り、学問の習得はもっぱら身を修め職分を全うするためであると強調している。これは「文道心ニタリ武備外ニ調テ」と唱える素行と同様の文脈にある。身を修め、学問を習得することは近世武家社会が文武兼備の「文」に託した一般的な意味内容であった。元来、儒学は修身、齐家、治国、平天下という理念を果たすための学問として成立したが、幕藩体制における儒学は、松浦玲によれば、「元来持っている政治的理想主義、普遍的道義性、硬骨性がどんどん削り落され、矮小化され、上級者へのひたすら

³ 『山鹿素行』日本思想大系 32、田原嗣雄、守本順一郎校注、岩波書店、1970年、32頁。

⁴ 大道寺友山『武道初心集』、岩波文庫、古川哲史校、2008年、164頁。

⁵ 同書、40頁。

な服従を説くつまらない教えに転落し、そういうものとして近世日本社会に浸透した」⁶。

この矮小化の一つの理由として、武士は、地位としては四民のトップ、指導者層に位置づけられていたが、実際、政治を行うことができたのは家老のようなごく一部の上級武士層に限られていたという現実が考えられる。しかし、幕末において、下級武士たちに政事的舞台への登場を促したのは、彼らが士大夫の学問としての儒学の素養を身に付け、支配指導者の一員であるという自覚を持っていただけでなく、各自の背後にある藩主や藩力からの支持⁷を得たことが重要な要素となった。久坂のような志士たちは、藩によって有為の人材と認められて江戸など各地に遊学したものが多く、低い身分として無視できる存在ではなかった⁸。

したがって、本論では、幕末の尊王攘夷において、もっとも早く行動を起こした長州藩の久坂玄瑞、および薩長土に出遅れた佐賀藩の江藤新平を実例として取り上げ分析する。従来、久坂に対する注目は高杉晋作と比較すると総じて少ないが、終始藩の内政だけに執する高杉晋作と異なり、藩を越えた各藩の志士たちとの連携を主眼とした久坂は見逃せない存在である⁹。彼は藩主と藩のために、他藩の有志と連携して、元治元年(1864)に禁門の変を指揮し、失敗して自決した。一方、佐賀藩から脱藩した江藤新平は、京都に潜伏している期間、木戸孝允や西郷隆盛など、他藩の藩士との交際があったため、維新後木戸の推薦により中央官僚の一員となった。この二人の下級武士の行動理念について、武士的忠誠の核心をなす諫言精神の共通点と相違点を併せて検討する。

第一節 久坂玄瑞と吉田松陰との交流

1-1 久坂玄瑞の攘夷論

久坂玄瑞は天保十一年(1840)に生まれ、父親は25石とりの藩医である。彼が生れた年は隣国の中国ではアヘン戦争が起こった年である。安政元年(1854)、彼が十五歳の時に兄と父が相次いで亡くなったことにより、家督を相続し藩医となった。安政四年(1857)に松下村塾に入り松陰の下で学問を修めた。同年、高杉晋作と明治初期に萩の乱を起こした前原一誠(1834～1876)も入門した。

久坂は微禄¹⁰の藩医の身でありながらも藩政、時局に対する関心を常に持っており、忠君報国を絶えず念頭においていた¹¹。松陰の門下に入る前の安政三年(1856)に、彼

⁶ 松浦玲『明治維新私論』現代評論社、1979年、9頁。

⁷ 遠山茂樹『明治維新』岩波文庫、2000/2009年、55頁。

⁸ 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、2007年、132頁。

⁹ 池田諭『高杉晋作と久坂玄瑞—変革期の青年像—』大和書房、1966年、23頁。

¹⁰ 久坂玄瑞の父が安政元年(1854)に提出した「家督奉書」によれば、久坂家の知行高は25石であった。「久坂良弼死に付、跡職のこと相伺ひ候処、知行高二十五石相違なく嫡子秀三郎相続仰付けらるべき旨の条、家督断絶なきやう申し渡さるべく候。恐々謹言」(竹田勘治『久坂玄瑞』(復刻版)マツノ書店、1998年、16頁)。

¹¹ 久坂の父兄は早くから久坂に学問を学ばせた。彼は最初に藩士の吉松淳三の営む吉松塾に通い、その後藩の医学所好生館に入った。医学所の規定に、「十七八歳まで、専一に儒学研究いたすべく候。第

は「修業」を理由に九州遊学の旅に出た。彼は出発当時の心情を「出郷」¹²という詩に託していた。桑蓬の志を持って萩を出た彼は、筑豊、長崎、久留米、熊本などへ赴いた。従来から幕府が唯一公認する対外貿易港であった長崎を訪れた久坂は、「……箋毫錦繡舶来日。市上吹薰蘭麝香」¹³、「市店連辺売蘭器……風外罽旄腥氣吹」¹⁴というような異国の雰囲気と舶来品が満ち溢れる光景を初めて目にし、「春暖閭門動午埃。蛮奴耽視叨徘徊。女兒或解侏離語。花柳樓辺扶得来」¹⁵という詩作を残している。外夷からの危険を身近に感じた彼は、異国人を「蛮奴」、外国語を「侏離語」と称しており、夷敵に対する憤りが窺える。箱崎に着いたときには、「如今国威何衰頹。万里妖雰委凌蔑」¹⁶と、憂国と夷敵への憤慨はなお一層増していた。九州遊学後に萩に戻った久坂は宮部鼎蔵（1820～1864）を介して松陰に書簡を送った。「奉呈義卿吉田君案下」（1856）には彼の時勢に対する意見が記され、そこに初期の攘夷思想も現れている。

（前略）居皇国之土、食皇国之粟則皇国之民也、夫方今、皇国之勢何如也、綱紀日弛、士風日頹、而洋夷日跳梁、屢乞互市、其意必在伺我罽伸其所欲也、而廟議以為不若、暫許互市、而嚴兵備於其隙、殊不知許互市、則天下之人益狎其無事而益般樂

一に彝倫を明かにして義理に通曉し、易く医を学ぶの基礎なり。尤も、詞藻に耽り本職を忘却いたさざるやう、肝要に候事」という一条があり、予科生は漢学を専ら勉強している（竹田勘治、同書、14頁）。そのため、専門の医学より儒学の素養を身に付けた久坂玄瑞は、十八歳の時に賦した「有感」という詩で、「……十五家兒従父亡。医林繼職杏花場。向人謾称医天下。胸臆不蓄療人方」と詠み、家督を相続して医者になったが、胸中には病人をなおす処方ではなく、天下の大患を治療する処方だけがあると、「天下」への強い関心を表わしている（「丁巳鄙稿」『久坂玄瑞全集』所収、福本義亮編、マツノ書店、1978年、112頁）。

¹² 「男子蓬桑志。飄然出霸城。雲烟三月好。書劍九州行。月落林花暗。鞭風帶馬聲。江戸吟眼裡。随处託予評」（「西遊稿」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、95頁）。竹田訳：男子蓬桑の志、ヘウゼンとして霸城を出づ。雲烟三月よろし、書劍九州の行。月落ちて林花暗く、鞭風馬声を帯ぶ。江山、眼裡に吟じ、随所予に評を託す（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、21頁）。

¹³ 「満港烟浪百尺檣。燦然如画映斜陽。箋毫錦繡舶来日。市上吹薰蘭麝香」（「長崎雜詩」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、105頁）。竹田訳：満港の烟波百尺の檣、燦然として画の如く斜陽に映ず。箋毫・錦繡、舶来の日、市上薫を吹く蘭麝香（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、26頁）。

¹⁴ 「市店連辺売蘭器。烟霞佳処記唐詩。行々忽（あやしむ）投胡地。風外罽旄腥氣吹」（「長崎雜詩」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、105頁）。竹田訳：市店連る辺、蘭器を売り、烟霞佳き処、唐詩を記す。行く行く忽ちあやしむ胡地に投ぜしを、風外、罽旄（毛織物の旗）腥氣を吹く（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、26頁）。

¹⁵ 「長崎雜詩」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、105頁。竹田訳：春暖の閭門午埃動き、蛮奴耽視してみだりに徘徊す。女兒（遊女）或は解す侏離の語（外語）、花柳樓辺、扶持して来る（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、26頁）。

¹⁶ 「鎌倉太郎真英傑。断然斬使三尺鉄。蒙古憤恚飛鯨鱗。黒雲蔽海奔魚鼈。小醜豈窺大八洲。捲天颶風忽（りつれつ）。神兵縦横若無人。賊艦靡粉妖氣絶。六百年後丙辰年。吾来慷慨目皆裂。如今国威何衰頹。万里妖雰委凌蔑。浩歌一曲上前途。風雨蕭索滴簑蓆。嚴然照々廟顔字。敵国降伏千古掲」（「箱崎有感」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、105頁）。竹田訳：相撲太郎真に英傑、断然使を斬る三尺の鉄。蒙古憤恚して鯨鱗を飛ばし、黒雲海を蔽ひ魚鼈奔る。小醜めに窺はんや大八洲、天を捲きて颶風たちまちリツレツす。神兵縦横して無人のごとく、賊艦靡粉して妖氣絶ゆ。六百年後丙辰の年、吾れ来りて慷慨し目眦裂く。如今、国威なんぞ衰頹せる、万里妖雰の凌蔑に委ぬ、浩歌一曲じて前途に上れば、風雨蕭索として簑蓆（ミノ）を滴る。嚴然照々たり廟顔の字、敵国降伏、千古に掲ぐ（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、28頁）。

怠傲也、兵備終不可嚴矣、昔者弘安之役、元使屢至我、以其書辭不礼、遂斬其使、元帥十万来寇精兵以当之、彼一敗蕩然、生帰者僅三人、元不復窺我辺、嗚呼我男子国之称、不宜哉、儻使方今如弘安、彼請互市、我对曰、国法有禁、彼強之則宜斬其使、天下之人皆謂、彼必来寇不可般楽也、不可怠傲也、綱紀必張士風必（以下闕）¹⁷。
（太字強調は筆者）

久坂はまず「皇国の民」を自称して、その立場から当今の時勢を論じている。洋夷は開港通商を求め、その目的は「欲」を伸ばすところにある。しかし幕府は外夷の要求を暫く容れて、その間に「兵備」を充実しようと考えていた。このように外夷の要求をあまりにも単純視している幕府を久坂は批判する。そして、今の日本は「弘安の役」の時のように、外夷を斬ることによって国の綱紀を張る一方、士風を高めるべきだと主張する。「外夷を斬る」という西洋排撃の考え方は当時の普遍的かつ一般的な攘夷論であったが¹⁸、皇国の民という出発点から幕府を批判する尊王と攘夷を合わせた考え方は、次第に反幕的政治運動の観念的支柱となり、明治維新の思想的基盤を用意するものとなった¹⁹。遠山が指摘するように、そもそも幕末の尊王と攘夷は本来それぞれ個別の思想である。尊王論は「古代の權威をもつ皇室を君臣関係の最高表現として尊崇すべきを主張する」が、「わが『神州』を侵略する意図をもつ『夷敵』を撃攘しようとする攘夷論は……本来儒教的名分論にもとづくもので、内にあっては君臣の大義、外にたいしては華夷の弁（自国を中華、外国を夷敵…）」である²⁰。

久坂の攘夷論はこのような儒教的な華夷思想から発したものである。華夷思想の影響下で、彼は「頃日人禽雑処交商已行利果在我乎、害果在彼乎、抑亦我損而彼益乎」²¹と記し、夷敵を「禽」として見下している。また、洋夷は表に通商貿易を求めているが、その裏に「欲」を伸ばすことを謀っていると考える久坂は、「邪教必薰入我人心、邪教乃

¹⁷ 前掲、『久坂玄瑞全集』、221頁。竹田訳：皇国の土に居り、皇国の粟を食む、即ち皇国の民なり。それ方今、皇国の勢如何や、綱紀日に弛み、士風日に頹れ、而して洋夷日に跳梁し、屢々互市（通商）を乞ふ、その意、必ず我が尊（すき）をうかがひてその欲するところを伸すに在るなり。而して廟議は、暫く互市を許すを以てし、その隙に兵備を嚴にするに若かずとなす。殊に知らず、互市を許さば即ち天下の人益々その無事に狎れて益々般楽怠傲し、兵備つひに嚴なるべからざることを。昔、弘安の役に、元使屢々我れに至る。その書辭礼ならざるを以て、遂にその使を斬れり。元の師十万来寇するや、精兵を以て之に当り、彼れ一敗蕩然として生帰するもの僅に三人。元また我が辺を窺はず。あゝ我れに男子国の称ある、うべならずや。もし方今を弘安の如からしむれば、彼れ互市を請はゞ我れこたへて曰はん、国法の禁ずるありと。彼これを強ひば即ち宜しくその使を斬るべし。天下の人皆いはん、彼れ必ず来寇す、般楽すべからざるなり怠傲すべからざるなりと、綱紀必ず張り、士風必ず（以下缺損）（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、31～32頁）。

¹⁸ 当時の攘夷論は、会沢正志斎、佐久間象山、吉田松陰のような西洋技術導入を認めた一派、及び大橋訥庵のような西洋技術を一切拒絶した一派に分かれる（中村安宏「攘夷に向かう心—大橋訥庵の「転向」—」『国家と宗教』所収、源了圓・玉懸博の編、思文閣、1992年、401頁）。

¹⁹ 遠山茂樹、前掲書、47頁。

²⁰ 遠山茂樹、前掲書、47～48頁。

²¹ 前掲、『久坂玄瑞全集』、223頁。竹田訳：頃日、人禽雑居し、交商すで行はれているが、利は果して我れにありや、害果して彼にありや、抑々また我れ損して彼れを益するのや（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、44頁）。

彼欲行之乎、交商之際也」²²と断定し、洋夷の「欲」が即ちキリスト教を盾とする日本への侵略であると非難している。

キリスト教の弾圧については天正十五年（1587）豊臣秀吉の代からすでにあり、禁止の理由を別問題とすれば、キリスト教排斥と神国観念との繋がりとは当初から存在していた²³。江戸時代において、「幕府のキリシタン禁制とキリスト教排斥論は、中世以来の神国概念や「三教一致」の世界と相容れないとする邪教観に加えて、むしろキリスト教世界を侵略勢力とする観点からの邪教論で貫かれて」²⁴いた。つまり、キリスト教＝侵略勢力という観念は当時の人々の心に深く根付いており、久坂もキリスト教による人心の惑乱を危惧している。このように、攘夷思想とキリスト教排斥思想が久坂の攘夷論を構成していた。

医者である久坂にとって、自ら「一医生而已天下大計為言其越樽俎甚矣」²⁵と記しているように、「樽俎を越え」て時勢を大いに論じることは常軌を逸したことであった。職分を越えた発言は一見封建的な身分秩序の枠を打破するように思われるが、「幕藩体制を観念的に支える封建主従道徳が弛緩しつつあった必然的趨勢に抵抗し、これをあくまでも護持してゆくために、天地と共に変らざる国体の顕現として、皇室の絶対尊厳を強調し、そこに忠道徳の最終の拠り所を求めようとした幕末尊王論には、もともと反幕的要素を含まず、まして反封建的イデオロギーたりうるものではなかった」²⁶という遠山の指摘のように、久坂の攘夷論にも反封建的イデオロギーは一切読み取れず、むしろ封建的な色彩が強く反映している。

1-2 吉田松陰の反論

久坂の攘夷論説に対して松陰は、「議論浮泛」「思慮粗浅」と評するとともに、自身の職分観をも久坂への返書に述べている。

天下為すべからざるの地なく、為すべからざるの身なし。但だ事を論ずるには、**当に己れの地、己れの身より見を起すべし、乃ち着実と為す。**故に身將軍の地に居らば、当に將軍より起すべし。身大名の地に居らば、当に大名より起すべし（中略）**豈に地を離れ身を離れ、之れを論ぜんや。今吾兄は医者なり、当に医者より起すべし。寅二は囚徒なり、当に囚徒より起すべし。必ずや利害心に絶ち、死生念に忘れ、国のみ、君のみ、父のみ。家と身とを忘れ、然る後家族之れに化し、朋友之れに化し、郷党之れに化し、上は君に孕とせられ、下は民に信ぜらる。**ここに於てか、將軍為すべきなり、大名為すべきなり、百姓乞食も為すべきなり。乃ち医者囚徒に至るまで、為すべからざる者あるなし。是れを之れ論ぜずして、傲然天下の大計を以

²² 前掲、『久坂玄瑞全集』、224 頁。竹田訳：邪教はわが人心に薰入しやう。邪教は彼が交商の間に行為はうと欲するところである（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、44 頁）。

²³ 山口啓二『鎖国と開国』岩波現代文庫、2006 年、183 頁。

²⁴ 同書、185 頁。

²⁵ 前掲、『久坂玄瑞全集』、223 頁。竹田訳：一医者の子で天下の大計を論ずるは樽俎を越える（分を越える）こと甚だしきなり（竹田勘治、前掲、『久坂玄瑞』、38 頁）。

²⁶ 遠山茂樹、前掲書、49 頁。

て言を為す、口焦げ唇爛るとも、吾れ其の裨益あるを知らざるなり。謂ふ所の議論の浮泛とは是なり（中略）聖賢の貴ぶ所は、議論に在らずして、事業に在り。多言を費すことなく、積誠之れを蓄へよ²⁷。（太字強調は筆者）

物事を行う際には身分による分限があり、それがいわゆる職分である。自分の身分を認識した上で行動することが、即ち「着実」であると松陰は考えている。幕藩体制における武士の職分については、山鹿素行や大道寺友山の観点を通してすでに明らしたように、武士は身分制度において士農工商の首位にあり、支配者の身分に位置づけられながら、主従関係の序列においては同時に被支配者の身分でもあった。近世の藩体制においては、実際政事に携わる者が一部の上層家臣、とりわけ家老に限られていたため、他の多くの武士は「文武」に修熟し、「奉公」を心掛けることこそがむしろ本業となっていた。この観念は幕末に至っても根強く固持されていたことが、松陰の職分に基づく「着実」の実践論から窺える。

彼は「綱常名分を以て己が責と為し、天下後世を以て己が任と為すべし。身より家に達し、国より天下に達す（中略）達せざる所なく、伝はらざる所なし。達の広狭は、行の厚薄を視し、伝の久近は、志の浅深を視す」²⁸と、職分をもって自らの責任で行動を起すならば、そこに発した志の精神は必ず個人から家、家から藩、藩から天下、というように伝わっていくと考えている。この観点は、前章でも触れたが、同年の八月に勤皇僧の黙霖（1824～1897）との往復書簡に現れる「一誠兆人を感じしむ」²⁹という理念と同じである。

当時まだ狂を発していなかった松陰は、「僕は毛利家の臣なり、故に日夜毛利に奉公することを練磨するなり。毛利家は天子の臣なり、故に日夜天子に奉公するなり。吾れ等国主に忠勤するは即ち天子に忠勤するなり」³⁰と、天皇への忠誠が藩主を経由しても成立すると述べる一方で、「然れども幽囚の身は上書も出来ず直言も出来ず、唯だ父兄親戚と此の義を講究し蠖屈龜藏して時の至るを待つのみ」³¹と、職分の桎梏によって自由に行動できない苦悶を黙霖に吐露している。

天皇－幕府－藩主－藩士という身分序列の図式が強く松陰の念頭に刻印されているため、職分に基づく実践論のなかの諫言は、無論この図式に従っている。「我が主人我が直諫を容れて六百年来の大罪を知る時、我が主人より諸大名且つ征夷をも規諫を尽すなり」³²とあるように、主君に諫言すれば、その誠志は必ず主君から諸大名、幕府、さらに天

²⁷ 「久坂生の文を評す」（『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、407～408頁。

²⁸ 「久坂玄瑞に復する書」[1856]（『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、416～417頁。

²⁹ 「黙霖と往復」[1856/8]（『吉田松陰全集』第7巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、443頁。

³⁰ 同書、442頁。

³¹ 同書、442頁。

³² 同書、444頁。

皇にまで伝わるはずである、と松陰は考える。これが即ち「一誠兆人を感じしむ」である。ここでの兆人とは、松陰が自ら付した注によれば、「幕府大名より士農工商まで掛けて兆人」³³、すなわち幕府を含めた天下の全ての人々を指していた。当時の松陰は、久坂への書簡にも記しているように、武士の「厚禄を費し衣食居の奢^{おごり}を窮め、敖然^{ごうぜん}として三者に驕る」³⁴現状を厳しく批判しているが、幕府の存在と幕藩体制をいまだ容認している。その職分に基づく実践論は身分序列に則った固有の観念を帯びながらも、「一誠兆人を感じしむ」という発言に現れた天皇による幕府を含めた政権統一構想は、封建イデオロギーの束縛から抜け出そうとする先進的な発想を示している。そしてこうした考え方は確実に後の王政復古に繋がっていくのである。

第二節 久坂の「言路洞開」論と「草莽」論

松陰と書簡を交わした翌年の安政四年（1857）、久坂は医学所好生館に通いながら、松下村塾で松陰の指導を受け始めた。松陰は久坂の「才」を大いに評価していたが³⁵、久坂もまた松陰から学んだものを常に重んじ、松陰の入獄後に、松下村塾の他の塾生に松陰の学を伝えようとした³⁶。

安政六年（1859）、老中間部詮勝の暗殺を企図して岩倉獄に入った同門の入江九一（1837～1864）への手紙の中で、久坂は松陰からの教えを語っている。「老兄（入江）幽囚、尚更に力を経義に尽し、諸名士の跡を追ひ給へよ、これ僕の素願なり。僕はかつて暢夫（高杉）に、力を経済に尽し国政を変ずべしと云ひし事あり。老兄（入江）は何とぞ名教を維持すべし……僕近時西洋のことを記せる諸書を観るに、城下都邑は勿論村落に至るまで、必ず病院・幼院・貧院・施薬局等を建て人心を籠絡すと見ゆ。さすれば我も人心を一和させて置かずしては、中々巨砲艦計りにては全勝は得られず。こゝに於いて吾れつひに医学に神（精神）を注ぎ、少しも国に益あり度く考ふるなる…松陰師、常に医を以て僕に説けり、『囚奴は囚奴より起すべし、医者は医者より起すべし』」³⁷。この言葉は、松陰の職分に基づく実践論が久坂の心に深く刻まれていたことを示しており、松陰から学んだ職分による「着実」の説がそれまでの攘夷の志と結合され、彼の事物についての思考や行動のベースとなっていたことが見てとれる。そして彼は、「今日に至りては宋学の弊最も甚し腐儒散生紛紜として雑処し、忠孝の道つひに地を払ひぬ。これを要するに繁文修飾の弊こゝに至る、この弊を一洗するものはかの姚江の学（陽明学）に過ぐるはなし……心術を鍛錬し生死を離脱するは、姚江の学実に捷徑にして、吾が輩の学間に甚

³³ 同書、447頁。

³⁴ 「講孟餘話」（『吉田松陰全集』第3巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、117頁。

³⁵ 松陰は安政五年木戸孝允への書簡において、「（前略）玄瑞の才、晋作の識とて毎に同友中にて賞し候事に御座候」と、久坂の才を評価した（『吉田松陰全集』第8巻、山口県教育会編、大和書房、1972年、75頁）。

³⁶ 安政六年の日記には、「午後会読講孟筭記（中略）筭記雖与近時論有所異、亦足以觀師之苦心」と記されている。久坂が松下村塾の塾生と共に松陰の「講孟筭記」（講孟餘話）を読んでいたことが分かる（「九仞日記」、前掲、『久坂玄瑞全集』所収、240頁）。

³⁷ 竹田勘治、前掲書、142～143頁。

だ適當するなり」³⁸と入江に語り、松陰と同じように、陽明学が当時の緊迫した情勢³⁹に適合する内容を有すると考えていた。

周知のように、江戸時代における朱子学は幕府の庇護の下に封建的教学の正統的地位を占めていた。官学とされた朱子学の基本的なテーゼは「性即理」である。朱子学における「性」は仁義礼智信という先天的な五常であり、「静的」な性格を帯びているとされる⁴⁰。この本然の「性」の「静」の価値を強調するために、朱子学はその実践論において、知を主とする「先知後行」を説いている⁴¹。知と行を分離して唱える朱子学が幕末にもたらしたものは、「繁文修飾」の弊であった。久坂はその弊を「忠孝の道つひに地を払ひぬ」と批判している。そして、社会が激しく変動し封建秩序の支柱が動揺している時代において、「心術を鍛錬し生死を離脱する」ためには、陽明学の中核思想である「心即理」及び「知行合一」の説が正しくまた「捷徑」である、と言うのである。すでに第二章で論じたように、松陰も当時、陽明学の実践学に魅了されていた。松陰が重んじた「着実」論は陽明学の「知行合一」の説と多く合致しており、松陰の学を踏襲した久坂は陽明学に傾いていったと考えられる。つまり、松陰の実践論を忠誠の基盤とし、さらにこれを陽明学で裏付けることにより、久坂は攘夷の理念を一步一步実現しようとしていた。

上述したように、彼の攘夷の理念は基本的に封建的な華夷秩序の思想に沿っている。かつて九州に遊学した際に西洋からの圧力を既に身近に感じ、外夷を払わなければならないと考えていた久坂は、上海視察から戻ってきた高杉晋作（1839～1867）の話の聞いて、攘夷の必然性を一層確信した。「解腕痴言」（1862）において、久坂は外夷を「蚕食」するものと見なし、中国と同じ轍を踏まないためには、攘夷あるのみとの確信を一層強めた。また、藩主に上書した「廻瀾條議」（1862）という諫言書にも、キリスト教会、外国の領事館などを含めた夷敵を払うべきことが明記されている。さらに、北方の「千島」を日本の版図に収めることにより、日本の「国威」を張り、その上で、朝鮮から印度までのアジアを始めとして、アメリカ、ヨーロッパ大陸と自由に行き来し、日本「館」を建て、「将士」を置き、世界の情勢を観察することなども提案されている。ここにおいて久坂は、今日においては国を守るよりもむしろ海外に進出し、海軍の練成に努める積極策をとるべきであると、大陸進出論をはっきりと打ち出すのである。

³⁸ 竹田勘治、前掲書、140頁。

³⁹ 幕府は対外問題において、安政元年（1854）に「日米和親条約」、「和蘭和親条約」、「和露和親条約」と次々に外国との条約を結んで以降、同五年（1858）には勅許なしにアメリカと「日米修好通商条約」を締結し、同年またイギリス、オランダ、ロシア、フランスなどの国とそれぞれ通商条約を締結した。幕府は国際的圧力に屈服し、外国からの侵略（開港貿易）に抗することができなかった。国内問題においては、安政五年（1858）の各国との条約締結をめぐる紛糾によって、幕府の権力と朝廷の権威の問題が浮上してきた（井上清『日本現代史第一巻 明治維新』東京大学出版会、1951年、及び高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、2007年、3～9頁を参照）。

⁴⁰ 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967年、92～93頁。

⁴¹ 丸山真男は、「朱子学が実践道徳そのものを軽視するといふのではない……知先行後はただ論理的の順序であって、価値的にはむしろ行為が重視されているのである」という（丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1952年、32頁）。

終始攘夷の立場をとった久坂が、自らの理念を実現するために示した具体的な行動方針は、「言路洞開」の要請と、藩と藩との連携による草莽論であった。

2-1 「言路洞開」論

安政五年（1858）彼は江戸遊学を決心した。その出発前に、藩の家老益田弾正（1833～1864）が日米通商条約の調印に関する藩の意見を纏めるために、藩校明倫館の学生にも意見を求めるということがあった。そこで久坂は「上国相益田弾正君書」を提出している。この建言書において久坂はまず「大臣保富貴。以顧其身。小臣憚忌諱。而不敢言」⁴²を批判して、「上下懸隔」という現状の問題点を指摘し、さらに「神州之興。自防長始。而防長之興。其自執事始」⁴³と記している。「神州の興」は「防長」から始まるという考え方には松陰の実践論における誠志の精神が端的に現れている。そして、主君に諫言する任務は家老にあり、幕府に諫言する任務は藩主にあるとする彼の立論もまた、基本的に松陰の職分論と軌を一にしている。

久坂はかつての松陰と同様に、諫言を通して幕府を正すことができると信じてはいたが、江戸遊学後、とりわけ師の松陰が安政の大獄によって刑死してからは、次第に変化を見せるようになった。「士気作興に関する建白書」（1860）には、「今日の弊上下の分は嚴然として明かなれども……君臣の間は所詮上下懸隔なり易き故おのづから疎く相成申候」⁴⁴と記され、下意上達という根本的意向は容易に実現されないという認識に立って、現状を改革、打破しなければならないという意識も萌し始めている。「下意上達」の環境を作るために、彼が求めたのは「言路を開く」ことである。しかしながら、職分という固定観念の強い影響下にあつて、彼はあいかわらず封建的主従関係の枠内にとどまっている。したがって、「言路」の範囲はあくまで武士階層に限られ、四民平等にまで拡大されることはない。

一方、文久三年（1863）に、朝廷は「草莽之士が学習院に国事意見を上る」ことを許可した。そこで久坂は熊本藩の轟武兵衛と同藩の寺島忠三郎と共に、関白鷹司輔熙に「鷹司関白宛上書」という建白書を上書した。その中にも「言路洞開」の要請がある。

（前略）此れまでのやうに君臣の間が隔絶してゐてはならぬ。言路を洞開し、重臣が下僚の意見を途中でさへぎるやうなことをせず、御近習は勿論堂上の方々を時々御前に召させられて、十分意見を奏上申し上げられるやうにされたい。第二に、国事御用掛は前かど多人数であつたのに、近頃減少してゐるから、この際人才を精選して新に任命され、日々列藩の情勢や国家の大事について聴取させられたい。近來は諸侯もだんだん参内して天盃を頂くほどの事になってゐる。是非々常の御所置を

⁴² 前掲、『久坂玄瑞全集』、202頁。

⁴³ 同書、202頁。

⁴⁴ 同書、489頁。

なされ、吾々の赤心を聞き届けられて、一刻も早く攘夷の大業の基本を建てられるやう……何とぞ速に御議定あるやう希ひ奉る⁴⁵。

久坂の言う「言路洞開」とは、これまでは「深宮」にいた天皇が君臣との「隔絶」の状態を解消して、「堂上の方々」と国事を討論することを意味している。天皇と近習のみならず堂上も含めて朝廷内の言路を開いた上で、天皇は「日々列藩の情実、国家大計等」を掌握しなければいけない。久坂がこの建白書に言及した「言路洞開」の対象は天皇と堂上、及び「諸侯も参内して天盃を頂く」というように天皇と諸大名の二方向を示している。つまり幕府がなくても、天皇―藩主―藩士という序列に則して藩主に忠誠を尽くすことが即ち天皇への忠誠でもあると考える久坂は、言路を開く対象を藩士にまで広げておらず、もちろん士民は念頭に上らなかった。そして、このような天皇による政権統一の考え方においても、基本的に松陰の実践論における王政復古と同様であった。

2-2 草莽論

久坂は「言路洞開」の要請を通して積極的に公家や藩邸の上位の人々に働きかけて、尊王攘夷の理念を実現しようとしていた。その一方で、彼は松陰の「草莽崛起」論を踏まえ、各藩の有志との連携による尊王攘夷を企図する。

「草莽崛起」という言葉は松陰の前原一誠（1834～1876）に宛てた書簡の中に初めて現れる。安政六年（1859）獄中にいた松陰は「吾が藩当今の模様を察するに、在官在禄にては逆も真忠真孝は出来申さず候。尋常の忠孝の積りなれば可なり。真忠孝に志あらば一度は亡命して草莽崛起を謀らねば行け申さず候」⁴⁶と、前原に忠孝の真義を語っている。ここではまず松陰の言う「草莽」について検討しておきたい。松陰はかつて黙霖に「一誠兆人を感じしむ」と語り、その「兆人」とはいわゆる幕府から士農工商の庶民までを含んでいた。そのため、当時すでに狂を発していた松陰は、「征夷は跋扈し、諸侯は覬望す、皆恃むに足らず。恃むべき所の者は草莽の英雄のみ」⁴⁷、と記し、勤王倒幕には「草莽」だけを頼みとしていた。松陰の勤王の図式は既に庶民を政治の枠内に納めており、幕府から庶民までが一体となって天皇に忠誠を尽くす国家を考えていた。そして、彼の「草莽」とは、すなわち藩を越えた有志らの連携という横軸の発展のみならず、上下の縦軸においても士族の有志だけでなく、庶民にも及んでいたのである。松陰のこの「草莽崛起」論は、革新的な考え方を示しており、これは高杉晋作が奇兵隊を創設した発想の土台となったといわれている。

松陰と同じように討幕は「草莽」に頼るしかないと考えていた久坂は、土佐藩の武市瑞山宛の書簡（1862）において、「……このたび坂本君、御出浮ありなされ、腹臑なく御

⁴⁵ 竹田勘治、前掲書、304 頁。

⁴⁶ 「佐世八十郎宛」[1859/2]『吉田松陰全集』第 8 巻所収、大和書房、1972 年、221 頁。

⁴⁷ 「戊午幽室文稿」[1858]『吉田松陰全集』第 5 巻所収、大和書房、1973 年、469 頁。

談合仕り候こと、委曲御聞き取り願ひ奉り候。竟に諸侯恃むに足らず、草莽志士糾合義拳の外には、とても策これ無きことと、私ども同志中申し合はせ居り候ことに御座候。失敬ながら尊藩も弊藩も滅亡しても大義なれば苦しからず」⁴⁸と述べていた。藩が滅亡してもかまわないと考え、藩主を通して天皇に忠誠を尽くすのではなく、直接に天皇に忠誠を尽くすという天皇－藩士の考え方が明確に浮かび上がっている。

彼の草莽論が具体化したのは禁門の変であった。この事件は、久坂が藩主の罪を一洗するために起こした戦いであったが、彼の真の目的はむしろ幕府を倒すことにあった。ここには、長州藩士だけでなく、久留米藩の真木和泉を含めた各藩の有志志士が参加している。「義拳日記」(1864)の中には軍令が記されており、その第一条は、「一軍一心之心得肝要にて他藩自藩之差別相立功を争ひ候儀致間敷候事」と⁴⁹、藩の枠組みを越えた内容を示している。したがって、松陰の藩を超えた「草莽崛起」の計画は久坂の禁門の変で一部実践されたといえるが、久坂はやはり庶民を革命の主体として含めるには至らなかったのである。

幕末においては、制度的変革を行った主体は個々の志士ではなく、有志が結成した集団、つまり横と横との繋がりをもつ集団であったことが特徴的である。長州藩において、集団の結成を促し実現した場合は、吉田松陰の松下村塾であった。松陰の獄死後、久坂玄瑞を始め、塾生たちによる「一燈銭申合」⁵⁰の組織が結成された。また、久坂も攘夷の実行に当たって長州藩士を中心とした「御楯組」を作り、禁門の変では藩を超えた「集撰組」という集団ができた。このような集団の結成は、幕藩体制において武家諸法度の禁ずる「結徒党」⁵¹であり、本来ならば厳罰に値した。幕末における変革のエネルギー源としては、志士たちの「狂」的諫言精神が無視できない要素であったが、制度の動揺によって可能となった集団の結成が変革の力になったことも否定しがたいように思われる。

⁴⁸ 竹田勘治、前掲書、221 頁。

⁴⁹ 前掲、『久坂玄瑞全集』、327 頁。

⁵⁰ 文久元年(1861)に設立された「一燈銭申合」の主旨は、「此度同社中申合せ自分々々の力を^{つくし}骨を折て鎖(瑣)細之事ながらも相儲置度事に候非常之変不意之急に差掛候ても囊中拂底にては差込ものにて候^{おいおい}逐々有志人の牢獄に繋かれ又は飢渴に迫候ものも相助度義士烈婦の碑を建墓を築等までも力を尽し手を延はし度事に候得共同社中有余の金も有之間敷事に候得者何れ此方の至誠をのみ貫き度事に候^さ左れば毎月写本なりともして^{むすか}纔之儲致置度月末松下村塾まで銘々持寄可致候半年にもせよ一年にもせよ塵も積れば山と成理にて屹と他日之用に相立目途も可有之被考候同社中身の膏を絞出して集る事なれば容易費すへきにあらす已を得さる事あれば同社中申合せ之上にて取捌可申候 抑 人を救も用に備るも富貴長者之事なれば如何様にも相叶へけれと我々にてかくまでもにするは^{なす}貧(貧)者之一灯とも申へき事にて至誠の貫ぬ理はよもあるましき依之此度取建候金を一灯銭とは名くる也」と記されている。参加者は高杉晋作、山県有朋、前原一誠らの村塾出身の塾生以外に、木戸孝允、大楽源太郎などの有志らも加入した(「一灯銭申合帳」『吉田松陰全集』別巻所収、大和書房、1974 年、266 頁)。

⁵¹ 寛永十二年(1635)には「企新儀、結徒党、成誓約之儀、制禁之事」と明文している(「武家諸法度」『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年、456 頁)。

第三節 佐賀藩の江藤新平

長州藩においては、吉田松陰の影響のもとに、松下村塾で学んだ久坂玄瑞や高杉晋作などの有志が「一燈銭申合」を組織した。一方、佐賀藩においても、藩校弘道館の教授である枝吉神陽⁵²（1822～1863）が組織した「義祭同盟」のもとに、江藤新平や大隈重信（1838～1922）のような尊王志士が集まった。

3-1 義祭同盟

嘉永三年（1850）に組織された「義祭同盟」発足の経緯について、参加者の一人であった大隈重信（1833～1922）は次のように語っている。

佐賀藩の先君は尊王忠誠の志厚く、彼忠臣楠公の像を作り、年々之を祭祀して以て士気の涵養に資する所をありしと。爾後星霜移り、藩情の漸く変するに従ふて、遂に其古典を勿かせにし、今は祭祀を廃して、其像を或る寺の一隅に放置し、知るものさへなきに至りしを。或る二三の志士相謀り、其寺に就てこれを祭ることを始めたり。然るに閑叟の庶兄鍋島安房なるもの、閑叟の家を継ぎし後に、出てゝ家老の家を相続し、執政となりてありしか、此人深く楠公の像に留心する所ありて、其祭りに加入し、遂に之を寺の一隅より取出し、藩の鎮守なる竜造寺八幡社内の末社を取り拂ひ、之を楠公社と為して此に其像を安置せり。此挙に与りたる同志を名つけて義祭同盟と称したり⁵³。

佐賀藩における楠公を祭る伝統は、鍋島光茂の代、つまり『葉隠』の時代に遡ることができる。深江信溪という佐賀藩士は、忠誠の表彰として、楠木正成と楠木正行父子の木像を藩主の許可のもと、佐賀城下に奉祀した⁵⁴。寛文三年（1663）から楠公祭祀の習慣は存在したが、時代の変化に合わなくなったため、義祭同盟が結成された当初は、藩としての伝統をとり戻すという目的があったのである。

佐賀藩においては、楠公を祭る伝統以外に、『葉隠』の学風も存在していた。江戸中期に完成された『葉隠』は成立当初から直ちに広く読まれたわけではなく、一般に普及したのは天明二年（1782）に弘道館が創設された後の寛政頃であるといわれている⁵⁵。天保十二年（1841）の「香焼詰心得之大意」の中には、長崎港に駐屯し警備の訓練を受けていた佐賀藩士の教育科目の中に、「葉隠会」（『葉隠』の読書会）が行われていたことが記されている⁵⁶。また、「城原鍋島家日記」の弘化四年（1847）の一節にも、佐賀藩内で

⁵² 枝吉神陽は「日本一君論」を主張し尊王論を唱えた枝吉種彰（1787～1859）の長男であり、天保十一年（1840）に弘道館に学び、父の「日本一君論」を継承し、その後嘉永元年（1848）に弘道館の教官となった（杉谷昭『江藤新平』吉川弘文館、1962年、24～25頁）。

⁵³ 『大隈伯昔日譚』一、日本史籍協会編、東京大学出版会、1895/1980年、23頁。

⁵⁴ 『副島種臣全集』著述篇Ⅱ、島善高編、慧文社、2004年、43頁。

⁵⁵ 木下喜作「神陽、枝吉左衛門経種の研究」、葉隠研究会第22号、1993年、18頁。

⁵⁶ 池田史郎は『佐賀藩研究論攷 池田史郎著作集』の中に、「『葉隠会』に参加したのは『小頭中』と

は、「葉隠会」が定期的に行われていたと記されている⁵⁷。このことから、当時『葉隠』が既に公認された書物であったと推測できる。また、佐賀藩に関する公譜考補の編纂⁵⁸が行われた際に、葉隠の考補の作成も進められていた。この作成に当たった人物が「日本一君論」を提唱していた枝吉神陽である。そして嘉永、安政年間に至ると彼の主宰する『葉隠聞書校補』⁵⁹の編集が始まった。

3-2 江藤新平の『図海策』

江藤は天保五年（1834）に下級武士の家に生まれ、貧困のために、藩校弘道館に入学するまで、母のもとで四書五経などを学んだ。そして、十六歳で内生⁶⁰として弘道館に入学し、安政元年（1854）に弘道館を退校した。その後、弘道館の教授である枝吉神陽（1822～1863）の私塾で学び、彼の尊王論からも影響を受けた。また、彼は「義祭同盟」が発足した当初からこの同盟に参加していた。

嘉永六年（1853）ペリーの来航後、「攘夷論」の声が急速に高まった。先述した久坂玄瑞はその一例である。江藤も最初は攘夷の立場をとり、彼の「論鄂羅斯檄」（1853）には、「汝意不在分海必在通商、汝心不在正境必在争端、甚矣、汝鄂羅之狡黠也」⁶¹と記している。

ところが、その後の『図海策』（1856）で江藤は通商に賛意を表した。彼の『図海策』の構成は、「形勢」、「招才」、「通商」、「拓北」の四章から成る。まず「形勢」では、攘夷実行の不可能について次のように五つの理由を挙げている。「当今の勢にては、日本彼等と戦へは勝つべからざるの理五あり。一には日本は大將軍愚人なる上に、当路の人皆戦鬪の何たるを知らず、然るに彼等の大將は何れも戦鬪を審にしたり。二には我軍兵は合戦を見たることもなし、然るに彼等の軍兵は皆合戦に熟したり。三には我未た大砲小銃を製するを得ず、其射手も熟せず、然るに彼等は銃砲全く備り、其射手も皆殊に熟したり。四には我舟の製作甚匱にして、之を運する未だ熟せず。然るに彼等の舟製は特に堅固にして、之を運する最も熟したり。五には我堡寨望瞭未だ全からず、隊伍の進退行止未だ熟せず、然るに彼等は隊伍の進退行止は論を待ず、其他海戦陸戦皆全備したり」⁶²。そして、当今の日本は、「強国と和親を結び、宇内の賢才を招て其用を給さしめ、軍艦を贖ふて海戦を練習し、通商を盛にして国家を富すに在り、国家已に富み、海戦既に熟し、

あるので、伍長（組頭）たちの間だけで『葉隠会』が行われたのであろう」と記している（池田史郎『佐賀藩研究論攷』出門堂、2008年、201頁）。

⁵⁷ 御与内葉隠会式日二付、七ツ時より荒々出席有之と、旦那様も御出席被遊候事。（同書、201頁）。

⁵⁸ 天保十年（1839）には『直茂公譜考補』の編集が始まり、同十四年（1843）には『勝茂公譜考補』、その翌年には『光茂公譜考補』の編纂が始まっている。（『佐賀県近世資料』第八編第一巻、4頁）

⁵⁹ 『佐賀県近世資料』第八編第一巻所収。

⁶⁰ 当時、弘道館の課業法では、6～7歳で外生（小学生）として入学し、16～17歳になると内生（中学生）となり、25～26歳で卒業して藩吏に採用されるのが普通であった（杉谷昭、前掲書、4頁）。

⁶¹ 的野半介『江藤南白』上、原書房、1968年、114頁。筆者訳：汝の意は分海にあらずして必ず通商にあり。汝の心は正境にあらずして必ず争端にあり。甚だしいかな、汝鄂羅之狡黠なり。

⁶² 『南白遺稿』、江藤新作纂、博文館、1892年、12頁。

然る後に檄を各国に伝へて、無道の国を攻む可し」⁶³と、通商による富国強兵を図る内容である。

次の「招才」は、「人才は天地の宝にして」⁶⁴から始まり、「今日本は家格によりて人を用ひ、卑賤を隔てゝ下情に通せず」⁶⁵と指摘する。彼は、「日本中は勿論、世界中の人才を招き集て用ひん歟……兵に長する者は兵を司らしめ、医に長する者は医を司らしめ……拓地に長する者は地を拓かしめ……拓地の利富国強兵の術も立ニ致すべし、形の得失も立に明なる可し、鉄艦大船大砲小銃の製も立に審なる可し」⁶⁶と、人材の登用による富国強兵の実現を企図している。ここで、江藤が唱えた人材登用論は、身分貴賤を問わない人材の登用以外に、国内外の人材を募集する先進的な考え方を示している。

そして「通商」においては、「航海通商の業を務めば、啻に其国を富す而已ならず、平常太平に浮み幾多の暴風逆浪及び海賊強寇等の危難を凌ぎ、往来するを以て、其士衆自ら勇になりて、軍役杯に出てゝも死を畏れず、能戦ふものなり」⁶⁷と述べ、航海通商は、富国強兵の益をもたらす他に、士気を鼓舞することもできると主張している。そして、「昔西洋人日本を以て『イギリス』国に相比したれとも、当時にては『イギリス』国は、兵強く国富み、海外の属国甚た多く、其威は世界を震動す、然れとも其本国は北極出地五十度より六十度の間にあれば、其地小に氣候寒厳に、其物産の日本に及ばざること論せずして明なり、而して彼が此の如く強盛富国なる者は、太平に航行して万国に通商するを以ての故なり、然るに今日本は洋中の大島を以て、航海通の業を起さば、其便利なること実に世界第一の上国なり」⁶⁸と、通商航海を力説する。さらに、もし通商航海をすれば、「先船舶の製造を堅固にして、海上に於て暴風逆浪及び寇盜に逢とも恐るゝ所なく、天文地理測量等の学を明にし、万里の大海を航行すれとも、猶旧来の塾路を行くが如にして、諸州品物産の輕重を考へて、有無相通し、以て互市の利を収む可し、然らば国富兵強なる而已ならず、世界を震動すること豈に『イギリス』の比ならんや」⁶⁹と論を進め、日本の優勢を活かして通商活動を行えば、当時の強国であるイギリスを乗り越えられると、主張している。

最後の「拓北」においては、「蝦夷は地方凡南北二百余里、東西百余里、氣候は寒厳なれとも、其山嶽に多く金銀銅鉄を生じ、其海中に多く昆布『ヲツトセイ』等を出す、而して北に『カラフト』『エトロフ』等の島及び『カムサツカ』等の地なり、故に若し之を開拓すれば則其産物を得るのみならず、地を得ること少くとも、長を断ち短を補ひ、百

⁶³ 同書、15 頁。

⁶⁴ 同書、16 頁。

⁶⁵ 同書、17 頁。

⁶⁶ 同書、18～19 頁。

⁶⁷ 同書、20 頁。

⁶⁸ 同書、22 頁。

⁶⁹ 同書、23 頁。

四方はあるべし」⁷⁰と、蝦夷地の開拓により、豊かな物産を得るのみならず、「地を得る」こともできると江藤は考えている。彼はさらに、「鄂羅と戦て『カムサツカ』『オポツカ』を攻取るは、鄂羅東顧の右臂を断なり。然れとも此右臂を断つも、先蝦夷を開拓して、彼れの動静を知らされは能はざるなり。由是觀之、蝦夷を開拓するは、唯富国広業而已ならず、鄂羅を計るにも便利なるなり」⁷¹と、積極的な海外進出論を表明している。

このように江藤の『図海策』は、全体的に「富国強兵」を趣旨とする先進的な積極開国論であった。また、海外進出論には彼の海外侵略の考え方がはっきりと現れており、この論説は彼が明治維新後に官僚として活躍する際の思想的基盤となったのである。

3-3 江藤の脱藩と尊王活動

ところで、政争の進展が不安定であった幕末期は、国家権力が江戸幕府と京都の朝廷との間で二分された時局であった。この内憂外患の危機的状況において、藩政改革で実力や経済力を蓄えた雄藩が登場してきた。そしてそれらの雄藩が中央政界に進出する手がかかりとなったのが京都の朝廷であった⁷²。

このような時局にあつて、佐賀藩主鍋島直正（閑叟）は皇室に対する尊敬の念は篤かったが、討幕までは考えていなかった。また、長年長崎警備勤番として貿易の重要性を熟知していたこともあり、開国を志向して、開国派である幕府との婚姻関係に配慮すべき立場にあったため、ついに文久元年（1861）の十一月に退隠したのである。

この動乱期に最も早く脱藩したのが江藤新平であった。彼は文久二年（1862）六月に死を覚悟して脱藩し、京都へ赴いた。尊王主義に与した江藤は、藩体制を全面的に否定していたわけではなかった。彼が脱藩する際に藩に提出した「藩府へ上るの書」には、『葉隠』的な「御国家」に奉仕する思想、「藩至上主義」が現れている。

方今之形勢を推考仕候処。当季春以来。薩長両藩及び上洛。列藩の諸侯順逆各分れ。諸方の浪人とも。只管に公武之間に致周旋由。（中略）且又小子如此武門の端に被加置。殊に辱老親安食之賜。無妻子凍餓之患。海深嶽高貴に難述盡御恩澤に奉沿候處。方今の形勢前條の至義に相及。自然御国家に相関係候義等出来る事も難計。此時こそ粉骨碎身影となり形となり。御高恩万分の一も奉報度と断然致決心乍蔭御城に向ひ拜伏して。今暫之御暇奉願。勿論形勢を得と相窺。其形勢相定候機先相見候はゞ。早速可罷帰⁷³。（太字強調は筆者）

江藤新平は尊王論、開国論を唱えるにもかかわらず、藩主を中心とする挙藩体制への奉仕の思いが依然として心中を去らず、藩体制を否定することができなかった。また、

⁷⁰ 同書、23～24 頁。

⁷¹ 同書、27 頁。

⁷² 遠山茂樹『明治維新』（岩波書店、2009 年）を参照

⁷³ 前掲、『南白遺稿』、33～34 頁。

脱藩しても藩の御恩を強く意識しており、藩を「御国家」と見なすところには、まさしく『葉隠』の「奉公」精神が生きている。彼はすなわち、「御用にたつ」ことを目指していたのである。

このことは当時の江藤について触れた『大隈伯昔日譚』の記述からも見てとれる。「閑叟は已に昔日の気力なく、左右の人は、皆な頑迷にして、謂ゆる、天下の大勢、各藩の事情を察するなく。内部より彼を動かすの道は殆んど杜りたり。是江藤か先づ京紳を動かし、然る後に閑叟を動かさんことを計りし所以なり」⁷⁴。ここから、江藤新平の脱藩の目的が、退隠したがまだ実権を握っている鍋島直正を立ち上がらせるためだったことが窺える。

京都で活動していた江藤は、桂小五郎（木戸孝允）をはじめ、姉小路、三条実美などの京都尊攘派の中心人物と知り合った。京都で付き合い合った人脈は明治期になってからの活躍を可能にした土台でもあった。尊王活動の間に、江藤は姉小路の信任を得て、彼を通して攘夷論者の孝明天皇へ「密奏ノ書」を奉った。その内容はまず、「幕府初代以来之智術を變し。即今遽に武勇を以て天下の諸大藩を都御致事は出来申間敷。既に以武勇不能都御天下候はゞ。何以て可奉行攘夷之勅哉」⁷⁵と述べて、政情不安の中で攘夷を行うことが上策ではないことを指摘しており、また、開国が「復皇權張国威」の好機会であると主張している。江藤の意見書は、『図海策』の「通商」の部分为基础として展開しており、天皇への諫言行為を通して「治国」の理想を実践しようとしたようにみえる。

江藤は尊王活動のかたわら、幕府・朝廷・諸藩の動向や内情などの情報も収集し、わずか二ヶ月の間に京都で入手した資料を基に「京都見聞」という報告書を作成して、鍋島直正に提出した。時局に絶えず関心を持ち続けていた直正は、この詳細な報告書を読んで感服し、江藤の才能にも驚嘆した。そしてただちに江藤を呼び返し、脱藩の咎を寛大に扱ったのである。永蟄居を命じられた江藤は、帰藩後自宅で謹慎生活を送った。そしてこの時期が、彼の以降の活躍の準備期間ともなったのである。

むすび

尊王、攘夷、開港、鎖国などは幕末期における中核的な課題である。朝廷、幕府をはじめ下級士族層までが神州日本の行く末を模索していた。本稿の分析対象とした久坂玄瑞は、日本は攘夷すべきだと終始力説していた。彼は封建的華夷秩序に基づき、日本は直ちに外夷を払うべきだと考え、さらに将来的には海外への進出という日本の未来像を描いていた。この攘夷の理念を実現するために、久坂は積極的に藩府や公家に諫言し、建言して、「言路洞開」の要請と藩を越えた「草莽」の戦略を示したのである。

「言路洞開」の論説には、天皇による政権統一という王政復古の考え方がすでに現れ

⁷⁴ 前掲、『大隈伯昔日譚』一、69～70頁。

⁷⁵ 前掲、『南白遺稿』、33～34頁。

ている。松陰の先進的な発想をさらに前進させると同時に、いまだに封建的職分論に捉われていたため、彼の言路洞開の対象は士族層に止まり農工商までには至らなかった。したがって、久坂の「言路洞開」論には封建秩序が色濃く残存しており、「四民平等」の近代的な観念は彼の尊攘論の言動には見出すことができない。また、「草莽」の戦略においても、革命の主体は藩を越えた全国的な草莽志士だけに限られ、西洋のブルジョア革命のような発想は彼には到底思い浮かばなかったのである。

つまり、久坂の思想は、「言路洞開」の要請にしろ、草莽論にしろ、全て上や横との連携による戦略であった。藩の枠組みを越えるという点には確かに彼の先進性が現れていたが、近世の官僚体制（士族層）と身分制度との結合⁷⁶がもたらした弊に専ら注目し、そのみを問題視していた久坂は、終始士族層の枠内だけで思索しており、そこに彼の限界も存在した。また、天皇による政権の統一を考えていた彼は、同時に藩の存在も容認しており、藩主―藩士、天皇―藩士という並列的図式が彼の忠誠観の根幹をなしていた。当時の状況は、「現状改革論が結局尊王を実現し、攘夷を断行する目的に従属せしめられ……一切の政治改革論を封建制の枠内に自覚的に閉じ込める働きをなした」⁷⁷と、遠山の指摘するように、まさに久坂の活動に典型的に現れていたと言えるだろう。

一方、江藤は最初は久坂と同様に攘夷論の立場であったが、その後攘夷の実行が不可能であることを理解し、ただちに通商航海の開国論に転じた。彼の開国の理念は、久坂より先進的な考え方が現れており、人材登用論においても世界全体を視野に収めていた。

⁷⁶ 近世の官僚体制は身分制度と不可分な関係にあった。当時の儒学者、例えば荻生徂徠（1666～1728）、広瀬淡窓（1782～1856）、安井息軒（1799～1876）などは、官僚制と身分階級との結合を幕藩体制の「一弊」として指摘していたが、「身分階層制秩序を破壊する」ことができないため、「賤者八分ノ才徳アリ、貴者二分ノ才徳アラバ、大賢ニアラズトモ同格ニ用イテ苦シカラズ、賤者六分ノ才アリ、貴者四分ノ才アリ、其格一階ノ貴賤ナラバ、同等ニ用フルモ可ナラン」（安井息軒 1855 年）というような妥協的態度を示していた（水林彪「近世の法と国制研究序説（五）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』国家学会事務所、第 94 巻第 9・10 号、1981 年、684～685 頁）。

⁷⁷ 遠山茂樹、前掲書、52 頁。

第四章

幕末・明治初期における「諫言」、「建言」/「建白」

—「言路洞開」をめぐる—

はじめに

第一節 「諫言」、「建言」/「建白」の意味

第二節 江戸時代における「言路洞開」と諫言の政体概念

第三節 幕末における「諫言」の変容と「言路洞開」の要請

第四節 西洋政体の導入と紹介

第五節 明治初期における「建白」

5-1 廢刀論

むすび

はじめに

武士の忠誠を表す諫言精神は、幕末の変革の力であったことが前章での分析を通して明らかになった。本章では、江戸時代の幕藩体制において、制度の中に組み込まれた諫言はいかなる政体概念であったのか、また、幕末の動乱、変革期において、「諫言」概念はどのように変化したのかという問題について、少し観点をかえ、「諫言」及び「建言」/「建白」という漢語表現を通して考察する。

江戸時代において、「諫言」という用語は藩の家訓書や武士の教訓書にも散見され、よく知られた語彙であった。幕末には諫言と類似する意味合いで「建言」/「建白」という漢語表現がしばしば現れたが、維新後は、建白書受付制度が成立したことにより、「諫言」に代わって「建言」/「建白」が圧倒的に多く用いられるようになった。

建言/建白が最初に制度化されたのは、慶応三年（1867）に布告された王政復古の大号令においてであった。明治政府は「旧弊御一洗ニ付、言論ノ道被洞開候間、見込有之向ハ、不拘貴賤無忌憚可致献言」¹として「貴賤」にかかわらず「言路の道」を「洞開」する政策を打ち出し、徳川幕府時代の目安箱の制に倣って、京都に目安箱を設置した²。その後、明治二年には建白書受付の機関として待詔局が創設された³。「言路洞開」は幕

¹ 「王政復古の沙汰書」（『天皇と華族』日本近代思想大系2所収、遠山茂樹校注、岩波書店、1988年）、4頁。

² 地方人民の上書の便に設置された目安箱は明治六年（1873）に全て廃されることになった（戸田十畝『明治建白沿革史』1887年、14頁）。

³ 同時期に公議所も建白書の受理を受け付けていた。明治二年（1869）の七月に公議所が集議院と改称されることにより、建白書受付の業務が集議院へ合併され、同年の八月に、待詔局も集議院へ合併された。集議院においては、地方の目安箱以外に、中央の建白の類も一括して受理することになった。明治四年（1871）の廃藩置県により、建白書受理の業務は、集議院（明治六年廃止）の名前を残した

末の下級武士によって常に掲げられたスローガンであり、同時期に高唱された「公議輿論」の副次的な主張であった⁴。井上勲は、「言路洞開」が「藩なり幕府なりといった既存の政治体の堅持を自明の前提とした上で、身分制の部分的解除による、政治体の政治的凝集力の高揚と統治能力の拡大を意図してとられた政策であるのに比して、『公議輿論』には、『闔国』という個々の政治単位を超えた政治体と、その政治体の意志たる『公論』創出への契機が強く含まれている」⁵と、「言路洞開」と「公議輿論」との内実の差違を指摘している。つまり「公議輿論」は、諸侯会議論などの「政治単位の水平的拡大」の観念であるのに対して、「言路洞開」は下へ向かっての「垂直的拡大」の概念である⁶。勝海舟（1823～1899）が嘉永六年（1853）に幕府に上書した意見書において、「凡そ外寇に備うる要、本を固く為すを以て専務と仕り候。これを成すの要、人を選び候を以て第一と仕り候……御政事に携わり候お役人は、別して嚴重に御人選遊ばされ、廉直にしてその志、正大雄偉の者を以て任ぜられ候様つかまつりたく存じ奉り候。且つ又御役人ども、時に御前へ召し込まれ、天下の御政事、外寇の御所置など闔論考究仰せつけられ候わば、自然と良疇善策湧出つかまつり、これによっておのずから言路も開け申すべくと存じ奉り候。泰平の通弊は尊卑隔絶つかまつり、下情上に達せず、自然と言路ふさがり候に御座候」⁷と記しているように、幕末における「言路洞開」は「人材登用」と緊密に繋がっており、両者とも封建体制における本質的な「階層」問題に関わっている。これがすなわち井上が指摘した「垂直的拡大」の概念であった。

そもそも「言路洞開」という概念が最初に具現したのは、享保六年（1721）に幕府によって設置された「目安箱」であり、それ以降、多くの藩もそれを藩内に設けていた⁸。維新後、明治政府は徳川時代の「目安箱」を援用しながら、「建白書」の受理制度を新た

まま左院へ取り込まれた（水野京子「建白書の「政治的機能」と左院—左院受付建白書の分析を通して—」『青山史学』23号、青山学院大学大学院文学部史学研究室、2003年、24頁）。

⁴ 高原泉は、「言路洞開が幕末における公論などの概念と直ちに結びつくわけではないことには留意すべきである」と、「言路洞開」と同時期に高まった「公論」とは同等なものではないと指摘している（高原泉『『まがきのいばら』の幕末像—かえりみる勝海舟—』『連続と非連続の日本政治』所収、菅原彬州編、中央大学出版部、2008年、26頁）。

⁵ 井上勲「幕末・維新时期における「公議輿論」観念の諸相—近代日本における公権力形成の前史としての試論—」『思想』609号、岩波書店、1975年、73頁。

⁶ 井上勲は次のように説明している。「政治単位の拡大は、まず『ヨコ』の拡大、すなわち有志大名—もしくは有志大名をもつ雄藩以外の諸侯、諸藩の政治的活性化として表出することになる。こうした政治単位の水平的拡大は、諸侯会議の構成メンバーを、限定された小数の有志大名から諸侯一般に拡大することになるわけである。次に、政治単位拡大のより重要な局面として、いわば垂直的拡大のモーメントがあった。『今日ハ、天下の諸侯、都て慶元（慶長、元和）時代における有名諸侯の如くならず。故に、衆議を聞かれんにハ、各藩共、其臣僚の言路を御洞開ある事肝要なるべし』（『続再夢紀事』第6巻所収）。この松平慶永の言をまつまでもなく、藩政の実質的リーダーシップは、しだいに藩士層に移行しつつあった」（井上勲、前掲論文、362頁）。

⁷ 『勝海舟全集』第14巻、勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編、勁草書房、1974年、219～220頁。

⁸ 幕府と各藩の目安箱を設置した状況については、大平祐一『目安箱の研究』創文社、2003年、12～32頁を参照。

に設けた⁹。江戸時代には、「目安箱」という直言のルートが設けられていたが、幕末の下級武士たち、例えば吉田松陰（1830～1859）は「広く視聴を開き、賢人を求めて自ら輔け、誹謗の木を立て、旌を設け鼓を陣ね、以て直言の路を広む……一饋にして十たび起ち、一沐にして三たび髪を握り、以て天下の民を勞れりとあるも同様にて、即ち今の目安箱の類なり。然れども誹謗の木、鐘・鼓・磬・鐸・鞀は舜禹の聖政後世に昭耀す。而して今日の目安箱、蓋し未だ茲に至らざるものあり。惜しいかな」¹⁰と述べて、目安箱の機能がすでに失われていることを嘆いている。彼は、「視聴を開く」、すなわち「言路洞開」を求めるとともに、「賢人を求め」ること、すなわち「人材登用」を要請している。つまり、「言路洞開」の要求は、まさしく武家社会の枠内での身分制度からの解放を求めているのである。

従来「諫言」と「建白」/「建言」という用語は個別に検討されており、「諫言」に関する先行研究は、主に制度史もしくは思想史の視座から、武士の忠誠意識を中心に分析が行われてきた¹¹。一方、「建白」/「建言」については、ほとんど建白書制度が成立した維新後を中心に検討されている¹²。したがって、「諫言」から「建言」/「建白」への軌跡は、未だ系統的に考察されていない課題と言ってよい。それゆえ、本論は「言路」の手段となった諫言と建言/建白などの漢語の使用例を通して、「諫言」の封建的性格、黒船以降の西洋との接触による近代的政治体制への指向などに関連づけて分析する。幕末になって、今まで思想的ベースとされてきた儒学のほかに、新知識としての洋学が導入された。洋学の幕末における影響力は、政体構想以外に当時の海防にも多大な影響を与えた。幕末における公議輿論の政体構想には、欧米諸国の議会制度などの参照が認められ、洋学からの影響があったことを、井上を含めて多くの先行研究が指摘している¹³。したがって、建言/建白などの表現が維新後に次第に主流となった理由を解明するには、洋学を視野に入れることが不可欠だと考えられる。

第一節「諫言」、「建言」/「建白」の意味

「諫言」という語彙は、「諫」の合成語である。その意味について、『広雅』（227年頃）という字書には、諫は正であると記されている。また、『字彙』（1615）は、諫は直言を

⁹ 同書、281頁。

¹⁰ 「読綱鑑録」[1858]（『吉田松陰全集』第5巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年）、83頁。

¹¹ 前田勉「諫言の近世日本思想史」（笠谷和比古編『公家と武家Ⅳ—官僚制と封建制の比較文明的考察—』所収、思文閣出版、2008年）、水林彪「近世の法と国制研究序説（五）—紀州を素材として—」（『国家学会雑誌』第94巻第9・10号、1981年）、石井紫郎「近世の国制における「武家」と「武士」（『近世武家思想』日本思想大系27所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974年）などがある。

¹² 明治初期の建白書に関する先行研究は、水野京子「建白書の「政治的機能」と左院—左院受付建白書の分析を通して—」（『青山史学』23号、青山学院大学大学院文学部史学研究室、2003年）、牧原憲夫『明治七年の大論争』（日本経済評論社、1990年）などがある。

¹³ 井上勲、前掲論文、及び尾藤正英「明治維新と武士—「公論」の理念による維新像再構成の試み—」（『思想』735号、岩波書店、1985年）、松沢弘陽「公議輿論と討論のあいだ—福沢諭吉の初期議会政観—」（『北大法学論集』41〈5・6〉、北海道大学法学部、1991年、2475～2530頁）を参照。

もって人に悟らせることと解釈している。そこから、諫言、諫諍、諫死、諫書などの語彙が派生してきたのである。そのため、「諫言」というのは、「目上の人の欠点や過失を指摘して忠告する」¹⁴ことを意味する。

また「建言」という用語は、「意見を申し立てること、特に官庁などに対して意見を述べる」¹⁵ことを意味している。そして、「建白」は、「政府、上役などに対し、自分の意見を申し立てる」¹⁶ことである。両者とも上に対して意見を申し上げる意味である。漢籍には早くから「建言」も「建白」も現れており、『漢書』（80 年頃成立）[霍光金日磾伝]には「將軍為國柱石、審此人不可、何不建白太后、更選賢而立之」と記され、「意見を陳述」¹⁷することを意味している。一方、「建言」は『漢書』[哀帝記]に「待詔夏賀良等建言改元易号」と記され、漢の哀帝は「待詔」¹⁸に就く夏賀良らの「建言」に従い、年号と帝号を改めたという。ここにおける「建言」は「建白」と同様に「意見を申し立てる」¹⁹意味である。

このように、「諫言」の原義は「建言」/「建白」と異なっているが、この三つの用語は全て主君や上役に対して意見を申し立てること、すなわち「言路」²⁰と同じである。そして幕末に盛んに行われた「言路洞開」要請の文面においては、建言や建白という漢語表現が諫言と同じような意味合いで、頻繁に使用される現象が見られる。勝海舟（1823～1899）は万延元年（1860）米国から帰朝後に記した「まがきのいばら」に、「海外の御処置大いに興れり。我か邦内、大変革の徴あり。或は数年の御政蹟、御変通なくては御守衛向、立難きあるをもって、その是非得失を建言する輩少なからず。將に大いに言路を開かれんとせられしかば、侯伯より以下、士夫皆建策して海防の策を言上し、英傑蜂の如く興りたり。この御時の前後は、大抵そのいう所、一は一失あり」²¹と述べており、ここには「是非得失を建言する」という表現が見られる。「是非得失」は儒学において基本的に諫言と結びついていたが、ここでは「言路を開く」という文脈で用いられていることが注目になる。このような現象がどのような時代背景において生じたのかを考察する前に、まず幕藩体制において形成された諫言像を一瞥しておきたい。

第二節 江戸時代における「言路洞開」と諫言の政体概念

徳川家康の重臣であり、老中に就いた本多正信（1538～1616）は「治国家根元」（成立

¹⁴ 『日本国語大辞典』第2巻、小学館、1972/2003年、1257頁。

¹⁵ 『日本国語大辞典』第5巻、小学館、1972/2001年、26頁。

¹⁶ 前掲、『日本国語大辞典』第5巻、107頁。

¹⁷ 「謂陳其所見有所倡議或論列也」（『中文大辞典』第12冊、中国文化研究所、台北：聯合出版、1961年、76頁）。

¹⁸ 官職の名。

¹⁹ 「謂申述意見也」（前掲、『中文大辞典』第12冊、77頁）。

²⁰ 言路というのは、上の者に対して、臣下が意見を述べるためのみち。進言するみちである（前掲、『日本国語大辞典』第5巻、136頁）。

²¹ 『勝海舟全集』第11巻、勝部真長、松本三之介、大石勇次郎編、勁草書房、1975年、398～399頁。

年代不明)において、主君が臣下からの諫言を広く受け入れることは「言路洞開」であるという考え方を示している。

言路ヲ開クト云ハ、上へ何事ニモ物ノ申能様ニスル義ナリ。譬バ門ヲ開キ置ケバ何事ニテモ能通ルナリ……大将タル人ハ下ヨリ物ノ申能キ様ニシ玉ヒ防ギ玉ハザレバ下ヨリ存寄ヲ能申モノナリ……下ヨリ申事ハ上ノ心ト少シハ違フト云ドモ、上ノ心ヲ捨玉ヒテ下ノ義ヲ用ヒ玉フ時ハ、下ヨリ進ンデ忠諫ヲ奉ルモノナリ。尤是ハ人ノウハサヲ云ヒ、人ノ悪事ヲ聞出シテ申事ヲ聞玉フ事ニテハナク、上ノ為ニ成事ヲ申、亦ハ君ノ身持・作法ノ悪キヲ諫ル者ノ事ナリ²²。(太字強調は筆者)

ここで本多が認識している「諫」は、主君の身持ちや作法の過ちを諫めることであり、「諫」の原義に即した意味合いであった。彼は、「下」いわゆる臣下、とりわけ大将の側近たる政事の要路者からの「忠諫」を受け入れることが「言路」を開くことであると考えている。このような考え方は、明らかに儒学的政治観の現れである。

第一章で論じてたように、江戸時代において、儒学、とりわけ朱子学は徳川幕府が体制を強化し、秩序を整える手段として採用され、幕藩体制における政治思想の根幹となるものであった。幕府を開いた徳川氏は、各大名の領地は幕府からの預かりものであるという観念を導入し²³、よく政理を行い、仁政を施すことを各大名に義務付けた。各大名(藩主)も、家の安泰を維持することを自己の任務としている。当時、各藩の藩主はよく自分の子孫や家臣団に向けて道徳的な家訓を記した。家訓書は藩政の方針のほかに、藩主の治国(藩)理念をも反映している。その中に「諫言」がしばしば言及されている。

磐城平藩三代藩主の内藤義概(別名義泰、1619～1685)は譜代大名として延宝五年(1677)に「内藤義泰家訓」という二十三か条の教訓を記した。家訓書は全体的に、「身ハ父母之遺体、孝ハ百行之本」²⁴や「大抵孝弟ナル者、本立ツ、故ニ必ズ上ニ忠ナリ」²⁵など、儒学思想に貫かれた内容である。そこには、「領内漸ク貯米ヲ致シ、水旱ノ災ヲ救フ可シ。其ノ他軍用之蔵金ヲ儲フ可シ」²⁶と、藩の政務が述べられているだけでなく、「国家民人ヲ以テ至宝ト為ス」²⁷という儒学をベースとする治世の倫理も説かれている。そして、その一環である諫言について、内藤は次のように述べている。

²² 本多正信「治国家根元」(『近世政道論』日本思想大系 38 所収、奈良本辰也校注、岩波書店、1976 年)、10 頁。

²³ 大名の領国支配を幕府からの「預」りものとする考え方は、単に幕府側から一方的に強制されたものではなく、大名の側にもみられた。幕府と大名の関係については、石井紫郎『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』東京大学出版会、1986 年、175～179 頁を参照。

²⁴ 内藤義概「内藤義泰家訓」(『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年)、38 頁。

²⁵ 前掲、「内藤義泰家訓」、39 頁。

²⁶ 前掲、「内藤義泰家訓」、39 頁。

²⁷ 前掲、「内藤義泰家訓」、40 頁。

昔良臣ノ詞ニ曰ク、木繩ニ從ヘバ則チ正シク、后諫ニ從ヘバ則チ順ナリト。忠諫ニ從ヒ、敢テ好カラ不ル者之例ヲ引キ、無道者之喩ヲ取り、諫争之路ヲ拒ミ塞グコト莫レ。耳ニ逆フ之人ヲ進ムルハ、真ニ主君之身ヲ謀ル。氣合フニ非ズト雖モ、強テ親近ス可シ。旨ニ順ヒ諂諛スル儕ハ、専ラ己ノ榮利ニ志ス。氣合フト為スト雖モ、強テ疎遠ス可シ。是レ古自リ治法ノ第一ノ事²⁸。

(太字強調と傍点は筆者)

内藤は『書経』に記されている「材木は墨繩にしたがってこそ真直になり、君主は諫めに従ってこそ聖となる」という一文を借り、諫言の重要性を説明している。ここでは、諫言概念が伝統的儒学と江戸の武家社会の二方向に分岐していることが明らかである。『書経』のいう「諫めに従ってこそ聖となる」とは、伝統的儒学の文脈で道の実現という個人道徳としての「諫言」を意味しており、諫言に従うことによって「聖」となる。一方、内藤は諫言を武家社会のモラルとして忠誠に連結させており、「忠諫」という「忠」と「諫」との並列結合は、武士（家臣）たちのみが「畳の上のご奉公」たる諫言を忠誠精神と見なしただけではなく、藩主にもこのような考え方が求められたことを示している。諫言を忠誠と連結させる例は、譜代大名の内藤家だけではなく、外様の薩摩藩²⁹や御三家の水戸藩³⁰などの家訓にも見える。すでに第一章で、儒学的諫言の概念が武家社会において忠誠の代表的精神へと変容したことを検証したが、その典型例がここでも再確認できるのである。

内藤は諫言が忠誠の証しであると唱えながら、「家老用人近習之者モ、又右之旨（二十三条）相心得、己ヲ正シク道ヲ守リ、此ノ訓ニ^{もと}戻ル子孫有レバ、身ヲ委テテ諫争ス可シ」³¹と述べ、内藤家の子孫は家訓に背くことがあれば、家老は身を捨てて諫争すべきであると強調している。江戸時代において諫言は政体に組み込まれておらず、中国の「諫議大夫」というような官職は設置されていない。しかしながら、諫言行使の権限は基本的に家老にあるという考え方は、譜代大名の内藤家だけではなく、外様の薩摩藩や御三家

²⁸ 前掲、「内藤義泰家訓」、39 頁。

²⁹ 例えば、薩摩藩の島津綱貴（1650～1704）は「島津綱貴教訓」（1702）において、「能ク諫を聞ケバ則チ必ズ良將ト為ル。三略ニ之有リ、將能ク諫ヲ請ケ言ヲ採ル云云、実ニ能ク之ヲ思フ可キ事」と記している（島津綱貴「島津綱貴教訓」『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年、64 頁）。『三略』は中国の兵学書であり、島津は『三略』に記されている「軍讎に曰く、將、能く清く、能く静に、能く平かに、能く整ひ、能く諫めを受け、能く訟を聴き、能く人を納れ、能く言を採り（後略）」（原文：「軍讎曰、將能清能静、能平能整、能受諫、能聽訟、能納人、能採言、能知國俗、能圖山川、能表險難、能制軍權」）を参考したのである（『七書全・鬼谷子全』塚本哲三編、有朋堂、1928 年、255 頁）。

³⁰ 徳川斉昭（1800～1860）は「明訓一斑抄」（1850）において、「諫言を用ゆるべき事」という一条を記し、「広く言路を開き給フ事、則明君たるゆゑんニて、人主たるものは、人に取て善をなすことを樂しむ処肝要なり」と、諫言を受け入れる重要性を説いている（徳川斉昭「明訓一斑抄」『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年、130 頁）。

³¹ 前掲、「内藤義泰家訓」、41 頁。

の水戸藩などの家訓、および第一章で取り上げた『葉隠』にも共通している。

諫言できる者を「家老」、または藩主の側近たる者と明示し限定することは、当時の藩体制と密接に関係している。江戸時代の藩体制においては基本的に藩主が家老を筆頭とする家臣団を統率するのではなく、藩主が家老と共に藩を統御することが一般的であった³²。寛永十二年（1635）に幕府は「大名、小名在江戸交替所相定也。毎歳夏四月中可致参勤」³³と武家諸法度の中に、「参勤交代」を明確に規定した。藩主が一年ごとに藩と江戸の間を往復するため、留守の間に国元の政務を家老たちに預けることが慣例であった。藩体制は藩主一人の専制政権ではなく、藩主と家老たちとの共治政体だったのである。例えば、「黒田長政遺言」（1622）の中には「子孫ニ至り、不義放逸ヲ専トシテ、諫ヲ聞入ズ、自由ヲ働キ掟ヲ守ラズ、ミダリニ財宝ヲ費スモノアラバ、家老中申合せ、其者ヲ退ケ、子孫ノ内ヨリ人柄ヲ撰ビテ主君トシ、国家ヲ相続セシムベシ。此趣ハ家老中能〔相〕心得、銘々子孫ヘモ申伝ヘ置ベキ事肝要ナリ」³⁴と記されている。お家の安泰を維持することは藩主を含めて家臣団の共通の目標であり、かつ課題であった。したがって、非常事態の時、黒田藩（福岡藩）のように、家老たちが「衆議」によって主君（藩主）を隠居させるという権利をもつ藩もあった。

藩政の基本的な構造について、笠谷和比古は次のように指摘している。「藩政確立期以後は家老政治が主要な形態となり、家老・中老・用人らの合議ないし諸事分担によって政務を処理し、特に重要な事項については主君の裁決を請うか、主君を交えた御前会議によって決定を行う。さらに政治が家老・重臣に委任され、その責任の下に政治が運営され、主君の実質的な政治関与が極小化していくような形態も多くみられる」³⁵という。江戸時代の幕藩体制は、このように幕府と老中ら、藩主と家老らとの「合議」による構造であった。そして、この体制が幕末に下級武士の批判の的となったのである。政権の主導は幕府と藩府の要路者に独占され、家老たち要路者は主君の目を塞ぐ奸人である、と君臣関係を絶対視する志士たちは見なしていた。そのような認識から、下級武士たちは「言路洞開」を要請したのである。

第三節 幕末における「諫言」の変容と「言路洞開」の要請

下級武士たちによる「言路洞開」の要請が行われるようになる幕末以前には、林羅山（1583～1657）や貝原益軒（1630～1714）などの儒学者が武家社会に諫言を定着させようとし、積極的に家臣たちに諫言を促す一方、主君にも「言路洞開」を求めたことがあ

³² 『近世武家思想』日本思想大系 27、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年、22 頁の注記。

³³ 「武家諸法度」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、456 頁。

³⁴ 「黒田長政遺言」（『近世武家思想』日本思想大系 27 所収、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年）、32 頁

³⁵ 笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、1993 年、204 頁。

った³⁶。例えば、林羅山が造形した後醍醐天皇に諫言する藤原藤房像、また日本における諫言の先例を集大成した藤井懶斎（1628～1709）の『国朝諫諍録』（1688）などがあり、儒学者たちは具体的なモデルを積極的に例示していた³⁷。彼らが諫言を促進しようとしたのは、儒学的「仁政」の実現を理想としたからである³⁸。

しかしながら、幕藩体制は基本的に「法」治を根本原理としており、「武士諸法度」にも、「法是礼節之本也。以法破理、以理不破法」³⁹と記されている。この「法」に基づく治世は、例えば元禄赤穂事件においても現れている。義士たちの主君に対する忠誠精神はある程度まで評価されたとしても、最終的に法に反するという点で彼らは切腹を命じられた。そのため、法遵守を根本とする幕藩体制において、武士が職分を越えて行動することは基本的に認められていないのである。

また、儒教道徳を強力な思想的背景とする幕藩体制においては、身分階級の秩序が堅固であり、先述したように、家老のような上層武士や側近以外の者からの諫言を実現することは極めて困難だった。内藤家の家訓にも「恩賞刑罰、兼テ士之進退用捨ハ、政之大体也。家老用人之外ハ、絶テ而聞知ス可カラ不。若シ其ノ職ニ非ズシテ而妄ニ言フ者有ラバ、必ズ追放為ル可シ」⁴⁰と明記されており、職分の定めが厳格に守られていた。

幕臣であった福地源一郎（1841～1906）は後年の『幕末衰亡論』（1892）において、このような少数の上層武士のみが決定権をもつ江戸時代の政権について、次のように述べている。

徳川幕府の政治は、將軍専裁の政治なり。上は天子といえども、下も諸大名といえども、決して干渉を許さざるの政治なり。徳川氏は、朝廷に対しては尽すべきの尊敬を尽して臣節を全くするを旨としたれども、政治においては、その内治たると外交たるとを問わず、すべて將軍の専断を以て取り行ない、もし朝廷よりかれこれと仰せ下さる旨もあらば、政治の事には京都のお口出しは御無用なりと拒絶し、あまつさえこれに関係の公卿・堂上を厳に譴責して罰したるは、その例少なからざりき⁴¹

幕藩体制において、藩政に参加することができるのは家老のような上層武士に限られ、

³⁶ 前田勉「諫言の近世日本思想史」、前掲書、188頁。

³⁷ 同書、191～192頁。

³⁸ 福岡藩儒者の貝原益軒（1630～1714）が、家老などの藩の重臣に四回にわたって提出した諫言書には、諫言行為の正当性、及びその必要性が絶えず述べられていた。しかし、彼の諫言観は限界付きであり、職分論の立場から下位者の政治批判のあり方を「不忠不敬」と位置づけていたと福田千鶴は指摘している（福田千鶴『幕藩制の秩序と御家騒動』校倉書房、1999年、167～171頁）。

³⁹ 前掲、「武家諸法度」、454頁。

⁴⁰ 前掲、「内藤義泰家訓」、39頁。

⁴¹ 福地源一郎『幕府衰亡論』東洋文庫 84、平凡社、1967年、20頁。

幕政に参加することができるのも譜代大名だけであった。このような体制は、二百年以上も確固として保たれていたが、嘉永六年（1853）のペリー来航によって、幕府はアメリカからの要求について譜代大名、御三家、外様大名、幕臣にまで意見を求めざるをえなかった⁴²。福地は「諸大名をして初めて政治に口を容れる事を促したるが故にして、これよりして、諸大名は幕府に向かって議論するの途を得て、是非を事とし、遂にその衰亡の原因を成した」⁴³と述べ、「言路」を開いたことが結局は、幕府自身を衰亡に導くことになったと指摘している⁴⁴。

「諮問」により、今まで保持してきた体制が瓦解していくにつれて、新たな政治決定のための回路が創出された。「諮問」という政治的意見聴取手段については、長州藩が天保十一年（1840）の藩政改革を行った際に、各役所の役人に実践した例があった⁴⁵。従来藩政に関与することのできなかった役人は、この諮問を通して意見を上申することが可能になった⁴⁶。その後、同藩では折に触れて諮問が行われ、安政改革の際には、諮問の対象が役人のみならず、藩校明倫館の学生にまで及んだ⁴⁷。このように、幕末の長州藩では「諮問」の慣習が既に形成されており、幕府から外国との調印締結に関する意見が求められると、藩士、さらに藩校の学生たちも諮問の対象となったのである。例えば、日米通商条約の調印に関する藩の意見を纏めるために、家老の益田弾正（1833～1864）が藩校明倫館の学生にも意見を求めるということがあった⁴⁸。それまで政治から排除されていた家臣団に意見を徴するという、自ら立てた政体の規範に反する幕府、藩府の開明性は、武士たちの政治的主張の踏み台となり、有志の政治的議論をも喚起したのである。

嘉永六年（1853）に米艦来航後の実情を見聞した吉田松陰（1830～1859）は、藩の要

⁴² 嘉永六年七月の幕府の諸大名への諮詢文書は次のとおりである。「浦賀表に渡来之亜墨利加船より差出候書簡和解之写式冊相達候、此度之儀は国家之御一大事ニ有之、実ニ不容易筋ニ候間、右書簡之趣意篤と被逐熟覧、銘々存寄之品も有之候ハ、仮令忌諱ニ触候とも不苦候間、聊心底を不残十分ニ可被申聞候」（『大日本古文书』幕末外国関係文書之一、東京大学史料編纂所、東京大学出版会、1910/1972年、473～474頁）。

⁴³ 福地源一郎、前掲書、24頁。

⁴⁴ 諸侯に諮問した幕府の行為は、「公議輿論」観念の制度化の端緒であったと、尾佐竹猛『維新前後に於ける立憲思想の研究』中文館書店、1934年、17頁、及び井上勲、前掲論文、361頁は指摘している。

⁴⁵ 意見提出者、及びその提出情況について、上田純子「幕末の言路洞開と御前会議一萩藩における新たな政治回路創出の試み」、『論集きんせい』21号、東京大学近世史研究会、24～51頁には詳細な分析が行われている。

⁴⁶ 天保十一年の八月七日に、長州藩は「広く財政の実況を一藩の士卒に示し且つ之れヲして班次の高卑を問はず苟も時弊に見る所あれば悉く之れを言ひ忌憚する所なからしむ是に於てか上下均しく奮ひ改革の業愈々其歩を進」んだ（末松謙澄『防長回天史』上巻、柏書房、1967年、57頁）。

⁴⁷ 長州藩では嘉永元年（1848）明倫館再建の際に、武芸師・算術師・手習師・大砲家に対して諮問が行われていた。また、嘉永二年（1849）に、吉田松陰を含めた七人の兵学諸師に、「異賊防禦ニ付、水陸戦争便利」についての諮問があった。さらに、安政元年の藩政改革に際しても諮問を下した、と上田は指摘している（上田純子、前掲論文、31～32頁）。

⁴⁸ 例えば久坂玄瑞の記した「上国相益田弾正君書」はその時に要請された意見書であった。

路者を通して藩主に「将及私言」という意見書を上書した⁴⁹。松陰は「納諫」という項目において、「近来直諫の風地を掃ひしこと衰季の光景、実に嘆ずべきの甚だしきなり。宜しく急に令を内外の臣に下し、言路を開き度きことなり」⁵⁰と、藩政における「言路閉塞」の問題を提起し、「内外の臣」に向けて言路を開くことを要請した。また彼は、「若し上言し度き事ありと云ふものあれば、深更にも必ず出座遊ばされ、其の言を聞き給ふべし。君相の身としては、平時すら周公の吐哺握髮天下の賢に下る如くならずんばあるべからず。況や今をや……方今直諫地を掃ふの際に当りて、如何ばかり上直諫を求むるの意切なりとも、尚ほ人々口を箝みて面従すること必せり。故に人君深く茲に思を致し給ふべきことなり」⁵¹と、藩主に向かい、中国の周公のように広く天下の賢者を求めて「納諫」を促している。松陰がここに示した「言路」における「諫」は、その原義以外に、広く求めるべき「意見」をも意味していると考えられる。

そして彼が具体的に構想した「言路洞開」の藩体制については、次のように記されている。

古は人君聴政と云へば、平明に朝堂に出でて群臣を座前に召し、政事を評議し、又臣民訴訟の筋を聴き給ふことなり。是れを朝に臨むと云ふ……窃かに按ずるに君公毎日辰時より午時に至るまで御書院へ御出座遊ばされ、大臣以下執政の臣は悉く君前にて官務を処置し、外臣も更番して君前に侍り、扱て群臣へ上書請対を許され、上書あれば即ち君前にて披封し衆議にかけ、然る後大臣に付して是れを行はしむ。或は又上書したるものを召出し、座を賜ひて其の議論を心の儘に陳ずることを得せしむ。総じて大事を挙げ行ふ時は必ず衆議帰一の所を用ふべし⁵²。

松陰は中国皇帝の「聴政」を範例として、「内臣」と「外臣」を含めた群臣の上書を求めている。ここで彼が記している「内臣」とは、内政の要務に参画する藩府の要路者であり、それ以外の者はすべて「外臣」と考えている。松陰は、「内臣・外臣固より一体なれば分つべき理なし。然るに太平の弊、内臣は日に益々柔媚を以て君前に進み、寵遇を受け、外臣は日に疎くして、遂に内外相分れ、外臣は内臣に交はるを恥ち、内臣は外臣に交はるを賤しむに至る、実に国家の一大患なり。故に当今の急務は、内臣は特に戒飭し、

⁴⁹ 松陰の意見書がいかなる経路で藩主に達したかについて、松陰は後年「将及私言」の跋文に次のように記している。「将及私言一同御直目附八木甚兵衛へ相渡し候処、熟覧の上御答に及ぶべしとて預り置き候。其の後甚兵衛より内々にて瀬能吉次郎に（此人予か父執なり）申し候は、此の書面は寅次郎へ差返し、将及私言は印符匿名にして手元役中井次郎右衛門へ相渡し然るべく、尤も君辺並びに相府をば委細甚兵衛取計ひ仕り候由申し候。其の後甚兵衛より吉次郎へ内々相話し候趣にては、一応君覧に及び候上にて相府迄下り候と申す事に御座候」（「将及私言」[1853]『吉田松陰全集』第2巻所収、山口県教育会編、大和書房、1973年、21頁）。

⁵⁰ 前掲、「将及私言」[1853]、13頁。

⁵¹ 前掲、「将及私言」[1853]、13～14頁。

⁵² 前掲、「将及私言」[1853]、13頁。

文武の芸を勤励せしむべし。又外臣にても、文武の芸に長ずる者は、数々引見して其の優劣を比較し、又言はんと欲する所ある者をば、座を賜ひて導き言はしむべし。是れ内外を一致にするの道なり」⁵³と述べている。内臣と外臣が本来「分つべき理」がないにもかかわらず、厳しく分たれていることを「太平の弊」として提起する松陰は、封建体制における身分秩序を暗に批判しているのである。

松陰が指摘する身分秩序固定の弊害は、当時「言路洞開」の要請と共にしばしば指摘された問題であり、また一般的に論じられ、批判の対象ともなっていた。例えば、嘉永六年（1853）に幕府が意見を諮問した際に、当時まだ「小譜請」という低い身分であった勝海舟も幕臣として上書している。その内容は五つの項目から成り、その第一は人材登用及び言路洞開のこと、第二は「堅船」製造及び海外貿易のこと、第三は江戸防衛を固めること、第四は旗本の困窮救済、兵制改革、教練学校設立などのこと、第五は武器製作のことであった。そこには幕末に盛んに求められた「言路洞開」についても言及があり、海舟は次のように記している。「（前略）泰平の通弊は尊卑隔絶つかまつり、下情上に達せず、自然と言路ふさがり候に御座候。故に何程の良将賢相御座候とも、下情に通達いたさず候ては、万民悦服致し候様なる御所置は相成り難き儀と存じ奉り候」⁵⁴。海舟が「尊卑隔絶」という封建体制の身分秩序の問題を「泰平の通弊」として取り上げて、それが言路を塞ぐ根本であると見る視点は、まさしく先述した松陰の言路洞開論と一致している。

松陰が要請した言路洞開は、武士階級内の身分秩序の解体を前提とする「人材登用」を含め、主君と群臣による「衆議帰一」の体制である。つまり彼は、従来の要路者たちの「合議」による藩体制を否定すると同時に、彼らを言路洞開の阻害要因と見なしていたのである。

ここで松陰が主張している「言路洞開」を含めた諫言論には、従来から武家社会で行われていた諫言の形式に現れた変化がよく示されている。元来、武士の忠誠エートスと緊密に結びついた諫言は、『葉隠』にも「我忠節にて主君の悪名を顕し申に付、大不忠」⁵⁵であり、「忠義の諫言と申は、能御請被成筋を以、潜に申上るもの也」⁵⁶とあるように、主君の名を守るという忠誠心から、「潜」かに、つまり非公式かつ、秘密裡に行うことが求められていた。また、徳川斉昭（1800～1860）も「明訓一斑抄」において、「泰平の世にて候はゞ、ひそかに可申上」⁵⁷と記している。

しかしながら、松陰はこのような諫言を含む要路者たちの議論に対し、「続狂夫の言」

⁵³ 前掲、「将及私言」[1853]、14 頁。

⁵⁴ 前掲、『勝海舟全集』第 14 巻、220 頁。

⁵⁵ 『三河物語 葉隠』（2-129）日本思想大系 26、斎木一馬、岡山泰四、相良亨校注、岩波書店、1974 年、308 頁。

⁵⁶ 前掲、『三河物語 葉隠』（2-114）、302 頁。

⁵⁷ 前掲、「明訓一斑抄」、122 頁。

(1858)において「今の議する者動もすれば輒ち曰く『秘密秘密』と。一言を発するも唯人の之れを聞かんことを恐れ、一事を挙ぐるも唯だ人の之れを見んことを患ふ……室内一言の善と不善とより判す。即ち秘密秘密（といふも）亦何の益あらんや……唐の魏徴、諫語を録す、未だ嘗て太宗の明を損するを聞かず……秘密秘密、以て上下を壅蔽す」⁵⁸と語り、秘密に議論する弊害を指摘し、武家社会における従来の諫言は言路「壅蔽」の病根であると批判した。ここでは、松陰が用いる諫言という語彙の本来的にもつべき意味内容がすでに、これまで武家社会で形成されてきた「秘密」裡のものではなく、「公」的なものに転じていることが明らかである。

このように、幕末には「諫言」という語彙自体に変化が起きていたが、その背景には、幕府、藩府からの「諮問」という「意見」徴収があり、幕臣、藩士が積極的に意見を上申し、言路洞開を求める趨勢もあった。まさしくこの状況において、「意見を申し立てる」ことを意味する「建言」/「建白」の語彙が登場したのである。安政五年（1858）、松陰が幽囚された際に表した文稿には、「吾れ幽囚廢錮、為すある能はずと雖も、近ごろ恩旨を蒙り、建言諱まざるを允さるるを得たれば、其れ徐ろに具して之れを奉らん」⁵⁹と記され、「建言」の表現が現れる。文脈から判断すると、「意見を申し立てる」という意味である。維新に近づくにつれ、「諫言」よりも「建言」/「建白」のほうがしきりに現れ、圧倒的に用いられるようになっていく。勝海舟の幕末における上書の題目には、「幕閣へ建言」（1864）、「当時（征長）敗走之報頻なれとも士氣解惰し国財空費し殆ど大敗之相あり然るに一も吐氣て建言する者なく悠々時日を消す慨歎之余権限」（1866）、「丁卯十二月稲葉閣老へ建言」（1867）など建言の表現が多く見られ、「建言」/「建白」が用いられる傾向が如実に強まっている。

諸士横議が盛んに行われた幕末において、多くの下級武士層は松陰のように、言路洞開の要請を通して現在の政体を批判し、諫言精神を以て変革しようとしていた。彼らの言路洞開の訴求は、すなわち藩府の要路者「合議」による政体への批判であった。しかし、長い間漢学を中心に学んできた彼らが新たに構想した政治体制は、やはり儒学的思想に拘束される傾向がしばしば見られる。松陰の弟子、久坂玄瑞（1840～1864）が文久二年（1862）に学習院に提出した天皇を中心とする王政復古の政体構想もいわゆる儒学的理念の上に立つ考え方であった。漢学が彼らの思惟方法に浸潤していたため、彼らは変革精神を持っていても、結局漢学の枠組みから抜け出すことができなかったのである。

第四節 西洋政体の導入と紹介

海禁（鎖国）政策をとっていた幕藩体制において、中国とオランダを通して洋学が漢

⁵⁸ 「戊午幽室文稿」[1858/7]（『吉田松陰全集』第4巻所収、山口県教育会編、大和書房、1972年）、519頁。

⁵⁹ 前掲、「戊午幽室文稿」[1858/7]、369頁。

籍や蘭書の翻訳という形で流入してきた。とりわけ享保の改革において、洋書輸入の緩和と政策により、多くの洋書がもたらされた。十八世紀の後半、洋学は賀茂真淵（1697～1769）、本居宣長（1730～1801）らの国学と並行して勃興した⁶⁰。医学、自然科学のみならず、西洋の政体も翻訳されて紹介⁶¹されたが、そのすべては幕府の統制下にあった。洋学は長い間幕府、つまり権力側の規制、弾圧⁶²を受けながらも、内外の危機が増大するにつれて、次第に権力内部に浸透していった。とりわけアヘン戦争（1840－1842）の勃発は、権力側に大きな衝撃を与え、蘭書による西洋軍事科学の研究が活発に行われるようになった。従来の蘭学研究は主に医者が担ったが、あらたに武士階級の出身者が担い手として登場した⁶³。また、蕃書調所（1856）の設立をはじめ、洋学研究ならびに教育機関が全国諸藩に設けられた⁶⁴。

このようなアヘン戦争のインパクトを受けた一人に、文久二年（1862）に欧米諸国に割譲された上海の実情を目のあたりにした高杉晋作がいた⁶⁵。また、アヘン戦争でイギリスに敗北した中国を素材として、欧米の立憲思想を日本に紹介したいと考えた加藤弘之（1836～1916）は、「最新論」（1861）を著した。

加藤弘之は嘉永五年（1852）に、「父は甲州流の兵学者なりしが、余は其固陋にして学ぶに足らざるを覚り、西洋流の兵学を学ばん」⁶⁶と志して、佐久間象山（1811～1864）に入門し蘭学を修めた。しかし象山が幕府に罪せられて国許へ蟄居を命ぜられたため、安政元年（1854）からは大木仲益（1824～1886）のもとで蘭学を学んだ。加藤は後年の回想において、「当時同門の人々には薩摩人多くして、小藩にては大垣藩の人多かりしなり。是等の藩々にては、藩士に蘭学を奨励すること盛なりしを以て、書籍学資等は十分藩主より支給されたり……余は但馬出石の仙石と云へる小藩の臣なりしが、同藩中にて蘭学の必要を唱道せし者なきにあらされども、其多数の人々は之を好まさりしなり……藩主は唯之を許したるに過ぎずして、学資を給し、書籍を与ふる等のことは、一切之なかりしなり」⁶⁷と語っている。万延元年（1860）、彼は蕃書調所教授手伝として蕃書調書に入ったが、「最新論」はその頃に記されたものである。これは加藤の最初の著作『鄰草』

⁶⁰ 芳賀徹『明治維新と日本人』講談社学術文庫、1980/1990年、82頁。

⁶¹ 日本に議会のことを伝えた最も古い書籍は、福知山藩（譜代）の藩主である朽木昌綱（1750～1802）の『泰西輿地図説』（1789）であった。朽木は『泰西輿地図説』において「〔ウェストミンスター〕ノ殿閣ハ古ヘハ是モ王ノ居処ナリシガ、今ハ会儀堂トナリテ國中ノ諸官人集リテ政事ヲ儀スルノ役所トナセリ」と記し、ここでは議会が「役所」、代議士は「官人」（役人）とされ、議会の意味が理解できなかったことを示していると、江村栄一は指摘している（江村栄一「幕末明治前期の憲法構想」『憲法構想』日本近代思想大系9所収、江村栄一校注、岩波書店、1989年、443頁）。

⁶² 天保十年（1839）に「蛮社の獄」が行われた。高野長英（1804～1850）、渡辺崋山（1793～1841）など多くの洋学者は弾圧され、罪を下された。

⁶³ 長崎の砲術家の高島秋帆（1798～1866）が西洋近代砲術を移植し創始した高島流砲術が、幕府・諸藩によって採用された（佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社、1980年、15～16頁）。

⁶⁴ 諸藩の洋学研究について、沼田次郎『幕末洋学史』（刀江書院、1950年）参照。

⁶⁵ 田中彰『高杉晋作と奇兵隊』岩波新書、1985年、8頁。

⁶⁶ 加藤弘之「昔の蘭学の話」『名家談叢』第3号、荒木竹次郎編、談叢社、1895年、20頁。

⁶⁷ 加藤弘之「昔の蘭学の話」前掲雑誌、21頁。

の初稿本であるが、『鄰草』と改題したのは、西周(1829～1897)と津田真道(1829～1903)の提案があったからである⁶⁸。「最新論」を書いた意図について、加藤は後年の回想で「西洋に議会なる者の設ありて、人民の輿論に依て政治を為すことを知り、我邦に於ても大に其必要を感じしに依り、『鄰草』と云へる書を著はしたり。本書の趣旨は、西洋には議会なるものありて、人民の輿論に依て政治を為せとも、我邦には未だ之を見る能はずとのことを述べんと欲」⁶⁹す、と語った。西洋の兵学や砲術がもっぱら注目されていた当時において、加藤は一国の防衛となる武備よりも、日本に「人民の輿論」に基づく立憲政体が最も必要であると考えていた。しかし、「公然我邦を書きては幕府の忌諱に触」⁷⁰ることを顧慮して、問答体を用い、中国清朝の場を借りて日本の政体を暗示したのである。

「最新論」において、彼はまず、「船砲の造製、武技の操練等は唯武備の外形にして、此等のことのみにては未だ武備に精神備はらず、世の俗諺に仏を作りて精神を入れずと云へる者と同じことなり。故に先づ其精神を求めざれば、外形のみにては何の益もなきことなり。扱武備の精神杯と云へば甚奇なるに似たれども、所謂人和より外に決して武備の精神となるべき者なし」⁷¹と記し、船艦、武技などによる海防を「外形」と譬えて、立派な外形を持っていたとしても、そこに「人和」という精神がなければ、何の「益」もないと主張している。つまり海防の改革などを論ずるより、単刀直入に「人和」という一国の政治に関わる本題を捉えている。加藤が記した「人和」というのは、すなわち「仁義の政」を施すことであり、「仁義を旨とせる公明正大の政体」のことである。しかしながら、ここにおける仁政の政体は決して儒学的仁政と同義ではない。加藤は儒学的仁政について次のように考えている。「先王の政体の立方にも未だ至らざる所なきにしもあらずと思ふなり。但し縦ひ其至らざる処ありとも、先王の政治なれば決して其弊の生ずることなしと雖ども、後世暗君出で玉ふに至りては其弊自ら生じて公明正大なる所を失ひ易し」⁷²というのである。彼は堯、舜、禹など儒学が理想政治と称揚する「先王の政治」を否定するわけではないが、そこに潜む亡国へと導く危険性、つまり「暗君」の世であれば「弊」が生じ、「公明正大」が失われる可能性を見通していた。

そこで彼は西洋の政体を「君王握権」、「上下分権」、「豪族専権」、「万民同権」と四つに分けて紹介し、なかでも「上下分権」についてとりわけ説明を加えた。加藤はなぜ「上

⁶⁸ 序文には西と津田の朱書があり、西は「題名全く本論に適せざるに似たり。殷鑒新話ともか。又余り暴ろに過ぎば、鄰も草などにては如何」と記した。また、津田は「余も亦題名は暴ろに過ぎざるをよしと思ふ。岡目草にては如何。岡目も傍眼なりき。さ故、人には序文に聊其意を含ませたし。鄰も草にても亦然なり」と記している(加藤弘之「最新論」『憲法構想』日本近代思想大系9所収、江村栄一校注、岩波書店、1989年、3頁)。

⁶⁹ 加藤弘之、前掲、「昔の蘭学の話」、24頁。

⁷⁰ 加藤弘之、前掲、「昔の蘭学の話」、24頁。

⁷¹ 前掲、「最新論」、5頁。

⁷² 同書、8頁。

下分権」の政体を推奨したのか、それは彼が清朝の政体に対して示した次のような考え
方から窺える。

今清朝の政体を改革せんには上下分権の政体を取りて可なるべし。尤も万民同権の
政体は一國中君臣尊卑の別を立てず、唯有德才識の士上に立て暗昧愚蒙の下を治む
る者なれば、其公明なる事は此政体の右に出る者あらずと雖ども、今清朝にて此政
体を立んと欲するとも、容易に為し得べきことにもあらざれば、今より速に上下分
権の政体に改革し、旧来の弊風を除き善政を興さんこそ実に清朝の一大急務と云ふ
べし……実に漢土の欠典と云ふべきは所謂公会なり。往古堯舜の世よりして此公会
を設けざるが故に、後代暗君暴主等出玉ふに至りては、或は大権を姦臣に奪はれ、
或は人君独り其権を擅にして遂に天下国家を失ひ易きなり⁷³。

「万民同権」も「上下分権」も貴賤尊卑に関らず全ての民が平等に政治に参加する権力
をもっている政体であるが、「上下分権」は今日の清朝に最も適すると、加藤は考えてい
る。つまり、上の朝廷を倒さずに、下の一般の民が政治に参加することができる「上下
分権」の政体は、「万民同権」より直ちに立てられるため、「容易」である。また、この
「上下分権」の政体には「公会」という議会があるから、奸臣の政権強奪や人君の独裁
政権を防止することができ、国家の安泰を維持することができる。清朝の政体に示した
彼のこのような考え方は、実に自国日本の政体に向けての意見であり、幕府の存在を前
提とするならば、「上下分権」はまさに当時の幕藩体制に最も適した政体であった。加藤
は中国に仮託して、自国日本のあるべき政体を検討し、幕藩体制における「公会」につ
いて次のような具体的な考案を記している。

封建にても郡県にても此政体を能く用ることを知れば、決して之れが為に害を生ず
ることはなかるべし。若し封建の世なれば、各州の諸侯よりも其領国の大小戸口の
多少等に従て其出す所の公会官員の多少を定め、大事若くは非常の事等あるときは、
必之を会聚せしめて之と其事を謀議すべきなり。然るときは諸侯も其仁徳に懷き、
朝廷を仰て真忠を尽すの志を生ずること疑なし。然るに務めて諸侯の権を奪はんと
欲して諸侯をして少しも国事に喙を容るゝこと能はざらしむるときは、朝廷の大権
一時盛なるが如しと雖ども、却りて諸侯をして朝廷を怨ましむるの起因にして、若
し一旦事あるときは朝廷諸侯の為に害を受けること少からざるべし。故に縦ひ封建と
雖ども人和を破らざらんと欲せば、必上下分権の政体を立てずしては叶はざるなり⁷⁴。

⁷³ 前掲、「最新論」、15～16 頁。

⁷⁴ 前掲、「最新論」、19 頁。

加藤は「人和」を実現するためには、西洋の「公会」制度が欠かせない重要な要素であると考えており、「上下の志情全く隔断し、人和全く破れ（るのは）……是殊に公会の設けなきに因るなるべし。若し公会の設けあるときは、暗君と雖ども常に下説を聴き下情に通じ玉ふ故、自然英明に移り玉ふこともあり、又姦臣権を窃まんと欲すと雖ども、公会下民之を縦さざるが故に、決して其志を遂ること能はざるなり。故に公会を設るは、堯の欲（敢）諫鼓を作り、舜の誹謗木を立て玉ふにも遙に優る者にして、実に治国の大本と云ふべきなり。此公会なきときは、縦ひ如何なる法律ありとも何の益もなきことなり」⁷⁵と、「公会」が果たした「下意上達」の機能を重要視している。また、彼は、「公会に入らざる者と雖ども、若し朝廷公会の説共に是ならずと思ふことあるときは、決して憚ることなく、或は己れが説を建白し、或は朝廷公会の処置公平ならざる趣を書記して之を上梓し、以て之を天下万民に報告して、天下の衆説如何を問ふこと忤ありと雖ども、朝廷にて決して之を禁ずること能はざるなり」⁷⁶と述べ、公会に入らない者も、全民が「建白」、「上梓」を通して自分の考えるところを天下万民に「報告」することができる言論の自由の体制、及び政治の公開性を主張した。加藤がここに記した「建白」の内実は、西洋の四民平等の理念を含んでおり、松陰が用いた語彙と明らかに異なっている。

加藤が西洋政体を学び、自国の政体を検討して示した考え方は、儒学思想をベースとする考え方とは明らかに異なっており、新たな可能性の現れである。彼が考えた幕藩体制に適合する「上下分権」は、全民が政治に参加することができる体制であり、「言路洞開」の対象は天下万民にまで拡大されている。これは自由平等を前提とする西洋政体の基本的立場を受容するものであった。

第五節 明治初期における「建白」

明治元年（1868）三月に明治天皇は百官、廷臣、諸侯を率いて紫宸殿に赴き、天神地祇を祭って「五ヶ条の御誓文」⁷⁷を發布した⁷⁸。

- 一、広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス
- 一、旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ

⁷⁵ 同書、「最新論」、16 頁。

⁷⁶ 同書、「最新論」、12 頁。

⁷⁷ 五ヶ条の誓文の草案は、明治元年一月初ころ由利公正（1829～1909）が議事所の規則として「議事之体大意」を執筆し、ついで土佐藩士福岡孝弟（1835～1919）が諸侯会盟（列侯会議）の盟約書としてその本旨をあらため、そのまま放置されていた。三月に、長州藩士木戸孝允（1833～1877）が加筆した（田中彰『明治維新』講談社学術文庫、2003/2010 年、63 頁）。

⁷⁸ 芳賀徹、前掲、『明治維新と日本人』、204 頁。

一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ

我国未曾有ノ変革ヲ為ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ジ、天地神明ニ誓イ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ。

その趣旨は、「独裁を否定して、政治参加の拡大をはかる。個人の能力を発揮できる社会を作り、先進国中心の国際社会に参加して新知識を導入するとともに、古い習慣にとらわれずにその標準に従う」⁷⁹ことである。それ以来、明治政府はこの「五ヶ条の御誓文」の精神に基づき、明治四年の「廃藩置県」、同年「非人の解放令」、明治五年の「学制」、六年の「徴兵令」、九年の「廃刀令」など一連の「変革」に取り組んで、「文明開化」や「四民平等」の方向に進んでいった。とりわけ「徴兵令」は「諸藩割拠の根源をなす封建武士団武力の粉碎のための最後の一撃にまっしぐらに突き進んだ」⁸⁰と遠山茂樹は指摘する。これによって、従来武士が所有していた身分的な象徴は次々と剥奪され、武士という身分階級の存在自体が否定されていった。

四民平等の方向にむけて、まず成立した政策は建白書受付の制度である。幕末に求められていた「言路洞開」が、建白書受付制度を設けることによって、実践されるようになった。このような「建白の世」になった時代的転換について、大隈重信は次のように述べている。

（前略）支那は其累代歴世に種々の制度を以て、諸般の方法を以て、賢才を登庸し、言路を洞開することを努めさりしにあらすといへとも、未だ完全なる制度方法を見出すに至らさりしなり（中略）支那政治の学は、王政維新なる一大革命の前後に於て、先つ時の藩侯及び志士に応用せられて、賢才の登庸すべく、言路の洞開すべきを誨えたり。彼の公議所成り、待詔院起り、官吏公選の制度立ち、謂ゆる建白の世の中、議論の世の中と為るに至りしは、之に因由せずとせんや。此際よりして、彼代議の方法、立憲の政制を誨えたる西洋の学理、更に入りて志士仁人の脳を刺撃したれば、いかてか相率ゐて之に心酔せざらん（後略）⁸¹。

幕末期における「言路洞開」や「賢才登庸」のスローガンは、志士たちが儒学の政治学に基づいて求めたものだが、「言路洞開」という理想をいかに維新後の「建白の世」、「議論の世」に実現するかについては、「西洋の学理」が求められたと、大隈は語っている。この言葉には、幕末期において、「諫言」が洋学の影響によって、儒学思想から次第に離れていったことが窺える。そして、洋学の思想概念を含んだ「建白」という概念の成立

⁷⁹ 鈴木淳『維新の構想と展開』日本の歴史 20、講談社学術文庫、2010年、13～14頁。

⁸⁰ 遠山茂樹『明治維新』岩波書店、2000/2009年、231頁。

⁸¹ 大隈重信（述）『大隈伯昔日譚』二、円城寺清編、東京大学出版会、1895/1981年、433～434頁。

は、日本が新たな近代文明国家の道を歩み始めたことを示唆するものでもあった。

明治政府は明治二年（1869）に建白書受付の機関として、待詔局を設置した。三月に掲げた布告は次の通りである。

太政更始以来、旧弊一洗、言路洞開、上下貫徹、少モ壅蔽無之、天下有志之者竭丹誠為国家無忌憚建言致候ニ付、追々御採用相成候得共、猶実効之不立廉々有之、畢竟御旨御趣貫徹不致、有志之者選挙ニ相洩候哉ト深ク御煩念被為在候ニ付、此度於東京城待詔局被為開候間、有志ノ輩草莽卑賤ニ至迄御為筋ノ儀早々建言可致、篤ト議論相遂、其所長ヲ以夫々御用可被仰付可被仰付御趣意ニ候間、向後潜伏隠遁鬱々其志ヲ不達者有之候テハ、至誠尽忠ノ素志ニ相悖り候間、尚上下一致偏ニ尽力可致旨被仰出候事⁸²。（太字強調は筆者）

政府は幕末に唱えられていた「言路洞開」の要請に基づき、この布告によって、「有志」「草莽卑賤」、上下の身分を問わず、国家に対して忌憚なく「建言」することができるようにした。さらに、「建議ノ立意世上ニ流布セシメ新聞紙ニ載出スベキ」という規則を定め、提出された建白書を政府の御用新聞である「日新真事誌」に掲載することにした。実際、征韓論争後、下野した板垣退助、江藤新平らが連名した「民選議院設立建白書」は、当時の「日新真事誌」に全文掲載されたのである。

色川大吉、我部政男監修の『明治建白書集成』に収録された明治二十三年（1890）、国会開設までの建白書には、官僚、士族以外に、僧侶や農民などが提出したものも多かった。このように、従来、特定の階級、もしくは一部の者しか議論することができなかった政事に、全民が参加できるようになり、また公に政治を議論することができるようになった。

こうした四民平等の理念を裏付ける「建言」や「建白」という用語には、新しい時代の意味が付与されており、このことも「諫言」が終焉を告げたことを示唆している。江戸時代に定着した「諫言」には本来的に、武士という社会的身分階級に特有の精神が強く込められていたので、「諫言」と同じような意味合いをもちながら、しかも階級的ニュアンスを含まない「建言」や「建白」という語に置き換えることによって、従来の政治・社会体制を含めた封建体制との間に境界線を引こうとする意志が如実に窺える。幕末期において、社会変革の機能を果たした「諫言」精神は、「建白」・「建言」という語の到来によって、次第にその役割を終えることになった。新たな「建白の世」は、従来の身分階級を否定することを課題としたが、それはかつて社会の担い手であった武士の時代から、全国国民が社会の主体となるべき四民平等の時代、文明開化の時代への変化を物語

⁸² 『憲法類纂』第3、明法寮編、1873年、40頁。

るものでもあった。

他方、「諫言」から「建言」・「建白」の世に転じた時代に、従来社会の支配者層として位置付けられていた武士が、諫言精神から建言・建白精神へと切り換え、武士意識をただちに切り捨てることは容易ではなかった。明治初期に頻発した士族の反乱はこのような時代の過渡期を表わす現象であった。

5-1 廃刀論

ここでは、武士精神、身分階級の象徴となった「佩刀」を例として検討する。明治二年（1869）五月に、森有礼（1847～1889）は「公議所」⁸³において「官吏兵隊之外、帯刀ヲ廃スルハ、随意タルベキ事」、「官吏ト雖モ、脇指ヲ廃スルハ、随意タルベキ事」と提案した。その意図は次のように説明されている。

人ノ刀剣ヲ帯スルハ、外ハ以テ人ヲ防ギ、内ハ以テ己ノ身ヲ護スル所ニテ、天下動乱ノ際ハ、又要スベキアリ。然レドモ、世運漸ニ文明ニ赴キ、人々自ヲ道義ノ尊キヲ知ルニ至テハ、粗暴殺伐ノ悪習自ラ相息ミ、此等ノ物モ畢竟虚飾ニ供スルニ過ギザルノミ。方今国家鎮定、皇運日ニ隆興良法以テ内ヲ正し、兵制以テ外ヲ守ル、此際ニ当テ、人各礼節ヲ砥礪シ、所謂粗暴殺伐ノ悪習、変ジテ道義自守ノ良俗ト化スベキ也。故ニ自今以後、官吏兵隊ヲ除クノ外、帯刀相廃シ候儀、随意タルベシ。尤官吏ト雖モ、脇差相廃シ候儀随意タルベシ是何ゾ偏ニ文事ヲ重クシ、武事ヲ軽クスルニ非ズ、固ヨリ文武同体、唯其名ヲ異ニスル者ニシテ、政治ノ頼テ挙ル所、人各篤ク、意を注ギ、両ラ之ヲ盛興スベキナリ。今此ニ陳スル所ノ二題目ハ、唯其弊習ヲ一新シテ、聊皇政隆興ノ際ニ、裨補アラン事ヲ思而已⁸⁴。

元治元年（1864）に江戸の開成所で洋学を学び、慶応元年（1865）にイギリス留学、その後アメリカ留学し、西洋文明の洗礼を受けた森は、刀剣を「粗暴殺伐の悪習」と見做し、「文明に赴」くに、刀剣は「虚飾」に過ぎないとする立場から、官吏兵隊以外の者の帯刀を「随意」に廃すべきだと主張している。しかし、森のこの「随意廃刀」論は、公議所の官僚たちに反駁された。

三宅鑛太郎は森の「帯刀ヲ廃スルノ説、卓見トモ云ベシ」⁸⁵と評価しているが、「此条ヲ以テ皇道ヲ裨補スルトナラハ、抑未ナラン。皇運隆興苟モ暴戾ノ事ナキニ至ラバ、何ゾ腰刀ノ有無ヲ論セン」⁸⁶。また、雨森謙三郎も「両刀ヲ帯ルハ皇国尚武ノ性、自然ニ

⁸³ 明治二年三月七日に開院、同年七月十日に集議院と改称され、日本最初の議院であった（「公議所日誌附前編解題」『明治文化全集』第一卷憲政篇、明治文化研究会、日本評論新社、1955年、3頁）。

⁸⁴ 「公議所日誌」（『明治文化全集』第一卷憲政篇所収、明治文化研究会、日本評論新社、1955年）、110頁。

⁸⁵ 同書、113頁。

⁸⁶ 同書、113頁。

発露スル処ニシテ、素ヨリ嘉尚スベキ所ナリ。今之ヲ廢セントナラバ、却テ士氣ヲ沮ムノ一端トナルベシ。夫利不百不易其法今帶刀ヲ廢シテ、其利幾何カアル仮令随意ニセヨリト令ストモ、苟モ大和魂ヲ有スル者、誰カ刀ヲ脱スル者アルベキヤ、此等ノ議維新ノ時ニ於テ、大ニ取ラザル所ナリ」⁸⁷と反論した。雨森は国家の守護にとって「士」が不可欠であることを説き、武士のアイデンティティをなす刀は「大和魂」であり、武士精神の象徴であるから、刀がなければ「士氣」が墜ちると主張している。雨森のように、「刀剣」を武国たる日本の精神的象徴だと考える官僚たちは、凡そ「神州ノ正氣此器ニ存ス」⁸⁸という理由で反対意見を出した。

しかしながら、明治四年八月に明治政府は「散髪脱刀令」を發布し、散髪、脱刀を任意とする法令であった。京都府士族の渡辺豪顕は「刀剣ヲ廢スルノ議」（1873）という建白書を提出した。

帶劍以テ道路ニ横行シ恃ンテ以テ百般ノ弊害ヲ生スルコト少カラス之ニ因リ是ヲ見レハ実ニ無用ノ贅物ナリ啻ニ無用ノ贅ノミニ非ラス終ニ政刑隆盛ノ道ヲ障碍スルニ至ラン豈嘆スルニ堪ユヘケンヤ……朝廷断然廢刀ノ令ヲ下シ海内ノ刀劍悉ク官ニ沒收シ一人ノ刀劍ヲ蔵ムル者無ラシメ以テ万民自由ノ權利ヲ通暢セシメハ実ニ天下人民ノ幸甚ナリ然而シテ沒收スル刀劍ノ利鈍ヲ鑒ミ利ナル者以テ武庫ニ蔵メ異日ノ用ニ供シ鈍ナル者以テ改鍛シ百般ノ器用ニ供シ且刀劍ヲ裝飾スル所ノ金銀銅錢ノ類ハ相当ノ価ヲ以テ官ニ沒收シ貨幣及ヒ諸ノ供セハ前ノ所謂無用ノ贅物今ハ變シテ有用ノ器材トナラハ其国益如何ソヤ是臣ノ微衷ヲ吐露シ敢テ建言スル所以ナリ⁸⁹。

刀剣を「政刑隆盛ノ道」における「障害」と見なす渡辺は、文明開化の世に刀剣は無用と考えている。「万民自由ノ權利」という文明開化の必要性を認識し、階級意識をすでに持たない彼は「廢刀」を促し、さらに無用の刀剣の使い道について具体的な提案をしていた。

つまり、廢刀に賛成する士族は帶刀を旧時代の陋習と考え、文明開化の障害であると考えている一方、廢刀に反対する士族たちは、身分階級を重んじ、帶刀を身分的象徴と見なしている。そして、刀を「大和魂」、すなわち日本国精神の化身と考えていた。この廢刀への不満は、武士の特権回復要求と結びつき、明治初期に反乱を惹起する原因となった。

加屋^{はるかた}霽堅（1836～1876）は、明治九年（1876）に神風連の変を起こした一人であり、彼は、「禁刀令駁議奏稿」という建白書を記し、政府に提出した。その中には、「我神武

⁸⁷ 同書、110 頁。

⁸⁸ 同書、111 頁。

⁸⁹ 『明治建白書集成』第二卷、内田修道、牧原憲夫編、筑摩書房、1990 年、439 頁。

の国、刀劔を帶る事は、綿邈たる神代固有の風儀にして、国本頼て以て立、皇威頼て以て輝き、以て神祇を慰祭し、以て邪教を護除し、以て禍乱を勘定す」⁹⁰と、まず、神武の国たる日本と刀との不可分の関係を述べている。そして、次のように帯刀の必要性を力説し、その裏で身分階級の回復を求めた。

皇国神武の利劔を脱却し、狗羯羶裘醜態に模倣し、固有の勇武を磨滅し、夷狄の糟粕を墨守し、神州固有の良法を廃し、国勢を削弱し、素より外夷の難を制するに足らずして、愈賊虜をして其伎倆を逞せしむるに至らば、抑、廢藩置県の詔に、大義を昭にし、名分を正し、内以て億兆を保安し、外以て万国と対峙せんとの朝旨にも、乖戾し、所謂国自毀而人毀之、人自侮而後人侮之の禍害を招き玉はんこと、自今倍駸駸たらん⁹¹。

加屋のような帯刀要求を通して、武士の特権＝身分階級の回復を求めることは、明治初期の多くの不平士族に共通する訴求であった。明治十年によく収束した士族の反乱はおおよそこのような武士特権の回復、武士意識への固執によるものであった。

むすび

本論では、「諫言」、「建言」/「建白」という語彙の幕末における使用法を通して、武家社会が形成してきた諫言像に変化が生じたことを明らかにした。従来「秘密」に行われるべきとされた諫言は公の議論を求められて、その封建的性格を次第に弱めていった。また、幕府や藩府の「諮問」の政策によって、多くの幕臣、藩士が意見を申し立てることができるようになり、こうした「言路洞開」を背景として、「諫言」という語彙に代わって「建言」/「建白」がしきりに用いられるようになった。

幕末において、「言路洞開」と表裏一体の課題であった「人材登用」も、盛んに議論されていた。松陰のように儒学の固定観念に囚われていた者たちは、儒学思想を深化させて「言路洞開」と「人材登用」を要請したが、その要請の及ぶ範囲はあくまでも武士階級の枠内にあり、そのなかでの身分秩序の解体であった。江戸時代の儒学は体制教学として幕府に採用されることにより、「歪曲、矮小化」⁹²された。「文武兼備」を求められた武士たちは儒学を学んでも身分秩序の固定化により政治に参加することができなかった。武士たる彼らが、幕末の時代に求めたことは、実に儒学の「士」をモデルとして政治に参加することができる体制であった。そのため、彼らの身分秩序解体の要請は、武士以外の農、工、商階級にまで及ぶことがなかった。海防を通して洋学にも触れた彼ら

⁹⁰ 加屋霽堅「禁刀令駁議奏稿」『西南紀伝』上巻二の「附録」に所収、黒竜会編、秀光社、1908年、62頁。

⁹¹ 同書、78頁。

⁹² 松浦玲『明治維新私論』現代評論社、1979年、9頁。

が、儒学的な思惟方法から抜け出すことができなかったのは、外夷に対する偏見や蔑視、もしくは膨張した国体の優越観のためであり、西洋の「外形」たる海防のみに目を奪われ、内的な政治体制の変改に開眼できなかったためと考えられる。

一方、加藤のような一部の幕臣たちの洋学摂取は、儒学的固定観念から脱け出して、柔軟な姿勢を示した。洋学の自由平等の理念により、彼らは四民という階級性が政体にもたらした弊害を看破した。そしてこの「四民平等」の考え方は、維新のための土台ともなったのである。

維新後、四民平等の実質化にむけて、新政府では建白書受付の制度が成立した。建白書は単なる西洋的な公に政治を議論する近代的・文明開化の一端を表わすのみならず、二百年間以上存続した身分階級、および一部の者しか政治に参加できないという上級士族の特権などを否定する意味をも持っていた。その後、明治六年の徴兵令や九年の廃刀令の発布は、まさしく従来武士が持っていた特権を完全に否定するものとなった。戦乱後の十七世紀初頭、泰平の世の江戸時代になると、佩刀は武士の身分的象徴となり、武芸の修練以外に、現実には刀を抜く機会はほとんどなくなった。また、幕末においては、西洋砲術の影響により、近代的武器である砲術のほうが個々の武士の武芸より重視されるようになった。にもかかわらず、刀は武士の魂を象徴するものとなった。明治初期に起きた士族の反乱において、反乱軍の一部が、廃刀や徴兵に強く反対したのは、かつての士族の身分的特権を回復するためであった。

第五章

明治初期における江藤新平の革新性と反動

はじめに

第一節 先行研究と課題

第二節 佐賀士族との緊張関係

2―1 藩政改革の理念

2―2 佐賀の藩政改革

第三節 政府官僚との軋轢

3―1 陸軍省と大蔵省との衝突

3―2 官商結託への批判

第四節 佐賀の乱

むすびに

はじめに

本章は、幕末の志士たちが下級藩士から中央政府の官僚に転身していく近代国家の成立過程において、なぜ最終的に離脱者たちが続出したのかという問題を探るため、江藤新平（1834～1874）を例にとって考察する。初代司法卿であった江藤は、近代的司法制度の基礎固めに貢献した一人として、革新的な考え方をもっていたと評価されているが、その一方で、韓国征討という対外進出論を唱えた彼は、佐賀の乱の首謀者として反動的であったとも見なされている。このような「改革と反動の奇妙な混合物」¹である江藤の政治思想は、最大の士族反乱を起こした西郷隆盛（1828～1877）もある程度まで共有しているが、藩に愛着した西郷の封建的性格とはまた異なったものである。したがって、明治官僚たちと同調できなくなった江藤の反動的側面は検討に値する課題であると思われる。

志士としての下級武士が明治維新の実現される過程で支配的な役割を果たしたことは、維新史の通説となっている。大久保利通（1830～1878）や西郷隆盛、山県有朋（1838～1922）、前原一誠（1834～1876）、江藤新平など、西南雄藩出身の下級武士たちは、幕末期に志士として尊王討幕運動で活躍し、維新後は中央政府の核心的官僚として出仕した。しかしながら、明治六年（1873）の征韓論争後、明治七年（1874）に佐賀の乱の首謀者となった江藤新平、明治九年（1876）に萩の乱を指導した前原一誠、そして明治十年（1877）

¹ ノーマンは、「江藤が明治初年に西欧思想と改革の先駆者であったという背景にかかわらず、佐賀の叛乱者がかかげて戦った標語は、藩の再興、韓国征討、外国人の追放であった」と述べている（E・H・ノーマン「日本政治の封建的背景」『ハーバート・ノーマン全集』第2巻所収、大窪憲二編、岩波書店、1977年、171～172頁）。

に西南戦争を指揮した西郷隆盛は、何れも志士から官僚に転身し、その後、官への反乱の首謀者となった者たちである。

このように志士が明治の官僚社会から離脱した根本的な原因について、佐々木克は、「志士の資質と官僚的発想・立場との対立」²を指摘している。彼は志士の資質が必ずしも「武士意識」ではないと強調しながら³、「公」と「私」の二項概念で、「志士の」性格と「官僚的」資質を次のように定義している。「公」というのは、『政治』の国家経営論理であり組織形成の論理⁴である。維新の官僚たちが『私』を『公』に完璧なまでに従属させて行った⁵のに比して、志士の性格をもつ人々は、「公と私の判別認識があいまい」⁶であり、『公』的なもの（たとえば、年貢や治水工事等にかかわるもの）を、『私』的な事情（たとえば地方的な特殊事情）や感情・信念（たとえば、自己における〈仁政〉観）等によって量るという傾向を持っていた⁷。また、志士は「熱狂的な神州観や大和魂の強調、悲憤・慷慨をストレートに発散する『狂』的運動論、組織を軽視し孤立を恐れぬ意気」⁸を持っていたとして、志士的精神と「狂」との結合、及びその組織性の希薄を指摘している。このような理由から、佐々木は、幕末の志士時代に活躍して維新後に有用人材として新政府に抜擢された江藤新平について、近代的司法体制を確立したという官僚的開明性を認めながらも、組織的観念が薄いため、「本質的に組織の中に棲む人間ではなかった」⁹と結論づけている。

しかしながら、佐々木のこの「公」と「私」の理論は、あくまでも近代的公共性から導き出されており、幕藩体制における公と私、あるいは幕末における尊王・倒幕をめぐる公と私の概念と非連続的なものであった¹⁰。そのため、この非連続的な公・私の概念で幕末から維持された志士の性格を説明することは、その説得力がやや不足していると思われる。

江藤は明治二年（1869）、佐賀藩での藩政改革において、新政府の方針に従って改革を

² 佐々木克『志士と官僚』講談社学術文庫、2000年、243頁。

³ 佐々木は、「武士意識」なるものは、必ずしも反乱軍に特有のものではなかったと指摘している。「武士意識」は当時の政府＝政府首脳部や官僚達にも、いわゆる開明派であっても士族を出自としている人びとにおいては、ひとしく共通して持ち続けていた意識であった（佐々木克、前掲書、293頁）。

⁴ 同書、283頁。

⁵ 同書、283頁。

⁶ 同書、283頁。

⁷ 同書、284頁。

⁸ 同書、157頁。

⁹ 同書、287頁。

¹⁰ 幕藩体制において「公儀」と言う場合、その「公」とは幕府に忠誠を尽すことであったが、ペリーの来航により、公私の秩序が新たに組み立てられた。例えば、幕末の尊王攘夷の運動において、朝廷の勅許を得ずに、日米和親条約を締結したことなどによって、幕府は「私政」、「私議」と批判された。また、当時の「公武合体論」や「公議輿論」などの「公」はすでに幕藩体制における「公」の概念と異なる意味を含んでいる。このような幕末期における公私概念については、井上勲「幕末・維新时期における『公議輿論』観念の諸相—近代日本における公権力」『思想』（609）岩波書店、1975年、354～367頁を参照。

断行したことにより、佐賀士族の反感を募らせ暗殺を企てられた。ここにおいて、彼は旧体制を擁護するのではなく、新しい体制を確立しようとしたことが明らかである。したがって、士族の特権回復や藩の再興など封建体制への回帰が彼の反動の意図であったとは思われない。また、海外進出論は幕末から一貫した彼の主張であり、征韓論はそのなかで手近に実現可能なものと見えたにすぎない。

征韓論争以前に、つまりいわゆる留守政府の期間に、すでに江藤と政府内部の官僚たち（大蔵省と陸軍省）との間に軋轢が生じていた。彼が結局明治の官僚世界から離脱することになった原因を探るには、この官僚たちとの対立の内実を知る必要がある。したがって、本稿は明治二年の藩政改革における佐賀の不平士族との緊張、そして明治四年の司法卿時代に生じた政府官僚との対立に焦点を当て、江藤の志士的精神と官僚的性格とがこの問題にどのように連動して作用したのかを考察する。

第一節 先行研究と課題

本題の考察を行うまえに、まず、士族の反動的性格が士族反乱に関する先行研究において、どのように位置づけられていたかを整理する。

士族反乱は、明治二年（1869）に大楽源太郎（1832～1871）が主導した「長州藩脱隊騒動」¹¹に端を発し、明治六年（1873）の征韓論争後に、西南地方を中心に各地の不平士族による反乱が次々と勃発した。明治七年（1874）の「佐賀の乱」、明治九年（1876）に前原一誠（1834～1876）が指導した「萩の乱」、その規模と動員数がもっとも大きかった明治十年（1877）の「西南戦争」、そして翌年の「紀尾井坂の変」がその終焉となった¹²。後藤靖は「征韓論決裂以前の反乱はそれぞれの藩庁主流派にむけられていたが、それ以後は、直接に中央政府にたいする大規模な反乱行動としてあらわれている」¹³と、征韓論政変を境にして士族反乱を分類した。政変後に、明治政府に向けられた士族による最初の武装反乱は、すなわち佐賀の征韓党及び憂国党の二党が結託した佐賀の乱であ

¹¹ 明治二年末ごろには、長州、薩摩、佐賀などの諸藩は藩政改革を行い、財政上の理由により兵力を整理、縮小した。長州も明治二年の十二月に藩政改革により、幕末期に尊攘派・倒幕派の主力となり、戊辰の内乱にもっとも功績のあった奇兵隊、遊撃隊などの諸隊を解散した。諸隊は十二月に、解隊反対、洋風兵式偏重反対、及び士官の天下り任命反対の三点を藩庁に要求した。そして、それに対する藩庁の回答に不満をもった彼らは、翌年の一月に、山口城に攻めよせ、藩庁を包囲して糧道を断ち、藩権力を奪取しようとした。また、この騒動には、農民と町人も同調して一揆を起し、人民一揆の性質を帯びたと井上は指摘している（井上清『明治維新』日本の歴史 20、中央公論社、1966/1973 年、176～177 頁）。

¹² 後藤靖は、士族反乱の発端として「長州藩脱隊騒動」を挙げる理由は、長州藩脱隊騒動の要求がその後に行われた諸反乱の諸要求と基本的に繋がっているのみならず、その脱隊の主導者たる大楽源太郎が、土佐勤王党の結党に際して重要な役割を担っていたからであるという。そして、士族反乱の終焉となった「紀尾井坂の変」は、いわゆる大久保利通が暗殺された事件であり、紀尾井坂の変の要求と組織とは西郷党と無関係ではないと見ている。明治初期に行われた各地域の士族による反乱の詳細については後藤のまとめた表を参照されたい（後藤靖『士族反乱の研究』青木書店、1967/1987 年、5～9 頁）。

¹³ 後藤靖、前掲書、9 頁。

った。

士族反乱の性格について、遠山茂樹は「その底流には、権力統一過程から脱落しようとする封建支配者諸層の不安と不満とがあった」¹⁴と述べ、「廃藩以後、封建的特権を失って不満を懷く士族は、特に薩長の政権独占に快からざる徒は、保守反動の立場から、反政府運動に出ようとしていた」¹⁵と、士族反乱の「保守反動」的な特徴を指摘している。従来士族がもっていた「常職」及び「特権」が、「廃藩置県」(1871)、「徴兵令」(1873)、「廃刀令」(1876)、「秩禄処分」(1876)など明治政府が系統的に実施した政策により、次々と剥奪されていった。政府に対する不満を懷く士族たちは、「武力によって日本を封建制度に引きもどす企て」¹⁶を持って、乱を發動させたのである。士族反乱が示した「保守反動」的な特徴は、多くの先行研究がすでに論じており、一般的に認められている¹⁷。

しかしながら、後藤は遠山の「権力統一過程から」¹⁸の脱落という通説と異なる論を提起している。遠山が「廃藩以後」という政策上の問題を中心として、「封建的特権」の喪失、及び「薩長の政権独占」により、不平士族が乱を起こさせたと考えているのに対して、後藤は、岩倉使節団(1871/11～1873/9)の洋行をその核心的問題と見て反論した。つまり彼は、非征韓派の結集の起点を「岩倉具視一行の欧米巡察の過程に求めることができる」¹⁹と考えている。米欧現地での視察により、岩倉、木戸、大久保などの洋行派は当初、廃藩置県までに「個別領有権を有償によって買いとることによって、それらを全国的統一的な領有制に再編」²⁰する方針をとり、それは「古典的絶対王制の成立過程とほとんどことなるところはな」²¹い政策であったが、この方針は洋行後に、「現代世界の発展段階に政治的にも経済的にも対応できる天皇制絶対主義の構築」²²が急務だという考え方に転換した。洋行派のこのような「絶対主義の政治的・経済的編成がえは、政変前の武士的特権との妥協政策をかなぐりすて、積極的・意識的に武士的特権を破壊するものとしてあらわれた」²³。征韓論の分裂はむしろそれを契機として、洋行した官僚派と征韓派との間に「権力構造および政策体系」²⁴の対立がより拡大していった結果

¹⁴ 遠山茂樹『明治維新』岩波現代文庫、2000/2009年、223頁。

¹⁵ 同書、296頁。

¹⁶ E・H・ノーマン『日本における近代国家の成立』岩波文庫、1993/2007年、144頁。

¹⁷ 井上清『明治維新』(中央公論社、1966/1973年)、E・H・ノーマン「日本政治の封建的背景」(『ハーバート・ノーマン全集』第2巻所収、大窪恩二編、岩波書店、1977年)、田中彰『明治維新』(講談社学術文庫、2003/2010年)、杉谷昭「明治初年における対外政策と士族反乱」(『九州文化史研究所紀要』22号、九州大学九州文化史研究所、1977年、217～250頁)などが挙げられる。

¹⁸ 遠山茂樹のこの論説の初出は、1951年に出版された『明治維新』(岩波全書)である。

¹⁹ 後藤靖、前掲書、15頁。

²⁰ 同書、20頁。

²¹ 同書、22頁。

²² 同書、23頁。

²³ 同書、44頁。

²⁴ 後藤靖は「非征韓派が『内治派』の所以は、彼等が国家的封建的土地所有・政商資本と直接生産・豪農商との階級対立という基本矛盾を緩和し、人民を統治体制にいかにくみいれるかという政策を構想しはじめたところにある。ただ、この政策転換が基本的には国民における人民闘争にもとづくとし

であると後藤は考えている。この見解について、遠山は「学制」(1872/8)、「徴兵令」(1873/1)、地租改正(1873/7)などの政策はいずれも留守政府により行われており、「廃藩置県前の古い方針の所産であるはずはあるまい」²⁵と、後藤が洋行を一つの区切りと見る安易な考え方に疑問を呈した。

後藤と遠山は、士族反乱に対してそれぞれ異なった見解を示していたが、「封建的特権」をめぐる観点は共通していた。前章で検討した廃刀反対論はまさしくこの封建的特権への固執の実例であった。

このように、士族反乱、およびその反乱者が封建反動的と見なされた要因は、「封建的特権」保守の主張にあった。したがって、佐賀の乱の首謀者たる江藤も同様にこのレッテルを貼られていた。ところが、その後、江藤を個別に取り上げる研究が次々と現れ、とりわけ江藤に関する一連の研究の著者、毛利敏彦は、江藤が佐賀の乱の首謀者になったのは大久保ら一派の政敵追放の陰謀であると論じた²⁶。毛利はさらに江藤を「人権の父」²⁷と見ており、江藤の意見は岩倉具視の「建国策」(1870)に大きな影響を与えた²⁸等、明治政府におけるその功績を高く評価している。しかしながら、毛利の論説は近年次々に修正され、検討され直しており、例えば岩倉の「建国策」は江藤の意見と無関係であることが実証されている²⁹。また、近代の法制度史の視点から、江藤の司法政策の構想や実行を検討・考察する研究もあり³⁰、江藤が司法制度の改革を推進した目的は有司専

でも、直接的な契機としては、何といっても欧米資本主義の発展構造にふれたことから生みだされたことは明らかである」と、洋行派が内治を優先する考え方を記している。一方、征韓派は「ただ列強国による日本の対外的危機にのみ着目していた。それは典型的には西郷＝薩摩がそうであったように、遅れた経済的・社会的状況のために旧来の支配層の内部交代だけで旧態依然たる統治体制によって支配しえたという階級対立の潜在性のために、権力対人民という基本的階級対立関係の調整に政策を進める必要を感じさせなかったことに起因する」と指摘している(前掲、『士族反乱の研究』、23～30頁)。

²⁵ 遠山茂樹「書評 後藤靖著『士族反乱の研究』」『立命館経済学』16(5・6)、立命館大学経済学会、1968年、215頁。

²⁶ 毛利敏彦は、佐賀に戻った江藤が「佐賀士族を鎮撫するつもりだったらしい」と記し、大久保は「この好機に佐賀士族もろともライバル江藤を抹殺しようとしたのかもしれない」と推論している(毛利敏彦『明治六年政変』中公新書、1979年、214～215頁)。しかし毛利のこの大久保の陰謀論はやはり甚だ怪奇である。それは、帰郷前に大隈邸に訪れた江藤と会談した大隈が、征韓論争後に辞職した江藤の心境について、「郷国に帰り、満腔の不平に駆られ、且不平不満の徒に擁せられて、寧ろ本性とも謂ふべき実務家立法家より、一変して武人と為り、将帥と為り、剣を執りて軍を率ゐ、以て其素志を全ふせんとし」たと述べているからである。江藤の「不平」及び「志」を全うするという考え方を、大隈は感じ取っていた(大隈重信(述)『大隈伯昔日譚』二、日本史籍協会編、東京大学出版会、1895/1981年、689頁)。

²⁷ 毛利敏彦「学校教育は『西洋ノ丸写シ』で一初代文部大輔江藤新平の運命的決断一」『学士会会報』836号、学士会、2002年、52頁。

²⁸ 毛利敏彦『江藤新平—急進的改革者の悲劇』中公新書、1987年、72頁。

²⁹ 菊山正明「江藤新平の司法改革構想と司法省の創設」『早稲田法学』63(4)号、早稲田大学法学会、1988年、40～45頁。

³⁰ 菊山正明、前掲論文、梶野順子「江藤新平と司法省」(『日本歴史』530号、日本歴史学会、1992年)、65～81頁、星原大輔「江藤新平の明治維新—「東京奠都の議」を中心に—」(『ソシオサイエンス』12号、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2006年)、202～217頁、星原大輔「由利財政と江藤新平—いわゆる『由利江藤金札論争』を中心に—」(『ソシオサイエンス』13号、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2007年)、217～232頁、土屋伶「明治初期における民法作成の意義—江藤新平が民法編纂を開

制を阻止する藩閥意識からの即断であるという従来の論を否定して、司法省権限の拡張を目指したなどの批判的な見解も現れている³¹。また、司法改革を行った江藤を急進的な欧化主義者、西洋主義者³²とみなすことも一つの盲点であるとして、江藤の政治思想は「儒学的発想に基づく国家形成を企図することにあつた」³³のではないかという見方も提出されている。

しかしながら、前述した先行研究は、いずれも江藤の官僚的資質と志士的性格とが相互に作用しつつも両者が分裂する側面への言及がない。つまり、遠山やノーマンが指摘しているように、明治政府が新しい国家を創設した際には、官僚的性格も志士精神も、その特徴が必ずしもはっきり表面化しておらず、近代国家成立の過程において、志士精神が強い者は次第に官僚世界から外されることになったのではないかと考えられる。したがって、その実態を解明することが本章の目的である。論述に入る前に、官僚的性格の者と志士精神の者の資質を予め定義することはしないが、論のゆれが生じる危険を回避するために、江藤新平を中心として、同時代の他の官僚たちをこれと対比しながら、彼の政治思想が官僚的性格と同調した部分、そして齟齬が生じ反発した部分を検証したい。

第二節 佐賀士族との緊張関係

維新後、新政府は、慶応四年（1868）九月八日に「慶応」を改めて「明治」³⁴に改元し、「自今以後革易旧制一世一元以為永式」³⁵（今より以後、旧制を革易し、一世一元、以って永式と為す）³⁶として、天皇一代に年号一つという「一世一元」の制を定めた³⁷。そして、十月二十八日に、明治新政府は「藩治職制」³⁸を發布し、藩を政府の一機関と

始した理由」(『日本史の方法』6号、日本史の方法研究会、2007年)、35～44頁、大庭裕介「江藤新平の政治行動」(『国史館史学』13号、国史館史学会、2009年)、56～79頁、山口亮介「明治初期における『司法』の展開過程に関する一試論—ブスケ・江藤新平と司法職務定制—」(『法政研究』77(3)号、九州大学法政学会、2010年)、501～540頁、大庭裕介「江藤新平の政治思想—『司法省達第四十六号』の位置づけをめぐる—」(『日本歴史』756号、日本歴史学会、吉川弘文館、2012年)、52～69頁、などが挙げられる。

³¹ 梶野順子、前掲論文、65～81頁。

³² 例えば佐々木は、「近代的な面よりも、例えば『攘夷』の槍に代えて、逆に過度の西洋信仰を持って突き進む、青年志士のような個性を、私は江藤の姿に重ねてみておきたい」と述べている(佐々木克、前掲、『志士と官僚』、287頁)。

³³ 大庭裕介、前掲、「江藤新平の政治思想—『司法省達第四十六号』の位置づけをめぐる—」、65頁。

³⁴ 「明治」という言葉は、『易経』の「聖人南面して天下を聴き、明に響いて治む」から採用された(田中彰『明治維新』講談社学術文庫、2003/2010年、95頁)。

³⁵ 『法令全書 慶応三年』内閣官報局、1887年、289頁。

³⁶ 田中彰、前掲、『明治維新』、96頁。

³⁷ 井上清は一元一世の制は、天皇の權威をいちだんと高める方策であつたと指摘している。年号はもとより古代中国の政治思想で、皇帝は時間をも支配するという思想から作られたものであるが、これまでのように天災などを理由に天皇一代に年号が度々変わることは、天皇の權威も不安定な印象を与えたと考えられたからである(井上清、前掲、『明治維新』、118頁)。

³⁸ 「天下地方府藩県之三治ニ帰シ三治一致ニシテ御国体可相立然ルニ藩治之儀ハ従前各其家之立ルニ随ヒ職制区々異同有之候ニ付今後一般同軌之御趣意ヲ以テ藩治職制大凡別紙之通可相立旨被仰出候事」

なし、今後政府の統治下に位置づけることを知らしめようとした。この制度は以下の二大方針を含めている。その第一は、「従来沿襲ノ門閥ニ不拘人材登庸務テ公挙ヲ旨ト」³⁹ すること、つまり、これまでの封建的な門閥世襲の制を廃止し、実力本位による「人材登用」を実施することである。「人材登用」の名のもとに有用人材を中央に集めるとともに、「四民平等」の方向に近代化を押し進めることは、明治政府が当初から積極的に取り組んだ政策であった。そして、その二は、藩の行政と藩の家政を分離することである⁴⁰。これはのちの版籍奉還、廃藩置県などの中央集権化の布石であったと考えられる。この政令が發布された後に、各藩は藩政改革に着手し始めた。佐賀藩は明治二年（1869）の一月に、薩摩、長州、土佐と共に版籍奉還を上奏したが、藩政改革を本格的に進めたのは三月からであった。

藩政改革にあたって、江藤新平は副島種臣（1828～1905）と共に拔擢され、二人は前藩主の鍋島直正（1814～1871）に随行して、三月一日に佐賀に着いた。江藤は、文久二年（1862）の脱藩の罪により永蟄居の咎めを受けていたが、元治元年（1864）に藩によってその罪を解かれた⁴¹。慶応三年（1867）十二月に王政復古の大号令が告示され、新政府は職制を改革した。江藤は新政府の「人材登庸」方針により、徴士として藩臣から朝臣に転身した。佐賀の藩政改革に着手する前に、江藤はすでに江戸府判事、また会計局判事として、江戸の民政や財政を担当しており、実務経験を持っていた（後掲の【江藤新平の官職一覧表】を参照）。

藩政改革の藩命を受けた江藤は、佐賀に出発する前に、「御国御変新の義、第一天意を体し奉り、諸事勤王を目的とし、上下の旧染を浣洗し、土民女子に至る迄、各其心魂を変改せずんばある可らず」⁴²を趣旨とする二十九か条の改革方案を藩主の直大と鍋島直正（閑叟）に提出していた。

2-1 藩政改革の理念

この趣旨に明白に示されているように、江藤の藩政改革は「諸局勤王報国の意に基づき、各其心力職掌を尽し、聊遅滞紛乱す可らず」⁴³として、勤王を本位とする理念に貫かれている。とくに彼は、「楠公の廟堂を建て、戦死の墳を製し、大に勤王報国の士気を

（前掲、『法令全書 慶応三年』、337 頁）。

³⁹ 前掲、『法令全書 慶応三年』、338 頁。

⁴⁰ 「藩主ノ側ラ従来所置用人等ノ職ヲ廢シ別ニ家知事ヲ置キ藩屏ノ機務ニ混セシメス専ラ内家ノ事ヲ掌ラシムヘシ」（前掲、『法令全書 慶応三年』、338 頁）。また、鈴木淳は「従来、藩政の中心は代々の門閥家老である一方、藩主の信任を受けたものは身分は低いながら用人として権力をふるうなど、権力が多元化する傾向があった。藩の幹部を実力本位で任用すればそのような必要はないので、機関としての藩と藩主の家を明確に区別して混乱を防ぐのである」と指摘している（鈴木淳『維新の構想と展開』日本の歴史 20、講談社学術文庫、2010 年、59～60 頁）。

⁴¹ 従来の通説においては、江藤の蟄居は慶応三年（1867）十二月に解かれたとされていたが、近年、星原大輔は江藤の上書や書簡などにより、元治元年の七月十九日に赦免されたことを論証している（星原大輔、前掲、「江藤新平の明治維新—「東京奠都の議」を中心に—」、204 頁）。

⁴² 『南白江藤新平遺稿後集』吉川半七、1900 年、15～16 頁。

⁴³ 同書、16 頁。

振はん」⁴⁴と述べて、佐賀の楠公祭祀という伝統的な勤王風習を保存しようとした。彼のこのような考え方には、佐賀の地域的性格がよく現れている。

「諸事勤王」を目的として、「上下の旧染を浣洗」するという江藤の改革方針は、具体的に、「門閥位階の僻論、親属故友の私挙、及び賄賂の路を厳禁す可し」⁴⁵、「御家老と雖も、実に其才に有らずんば、職に居て徒食す可らず」⁴⁶、また「冗職を省き、繁務を約し、諸事古習に係らず、簡略ならんばあらず」⁴⁷、「諸事公法正義に帰し、奸吏貪商を厳罰せずんばあらず」⁴⁸などの言葉に示されており、士族階級に存在する「徒食」及び「冗職」を排し、人間関係を利用した「賄賂」や「奸吏貪商」（官僚と商人との結託）などの旧習を厳罰に処すことが含まれていた。「徒食」を改めるとはすなわち、新政府が標榜する門閥打破の「人材登用」を意味しており、実力本位という時代の方針をよく反映している。

藩政改革の理念において、江藤がもっとも関心を寄せたのは、幕末から目指されていた「富国強兵」政策である。彼は、「強兵の基は富国に在り、国富ずんば兵隊の俸賞を厚し、軍事の費用に供する能はず。故に国富て而して兵強く、兵強くして而して外患なし」⁴⁹と、兵を強くするために富国の重要性を力説し、「国を富すは国産を繁殖し、貿易を開広するにあり」⁵⁰と述べて、殖産興業と海外貿易による富国を主張した。

今夷人開港の地に於て、富饒を致す所の者は、我皇国の産を以て、上海に運び、上海の産を我に齎らして、其往来運輸交易の利を収むるを以てなり。故に運送蒸汽船三四艘を以て東京、大阪、長崎、上海に運輸交易をなし、且北国、松前、箱館、蝦夷の地、物産夥盛にして、運輸の道未だ自在ならず。因て蒸汽運送船を以て北国、松前、蝦夷等の物産を交商し、此を東京、大阪、長崎、上海に交通するあらば、其利必ず大にして、富国の道此れに過ぐる者有らざらん歟。而して一日速なれば、一日の利を得、一日遅きは一日の利を失ふ。此尤も其人を得て、以て其事を委任するに在り。抑税賦の入る所は定りありて、当今費用日々に大なり。入る所出るを供せずんば、遂に匱乏に至る。此を以て速に遠大富国の策なくんばあらず⁵¹。

この当時の江藤の海外貿易の考え方は、幕末に著した「図海策」（第三章）をより一層具体化したものである。富国のためにただ国内の「税賦」のみに依存することには限界が

⁴⁴ 同書、20 頁。

⁴⁵ 同書、16 頁。

⁴⁶ 同書、16 頁。

⁴⁷ 同書、17 頁。

⁴⁸ 同書、17 頁。

⁴⁹ 同書、20 頁。

⁵⁰ 同書、20 頁。

⁵¹ 同書、20 頁。

あるため、彼が注目したのは、「夷人」が日本の物産を輸出したり、上海の物産を輸入したりして「富饒」になった、という海外貿易のもたらす「交易の利」であった。幕末から海外貿易に関心を持ったのは、佐賀藩の地理的位置、及び彼が幕末に「代品方」⁵²に携わった経験からであろう。海禁時代に唯一の対外窓口であった長崎の警備は、佐賀藩と福岡藩が隔年で担当していた。警備のための軍事的支出が藩の財政に大きな負担となっていたため、天保改革（1835）の際には、石炭や砂糖などの殖産奨励が行われた⁵³。そして、嘉永・安政年間、長崎警備の増強にあたり、銃砲や蒸気船購入のため、オランダとの貿易を開始し、高島・香焼島の石炭や白蠟、茶などの物産品がオランダ人へ売り渡されたという⁵⁴。よって、江藤は幕末においてすでに通商貿易がもたらす利益に開眼していた。江藤以外に、同じく「代品方」に就き、さらに長崎に派遣された大隈も同じような見識を持っていたといえる。

一方、強兵について、江藤は、従来「甚だ役人の権利を羨み重んじ、兵武研究の者を軽蔑す」⁵⁵の旧習を、今後「俗吏を軽んじて、兵隊を重んぜずんばあらず。依て兵隊の位席俸給は、俗吏に過ぎずんばあらず」⁵⁶と、兵隊を重視する考え方を明示している。そして、元来、士族の常職である兵役について、彼は「市中郷村の農商、皆奸詐利慾を事とし、又幻怪浮屠の説を信ず。此れ全く教化の道薄く、勸懲の術なく、専ら収斂租税に心力を用るに在り。此れ皆浣洗して、信義を尊び、勸懲を旋し、幻説迷語を禁じ、苛法を除き、収斂を薄くし、且つ市兵、農兵を制して、不時非常の用に供せん」⁵⁷と記している。市兵や農兵を「不時非常の用」の予備軍として取り込む必要があると、江藤は考えていた。

市兵や農兵の採用に関する提案は、江藤がその首唱者であったわけではなかった。長崎警備を担当していた佐賀藩は、天保改革の時から軍事力増強に向けて改革を行っている。嘉永三年（1850）から、長崎警備の増強にあたり、藩領の伊王島・神ノ島に大規模な台場が構築された。そこへ配備される兵員には、深堀領の伊王島、神ノ島、香焼島、沖ノ島、鷹島五箇村の住民から「壮丁」を募り、「深堀の兵」として日常的に大砲の訓練を受け、いわば農兵砲隊の組織が編成された⁵⁸。また、戊辰戦争の際には、「日雇工商半農」の「壮年強精」の者二千人に対して大砲、小銃の訓練を行って兵隊化する計画もあった⁵⁹。このように佐賀の強兵政策においては、洋式の装備を施すのみならず、平民に

⁵² 安政元年（1854）に設置された国産統制の機関である。代品方は蒸気船の代価に充てる国産を取り扱う部門であり、代品として石炭、白蠟、お茶など佐賀の物産があった（木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』、九州大学出版会、1997年、418～419頁）。

⁵³ 同書、418頁。

⁵⁴ 同書、462～469頁。

⁵⁵ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、17頁。

⁵⁶ 同書、17頁。

⁵⁷ 同書、19頁。

⁵⁸ 木原溥幸、前掲、『幕末期佐賀藩の藩政史研究』、353頁。

⁵⁹ 木原は、兵隊化された「日雇工商半農」は強制的に徴発される可能性があったと指摘している（同

よる増兵と訓練によって軍事力を強化しようとしたことがうかがえる⁶⁰。

佐賀のこのような強兵政策の影響であろうか、江藤は農民や商人を道德教化が行き届かず、「奸詐利慾」の輩と見なしても、なおかつ武士の常職かつ身分の象徴である兵役を、農商にも担わせうと考えている。この構想にはむしろ身分秩序を否定する考え方をも含まれているが、むしろ増兵によって「富国強兵」を実現するという江藤の強兵志向のほうが強く作用しているだろう。藩政改革の構想以外に、明治三年（1870）十月ごろ太政官に提出した「海陸軍備方策」にも同じような考え方が示されている。江藤は「今兵乱の後、会計の目的甚だ窮したり。宜しく其事情を酌んで、兵備を設けずんば有る可らざるなり」⁶¹と、政府の財政逼迫を念頭において、陸軍と海軍がそれぞれ配備する常備軍を兵部に管轄させ、予備軍は諸藩に管轄させるという案を提出している。常備軍として各藩に課する「兵」については、「藩々所出を兵部にて撰ぶ法は、士卒民を不問、只強壯を旨として、白面油骨を禁ず、此事は豫め藩々へ御達し有之置候」⁶²と、兵としての強壯を重んじる能力主義である。また、「平常は皆其職業を勤候事」⁶³、「非常の時は皆兵となり候事」⁶⁴と、近代の徴兵制に近い考え方を記している。従来各藩が管理してきた常備軍を中央政府の兵部省に統轄させるという江藤の案は、「富国強兵」を実現するための方策であったが、士卒庶を問わず兵隊を編成する考え方は、翌月の十一月に政府が定めた「徴兵規則」の方針と同じである。「徴兵規則」には「兵事ハ護国ノ急務皇威ヲ發揮スル之基礎ニ付……兵制一変全国募兵之御目的」⁶⁵と謳われ、「各道府藩県士族卒庶人ニ拘ラズ、身体強壯ニシテ兵卒ノ任ニ堪^{たゆ}ベキ者ヲ選ミ、一万石ニ五人ヅ、大阪出張兵部省へ可差出候事」⁶⁶と記されている。この際の徴兵計画は結局予定通りの人員が集まらず失敗に終わったが、廃藩置県後の徴兵令へ向けた第一歩であった。

江藤は徴兵について革新的な考え方を表しているが、農商を「奸詐利慾」と見なす心底には、たとえ無自覚的であっても、武士意識が働いていることが明らかである。そのため、士卒民から徴集するという発想においても、なおかつ士族としての階級意識を保っていたといえるだろう。

書、390～391頁）。

⁶⁰ 農民を兵隊とした例としては、長州藩の奇兵隊がもっとも有名である。文久三年（1863）に高杉晋作（1839～1867）は防備と討幕を目的として奇兵隊を創設した。また、紀伊藩においても津田又郎という者が文久三年（1863）に、身分階級を問わず組織した兵隊に西洋式兵器の訓練を行った。土佐藩においても、嘉永七年（1854）に、沿岸を警備する目的に民兵の制度が設けられた（E・H・ノーマン「日本の兵士と農民」『ハーバート・ノーマン全集』第4巻所収、大窪愿二編、岩波書店、1978年、46～54頁）。

⁶¹ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、22頁。

⁶² 同書、24頁。

⁶³ 同書、25頁。

⁶⁴ 同書、25頁。

⁶⁵ 『軍隊 兵士』日本近代思想大系4、由井正臣、藤原彰、吉田裕校注、岩波書店、1989年、36頁。

⁶⁶ 同書、36頁。

2-2 佐賀の藩政改革

実際、佐賀の藩政改革は、久米邦武（1839～1931）が起草し、江藤と副島が定めた「藩治規約」に基づいて行われている。藩主の直正（閑叟）と副島は、三月末に佐賀を出発して東京に戻ったため、藩政改革は主に新政府の官僚となった江藤の主導下で進められた⁶⁷。また、藩政に参加した中心人物は中野数馬を除いて、前山精一郎（1823～1896）、増田忠八郎、木原儀四郎ら、人材登用によって抜擢された下級武士であった。なお、前山精一郎は後に佐賀の乱で中立党を組織し、政府軍とともに江藤の征韓党と島義勇（1822～1874）の憂国党を征伐した人物である。

十五か条からなる「藩治規約」には、「閩藩の身格は国老、準国老、士、卒の四級に定め、職は軽重の品を分て七等とす」⁶⁸と、既存の八つの階層を廃して改めて四つに分け、七つの等級を定めている。例えば、徒や手明鎧などは「士」、足輕は「卒」となった。また、「門閥を廃せずと雖も、士庶人の才徳ある者は、旧制に従ひ一等官に昇るを得る事勿論たるべし」⁶⁹と、新政府の「門閥ニ不拘人材登庸」政策に従い、士、庶を問わず「才徳」あるものを選抜すると明文化している。

一方、兵制改革においては、従来大組制（侍、手明鎧、足輕組、諸職人組などから編成）を中心にして、新式の西洋製の小銃、大砲を装備する編成が否定され、改めて小銃隊、大砲隊など、近代的軍事組織である大隊制を採用した⁷⁰。しかし、常備軍や予備軍の編成は明治二年九月に制定された「編隊規則」において、相変わらず「士卒」を中心に据える方策であった⁷¹。

藩政改革においてもっとも大きな成果を挙げたのは、既存の地方知行制の廃止による支配体制の集権化である。これまで実質的な支配権を握っていた私領主が否定されることにより、私領主の土地人民、さらに家臣団も解体されることとなった⁷²。その結果、兵権、及び財政がすべて藩政府の管轄下になり、藩の統一的構造を確立させていった。一方、地方知行の廃止に伴う常禄（家禄）、職禄の整理により、武士たちの禄高は削減されるようになった。私領主を含めた上級武士層から下の士卒にまで影響が及び⁷³、とりわけ下層卒からの反発が大きかった。「朝廷の藩制にて士族卒給禄の処分を布令するに先

⁶⁷ 木原溥幸『佐賀藩と明治維新』九州大学出版会、2009年、9頁。

⁶⁸ 中野礼四郎編『鍋島直正公伝』第六編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、356頁。

⁶⁹ 同書、357頁。

⁷⁰ 木原は、長州征伐の際、「これまでの大組制では十分臨戦体制がとれないことが明らか」になった。さらに、戊辰内乱の際にも、これまでの兵隊編成が実戦に役立たないことがはっきりして、従軍した藩兵たちが、帰藩後に兵制改革の声を上げるようになった、と指摘している（木原溥幸、前掲、『佐賀藩と明治維新』、100～101頁）。

⁷¹ 同書、105頁。

⁷² 同書、108～110頁。

⁷³ 例えば、私領主の鍋島市佑はその一人であった。禄制改革により、鍋島市佑は経済的に行き詰まり、拝借米を願い出ざるをえなくなり、遂に大隊長辞任という事態にまで及んだと、長野暹は述べている（長野暹「明治二年における佐賀藩藩政改革の一考察―鍋島市佑の動向を中心として―」『佐賀大学経済論集』20（3）、佐賀大学、1987年、175～176頁）。

立ち、軍事局より、旧来の大組、小組を廃すれば是まで徒、船手、足輕、小道具等総ての卒へ小組頭より配当したる給米は、爾今軍事局に渡されて、一規の処分に從ふ事と致し度しと伺ひ出でしに、異議なく裁可せられたり。然るに卒に於ては、是を面々の家禄と信じ、よりて大に苦情を申し出で」⁷⁴たという。つまり、従来足輕などの卒に渡されていた扶持米は、「家名」によって個人に与えられていた「家禄」ではなく、属する組頭の裁量によって分配される形式であったが、長い間続けられるうちに、卒はこれを「家禄」と認めて相続し、家株を売買し、組頭も黙許し来りたる事……数百年來の習慣」⁷⁵となっていたからである。しかしながら、大組制の廃止に伴う兵制や禄制の改革により、以降は軍事局で選抜して兵として雇用することになり、かつて有していた特権を失うことになった⁷⁶。『鍋島直正公伝』はこの間の事情を、「江藤は、卒は天下に通じて家名はなきものたるに、若し卒が卒族とならば、諸国の卒も尽く家名を立て、二三斗の禄を永給する様になり畢らん、誤解したるの有無を問はず、事情には別に酌量仁恕の法あるべし、家禄とは認むるを得ずとて、遂に其事は否決せられたりき。卒の多数は之を領掌したれど、一部の血氣の者は是を不法の暴断となし、頗る不穩の状ありたり」⁷⁷と記している。彼らはその不満を江藤にぶつけたのである⁷⁸。

自身もまた下級武士出身であった江藤は、足輕のような最下層の卒が生活に困窮していることを知悉していた。彼は、藩政改革構想において、「平禄の説は適然と謂ふ可し。其石貳拾五石、三拾石に非ずんば、父母妻子を養ひ、以て武道を研ぎ、兵隊に専一なる能はざらん」⁷⁹と述べている。それにもかかわらず、実際に行われた改革において、江藤は中央政府の方針に基づき、兵制や財政の改革を断行した。それは、すべて「勤王」を旨として中央集権化を目指している。江藤のような下級武士の抱える心情は、「下級士族独裁の西郷王国」⁸⁰を形成した西郷隆盛も同様であった。しかし中央政府の政策に従い、郡県論者であった江藤とは反対に、西郷は下級士族を優遇する改革を行い、他藩が廃止した知行制を依然としてその原則としていた⁸¹。

佐賀の藩政改革は、基本的に中央政府と軌を一にしている。秩禄改革により、江藤が一時的に佐賀士族と緊張関係に陥り、また下卒に襲撃される事態に立ち至ったことは、不平士族からの一つの警鐘であったと思われる。かつて有していた特権が政府の改革に

⁷⁴ 前掲、『鍋島直正公伝』第六編、421 頁。

⁷⁵ 同書、422 頁。

⁷⁶ 木原溥幸、前掲、『佐賀藩と明治維新』、112～113 頁。

⁷⁷ 前掲、『鍋島直正公伝』第六編、422 頁。

⁷⁸ 江藤は十月に朝命に應じて上京した。その年の十二月二十日の夜、葵町の藩邸から帰宅途中の江藤は、佐賀の下卒六名に襲撃され、重傷を負った（的野半介『江藤南白』上、原書房、1968 年、442～443 頁）。

⁷⁹ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、19 頁。

⁸⁰ 井上清は、西郷の下級武士を中心とする藩政改革を「下級士族独裁の西郷王国」と表現している（井上清『西郷隆盛』下、中公新書、1970 年、106 頁）。

⁸¹ 同書、106～114 頁。

より一つずつ剥奪されていき、その不満が不平士族による反乱の伏線となったのである。

第三節 政府官僚との軋轢

明治六年（1873）の征韓論争により、江藤は西郷隆盛、板垣退助（1837～1919）らと共に下野したが、その前にすでに、政府の官僚たちとの間の溝を深めていた。明治四年（1871）の十一月に出発した岩倉具視を正使とする岩倉使節団が米欧を視察している間、留守政府において、予算の削減問題で大蔵省は各省、とりわけ文部省の大木喬任（佐賀・1832～1899）、及び司法省の江藤新平との対立を激化させていた。また、陸軍の御用商人、山城屋和助が公金流用で摘発されたことにより、陸軍の山県有朋（長州・1838～1922）は司法省に追及されていた。さらに、尾去沢銅山事件をめぐり、司法省と大蔵省の井上馨（長州・1835～1915）が衝突した。留守内閣において生じたこれらの軋轢は、藩閥権勢を背景とした「派閥対立」⁸²であったと言われている。

江藤と陸軍の山県及び大蔵省の井上との間に生じた対立は、主に官商の結託をめぐっている。江藤がこの事件を徹底的に追及したのは、当時の司法卿であった彼が、行政と司法を分立させ、司法権の独立を確保しようとしたとも考えられるが、対立が発生した当初、山県を庇護した西郷⁸³や、井上を窮境から救った大隈⁸⁴と異なり、そこに現れた独特の個性と性格は注目に値する。

3—1 陸軍省と大蔵省との衝突

⁸² 派閥の対立はすでに明治三年に行われた民蔵分離の問題で表面化していた、と田中彰は指摘している。明治二年の八月に、民部と大蔵省が合併されて、民蔵を握っていた大輔大隈重信（佐賀）、少輔伊藤博文（長州）、大丞井上馨（長州）らの木戸孝允の支援を受けたグループは、行財政の権力が太政官を圧倒するほど大きいという理由から、民蔵合併に反対する大久保利通（薩摩）たちと対立した。岩倉と結ぶ大久保は民蔵分離の決意を固め、明治三年に大久保の主張通りに民蔵両省が分離された。廃藩置県後、各省の租税徴収、予算決定の実権をはじめ、財行政及び司法権の一部をも包含する大蔵省の組織は、大久保が卿、井上馨が大輔、渋沢栄一が大丞、松方正義（薩摩）が権大丞という顔ぶれであった。大久保が米欧視察中、大蔵省の実権は大輔の井上馨にあり、予算削減の問題で大蔵省が各省、とくに佐賀代表の文部省と司法省と激しく対立したため、結局井上は渋沢とともに辞職した。このように、薩長土肥藩閥政府の分裂は、大久保の薩摩と木戸の長州がその核をなし、土佐と肥前はその周辺に渦巻いていたという（田中彰、前掲『明治維新』、256～258頁、及び毛利敏彦『大久保利通』中公新書、1969/2006年、168～169頁）。

⁸³ 明治五年の二月に兵部省は陸軍と海軍とに分離された。山県が陸軍大輔兼近衛都督に、薩摩出身の西郷従道が陸軍少輔兼近衛副都督に就任した。一方海軍省の責任者は、薩摩出身の海軍少輔川村純義であった。陸軍の主力部隊は近衛兵であり、その前身は明治三年に薩長土三藩から徴集された御新兵であった。山城屋の事件で、山県は陸軍内の薩摩系の士官たちに攻撃され、自ら辞任したが、天皇のお供で西下している西郷はそれを聞いて直ちに帰京した。山県の軍事力を評価する彼は、山県の近衛都督の兼任を解き、彼に陸軍大輔を専任させて、自ら陸軍元帥と近衛都督を引き受けた。西郷の庇護により、騒ぎは漸く落ち着いた（圭室諦成『西郷隆盛』岩波書店、1960年、124～126頁、及び毛利敏彦『明治六年政変』中公新書、1979年、64～66頁）。

⁸⁴ 佐賀の乱を起こした江藤の死去後も、司法省は尾去沢事件について井上の調査を続けた。井上はこの事件の救済を大隈に依頼し、大隈も斡旋したようである（『世外井上公伝』第二巻、井上馨侯伝記編集会、原書房、1968年、81～81頁、及び『大隈侯八十五年史』第一巻、大隈侯八十五年史会編、原書房、1970年、492～493頁）。

まず、山城屋和助事件について簡単に説明する⁸⁵。山城屋和助（1836～1872）はもと野村三千三と称して、長州藩奇兵隊の一員であった。維新後、商売の道を選んだ彼は、生糸の商店を横浜で開いた。その後、同藩山県有朋との縁故により、陸軍省（前身兵部省）の御用商人となり、軍需品の納入を手がけ、さらに兵制改革に際しての需要の激増に伴い、たちまち巨利を蓄えて有力豪商に申し上がった。長州官僚との関係により、彼は陸軍省から借用した公金で、店舗の拡張と増員、経営の拡大に努めたが、陸軍省の官吏たちもこの御用商人に金を借りる者が多く、中には証文なしの人もあったという。

新興商人となった彼はやがて生糸相場に手を広げ、陸軍省からさらに資金を借り出した。当時、陸軍省は軍需品輸入用に保管していた現銀の価格低落に苦慮していたので、資金運用を理由に山城屋の借用に応じた。しかしながら、普仏戦争で生糸相場が暴落したため、山城屋は投機の失敗で大きな損害を被った。にもかかわらず、彼はさらに陸軍省から公金を借用して自ら海外視察に赴き、各国の実況を究め、輸出貿易の発展を図ろうとした。これによって前後数回凡そ六十四万九千円の公金を借入れたと言われる。この金額は、当時の国家歳入の一パーセントを超え⁸⁶、大蔵省が司法省に決定した予算、四十五万円を上回っている⁸⁷。

外遊中、パリに滞在した山城屋は豪奢な生活を送ったため、駐仏中弁の鮫島尚信（薩摩・1845～1880）及び駐英大弁の寺島宗則（薩摩・1832～1893）に知られ、寺島は本国の外務卿副島種臣（佐賀・1828～1905）に報告した。また、陸軍省会計監督の種田政明（薩摩・1837～1876）も不審に思って調査をはじめ、さらに同省陸軍少将の桐野利秋（薩摩・1838～1877）にも知らせて、問題は次第に表面化した。省内に山県の責任を追及する声が高まり、司法省も動き出して調査に入った。山県は山城屋をパリから急遽呼び返し、公金の返済を催促した。しかし山城屋は返済不能のため、ついに明治五年（1872）十一月に陸軍省の一室で自刃した。

これと期を同じくして、尾去沢銅山事件が発生した⁸⁸。

尾去沢銅山は盛岡藩の治下であり、その採掘権は御用商人の村井茂兵衛（1821～1873）

⁸⁵ 事件の経緯は、的野半介『江藤南白』下、原書房、1968年、37～44頁、『公爵山県有朋伝』中巻、徳富蘇峰編述、原書房、1969年、280～284頁、及び毛利敏彦、前掲、『明治六年政変』67～69頁を参照して、まとめたものである。

⁸⁶ 明治四年十月から明治五年十二月に至る第五期の歳入は、五千四十四万五千七百七十二円であるが、經常歳入は僅かに二千四百四十二万二千七百四十二円である（前掲、『大隈侯八十五年史』、460頁）。

⁸⁷ 司法省は最初九十六万五千七百四十四円の予算を要求したが、大蔵省は四十五万円に減縮した。激怒した江藤は井上に反撥して、辞表を提出した。司法大輔の福岡孝弟（1835～1919）もその後辞表を出し、司法大丞の楠田英世（佐賀・1831～1906）などの重職も相次いで辞表を提出した。この非常事態に、政府（太政官）は前大蔵大輔、参議の大隈を大蔵事務総裁に任じて、歳入歳出を再び計算・調査させた。再議の結果、司法省の予算は四十五万円から六十三万円に決定した（前掲、『大隈侯八十五年史』、463～479頁）。

⁸⁸ 事件の経緯については、前掲、『大隈侯八十五年史』、491～492頁、前掲、『世外井上公伝』、56～59頁、及び宮本又次『小野組の研究—前期的資本の興亡過程（下）』第四巻、新生社、1970年、642～645頁、を参照してまとめたものである。

にあった。村井は幕末期に藩の大阪蔵屋敷から尾去沢銅山関係の資金の送達に当たる為替御用であり、大阪にも支店を出して手広く営業し、藩への献金にも相当尽力していた。しかし、藩の財政はますます行詰まり、ついに銅山経営の資金調達が困難になったため、その経営を御用商人の村井に委任した。

盛岡藩は維新の変で朝敵の罪名を負い、二十万石を十三万石に減ぜられ、なお七十万石の献金を命ぜられた。この財政逼迫によりついに外債を起こしたが、その際、命ぜられて保証人となったのが村井である。明治四年の廃藩置県と共に盛岡藩の債務を政府が引き継ぐこととなり、大蔵省は旧盛岡藩が外商に負っていた債務を肩代わりするために、その代償をもとめて盛岡藩の資産を調査した。そこで大蔵省は、村井が盛岡藩への貸金を「奉内借」⁸⁹と記した証文を見つけた。この藩への貸金を、文字通り藩からの借金と解釈した大蔵省は、村井に借金の返済を督促した。これに対して村井は弁明したが、大蔵省は認めず鉱山を没収した。すべての家産を差押えられた村井は鉱山を差し出さずに済むよう嘆願し、五万五千余円を五年で返済すると申し出たが認められなかった。大蔵省が尾去沢鉱山の採掘権を取り上げてまもなく、岡田平蔵という者がそれを引き受けたいと願い出た。井上は渋沢栄一（1840～1931）らと連名の打合せ書を工部少輔の山尾庸三（長州・1837～1917）に提出し、銅山経営を岡田へ下命されたい旨を通じた。その結果、鉱山の経営権は村井から岡田に移ったのである。

明治五年（1872）十一月二十八日、徴兵告諭の発布と同日に、司法省の「司法省達第四十六号」⁹⁰も公布された。村井はこれによって裁判所に提訴したため、司法省は本格的調査に入ったのである⁹¹。

3-2 官商結託への批判

両事件とも官僚が商人と結託した、いわゆる不正事件である。江藤が積極的に追及し

⁸⁹ 盛岡藩では「貸」と「借」とを混用し、手形でも貸上げであるのに「奉内借」としていた（前掲、『小野組の研究—前期資本の興亡過程（下）』第四巻、644頁）。

⁹⁰ 六か条から成る「司法省達第四十六号」のその一は、「地方官及ヒ其戸長等ニテ太政官ノ御布告及ヒ諸省ノ布達ニ悖リ規則ヲ立、或ハ処置ヲ為ス時ハ各人民華土族卒平民ヲ併セ称スヨリ其地方裁判所へ訴訟シ、又ハ司法省裁判所へ訴訟苦シカラザル事」。その二は、「地方官及ヒ其戸長等ニテ各人民ヨリ願伺筋等ニ付、之ヲ壅閉スル時ハ各人民ヨリ其地方裁判所エ訴訟シ、又ハ司法省裁判所へ訴訟苦シカラザル事」。その三は、「各人民此地ヨリ彼地へ移住シ、或ハ此地ヨリ彼地へ往来スルヲ地方官ニテ之ヲ抑制スル等人民ノ権利ヲ妨ル時ハ、各人民ヨリ其地方ノ裁判所亦ハ司法省裁判所へ訴訟苦シカラザル事」。その四は、「太政官ノ御布告及ヒ諸省ノ布達ヲ地方官ニテ其隣県ノ地方揭示ノ日ヨリ十日ヲ過グルモ、猶延滞布達セザル時ハ、各人民ヨリ其地方ノ裁判所へ訴訟シ亦ハ司法省裁判所エ訴訟苦シカラザル事」。その五は、「太政官ノ御布告及ヒ諸省ノ布達ニ付、地方官ニテ誤解等ノ故ヲ以テ、各御布告布達ノ旨ニ悖ル説得書等ヲ頒布スル時ハ、各人民ヨリ其地方裁判所亦ハ司法省裁判所エ訴訟苦シカラザル事」。その六は、「各人民ニテ地方裁判所及ヒ地方官ノ裁判ニ服セザル時ハ、司法省裁判所エ訴訟苦シカラザル事」（『法令全書 明治五年』内閣官報局、1889年、1346～1347頁）。また、江藤新平の政治思想における「司法省達第四十六号」の位置づけについては、大庭裕介「江藤新平の政治思想—『司法省達第四十六号』の位置づけをめぐって」（『日本歴史』765号、日本歴史学会、2012年）52～69頁を参照されたい。

⁹¹ 裁判は二年あまりかかった。明治八年の判決において、井上は「贖罪金三拾円」という判決を受けたが、その翌日に元老院議員に任命されている（前掲、『世外井上公伝』第二巻、104～105頁）。

た裏には、「諸事、公法正義に帰し、奸吏貪商を厳罰せずんばならず」⁹²という彼の是非を糺そうとする性格がある。「公法正義」に基づいて「奸吏貪商」を厳罰に処するという考え方には、官僚的資質と志士的性格が協働している。この二律背反的性格を詳しく検討する前に、まず日本における近代国家成立の時代背景を見ておきたい。

日本近代国家成立の特徴は、ノーマンが指摘しているように、「封建社会から近代的工業社会への移行が迅速におこなわれた」⁹³こと、すなわちその「速度」⁹⁴にある。そして、「近代的工業社会」を迅速に実現しえたキーポイントは、下級武士が商人と連合するという「円と剣」⁹⁵との結合にあった。より具体的に説明すれば、「明治革命の政治的指導権は下級武士の手に握られたが、その背後の経済的推進力は三井、住友、鴻池、小野、安田のような大商人の増大しつつある貨幣権力」⁹⁶にあったのである。ここには二つの要素が内在しており、士と商の封建的支配関係とともに、近代資本主義成立のための予備的段階が窺える。

まず、士と商の封建的支配関係については、江戸中期以降、町人階級が台頭して貨幣経済が発達することにより、土地経済による封建制度の基盤が動揺するに至った。しかしながら、封建社会を倒して次の資本主義社会を確立していったのは、経済資本を蓄積していた町人階級ではなく、明治政府を成立させた下級武士たちだったのである。この意味で、明治政府の政権は依然として武士階級の手にあり、単にその上層部から下層部に移転したのみであった。

したがって、日本の「近代資本主義は、下から強く盛り上がる力によって自生的に成立、確立したのでなく、藩閥政府の富国強兵、殖産興業、文明開化なる政策による指導、保護、育成の下に作り上げられたもの」⁹⁷であり、「その過程において藩閥官僚が特定の政商と結託して、これに特別の保護や特別の利権を与えることも起こりえた」⁹⁸。このよ

⁹² 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、17 頁。

⁹³ E・H・ノーマン、前掲、『日本における近代国家の成立』、32 頁。

⁹⁴ この「速度」の特徴は、夏目漱石（1867～1916）も認識していた。漱石は「現代日本の開化」（1911 年）において、西洋の開化が「行雲流水の如く自然に働いている」ことを指して、「内発的」と述べている。これに対して日本の開化は「内発的に展開して十の複雑の程度に開化を漕ぎつけた折も折、図らざる天の一方から急に二十三十の複雑の程度に進んだ開化が現れて俄然として打って懸った」として、これを「不自然な発展」であり、「外発的」であるという（夏目漱石「現代日本の開化」『漱石文明論集』所収、三好行雄編、岩波文庫、1986/2005 年、26～27 頁）。

⁹⁵ ノーマンは「円と剣」との結合が幕末期に既に行われていたことを指摘している。下級武士が商人と結び付いた二つの契機を、彼は次のように記している。その一は、「町人がその経済力により養子縁組または侍株の買受けを通じて武士階級に入る権利を獲得し」たこと、その二は、経済的窮地にあった封建支配者が、収入の増加に汲々として、「資本家の生産方法を採用し、かなりの程度まで資本家的処世観の色づけをもつようになった。武士はしばしば町家に庇護を求め、維新後の日本における最初の工業組織者の仲間に加わった」こと、である。このように階級の境界線は、維新前から既に不明確になり、「階級混合」の現象が生じていたとノーマンは記している（E・H・ノーマン、前掲、『日本における近代国家の成立』、106～107 頁）。

⁹⁶ E・H・ノーマン、前掲、『日本における近代国家の成立』、114 頁。

⁹⁷ 土屋喬雄『近代日本の政商』「序」、経済往来社、1956/1968 年、8 頁。

⁹⁸ 同書、8 頁。

うに為政者が主導した経済発展の構造は、江戸時代から存在していた。

江戸時代の中期、老中の田沼意次（1719～1788）は幕政改革において、「発展してきた商品生産の成果を吸収するために、積極的に株仲間を公認し、特権的商人を通じて商品流通を統制し、運上金を上納させた。さらに、各地の特産品についても、座や会所を設けて特権商人による独占的集荷機構をつくり、幕府の専売制を実施し……特権的な前期資本と封建的為政者との相互依存関係はこの時期に決定的となり、前期的資本の流通・産業支配の強化とともに、政商の先駆的形態＝特権的御用商人の資本の蓄積基盤も確立された」⁹⁹のである。前述した尾去沢鉦山の村井はまさにその典型例であった。財政窮乏に陥った藩を救った御用商人は、強圧的かつよく管理された封建体制においても、貨幣経済を蓄積しえたのである。このように政権との結託は御用商人の特質となり、為政者側からの保護ないし干渉も慣習となっていた¹⁰⁰。

一方、官僚側は、維新後、欧米からの資本主義の圧力により、資本主義を押し進める主体が十分に形成されていない状況において、幕藩社会で資本蓄積を遂げていた特権的前期資本に注目し、それを育成しようとした¹⁰¹。例えば、大久保は「殖産興業に関する建議書」（1874年）において、「我邦人ノ気性薄弱ナルノミ其薄弱ナル者ヲ誘導督促シテ工業ニ勉励忍耐セシムルハ廟堂執政ノ担任スヘキ義務ナリ」¹⁰²と、政府主導による殖産興業方針をはっきりと打ち出している。この形態は、幕藩体制とほぼ変わらぬ上からの保護政策であった。もっとも代表的な例として、三井家は井上馨らの長州閥政治家に援護され、岩崎家は大久保利通ら薩摩閥政治家及び大隈重信らによって支援を受けたのである¹⁰³。このような歴史的経緯において、官僚と商人との結託は当時の官僚世界における習わしであったと思われる¹⁰⁴。

江藤は、このような封建社会から存続していた官僚と商人の結託にきわめて批判的であった。それが明確に現れているのは、彼の藩政改革構想である。彼はそこで、「親属故友の私挙、及び賄賂の路を厳禁すべし」¹⁰⁵と、「賄賂」の風習を一掃する決意をはっきりと示し、「諸役是れ迄、会計の吏を重じ、又其権力に憑りて、其賄賂を求むる者あり。諸職人、諸物屋等、多く賄賂を以て事をなす。曰く役人と利を分つ。此れ姦吏邪商の徒

⁹⁹ 浅田毅衛「日本型前期的資本＝政商資本と資本の蓄積基盤」、『明大商学論叢』65（3～5）、明治大学商学研究所、1983年、361～362頁。

¹⁰⁰ 例えば、三井家は、維新时期において一方で幕府の政治権力への寄生を続けながら、他方で討幕軍との新しい関係をもつという「オポチュニスト」（opportunism）的行動によって、動乱を切り抜けようとした（浅田毅衛、前掲論文、366頁）。

¹⁰¹ 中村尚美『大隈財政の研究』校倉書房、1968年、17頁。

¹⁰² 『大久保利通文書』第五、日本史籍協会、1928年、565頁。

¹⁰³ 土屋喬雄、前掲、『近代日本の政商』、10頁。

¹⁰⁴ 大蔵省時代に井上と共に活動し同時に退官した渋沢栄一は、井上と異なり、「儒教的仁愛道義の原理と合本主義および官尊民卑打破という民主主義の理想に導かれて行動した」と土屋は指摘しており、渋沢と同じ立場に立っていた人物として、福沢諭吉を挙げている（土屋喬雄、前掲書、10～11頁）。

¹⁰⁵ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、16頁。

なり。厳罰せずんばあらず」¹⁰⁶と述べている。金銭に対する禁欲という道德倫理に基づいて、彼は商人と結ぶ官吏をすべて利を貪る「姦吏」と見なしている。そして、役人と「利を分つ」「邪商」についても、先に引用したように¹⁰⁷、「市中郷村の農商」をみな「奸詐利慾を事とし」、「専ら収斂租税に心力を用る」¹⁰⁸者と見なしている。ここには武士として、農民や商人を軽蔑する階級観が露骨に現れている。したがって、彼は旧封建社会から横行している「利を貪る」官吏と「教化の薄い」商人との結託を「厳罰」にすべきである、と考えるのである。そして、この旧弊を一掃するには「監察」を設ける必要があると唱え、その「監察」とは「正法を執りて、賢愚邪正を明かにし、教化習俗を弁じて、下情を通ずる」¹⁰⁹ものであるという。「賢愚邪正」、「教化習俗」などの道德倫理を重んじると同時に、「下情を通」じて訴訟を認め、賄賂などの不正事件は「法」に基づく「監察」によって正すべきだと江藤は記している。この「法」は、従来もっぱら懲戒を目的としてきた幕藩体制時代の法ではなく、人の「教化」を含む西洋法制の理念を指していることが明らかである¹¹⁰。

明治三年（1870）、制度局に勤務していた江藤は、民法編纂会を開き、箕作麟祥（1846～1897）にフランスを中心とするヨーロッパ各国の法律を翻訳させていた。そして、司法卿時代に、お雇い外国人のフランス人ブスケ（1872 来日）に学んだことにより、法については、「並立の元は国の富強にあり。富強の元は国民の安堵にあり安堵の元は国民の位置を正すにあり。夫尚国民の位置不正れば。安堵せず。安堵せざれば其業を勤めず…婚姻、出産、死去の法厳にして。相続、贈遺の法定り。動産、不動産、賃借、売買、共同の法厳にして、私有、仮有、共有の法定り、而て聴訟始て敏正。加之国法精詳、治罪法公正にして、断獄初て明白、是を国民の位置を正すと云なり」¹¹¹と、近代的な法観念を表明している。また、ここには、近代国家として法を確立し、行政から独立させようとする江藤の強い意思が見てとれる。

したがって、前述した山県の山城屋との結託、及び井上の尾去沢鉦山事件での不正に

¹⁰⁶ 同書、19 頁。

¹⁰⁷ 前述した江藤の藩政改革の理念を参照。

¹⁰⁸ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、19 頁。

¹⁰⁹ 全文は「監察は正法を執りて、賢愚邪正を明かにし、教化習俗を弁じて、下情を通ずるにあり。然るに其職を忘れ、反て権力を以て賄賂を求め、公事を妨げ、又頗る女遊等の少疵を穿鑿して、費金を貪る者あり。此の如き者は、退懲して、監察の本職に基づかずんばあらず」（前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、19 頁）。

¹¹⁰ 西洋文明に反感をもつ西郷隆盛も、西洋刑法の理念が人を善良に導くことに注目している。『西郷南洲遺訓』には「西洋の刑法は専ら懲戒を主として苛酷を戒め、人を善良に導くに注意深し。故に囚獄中の罪人をも、如何にも緩るやかにして監誡となる可き書籍を与へ、事に因りては親族朋友の面会をも許すと聞けり。尤も聖人の刑を設けられしも、忠孝仁愛の心より鰥寡孤独を愍み、人の罪に陥るを恤ひ給ひしは深けれ共、実地手の届きたる今の西洋の如く有しにや、書籍の上には見え渡らず、実に文明ぢやと感ずる也」と記されている（山田済斎編『西郷南洲遺訓』、岩波文庫、1939/2008 年、9 頁）。

¹¹¹ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、52 頁。

対して、江藤が示した徹底的な追及精神は、武士道的¹¹²かつ儒学的禁欲の道德観と近代
的法觀念の両者が協働して作用した結果といえる。彼のこのような禁欲と輕商の考え
方は、西郷隆盛の思想と共通するところがある。『西郷南洲遺訓』¹¹³には次のように記
されている。

万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正しく、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事
に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、政令は行
はれ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、
蓄財を謀りなば、維新の功業を遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏へ
に私を営みたる姿に成り行き、天下に対し戦死者に対して面目無きぞとて、頻りに
涙を催されける¹¹⁴。

国家の草創期に、「家屋を飾り」、「衣服を文り」、また「美妾を抱へ」、さらに「蓄財を謀」
っている政府官僚の「驕奢」な生活を大いに批判する西郷は、このような「私を営」む
官僚によっては、「維新の功業」が遂げられないと考えている。また、「談国事に及びし
時、慨然として申されけるは、国の凌辱せらるゝに當りては、縦令国を以て斃るゝ共、
正道を踐み、義を尽すは政府の本務也。然るに平日金穀理財の事を議するを聞けば、如
何なる英雄豪傑かと思ゆれ共、血の出る事に臨めば、頭を一処に集め、唯目前の苟安を
謀るのみ、戦の一字を恐れ、政府の本務を墜しなば、商法支配所と申すものにて更に政
府には非ざる也」¹¹⁵と述べて、官僚と商人が結託する政府を「商法支配所」と揶揄する
西郷は、「己れを慎み」、「驕奢を戒め」、「節儉を勉め」など士大夫的「正道」を尽そうと
しない政府官僚を非難している。

西郷は官僚世界に蔓延する不正な慣習に不満をもっているが、いかに矯正するかにつ
いては具体的方策を挙げていない。それは、彼の政道の基本方針が「政の大体は、文を
興し、武を振ひ、農を励ますの三つに在り」¹¹⁶というように、いかに文、武、農を「振
興」するかという従前の封建的理念の枠内にとどまっており、近代的制度を追求しない

¹¹² 『葉隠』には『奉公人の禁物は何事にて候半哉』と尋候へば、『大酒・自慢・奢なるべし』……と述べられ、奢侈が戒められている（『三河物語 葉隠』(2-1) 日本思想大系 26、斎木一馬、岡山泰四、相良亨校注、岩波書店、1974年、273頁）。

¹¹³ 遺訓の由来については、明治三年庄内藩の藩主酒井忠篤が、菅実秀、三矢藤太郎、石川静正など数十人の藩士を薩摩に訪わせて、西郷の教えを学ばせた。帰藩後、「其聞く所を纂めて一書となし、之を同志に頒らしに起る。明治二十三年三矢藤太郎を庄内に印行し、『南洲翁遺訓』と題す、是れ遺訓印行の始か。二十九年佐賀の人片淵琢再び之を東京にて板行し、『西郷南洲先生遺訓』と題す」とある（前掲、『西郷南洲遺訓』、105頁）。

¹¹⁴ 同書、6頁。

¹¹⁵ 前掲、『西郷南洲遺訓』、11頁。

¹¹⁶ 同書、6頁。

からである¹¹⁷。彼は、「広く各国の制度を採り開明に進まんとならば、先づ我国の本体を居る風教を張り、然して後徐かに彼の長所を斟酌するものぞ」¹¹⁸と述べ、制度よりも「風教」という内面的道德倫理の営みを重視している。因みに、ここで農を重視する西郷の考え方は、大久保利通の勸業の構想にも現れている。大久保は「勸業寮定額金見込書」(1875)において「勸業ノ目的ハ専ラ物産ヲ繁殖シ貿易ヲシテ益盛大ナラシメンカ為メ勸奨ノ法ヲ設ク其部門ヲ分テ農工商ノ三課トシ農ヲ基トシ工商之ニ応シ」¹¹⁹と記し、富国強兵、殖産興業の理念において、農を本位とする考え方を表している。大久保や西郷の重農主義と江藤や大隈の重商主義はそれぞれ出身藩の異なった背景を反映していると思われる。

ところで、官商の結託に消極的な姿勢を示す西郷と対照的に、江藤は官商の結託などの不正を根絶するために積極的に近代的「法」制度の確立を目指していた。

江藤は「会計官合併及び国債に就ての意見書」(1868)において、「治国の要官は会計刑法の両官なり」¹²⁰、すなわち国家の大要は経済と法律にあると記し、西郷の東洋士大夫的性格に比して、近代官僚的な側面を示している。また、「国法会議の議案」(1870)にも、「国法の箇条未だ確定無之。是迄は時々触来る所の一事つゝ御施行有之候様相窺。左候ては此後前令後令矛盾の患ひも相見。一体各国とも政府と政府との交際は公法を以て相整へ。政府と其国民との交際は国法を以て相整へ。民と民との交際は民法を以て相整へ候次第。各国の通義の様相成居。総て国家富強盛衰の根元も、専ら、国法民法施行の厳否に管係致し候趣……」¹²¹と、「法」の果たす役割を極めて重んじている。

江藤と西郷の政治理念は基本的に異なっているが、両者の共通性は、儒学の倫理道德に基づく禁欲である。そしてまさしくこの考え方が、二人が官僚世界から離脱した重要な要素をなしていると思われる。西郷は金銭の他に、権力にも禁欲的であった。これはまた、権力に固執する大久保と対照的であった。

井上清は、西郷が「絶対主義官僚への転化」をなしえなかった理由について、次のように指摘している。

西郷は農政関係の平凡実直な下級吏員の家に生まれ、育ち、みずから青年期を郡方の下役人として薩摩の農村・農民と密着してすごし……骨のずいまで薩摩人である彼は、いよいよ薩摩の藩士大衆と一体不可分のものとなった。その一体感は戊辰の

¹¹⁷ 井上清は、「西郷の『政の大体』は、体制そのものは問わず、したがって既存の体制を前提として、興すとか、振うとか、励ますとかいうだけである。ことに『農』を興すことだけをいって、商工業をいわないのは、彼の限界のせまさを端的に示している」と、西郷の限界を指摘している（井上清、前掲、『西郷隆盛』下、144頁）。

¹¹⁸ 前掲、『西郷南洲遺訓』、7頁。

¹¹⁹ 『大久保利通文書』第六、日本史籍協会、1928年、314頁。

¹²⁰ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、11頁。

¹²¹ 同書、31～32頁。

戦争で生死をともにしたことによって、ますます強まった。さらに天皇政権草創の激動の二年半ほどを、薩摩武士団の首領として日本の最後進地域に蟠踞したことは、彼をして**社会経済上のブルジョア的改革**にいよいよ無理解ならしめた。ことにその**改革は商業資本と政府官僚との結びつきを必然にし、西郷のもっとも憎む「官吏の驕奢」**をうみだしたことが、彼のブルジョア的経済改革を正当に評価することを妨げた¹²²。
(太字強調は筆者)

西郷の「官吏の驕奢」への反感は、政府主導の経済改革を妨げる要因となったため、絶対主義官僚への転進は不可能だった、と井上は指摘している。前述したように、日本が封建社会からめざましい速度で近代工業社会に移行しえたのは、政府主導によったからである。この過程において、官僚と商人との結託は避けがたい現実であった。それを理解できなかった西郷は、官僚世界から離脱せざるをえなかったのである。一方、西郷と同様に下級武士出身の江藤は、藩士時代に、佐賀藩の「代品方」を務め、貿易商業業務に携わった経験があり、また維新後、江戸の会計官判事に命じられ、新政府の財政改革にも参与した¹²³。にもかかわらず、彼は西郷と同様に、官商の結託を理解できず、また妥協もできず、「法」制度によってそれを徹底的に矯正すべきであると考えていた。

江藤のこの是非を厳しく分別する性格とは対照的に、同藩の大隈は典型的な官僚の姿を示している。上士の家柄の出身である彼は、江藤と同様に「代品方」を務め、さらに長崎まで派遣された。彼は藩士時代に英学普及の費用を捻出するために、商人と結んだことがあった。幕末に、英学の普及を急務と考えた彼は同志たちと、「長崎に設立したる致遠館てふ英学校の規模を拡張し、佐賀藩の子弟は勿論、他藩の有志をも集めて相共に同窓の交誼を分ち、将来同一の方針に依りて改革の衝に当らんと欲した」。しかし、「数々藩庁に請願する所ありしも、藩吏等は是にも反対の意見を懷きたるを以て、肯て之れに応」じなかった¹²⁴。資金を集めるため、「種々の手段方法を講究したる中に、長崎へは諸藩より有志者、商人等多く出入するを以て、是等の人々を叩きて以て図る所あらんと存立せり……一般の士人は商売を賤み、金銭を賤しむこと甚たしく、商人と膝を接して事を談する事などは夢にたも思想せさりしなり……商人の間に交を容るゝ温かなるに従ひ、漸く商人の気質を知るを得たり」¹²⁵という。藩士時代の経験から、商人との結びつきを排斥せず、かえって利用することを考えた大隈は、維新後、容易に官僚世界に進出することができたのである。

¹²² 井上清、前掲、『西郷隆盛』（下）、147～148頁。

¹²³ 星原大輔「江藤新平と明治初期財政—明治草創期の国家形成に関する基礎的研究—」（早稲田大学大学院社会科学部研究科博士学位論文、2009年）を参照。

¹²⁴ 大隈重信（述）『大隈伯昔日譚』一、日本史籍協会編、東京大学出版会、1953/1980年、85頁。

¹²⁵ 同書、85～86頁。

第四節 佐賀の乱

明治二年の藩政改革においては、江藤は自身の理念を持っていたとしても、基本的に中央政府の方針に従って、中央集権国家の確立に尽力した。しかしながら、経済改革の実施過程において必然的に生じた官商の結託に対して、江藤は理解も妥協もできなかった。この反時代的性格により、彼は政府主流と同調できず、容易に官僚となることができなかったのである。この性格は、江藤のみならず、西郷にも同様に現れており、萩の乱を起こした前原にも共通していた。

前述したように、新政府成立後まもない段階で、江藤はすでに政府主流派と同調できなくなっていたので、明治六年に行われた征韓論争は政府に反発する引き金となったにすぎないだろう。征韓論における海外征討は、幕末から一貫する彼の信念であり、維新後にも、例えば「対外策」（1871）において、「支那は其人民百分の二は儒及耶蘇天主等の宗門を奉すと雖も、其他は仏法を奉す。我人民と宗門相同し、故に自今仏法弘めの為め、或は修行等に僧徒を遣し置き、他日民心を安んじ、或は間者を遣す等、軍略を施すの種とすべし」¹²⁶と、宗教を利用して中国を侵略することも考えている。

明治七年（1874）に起きた佐賀の乱は、いわゆる武士特権の回復を要求する憂国党（1874年1月に結成）、及び征韓即行を唱える征韓党（1873年12月に結成）、二党合同の決起であった。征韓という共通目標をもっていたため、江藤は征韓党の首領になったのである。また、憂国党は、基本的に政府の政策の批判や封建制度への回帰を求める組織であり、首領の島義勇（1822～1874）はかつて北海道開拓使を務め、秋田県権令（知事）に就任した政府官僚であった。

佐賀の乱の前日に公にされた檄文、「決戦之議」¹²⁷において、江藤は「夫、国権行はるれば、則、民権従て全し。之を以て交戦講和の事を定め、通商航海の約を立つ一日も権利を失へば、国、其国に非ず」と、国権の拡張を唱えている。そして、政府の偷安により、「国権を失」うことが「有志の士の以て切齒扼腕する所」であり、そのため、「上は聖上の為め、下は億兆の為め敢て万死を顧みず、誓て此の大辱を雪がんと欲す」と、反乱を起す理由を述べている。そして末尾の文章、「我輩の一念、遂に此雲霧を披き、以て錦旗を奉じ、朝鮮の無礼を問んとす。是誠に区々の微衷、死を以て国に報ゆる所以なり」には、死をもつての報国という幕末の志士的精神が明確に甦っている。

檄文の冒頭では「国権行はるれば、則、民権従て全し」と記され、「国権」論を中心とする主旨が提示されているが、その後の、下は「億兆の為め」という主張は、必ずしも民衆の立場にたつものではなかった。佐賀の藩政改革について分析したように、江藤は基本的に他の政府官僚と同じく中央集権を目指していたが、司法制度の確立に尽力する

¹²⁶ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、46頁。

¹²⁷ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、67～68頁。

際に、「富強の元は国民の安堵にあり安堵の元は国民の位置を正すにあり」¹²⁸と高唱し、一見国民の立場にたつ民権論のようでありながら、その真意は司法裁判権の中央統括によって地方官を統制することであり¹²⁹、民権を擁護するものではなかった。このように江藤が民衆の立場に立っていないことは、彼の徴兵論にも明らかであり、農商の蔑視は彼の心底に武士意識が残存していることの証であった。したがって、彼は「建白の世」の近代国民国家を作り上げようとする明治政府の路線と最終的に無縁だったのである。

むすびに

本論は中央政府の官僚に転進した幕末の志士たちの一部が、近代国家成立の過程において、なぜ結局官僚世界から離脱したのかという問題について、江藤新平をその一例として考察した。

明治政府成立の初期段階においては、不平等条約の解消という対外問題、及び中央集権、西洋並みの文明国家の建設という対内課題が、中央政府官僚たちの共通目標であった。大久保利通、木戸孝允など、志士から政府官僚に転身した人々はみな、いかなる方向でこの目標を成し遂げるかを模索していた。それぞれの志や理念を抱く官僚たちは、相互に妥協したり摩擦を起こしたりしながら、大隈のようにうまく官僚化した人も、また江藤新平や西郷隆盛のように官僚世界から離脱した人もいた。

江藤が最終的に官僚世界から離脱した要因の一つは、金銭に対する禁欲という強固たる儒学的道德倫理観に求められる。この反時代的性格は、近代的経済改革の初期的過程を遂行する妨げとなった。江藤のこのような禁欲精神は、西郷隆盛にも共通している。大隈重信や大久保利通のような官僚たちがこの精神を持っていなかったわけでは決していないが、彼らは、経済改革を行う過程において、商人との結び付きにより「利」が生じることを必然と理解しており、真っ向から排斥することはなかったのである。

このように東洋士大夫的禁欲という堅固な道德観、そして武士固有の金銭蔑視観が、江藤や西郷の考え方に深く根付いていたため、それが結局、彼らを最終的に官僚世界から離脱させる要因となったといえるだろう。

¹²⁸ 前掲、『南白江藤新平遺稿後集』、52頁。

¹²⁹ 大庭裕介「江藤新平の政治行動」『国史館史学』13号、国史館史学会、56～79頁。

【表】江藤新平の官職一覧表

慶応 4 年	明治元年	明治 2 年	明治 3 年	明治 4 年	明治 5 年	明治 6 年
関東監察使 (4)						
鎮台府判事 (6)	会計官判事/東京府判 (10-5/23)					
		太政官中弁 (11/7-7/14)				
				文部大輔 (7/18-8/4)		
				制度取調御用 (7/2-8/12)		
				左院副議長 (8/10-4/25)		
					教部省御用 (3/14-5/24)	
					司法卿 (4/25-4/19)	
						参議 (4/19-10/25)

(この表は、星原大輔『江藤新平と明治初期財政—明治草創期の国家形成に関する基礎的研究』(早稲田大学大学院社会科学部研究科博士学位論文) 4 頁の官職一覧の元に作成したものである。)

終章

本論文は、中国（儒学）から受容し、江戸時代の武家社会で忠誠精神を代表する概念として形成された「諫言」が、政局が不安定になった幕末期において、下級武士たちによっていかに受け継がれ実行に移されたのか、また、その過程でいかなる概念に変容していったのかを考察した。また、幕末の志士から明治の官僚に転身したものたちの一部が近代社会に進む過程において、なぜ離脱していったかについても明らかにした。

中国（儒学）における諫言は諷諫、降諫、忠諫など、その作法が多様化しているのに対し、江戸時代における諫言には「忠誠」というイメージが強かった。戦乱がなくなった江戸時代において、武士が主君に忠誠を尽くす場は戦場から「畳の上」に移り変わった。従来主君に忠誠を尽くすことの中でもっとも代表的な殉死は、江戸時代に至って「不義」と見なされ、幕府に禁止された。主君のために命を捨てることができなくなった江戸時代において、主従関係は戦国時代にみられた殉死のような情念的な契りから、「禄」による繋がりへと変化した。また、殉死の禁止自体は、今までの主従の人格的關係を否定しており、家臣は主君という人格に忠誠を尽くすのではなく、今後は「御家」つまり非人格的な藩に奉仕することが武士の職分とされた。しかし、『葉隠』（1716）に示されているように、江戸前期の武家社会においてはまだ、戦国の合戦時代と同様の全身命を主君に捧げるような情念的な感情が残っていた。『葉隠』の口述者たる山本常朝や赤穂義士の堀部武庸はその典型的な例である。このような主君に対する情念は、幕藩体制においてはけっして認められておらず、むしろ幕府にとって危険な要素とみなされていた【第一章】。

江戸時代において、「御家」に忠誠を尽くすという考え方は、幕府が導入した観念である。江戸幕府は、各大名（藩主）の領地が幕府からの「預かり」ものであり、藩主がよく政理を行わずに「御家騒動」に至れば、幕府は随時御家を改易し、領土を没収する権利をもっている、という観念を浸透させた。この考え方は、単に幕府側からの一方的なものではなく、大名側にも見られ、また、当時の儒学者も同様な認識をもっていた【第一章第三節】。したがって、御家の安泰を維持することが大名（藩主）や武士（家臣）にとっては第一義の課題となった。そこで、「諫言」が「畳の上の御奉公」として注目され、忠誠の証となったのである。当時の藩主の治国（藩）理念を反映した家訓書には、諫言がしばしば言及されている。例えば磐城平藩三代藩主の内藤義概（別義泰、1619～1685）は、「諫めに従ってこそ聖となる」という儒学的な諫言概念を持ちながら、藩主としては家臣からの「忠諫」をよく受け入れるべきであると唱えている【第四章第二節】。

このように、諫言を忠誠と結び付ける考え方は藩主のみならず、武士（家臣）たちも諫言を「畳の上の御奉公」として、主君に対する忠誠とみなした。『葉隠』には「奉公の至極の忠節は、主に諫言して、国家治むる事也」と記されているように、忠誠の至極は

主君に諫言して国家（藩）を治めることである。「一番乗」や「一番鎗」のような戦場で果たす忠誠は戦場での一時的な仕事であるのに対して、主君の「御心入を直」し、「御国家を固め」という暈の上の御奉公は、奉公人の「一生骨を折」るべき仕事である。泰平の世になった江戸時代において、暈の上の御奉公は戦場で「命を捨てる」忠誠と明らかに異質なものになっていた。しかし、厳然たる身分秩序が支配する体制下では、諫言は家老などの一部の上層武士しかできなかった。江戸時代において、藩体制は基本的に藩主が家老を筆頭とする家臣団を統率するのではなく、藩主が家老と共に藩を統御することが一般的であった。「参勤交代」の制度が制定されてからは、藩主が一年ごとに藩と江戸を往復するため、留守の間に国元の政務を家老たちに預けることが慣例であった。幕藩体制においては、武士の身分は農、工、商の上に位置づけられていたが、実際藩政に参加することができるものは、家老などの一部の上級武士のみであった。したがって、主君に諫言することも、上級武士層や主君の側近者など一部のものしかできなかったのである。諫言の実行が身分の高い上級武士層に限られていたことは、中国的（儒学的）諫言と大きく異なっていたが、当時の武家社会では一般的に受け入れられており、『葉隠』が述べているように「其位に至らずして諫言するは、却て不忠」と、認識されていた【第一章・第四章第二節】。

『葉隠』や赤穂事件の分析を通して、武士の心底には主君に対する情念と御家に対する理性的な忠誠精神が共存していることが明らかになった。しかし、時代の推移につれて、御家に忠誠を尽くし、「御家の安泰」を維持することが武士の行動目標となったのである【第一章第三節】。

しかし、ペリーの来航後、政局が不安定になった幕末においては、志士としての下級武士たちの間に、丸山真男が指摘する武士のダイナミズム、「御家のために奮闘するダイナミックな忠誠」が現れるようになった。従来は武士が職分に従って行動することこそが暈の上の御奉公であり、それは丸山のいう「静態的な忠誠」であった。幕府は幕藩体制における身分秩序を整えるために儒学を補佐として採用し、武士たちに「文武兼備」を求めた。しかし、「文」、つまり学問を学んだ武士たちは、儒学における修身、齐家、治国、平天下という理念を実践に移す場をもたず、学問はあくまでも身を修めるだけにとどまらざるをえなかった。ところが、幕末になると、儒学の素養を身に付けた志士としての下級武士たちは、支配層の一員であるという自覚に立って、御家（藩）と主君（藩主）のために、分限を越えて積極的に藩主や藩府に政事に関する諫言書を提出し、あるいは諫言して、従来認められていなかった行動を起こすようになった。この諫言行為、及び諫言精神は、武士のダイナミックな行動のもっとも代表的なものである【第三章】。

ところで、志士たる武士の諫言と、中国の士大夫の諫言の作法とのもっとも大きな違いは、例えば、中国の士大夫が一般的に行っていた「三度諫めて身退く」という儒学的な仕法との比較によって明らかになる。この仕法は、江戸時代において「臣として君を

諫むべきことあらば、幾度も諫むべし」と修正された。日本と中国の政治体制が異なるため、忠誠の拠って立つ基盤も修正されたのである。幕藩体制は基本的に上から下への「御恩」を基軸に構成されている。中世においては、「奉公」と「家」の利益、いわゆる「家業」は必ずしも直結していなかったため、「奉公」の提供者は「奉公」の相手の選択、態様、程度などに対する自立性が高かった。ところが、江戸時代になると、武士が君臣関係を破棄することは、すなわち生計の手段を失うことを意味した。武士の生計上の自立性がなくなった江戸時代においては、父や子が君に仕えて禄を得ていたため、禄すなわち君恩によって初めて孝が可能になるという考え方が定着していった。つまり、禄という媒介物により、君・臣は切り離せない関係となったのである。したがって、中国では、「父子天合」といって父子関係は天性のものと考えられるのに対し、君臣関係は「君臣義合」というように後天的に結ばれた関係である。そのため、忠より孝が優先されるのである。これに対して、日本では、君と父が一体化しており、主君に忠誠を尽くすことはすなわち親への孝でもある。このような君恩を絶対的なものとする考え方は、吉田松陰の儒学における忠臣に対する評価に明確に現われている。幕藩体制においては忠孝が一体化しており、したがって人臣たる者は「君恩」ゆえに、君臣の主従関係を全うして、「君に事へて遇はざる時は諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり」と、「死ぬ」覚悟をもつべきなのである【第二章第一節】。

君臣関係を絶対的なものとする松陰は、中国の汨羅江に身を投げて世を去った屈原や夷敵に対抗して処刑された文天祥、及び二朝に仕えることを拒んだ陶淵明や劉因のような処士をとりわけ評価している。彼は中国忠臣たちの誠志を重んじる精神に強く惹かれ、心の底から共感したが、とりわけ汨羅に身を投げた屈原への関心は極立っていた【第二章第二節】。

間部要撃計画に際して、久坂玄瑞を含めた大半の弟子たちに反対された松陰は、自らの志をよく理解する弟子たちが周旋しない無力感を「世間は皆濁っているのに私ばかりが澄んでいた、人々は皆酔っているのに私ばかりが醒めていた」という屈原の孤独的な心境に擬えた。松陰は、屈原が主君に何度も諫言して、最後に死を選択したことを「狂顛」と見なした。彼のこうした見解には、中国に見られる屈原への評価とは大いに異なるものがある。例えば、司馬遷（前145頃～前86頃）は、屈原の節操を高く評価した。この評価は後世、例えば王逸（114～120）にも引き継がれている。しかしながら、屈原を「露才揚己」と批判する班固（32～92）のような人もいた。班固は屈原が入水したのは「忿」のためであると考え、「忿」のために江に身を投じるべきではなく、詩経・大雅に説かれているように「既明且哲、以保其身」すべきであると主張している。他方、宋の朱熹（1130～1200）も、屈原の行為は儒学が唱える「中庸」の道に合致していないが、彼の誠心は評価するに値すると考えている。司馬遷を含め、屈原の自死に対する中国文人の観点はそれぞれ異なっているが、彼の忠君愛国の精神及び文才に対する評価は一致

していた。それは彼らがともに「士大夫」の立場から、士としての屈原の節義に注目していたからだと思われる。松陰はむしろ屈原の節義を賞賛する立場にあり、さらにその心象世界にも共感しているが、屈原の行為を「狂顛」と見なす点は、中国に見られる屈原への評価とは大いに異なっている【第二章第三節】。

松陰のいう「狂」は、基本的に孔子と孟子の示した「志が大きい」という意味を踏まえ、さらに展開されている。彼は「道を興す」ためには「狂者」に期待せざるをえないと力説する。それは「氣力雄健」なる「狂者」は、儒学が唱える道から外れ、「礼法を乱り政教を害する」行動力をもっているからである。世俗を顧慮せず、常軌を逸する勇氣、行動力があるからこそ、再び真の「道を興す」ことができると彼は考える。孔子と孟子は狂者より中庸の士を重視するのに対して、松陰は狂者がもつ行動性に注目するため、狂者のほうを評価するのである。彼が自分自身の行為を初めて「狂」として自覚したのは、安政五年（1858）に「狂夫の言」と題して、藩政批判を含め、言路洞開や身分を度外視した人材登用など、時勢に対する意見を記した文書においてであった。また、弟子入江杉蔵への書簡においても、彼は自らの行動を「狂」と認識し、自ら「狂人」と称していた。彼のいう「狂」は自身の志を意味する他に、死の覚悟を前提とする武士的倫理とも緊密に関わっている。

『葉隠』の中にも「大業」を全うするには、「死狂い」精神が必要であると記されている。ここにおける「死狂い」は、儒学的な「志」を含んでおり、さらに、「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」という「死の覚悟」(=「狂」)も不可欠であった。「死狂い」とはすなわち「暈の上の御奉公」の精神を表すものであり、泰平の世における「狂」であった。これに対して、幕藩体制が崩壊に瀕した幕末動乱期の松陰にとっては、理想を実現するための行為は全て制度から逸脱したものとならざるをえなかった。彼の「狂」には、『葉隠』が理念化した武士道精神を再度活動へと移し換え、それを儒学的思惟と結合させる意思が込められていたと考えられる【第二章第三節】。

このような「死狂い」的精神は、基本的に松陰の諫言精神でもあった。一方、主君に何度も諫言して、受け入れられなかったため自死の道を選んだ屈原は、「存在への『忠』と当為への『誠』に引き裂かれ」たため、彼が最終的に殉じたのは自らの諫臣としての良心に対してであり、制度そのものではなかった。つまり、正すという改善、修正の意味合いをもつ「諫言」は、制度への批判ではなく、むしろ諫言を通して制度はより強化されるのである。これが中国の政体における諫言の機能であった。ところが、幕末における、松陰のような下層武士層有志の諫言は、制度内部の改革を行うのではなく、むしろ制度を無視し、さらに既成の階級の枠を打ち壊して、変革を行うことを目指した。儒学から受容した諫言の概念は、幕末の武家社会で革新的な「死狂い」的諫死精神として展開されることになったのである【第二章】。

この「死狂い」的諫言精神は、松陰の弟子たる久坂玄瑞、及び佐賀藩の江藤新平の行

動にも表れている。江藤も久坂も微禄の家柄の出自であり、従来から政事参与が許されない身分であった。しかし、幕末においては、彼らと同じような「志」をもつ下級武士層が、分を越えて積極的に、政事に関する諫言書を藩主や藩府に提出し、諫言を行った。ペリーの来航後、久坂も江藤も攘夷論を主張していたが、江藤はその後、もし外国と戦争が起これば、日本の軍備はまったく勝つ余地がなく、当時の段階では攘夷が不可能だと認識し、通商に賛成する立場に転じた。攘夷論を唱える久坂と開国通商論を唱える江藤は、それぞれ異なった理念をもっていたが、二人とも海外侵略への強い関心を示している。また、下級武士層の二人に共通するところは、「言路洞開」や「人材登用」を藩府や藩主に積極的に要請したその行動力であったといえるだろう【第三章】。

江戸時代の幕藩体制は、基本的に幕府と老中ら、藩主と家老らとの「合議」によるものであった。それゆえ君臣関係を絶対視する幕末の志士、下級武士たちは、政権の主導が幕府と藩府の要路者に独占され、家老たち要路者は主君の目を塞ぐ奸人であるとみなして、「言路洞開」や「人材登用」を求めたのである。

例えば、吉田松陰は藩の要路者を通して藩主に提出した「将及私言」において、幕藩体制における身分秩序固定の弊害を問題視し、中国皇帝の「聴政」を範例として、群臣の上書を求めている。封建体制における身分秩序の固定を「言路閉塞」の問題とする視点は、松陰の他に、幕臣の勝海舟も同様であった。嘉永六年（1853）に幕府が意見を諮問した際に、当時まだ「小譜請」という低い身分であった勝海舟も幕臣として上書している。その中で、彼は「泰平の通弊」たる「尊卑隔絶」、つまり封建体制における身分秩序の問題を取り上げている。このように当時志士たちが要請した言路洞開は、身分秩序の解体を前提とする「人材登用」を含め、主君と群臣による「衆議帰一」の体制である。つまり勝もまた、従来の要路者たちの「合議」による藩体制を否定すると同時に、彼らを言路洞開の阻害要因と見なしたのである。

ここで松陰が主張する「言路洞開」を含めた諫言論には、従来から武家社会に行われてきた諫言の形式に生じた変化がよく現われている。元来、武士の忠誠エートスと緊密に結びついた諫言は、『葉隠』にも「我忠節にて主君の悪名を顕し申に付、大不忠」とあり、「忠義の諫言と申は、能御請被成筋を以、潜に申上るもの也」とされるように、主君の名を守るという忠誠のために、「潜」かに、つまり非公開的、秘密裡に行うことが求められた。しかしながら、松陰は秘密に議論する弊害を指摘し、武家社会における従来の諫言は言路「壅蔽」の病根であると批判した。幕府、藩府には江戸後期から「諮問」という「意見」聴取があり、幕臣、藩士が積極的に意見を上申し、言路洞開を求める趨勢もあった。これが、幕末における「諫言」の内実の大きな変化に繋がったのである【第四章第三節】。

「諫言」の変化は、諫言という語彙の使用状況からもうかがえる。松陰を含め、久坂玄瑞や勝海舟の「言路洞開」要請の文面においては、「諫言」という漢語以外に、これと

類似する意味合いで「建言」/「建白」という漢語がしばしば現れている。元来、「諫言」の原義は「建言」/「建白」と異なっているが、この三つの用語は全て主君や上役に対して意見を申し立てること、すなわち「言路」を意味している【第四章第一節】。この意味合いで、松陰の文稿には「諫言」の他に、「建言」という表現も見られ、また、勝海舟の幕末における上書の題目にも「建言」/「建白」が用いられる傾向があった。

諸士横議が盛んに行われた幕末において、多くの下級武士層は松陰のように、言路洞開の要請を通して現在の政体を批判し、諫言精神を以て変革しようとしていた。彼らの言路洞開の訴求は、すなわち藩府の要路者「合議」による政体への批判であった。しかし、長い間漢学を中心に学んできた彼らが新たに構想した政治体制は、やはり儒学思想に拘束される傾向がしばしば見られる。松陰を含めて、久坂玄瑞（1840～1864）が文久二年（1862）に学習院に提出した天皇を中心とする王政復古の政体構想も、いわゆる儒学的理念の上に立つ考え方である。漢学が彼らの思惟方法に浸潤していたため、彼らは変革精神を持っていても、結局漢学の枠組みから抜け出すことができなかったのである。

一方、幕末においては、今まで思想的ベースとされてきた儒学のほかに、新知識としての洋学が導入され、蕃書調所（1856）の設立をはじめ、洋学研究ならびに教育機関が全国諸藩に設けられた。従来蘭学研究は主に医者が担ったが、あらたに武士階級の出身者が担い手として登場した。当時蕃書調所の教授手伝の一人であった加藤弘之（1836～1916）は、欧米の立憲思想を日本に紹介したいと考え、「最新論」（1861）を著した。彼は幕府の忌諱に触れることを顧慮して中国清朝の場を借りて日本の政体を暗示した。「最新論」において、加藤は西洋の政体を「君王握権」、「上下分権」、「豪族専権」、「万民同権」と四つに分けて紹介し、なかでも「上下分権」の政体を取りわけ推奨した。それは、幕府の存在を前提として、上の朝廷を倒さずに、下の一般の民が政治に参加することができる政体である。また、この「上下分権」の政体には「公会」という議会があるから、奸臣の政権強奪や人君の独裁政権を防止することができ、国家の安泰を維持することができる。彼はさらに「公会」について詳しく紹介し、「公会」が果たした「下意上達」の機能を重要視している。また、公会に入らない者も、全民が「建白」、「上梓」を通して自分の考えるところを天下万民に「報告」することができる言論自由の体制、及び政治の公開性を紹介した。加藤がここに記した「建白」の内実は、西洋の四民平等の理念を含んでおり、松陰が用いた語彙と明らかに異なっている。加藤が西洋政体を学び、自国の政体を検討して示した考え方は、儒学思想をベースとするものと明らかに異なっており、新たな可能性の現れである。彼が考えた幕藩体制に適合する「上下分権」は、全民が政治に参加することができる体制であり、「言路洞開」の対象は天下万民にまで拡大されている。これは自由平等を前提とする西洋政体の基本的立場を受容するものであった【第四章第四節】。

維新後、明治新政府は、「貴賤」にかかわらず「言路の道」を「洞開」する政策を打ち

出し、建白書受付の機関として待詔局が創設された。建白書受付制度が成立したことにより、「諫言」に代わって「建言」/「建白」が圧倒的に多く用いられるようになった。大隈重信は明治時代を「建白の世」と称していた。つまり、士農工商という身分秩序の固定に基づく「諫言」の政体概念が封建的性格を帯びているのに対して、「建白」には「四民平等」という西洋の自由平等の理念が含まれていた【第四章第五節】。

「諫言」の終焉段階を示すものとして、明治初期に起きた不平士族による反乱が挙げられる。佐賀の乱を起こした江藤新平は、幕末に志士として活躍し、維新後は中央政府の官僚に転身した一人であった。彼が最終的には官僚世界から離脱した要因の一つは、金銭に禁欲という強固たる道德倫理観に求められる。

江藤は徴兵の構想においても、明治二年に佐賀藩で行った藩政改革においても、基本的に中央政府の方針と軌を一にしており、官僚的な側面を有していた。しかしながら、維新後、欧米からの資本主義の圧力に脅かされ、資本主義に対応する主体が十分に形成されていない状況において、新政府は、すでに幕藩社会で資本蓄積を遂げていた特権的前期資本に注目し、それを育成しようとした。この形態は、幕藩体制とほぼ変わらぬ上からの保護政策であった。そのもっとも代表的な例として、三井家は井上馨らの長州閥政治家に援護せられ、岩崎家は久保利通ら薩摩閥政治家及び大隈重信らによって支援を受けたのである。このような歴史的経緯において、官僚と商人との結託は当時の官僚世界における避けがたい慣習となっていた。江藤は、このような封建社会から存続していた官僚と商人の結託にきわめて批判的であった。旧封建社会から横行している「利を貪る」官吏と「教化の薄い」商人との結託を「厳罰」に処すべきであると、彼は考えたのである。江藤のこのような禁欲観は、西郷隆盛にも共有している。このような倫理観を大隈重信や久保利通のような官僚たちが持っていなかったわけでは決してないが、彼らは、経済改革を行う過程において、商人と結び付いて「利」が生じることを必然的と見なしており、排斥することはしなかった。一方、職禄以外の利益を禁ずるべきだと考える江藤や西郷は、この性格ゆえに近代的経済改革の過程において妨げとなった。東洋士大夫的な禁欲という強固たる道德観、そして武士固有の金銭蔑視による禁欲的ひいては反動的性格が、深く彼らの考え方に根付いていたため、それが最終的に彼らを官僚世界から離脱させる要因となったといえるだろう【第五章】。

本論文は、下級武士の忠誠観を通して、江戸時代の武家社会における「諫言」が幕末期に起きた内実的变化について考察を行った。従来の江戸時代に限定した断片的「諫言」像は、幕末期を中心とした本研究を加えることによって、その輪郭をはっきりさせることができたと思われる。また、維新时期になって、これまで封建的身分階級と結びついていた「諫言」は、万民に開かれた「建言」/「建白」へと切り替わった。第四章ではこの用語の変化は、日本が近代社会へ踏み出した第一歩を示唆することを明らかにした。この指摘は明治維新イデオロギー史の一側面に新たな光を当てたと考えられる。しかし、

諫言から建言・建白に転換したプロセスを、本論文では十分に踏み込んで論じることができなかったのも、諫言の終焉に関する分析がやや薄弱である。

今後の課題としては、この論文の延長線上にある「建言」/「建白」の、近代社会における時代的意義を考察していきたい。また、維新の志士たちの武士的精神・倫理観が、近代化をめざす「建白の世」において、どのような問題に直面したのか、とりわけ文・武の特権階級であった武士がその特権を剥奪されていくその転換と葛藤のプロセスを、近代的兵制確立のプロセスとからめて、今後も続けて追究していきたい。

注記

1. 引用文は原則として本論文で使用したテキストに準じているが、漢字に関しては旧字体を全て新字体に改めた。
2. 本論で記した漢数字またはローマ数字の年・月は、全て旧暦に統一した。

1. 一次史料

- 『赤穂義人纂書』第一、早川純三郎編、日進舎、1910 年
- 『大石家義士文書』大石神社編、佐佐木杜太郎校注、新人物往来社、1982 年
- 『荻生徂徠全書』第 6 卷、今中寛司・奈良本辰也編、河出書房新社、1973 年
- 『勝海舟全集』第 11 卷、勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編、勁草書房、1975 年
- 『勝海舟全集』第 14 卷、勝部真長、松本三之介、大口勇次郎編、勁草書房、1974 年
- 『加藤弘之文書』第一卷、同朋舎、1990 年
- 『管子』下、新釈漢文大系 52、遠藤哲夫著、明治書院、1992 年
- 『近世政道論』日本思想大系 38、奈良本辰也校注、岩波書店、1976 年
- 『近世武家思想』日本思想大系 27、石井紫郎校注、岩波書店、1974 年
- 『久坂玄圃全集』福本義亮編、マツノ書店、1978 年
- 『軍隊 兵士』日本近代思想大系 4、由井正臣、藤原彰、吉田裕校注、岩波書店、1989 年
- 『憲法構想』日本近代思想大系 9、江村栄一校注、岩波書店、1989 年
- 『憲法類纂』第 3、明法寮編、1873 年
- 『孔子家語』新釈漢文大系 53、宇野精一著、明治書院、1996 年
- 『国学運動の思想』日本思想大系 51、芳賀登、松本三之介校注、岩波書店、1971 年
- 『佐賀県近世史料』第八編第一卷、佐賀県立図書館、2005 年
- 『佐賀県近世史料』第八編第三卷、佐賀県立図書館、2007 年
- 『史記』八列伝一、新釈漢文大系第 88 卷、水沢利忠著、明治書院、1990 年
- 『史記』九列伝二、新釈漢文大系第 89 卷、水沢利忠著、明治書院、1993 年
- 『詩経・楚辞』中国古典文学大系 15、目加田誠訳、平凡社、1969/1977 年
- 『七書全・鬼谷子全』塚本哲三編、有朋堂、1928 年
- 『四部叢刊正編』第 30 冊、王雲五主編、台北：台湾商務印書館印行、1979 年
- 『荀子』新釈漢文大系第 5 卷、藤井専英著、明治書院、1966 年
- 『春秋左氏伝二』新釈漢文大系第 31 卷、鎌田正著、明治書院、1974 年
- 『貞観政要』上、新釈漢文大系第 95 卷、原田種成著、明治書院、1978 年
- 『新訂増補国史大系』43 卷、黒板勝美編、吉川弘文館、1999 年
- 『水滸伝』（中）中国古典文学大系第 29 卷、駒田信二訳、平凡社、1968 年
- 『水滸伝』（下）中国古典文学大系第 30 卷、駒田信二訳、平凡社、1968 年
- 『説苑』塚本哲三編、有朋堂、1928 年
- 『叢書集成続編』第 119 冊、王徳毅主編、台北：新文豊出版、1989 年
- 『続日本儒林叢書』第 2 冊、関儀一郎編、東洋図書刊行会、1931 年
- 『大日本古文書』幕末外国関係文書之一、東京大学資料編纂所、東京大学出版会、1910/1972 年
- 『天皇と華族』日本近代思想大系 2、遠山茂樹校注、岩波書店、1988 年
- 『伝習録』新釈漢文大系第 13 卷、近藤康信著、明治書院、1961 年

『徳川禁令考』前集第一、法制史学会編、創文社、1959年
『南紀徳川史』第1冊、堀内信編、清文堂、1930年
『南紀徳川史』第5冊、堀内信編、清文堂、1931年
『日本書紀』下、日本古典文学大系68、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注、岩波書店、1966年
『南白江藤新平遺稿後集』吉川半七、1900年
『法令全書 慶応三年』内閣官報局、1887年
『法令全書 明治五年』内閣官報局、1889年
『三河物語 葉隠』日本思想大系26、斎木一馬、岡山泰四、相良亨校注、岩波書店、1974年
『水戸学』日本思想大系53、今井宇三郎校注、岩波書店、1973年/1974年
『明治建白書集成』第二卷、内田修道、牧原憲夫編、筑摩書房、1990年
『明治文化全集』第一卷憲政篇、明治文化研究会、日本評論新社、1955年
『孟子』新釈漢文大系第4巻、内野熊一郎著、明治書院、1962/1967年
『毛詩』漢文大系第12巻、星野恆、服部宇之吉校訂、富山房、1911/1975年
『山鹿素行』日本思想大系32、田原嗣雄、守本順一郎校注、岩波書店、1970年
『吉田松陰全集』第2巻、山口県教育会編、大和書房、1973年
『吉田松陰全集』第3巻、山口県教育会編、大和書房、1972年
『吉田松陰全集』第5巻、山口県教育会編、大和書房、1973年
『吉田松陰全集』第6巻、山口県教育会編、大和書房、1973年
『吉田松陰全集』第7巻、山口県教育会編、大和書房、1972年
『吉田松陰全集』第8巻、山口県教育会編、大和書房、1972年
『吉田松陰全集』別巻、山口県教育会編、大和書房、1974年
『礼記』上、新釈漢文大系第27巻、竹内照夫著、明治書院、1971/1972年
『論語』金谷治訳注、岩波文庫、1963年/2008年

2. 回想録・伝記

『江藤南白』上、の野半介著、原書房、1968年
『江藤南白』下、の野半介著、原書房、1968年
大隈重信（述）『大隈伯昔日譚』一、円城寺清編、東京大学出版会、1895年
大隈重信（述）『大隈伯昔日譚』二、円城寺清編、東京大学出版会、1895/1981年
『大隈侯八十五年史』第一巻、大隈侯八十五年史会編、原書房、1970年
『公爵山県有朋伝』中巻、徳富蘇峰編述、原書房、1969年
『世外井上公伝』第二巻、井上馨侯伝記編纂会、原書房、1968年
『鍋島直正公伝』第六編、中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年
福地源一郎『幕府衰亡論』東洋文庫84、平凡社、1967年

『名家談叢』第3号、荒木竹次郎編、談叢社、1895年

3. 二次文献

足立栗園『先哲赤穂義士評論』積文社、1910年

E・H・ノーマン『ハーバート・ノーマン全集』第二巻、大窪愿二編、1977年

————『ハーバート・ノーマン全集』第四巻、大窪愿二編、1978年

————『日本における近代国家の成立』岩波文庫、1993年

猪飼隆明『西郷隆盛 一西南戦争への道』岩波新書、1992/2011年

池田史郎『佐賀藩研究論攷』出門堂、2008年

池田諭『高杉晋作と久坂玄瑞：変革期の青年像』大和書房、1966年

石井紫郎編『日本近代法史講義』青林書院新社、1972年

————『日本国制史研究Ⅱ 日本人の国家生活』東京大学出版会、1986年

石井良助『日本法制史概説』創文社、1960/1994年

————『江戸時代漫筆』井上図書、1959/1964年

伊藤仁太郎『松陰と晋作 その2』維新十傑第十巻、平凡社、1941年

井上清『日本現代史 第一巻 明治維新』東京大学出版会、1951年

————『日本の歴史 20 明治維新』中央公論社、1966/1973年

————『西郷隆盛』(上)(下)中公新書、1970年

————『日本の軍国主義』Ⅰ、Ⅱ 現代評論社、1975年

————『明治維新』井上清史論集Ⅰ、岩波現代文庫、2003年

色川大吉『明治の文化』岩波現代文庫、2007年

岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』吉川弘文館、2001年

大津淳一郎『大日本憲政史』第一巻、原書房、1974年

小島祐馬『中国の革命思想』筑摩書房、1967/1968年

大平祐一『目安箱の研究』創文社、2003年

笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、1970年

笠谷和比古『主君「押込」の構造 一近世大名と家臣団一』平凡社、1988年

————『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、1993年

————編『公家と武家 Ⅳ』「官僚制と封建制の比較文明史的考察」 思文閣 2008年

鹿野政直『日本近代思想の形成』新評論社、1956年

神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、1961年/1977年

川上清吉『葉隠の哲人石田一鼎』霞ヶ関書房、1942年

鬼頭宏『文明としての江戸システム』日本の歴史 19、講談社学術文庫、2010年

衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』法政大学出版局、1976年

木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』九州大学出版会、1997年

———『佐賀藩と明治維新』九州大学出版会、2009 年
 木村礎『下級武士論』塙書房、1967 年
 桐原健真『吉田松陰の思想と行動 幕末日本における自他認識の転回』東北大学出版会、2009 年
 小池喜明『攘夷と伝統 その思想史的考察』ペリカン社、1985 年
 ———『葉隠 一武士と「奉公」』講談社学術文庫、2004 年
 後藤靖『士族反乱の研究』青木書店 1987 年
 近藤啓吾訳注『講孟筭記』上、講談社学術文庫、1979/2008 年
 ———訳注『講孟筭記』下、講談社学術文庫、1980/2007 年
 ———『吉田松陰と靖献遺言』錦正社、2008 年
 坂田吉雄編『明治維新史の問題点』未来社、1962 年
 坂本慶一『民法編纂と明治維新』悠々社、2004 年
 相良亨『相良亨著作集 2 日本の儒教Ⅱ』ペリカン社、1996 年
 ———『相良亨著作集 3 武士の倫理 近世から近代へ』ペリカン社、1993 年
 佐々木克『志士と官僚』講談社学術文庫、2000 年
 佐藤亨『近世語彙の歴史的研究』桜楓社、1980 年
 ———『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社、1986 年
 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967 年
 末松謙澄『修訂防長回天史』上巻、柏書房、1967 年
 杉谷昭『江藤新平』吉川弘文館、1962 年
 ———『鍋島閑叟 一蘭癖・佐賀藩主の幕末—』中公新書、1992 年
 鈴木淳『日本の歴史 20 維新の構想と展開』講談社学術文庫、2010 年
 鈴木鶴子『江藤新平と明治維新』朝日新聞社、1990 年
 関根悦郎『吉田松陰』創樹社、1979 年
 園田日吉『江藤新平伝』大光社、1968 年
 高須芳次郎『近世日本儒学史』越後屋書房、昭和 18 年
 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、2007 年
 竹治貞夫『楚辞研究』風間書房、1978 年
 竹田勘治『久坂玄瑞』（復刻版）マツノ書店、1998 年
 田中彰『高杉晋作と奇兵隊』岩波新書、1985 年
 ———『明治維新』講談社学術文庫、2003/2010 年
 田原嗣郎『赤穂四十六士論 一幕藩制の精神構造—』吉川弘文館、1978 年
 圭室諦成『西郷隆盛』岩波文庫、1960 年
 土屋喬雄『近代日本の政商』経済往来社、1956/1968 年
 寺尾五郎『草莽の維新史』徳間書店、1980 年
 遠山茂樹『遠山茂樹著作集』第五巻、岩波書店、1992 年

———『明治維新』岩波現代文庫、2000年/2009年
 戸川芳郎、蜂屋邦夫、溝口雄三『儒教史』山川出版社、1987年
 戸田十畝『明治建白沿革史』顔王堂、1887年
 長野暹『「佐賀の役」と地域社会』九州大学出版会、1987年
 ———編『西南雄藩と廃藩置県』九州大学出版会、1997年
 中原邦平『長井雅楽詳傳』マツノ書店、1979年
 中村尚美『大隈財政の研究』校倉書房、1968年
 夏目漱石『漱石文明論集』三好行雄編、岩波文庫、1986/2005年
 奈良本辰也『あゝ東方に道なきか』中央公論社 1984年
 奈良本辰也編『吉田松陰集』日本の思想 19、筑摩書房、1969年
 沼田次郎『幕末洋学史』刀江書院、1950年
 法本義弘『靖献遺言精義』国民社、1943年
 法本義弘『定本靖献遺言精義』上巻、下巻、靖献遺言精義刊行会、1936年
 芳賀徹『明治維新と日本人』講談社学術文庫、1980/1990年
 橋川文三、鹿野政直、平岡敏夫編『近代日本思想史の基礎知識』1971/1974
 服部之総『服部之総全集 3 明治維新』福村出版社、1973年
 服藤弘司『幕府法と藩法』創文社、1980年
 尾佐竹猛『維新前後に於ける立憲思想の研究』中文館書店、1934年
 尾藤正英『日本封建思想史研究』青木書店、1966年
 福田千鶴『幕藩政的秩序と御家騒動』校倉書房、1999年
 福地重孝『士族と士族意識』春秋社 1956年
 ———『軍国日本の形成』春秋社 1959年
 福地惇、佐々木隆編『明治日本の政治家群像』吉川弘文館、1993年
 藤田省三『精神史的考察 —いくつかの断面に即して—』平凡社、1982年
 ———『[新編]天皇制国家の支配原理』影書房、1996年
 藤堂明保『漢字の語源研究』学燈社、1963年
 藤野保『幕藩体制史の研究』吉川弘文館、1961年
 ———『幕政と藩政』吉川弘文館、1979年
 ———『佐賀藩の総合研究 —藩政の成立と構造—』吉川弘文館、1981年
 ———『日本封建制と幕藩体制』塙書房、1983年
 ———編『論集幕藩体制史 第1期＜支配体制と外交・貿易＞第十巻封建思想と教学』雄山閣、1995年
 古川薫訳注『吉田松陰 留魂録』講談社学術文庫、2002年/2005年
 古川哲史・石田一良編『日本思想史講座』4、5 雄三閣 1975年
 保谷（熊沢）徹編『幕末維新論集 10 幕末維新と情報』吉川弘文館、2001年

本庄栄治郎編『明治維新経済史研究』改造社、1930 年

毎熊（前野）佳彦『東洋の専制と疎外 ―民衆文化史のための制度批判―』文化史研究会、1987 年

前野佳彦『中世的修羅と死生の弁証方』法政大学出版局、2011 年

牧原憲夫『明治七年の大論争』日本経済評論者、1990 年

松浦玲『勝海舟』中央公論社、1968/1969 年

——『明治維新私論』現代評論社、1979 年

松本三之介『吉田松陰』日本の名著 31、中央公論社、1973 年

丸山真男『忠誠と反逆 転形期日本の精神史的位相』筑摩書房 1992 年

——『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1952 年

マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 2008 年

三島由紀夫『葉隠入門』新潮文庫、1983/2005 年

三谷博『東アジアの公論形成』東京大学出版会、2004 年

源了圓・玉懸博之編『国家と宗教』思文閣、1992 年

毛利敏彦『幕末維新と佐賀藩』中公新書、2008 年。

——『台湾出兵 一大日本帝国の開幕劇―』中公新書、1996 年

——『江藤新平 急進的改革者の悲劇』中公新書、1987 年

——『大久保利通』中公新書、1969/2006 年

——『明治六年政変』中公新書、1979 年

——『明治六年政変の研究』有斐閣、1987 年

谷口真子『赤穂浪士の実像』吉川弘文館、2006 年

山口啓二『鎖国と開国』岩波現代文庫、2006 年

山本博文『殉死の構造』講談社学術文庫、2008 年

横田冬彦『天下泰平』日本の歴史 16、講談社学術文庫、2009 年

和辻哲郎『日本倫理思想史』四、岩波文庫、2012 年

4. 中国語文献

余英時『士与中国文化』上海：上海人民出版社、2003/2007 年

余英時等『中國歴史轉型時期的知識分子』台北：聯經出版、1998 年

陳謙『中国古代政治伝播思想研究』北京：中国社会科学出版社、2009 年

黄仁宇『万曆十五年』台北：食貨出版社、1985/2012 年

傅紹良『唐代諫議制度与文人』北京：中国社会科学出版社、2003 年

虞云国『宋代台諫制度研究』上海：上海書店出版社、2009 年

戴錫琦、鍾興永編『屈原学集成』北京：中央編訳出版社、2007 年

5. 参考資料

- 青山英彦「士族反乱に関する諸問題 ―後藤靖著『士族反乱の研究』を中心に」『歴史学研究』343号、歴史学研究会、青木書店、1968年、45～51頁
- 浅田毅衛「日本型前期的資本＝政商資本と資本の蓄積基盤」『明大商学論叢』65（3～5）明治大学商学研究所、1983年、343～372頁
- 李秀石「日本主義儒学の奉公倫理道德と論理 ―吉田松陰の尊王討幕と忠諫思想―」『日本歴史』(523) 吉川弘文館、1991年、41～58頁
- 池田勇太「公議輿論と万機親裁 ―明治初年の立憲政体導入問題と元田永孚―」『史学雑誌』115(6)、財団法人史学会、2006年、1041～1078頁
- 井上勲「幕末・維新时期における「公議輿論」観念の諸相 ―近代日本における公権力形成の前史としての試論―」『思想』(609)、岩波書店、1975年、354～367頁
- 上田純子「幕末の言路洞開と御前会議 ―萩藩における新たな政治回路創出の試み―」(『論集きんせい』21号、東京大学近世史研究会、1999年、24～51頁
- 大庭裕介「江藤新平の政治行動」『国史館史学』13号、国史館史学会、2009年、56～79頁
- 大庭裕介「江藤新平の政治思想 ―「司法省達第四十六号」の位置づけをめぐって―」(『日本歴史』756号、日本歴史学会、吉川弘文館、2012年、52～69頁
- 梶野順子「江藤新平と司法省」『日本歴史』530号、日本歴史学会、吉川弘文館、1992年、65～81頁
- 菊山正明「江藤新平の司法改革構想と司法省の創設」『早稲田法学』63(4)号、早稲田大学法学会、1988年、33～87頁
- 小島毅「中国近世の公議」『思想』(889)、岩波書店、1998年、118～133頁
- 桐原健真「吉田松陰における「忠誠」の転回 ―幕末維新时期における「家国」秩序の超克―」『日本思想史研究』33号、2001年、83～101頁
- 真田幸隆「吉田松陰における武士の思想」『季刊日本思想史』(10) ペリカン社、1979年、76～96頁。
- 杉谷昭「佐賀の乱小論（上）―大隈文書を中心として―」『日本歴史』121号、日本歴史学会、吉川弘文館、1958年、51～63頁
- 杉谷昭「佐賀の乱小論（下）―大隈文書を中心として―」『日本歴史』122号、日本歴史学会、吉川弘文館、1958年、78～90頁
- 杉谷昭「明治初年における対外政策と氏族反乱」『九州文化史研究所紀要』22号、九州大学九州文化史研究施設、1977年、217～249頁
- 高山竜博「近世武家諫言考」『仏教大学大学院研究紀要』第9号、仏教大学学会、1981年、159～179頁
- 竹村英二「武家社会と幕末武士／構造と行為 ―武士的徳目と行為の理解への方法論策定にむけた試論」『日本研究』31、国際日本文化研究センター、2005年、47～68頁

- 田中佩刀「赤穂義士論に関する考察 ―近世武士道論序説―」（上）『明治大学教養論集』明治大学教養論集刊行会、1986年、23～43頁
- 田中佩刀「赤穂義士論に関する考察 ―近世武士道論序説―」（中）『明治大学教養論集』明治大学教養論集刊行会、1987年、23～46頁
- 田中佩刀「赤穂義士論に関する考察 ―近世武士道論序説―」（下）『明治大学教養論集』明治大学教養論集刊行会、1991年、75～118頁
- 土屋怜「明治初期における民法作成の意義 ―江藤新平が民法編纂を開始した理由―」『日本史の方法』6号、日本史の方法研究会、2007年、35～44頁
- 遠山茂樹「書評 後藤靖著『土族反乱の研究』」『立命館経済学』16（5・6）、立命館大学経済学会、1968年、213～219頁
- 檜原孝俊「公議輿論思想の形成（上）」『国士舘大学政経論叢』80、国士舘大学政経学会、1992年、89～112頁
- 長野暹「明治二年における佐賀藩藩政改革の一考察 ―鍋島市佑の動向を中心として―」『佐賀大学経済論集』20（3）、佐賀大学、1987年、135～177頁
- 原平三「番書調所の創設」『歴史学研究』103号、歴史学研究会、1942年、1～42頁
- 尾藤正英「明治維新と武士 ―「公論」の理念による維新像再構成の試み―」『思想』(735)、岩波書店、1985年、1～16頁
- 星原大輔「江藤新平の明治維新 ―「東京奠都の議」を中心に―」『ソシオサイエンス』12号、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2006年、202～217頁
- 星原大輔「由利財政と江藤新平 ―いわゆる「由利江藤金札論争」を中心に―」『ソシオサイエンス』13号、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2007年、217～232頁
- 前田勉「江戸後期の読書と政治」『日本文化論叢』19、愛知教育大学、2011年、57～80頁
- 松沢弘陽「公議輿論と討論のあいだ ―福沢諭吉の初期議政観―」『北大法学論集』41（5・6）、北海道大学法学部、1991年、2475～2530頁
- 水野京子「建白書の「政治的機能」と左院 ―左院受付建白書の分析を通して―」『青山史学』23号、青山学院大学大学院文学部史学研究室、2003年、23～42頁
- 水林彪「近世の法と国制研究序説（一）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』第90巻第1・2号、国家学会、1977年、1～61頁
- 水林彪「近世の法と国制研究序説（二）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』第90巻第5・6号、国家学会、1977年、207～269頁
- 水林彪「近世の法と国制研究序説（三）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』第91巻第5・6号、国家学会、1978年、343～380頁
- 水林彪「近世の法と国制研究序説（四）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』第92巻第11・12号、国家学会、1979年、778～848頁
- 水林彪「近世の法と国制研究序説（五）―紀州を素材として―」『国家学会雑誌』第94巻第9・

10 号、国家学会、1981 年、659～707 頁

目加田さくを「善居逸の文芸における政治的志向」『香椎潟』18 号、福岡女子大学、1973 年、1～14 頁

目加田さくを「漢文芸作家圈における諷諭・諷諫の挫折と潜行」『香椎潟』26 号、福岡女子大学、1981 年、173～191 頁

山口亮介「明治初期における「司法」の展開過程に関する一試論 ―ブスケ・江藤新平と司法職務定制―」『法政研究』77（3）号、九州大学法政学会、2010 年、501～540 頁

吉田昌彦「学習院建言制度の成立と「言路洞開」」『比較社会文化』九州大学大学院比較社会文化学府、第 17 号、2011 年、37～50 頁。

6. 学位論文

星原大輔「江藤新平と明治初期財政 ―明治草創期の国家形成に関する基礎的研究―」（早稲田大学大学院社会科学部研究科博士学位論文、2009 年）

7. 辞典類

『中文大辞典』第 12 冊、中国文化学院研究所、台北：聯合出版、1961 年

『中文大辞典』第 31 冊、中国文化学院研究所、台北：聯合出版、1968 年

『日本国語大辞典』第 2 巻、小学館、1972/2003 年

『日本国語大辞典』第 3 巻、小学館、1972/2003 年

『日本国語大辞典』第 4 巻、小学館、1972/2001 年

『日本国語大辞典』第 5 巻、小学館、1972/2001 年

『日本国語大辞典』第 7 巻、小学館、1972/2003 年

『日本国語大辞典』第 9 巻、小学館、1972/2004 年

『古事類苑』細川潤次郎等編、古事類苑刊行会、1932 年